

Fate/Apocrypha/Quantum

うおぬま

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

——運命は斯く扉をたたく。

大聖杯が”彼方”へ持ち去られてから数年後。

邪竜がつかないだ永き旅路は一筋の道となり、あらたな波紋を喚び起こす。

目次

プロローグ	Quantum	I	穴倉より出ずる	1
		II	アーチャー	28
		III	ランサー	50
		IV	バーサーカー	68
		V	セイバー	83
		VI	ライダー	99
		VII	アサシン	117
	Quantum	I		126
	Material		アーチャー	130
バーサーカー				130

第一章	I	夢想	138
	II	死神犬	161
	III	英雄(エロイカ)	177
	IV	秘密	195
	V	キャスター	219
	Quantum	II	247
	Material	キャスター	247
	セイバー		258
第二章		死神犬討伐指令	
	I	討伐指令	266
	II	ユグドミレニア	286
	III	告死十字	308

M a t e r i a l	—	ランサー	(全)
Q u a n t u m	—	IV	536
V	—	戦果と代償	509
IV	—	時計塔動乱	476
III	—	フェイカー	452
II	—	ホムンクルス	433
I	—	三帝問答	411
第三章	—	時計塔戦争	
ヴ	—	エンジャー	407
M a t e r i a l	—	ライダー／ア	
Q u a n t u m	—	III	384
V	—	喜劇の英雄	360
IV	—	運命は斯く扉を叩く	328

公開版)／ア	—	チャー	(全公開版)
548			
第四章	—	量子の魔術師	
I	—	乾杯	554
II	—	猛毒	575

プロローグ

Quantum

——まっくら。

目の前を満たす金色の気泡がかつた景色を見つめながら、彼女は何千回ともわからぬその言葉を漏らした。

気の遠くなるような時間をこの空間で過ごすことへの後悔の時期はどうに過ぎており、悟りを開いたような穏やかな表情を浮かべて、円筒形の調整槽の中から女はひたすらに、ここから見えるだけの闇を眺め続けた。

女はこの特殊な液体の満たされた調整槽の中でしか生きられない。

継ぎはぎだらけの、皺だらけの体や顔はもはやほとんどが動せずになっていた。

真っ白にうつり変わった長い髪は調整槽の底にまで到達し、ガラスの下部が見えなくなるほど覆いつくしている。

彼女のあらゆる生命活動は最先端の医療技術と魔術が併用された機械類によつて管理されている。

万が一のバックアップも兼ね備えてはいるが、その姿はさながらホルマリン漬けの標

本であった。

誕生時に親から授かった体は、そのほとんどが既に失われようとしている。

その代わりに意識のほとんどが量子化されている状態で、彼女には新たな特技が生まれた。

自身の意識をコンピュータなどの電子機器に送り込み、インターネットを通じて様々な情報を閲覧することだ。

過去の魔術師たちが見たら卒倒するかもしれないような事態だが、彼女はこれを受け入れた。

慣れてしまえば不便ではない。

それどころか過去にそれらは「魔法」として実現不可能であったとカテゴリーズされてきたものが、このような科学技術によって補えるという事実には彼女は始めの内は驚嘆さえしていた。

この光景を見た彼女の親類の「魔術師」はショックを受け、また一言も口がきけずに踵を返していく。

「それでお前は「不老不死」になったつもりか」

彼女はそう言い放った魔術師たちを逆に嘲笑した。狭い調整槽の中から。

彼女は確かに不老不死だった。それと引き換えに彼女のほぼすべてを捨てることに

はなつたが。

一族の繁栄、そのための永遠の命という課題はいつしか目的から手段へ成り代わっていった。

そうまでして、彼女はひたすらに待ち望つづけるべきものがあつた。

彼女の一族の念願をかなえるその瞬間を。

100年以上も前からその瞬間を待ち望み、機会に乗ずるその一手を今か今かと待ち構えていた。

——その一手が、間もなく始まろうとしている。

事の発端は1年前に起きた”聖杯大戦”である。

『聖杯大戦』あるいは『聖杯戦争』

お伽噺のような、現実味の無い単語をほとんど動かぬ口で呟いた後、皺だらけの彼女の顔に笑みとも悔しさともとれない微妙な表情がわずかに浮き出す。

”聖杯”は、多くの魔術師たちにとつての悲願であり、目標のひとつである。

過去極東の島国にある地方都市で、アインツベルンと呼ばれる高名な魔術師の一族により行われた儀式が始まりと言われている。

それはあらゆる願いをかなえる”願望器”とも呼ばれており、魔術師たちはこの『聖杯』をかけ、『サーヴァント』と呼ばれる英霊同士の戦いに身を投じていく。

この古今東西の英雄が夜の街を駆け巡り、誰にも知られることなく殺しあうというシステムは、勝者の聖杯という莫大な賞品の他にも、魔術師の儀式として高貴なものであるとして人気も高く、アインツベルンの聖杯戦争システムが流出するとこのシステムを模倣した”亜種聖杯戦争”が各地で起こり始めた。

ここに在るひとりの魔術師もそんな高貴な儀式の熱に充てられたひとりである。

——もつともそれらの亜種聖杯戦争のいくつが果たして本当に成功のうちに終わったのかは定かではないのだが。

『サーヴァント』として召喚されるには条件がある。

それは人類史に残るような偉業を成し遂げたものであるもの。

この星の誕生から今日、果ては未来に至るまでの英雄、伝承上の人物、果ては創作の登場人物や虚構、呪いにいたるまで『座』に登録されている者であればどんなものでも召喚される。

そうした英雄の魂を『サーヴァント』という器に当てはめ現世に召喚することが『聖杯戦争』で『聖杯』の力を顕現させるための第一ステップとなる。

『聖杯戦争』に召喚される『サーヴァント』は合計で7騎。

— 剣士（セイバー）

— 弓兵（アーチャー）

― 槍兵（ランサー）

― 騎手（ライダー）

― 魔術師（キャスター）

― 暗殺者（アサシン）

― 狂戦士（バーサーカー）

過去には例外があるものの、基本的に英雄たちはそれぞれの逸話によってこれらの『クラス』に当てはめられ、それぞれの持ち味や能力を活かして互いに殺しあう。

剣やその腕に逸話を持つ者であればセイバー、暗殺に逸話を持つ者であればアサシンなど。

最後に生き残ったマスターひとりのみに『聖杯』を手にする権利を与えられる。

この世界で最も苛烈な殺し合いに挑むまでも、魔術師たちには共通したあるひとつの”野望”が存在するからだ。

『そうだというのに……おのれ、ダーニツク。神聖な魔術師の一大儀式を私物化するとは！』

激しい怒りに満ちた抗議は女の口から泡となつて培養槽の下から上へ上昇していく。彼女の声は培養槽の脇のスピーカーが代弁するが、やがてその声もむなしく遠い闇に消えていく。

1年前、このシステムを覆すとある”事件”が起きた。

先の聖杯戦争の折に動乱の中で消息がつかめなくなっていた『大聖杯』の所在が明らかになり、聖杯大戦の開始が宣言されたのである。

大聖杯を所持していたのはかつて自身も聖杯戦争に参戦し勝利したというルーミアの魔術師、ユグドミレニアという一族の長であった。

本来争うはずだった7騎のサーヴァントが同盟を結び、魔術協会に挑むという前代未聞の事例に、聖杯はその新たな側面を魔術師たちに見せることとなった。

同盟である7騎のサーヴァントに対して、さらに7騎のサーヴァントが召喚され、聖杯大戦は14騎のサーヴァントによる激戦が繰り広げられた。

そしてどうなったか？

どのようにしてこの戦いが終わったところで、勝敗など彼女にはさしたる興味もない話だった。

肝心なのはこの”聖杯大戦”を最後に『大聖杯』が”彼方”へ姿を消したということだ。

彼女はこの予想外の事態の連続になすすべもなく、指をくわえて見ていることしかできなかつたのだ。

——もうあんな思いはごめんだ。調整槽の前で彼女と彼女の養子を啜う魔術師たち

が許せない。

——” 根源到達” も諦めてしまった志の低い弱小魔術師たちと、同列にいるという恥辱を、今こそ捨て去る時。

「噂には聞いていたが、なるほどこれは大した技術力だ。現代の魔術師というのもバカにできないものだな」

彼女が己の生きる目的を再確認して息巻いていると、暗闇から近づく足音が聞こえてきて、やがて調整槽の前に一人の女性が現れた。

上品な紫色の制服の上から白衣を纏っている。メガネをかけていて、レンズの奥からは知性を感じさせる落ち着いた青色の瞳が見えた。

身だしなみに気を配っていないせいかな髪の毛は特に手入れはされておらず、目の下には若干のクマさえ見える。

その年でその容姿とあれば男など引く手あまただろうというのに、彼女のその姿は明らかに一回の仕事人間で、またそのことを全く気にも留めていないような様子である。

「私を呼んだのは君だな、ミランダ・ウォルフオーク。君たちほどの技術力を持った魔術

師一族が、”契約書”まで持ち出して錬金術師を呼び出すとは、いったいどういうことかね？」

白衣の女はそう言いながら手にした一枚の古い羊皮紙を調整槽の前に持ってきた。

『イザイ・エルトナム：アトラス院で現在、最も力を持った錬金術師と聞いているが：女だったとはな』

言葉とは裏腹にほとんど驚きを感じていないような口調でスピーカーから音が響いた。

アトラス院。

”彷徨海”、”時計塔”と同じく魔術協会に古くから名を連ねる三大部門のひとつでありながら、時計塔とは長らく親交の無い閉鎖社会のような機関。

魔術よりも科学の進歩に重きを置き、様々な錬金術師たちが、兵器を製造しては放棄していく”巨人の穴倉”である。

製造された兵器の規模や数は底知れず、その力は世界を7度滅ぼすこともたやすいと言われている。

アトラス院がこのように外部に錬金術師を出すことは極めて異例である。

それこそ、かつてアトラス院が作ったと言われる数枚の”契約書”が持ち出されるような事態でもなければの話であるが。

イザイと呼ばれた女流錬金術師は少し残念そうな表情をして返す。

「性別なんて大した問題じゃない、と君なら分かってくれると思うたんだがね、まあともかくだ」

咳払いしたあとイザイと呼ばれた女は本題に入った。

「今一度、かの聖杯戦争を熱望する先行き不安な君たちのために、手を貸すこともできないくはない」

『ずいぶんと曖昧だな、錬金術師』

「なにせ事が事だ。アインツベルンとはそれほどまでに力を持った一族。並みの技術力では聖杯戦争のシステムの模倣をするので精一杯だ。仮にシステムを再現してもうまくいくかどうかの保証もない」

じつと睨みつけるガラス越しの依頼人に、肩をすくめてイザイは困ったように答えた。

「だがホムンクルス研究については私もいくらか心得があつてね。ちょうどそのような大掛かりな“実験”の舞台を探していたところに、こうして世界に散らばっていたはずの“契約書”が舞い戻って来たというわけさ」

『“聖杯戦争”を“実験”と言ったか？』

調整槽の向こうから底知れぬ魔力が伝わり、錬金術師とはいえ体の各機関がしびれる

ような殺意を覚えたイザイは慌てて言葉を取り消した。

『崇高なる魔術師の儀式を”実験”と言ったか!?!』

「おっと、すまない。言い方が悪かったね。もちろん聖杯戦争には私もできうる限りの力で挑む。初めから同盟を結んだ状態での戦いなら君にとつても勝機が高くなるはずだ」

『長かった。長い年月だった。わが念願を成就させるために多くのものを犠牲にした。勝機が高い、などとあいまいな答えでは済まされないので、イザイ・エルトナム』

魔術回路を逆立てたまま、ミランダと呼ばれた調整槽の中の女はうつすらと目の前の錬金術師を見据えた。

『我々がアトラス院の者と秘密裏に接触しているということを、魔術協会の連中に察知される危険もある。この場所とて絶対安全ではない。もう後には引けないのだ』

「それは君次第だよ。それこそ、聖杯戦争は何が起きるか分からない。あのダーニツクの最後のようにな。どれだけ強力なサーヴァントを召喚出来たとしても、勝率を上げることは出来ても、確実ににはできないというものだ」

——まして、この”擬似”聖杯戦争ならなおさら、ね。

そう言いかけて、イザイ・エルトナムは言葉を心にしまった。

余計なことを言つて、これ以上魔術師の量子化されたパラメータに波を立て、己の寿

命を縮めたくなかったからだ。

「ところで、それに必要な道具は手に入っているかな？」

『……一族のほとんどの財と力をもつてして、ようやく0.8ポンド回収できた。しかしこんなもので本当にできるといえるのか？』

「十分だとも。見せてくれ」

ミランダが何かを呟くと、暗闇からスーツを着た男がこちらに嚴重に補強されたコンテナケースを運んできた。

イザイは手袋をして、コンテナケースの前に立つと、合図をしてケースのふたが開いた。

メガネのレンズ越しに中のあるものを穴が開くほど眺めた後、手に取って恍惚の表情をしてため息を漏らす。

「……素晴らしい。欠片とはいえ、十分に上質な力を感じるよ。これなら再現することも問題ではないな」

「しかし分からないな。その試験管から出るとは言わず、もつと野心を抱いていけばいいものを」

『マッドサイエンティストめ。そのような俗な願い、私にはふさわしくないわ』

「……もう結構だ。あとはこちらで”器”の準備を進めよう」

欠片とよばれたそれをコンテナケースに戻した跡、男は再びそれを持って暗闇の中へ消えていった。

『器……アインツベルンも用意していたな、聖杯を顕現させるための“器”か』
 「ある意味中身そのものよりもこれが重要だ。器より多くのものを内包することは出来ない。そして最後に、上質な龍脈を持った土地、つまり“戦場”だ」

『問題ない、上質な“戦場”を用意している』

「ほう？ それはまた手際が良いな。どこだい？ やっぱリルーマニアか？ それとも人の手がまだ行き届いていないというアメリカの大地、オーストラリアの荒野なんかもいいな。もちろんアトラス院のおひざ元、エジプトでだつて行うというのも一興だろう、ニトクリスやオジマンディアスのようなフアラオたちの力を借りられれば……」

舌が乗ってきたイザイの言葉をさえぎるようにして、スピーカーから聞きなれた都市の名前が高らかに響いた。

『ロンドンだ。此度の聖杯戦争はロンドンで行う』

一瞬の静寂の後、緊張と歓喜に震えた声でイザイは尋ねた。

「……おいおい、正気かい？ よりによつて“時計塔”のおひざ元で？」

『こんな体になつても、魔術師としての矜持はある。神聖な儀式を行う土地としてはこれ以上に歴史が積み重ねられた、龍脈に欠かない土地はないと思うが？』

「……いや、君の言う通りだ。なるほど、”人間の体を捨てたも同然”の君なら、考えることも実に大胆なものだ。魔術協会の連中、さぞや慌てふためくことだろうな」

『では、決まりだな』

ミランダの顔が逆さのまま微妙に歪んだような気がした。

『——いよいよ始まる』

見事に交渉を成立させた喜びか、調整槽内に彼女の笑みとも取れる気泡がコポコポと沸き立った。

そして再び目を閉じると彼女の意識が接続されている電子媒体を通して、ロンドン中の下見を始めるのであった。

住宅街、公園、駐車場、大きな橋の上、駅、地下鉄構内にいたるまであらゆる場所を調整槽にしながら眺めることができる。

彼女は現在ロンドン市内にある400万台の監視カメラのセキュリティシステムに忍び込んでいる。

魔術協会の三大部門、時計塔のおひぎ元たる歴史的な大都市、よく知るこの英国ロンドンの街並みを、彼女は“地下深く”から眺めていた。

この面会から数か月後、新たな聖杯戦争の幕が切つて落とされることとなる。

I
—
穴倉より出ずる

英国、ロンドン。

ヨーロッパの北、ブリテン島を中心に構成されるこの連合王国は、面積こそ小さいものの近代史において主導権をたびたび握るほどの強大な力を得ていた。

国内では様々な文化が勃興し、古き伝統がそのまま残されていると言った方が適しているだろう。

そしてこの“昔ながらのものが失われずに残る”ということは魔術師世界においても非常に重要な事であった。

時計塔がロンドンに存在するというのがその良い証拠と言える。

——『ロンドンの時計塔』といえは多くの民間人にとつて“観光名所”という認識である。

ところが、“魔術師”となればそれも話は別だ。ここは魔術協会の心臓部であり、様々な学部に分かれて魔術師の養成を行う至高の学府である。

その歴史はおよそこの大英帝国の歴史にも引けを取らない。

伝統的な手法と洗練された魔術の使い手である講師が集い、未来に輝かしい若き魔術

師に排出していくための施設でもある。

彼らの目的は一概にはまとめることは難しい。

自身の家系に伝わる魔術回路を基盤とし、自身の能力を様々な研究に利用し、また研鑽していく。

魔術師たちはこの時計塔で自身の魔術回路の特性を学習し、それに見合った方法でその才能を開花させていくというのが一般的な修練の流れになる。

そして、その才能をより極めた者にはそれ相応の立場というものが与えられる。

体制としては一般的にイメージされる現代社会の大学とそれほど変わらないのかもしれない。

——そして、魔術師であつても結局は同じ人間であり、つまるところ優秀な才能と人格を兼ね備えた人間ばかりであるとは限らないのはただの人間も魔術師も同じである。

この時計塔のとあるいち教室で、講師の心労など露知らずといった様子の問題児たちが、息をするたびに厄介事を持ち込んでいる。

この日も”エルメロイ教室”で教鞭を振るうロードⅡエルメロイ2世の心中は穏やかではなかった。

この教室でも問題児の一角をなす少年は今応接用のテーブルをはさんで向かい合つて座っていた。

「絶対に教えてやるものか、わかったのならさっさと教室から出ていけ！ 聞き耳も、盗聴もハッキングも、たまたま耳が音を拾うこともすべて許さん」

「そ、そんな殺生なあ！ 俺どうしても気になるんです！ どうして今になって”錬金術師”が？」

どこで聞いてきたのかも問い詰める前に、やせ型に黒い長髪の男は今しがた”ハッキング”で手に入れた”極秘情報”についてさっそく質問攻めにあっていた。

先刻エルメロイ2世が参加した極秘の会議は盗聴防止に様々な一級線の魔術結界が張られているはずだった。

それを”ハッキング”などと俗な言葉であっさりと破られてしまった魔術師のメンツを思うとエルメロイ二世もやるせない気持ちになる。

——それにしても『錬金術師』、生きているうちにその姿を見ることになるとは。

ロードⅡエルメロイ2世はこの少年の口から出た”錬金術師”という言葉聞いて、それが意味するところについて再度咀嚼していた。

——魔術協会を成している三大部門の一角、『アトラス院』。

かつては同じく魔術協会の学徒でありながら時計塔とは異なる独自の方法で根源へのアプローチを目指した”錬金術師”たちの総本山。

錬金術師たちは「自分たちが最強である必要はない、最強である者を創り出す」という理念のもとで、来たる世界の滅亡に備えて様々な兵器の製造を行ってきたという。

非人道的な兵器であつても、それらを咎める者はどこにもいない。

錬金術師たちは演算され続ける未来の破滅に備えてひたすらに兵器を生み出してはそれを投棄するというルーティンを繰り返す。

プラハの錬金術師を名乗るある人物は彼らのことを後に高評価している。

——アトラス院の兵器を外に出してはならない。でなければ世界を七度滅ぼすだろう。

その本部はエジプト、アトラス山脈の地中に存在するともいわれているが、長い間時計塔との交流はなく、閉鎖された環境からは人も情報もほとんど出回ることがない。

田舎の若い魔術師では存在そのものを知らない人間さえいるようだ。

長らく時計塔とは袂を分かつて来たと思われてきた通称”巨人の穴倉”ことアトラス院であるが、この数日前に行われた時計塔上層部たちの極秘会談で驚くべき通達が行われたのだ。

『アトラス院のイザイ・エルトナム・アトラシア。緊急の要件につき、ロードⅡエルメロ

「伊氏に面会を申し出る』

短くはあったが、時計塔幹部の面々を震え上がらせるにはおよそ十分すぎるほどの文面が、召喚科の講師ロッコ・ベルフェバン教授の口から読み上げられた。

アトラス院の錬金術師が、時計塔のいちロードに面会を申し出るという前代未聞の邂逅には当然さまざまな憶測が飛び交ったが、最終的にロードⅡエルメロイ2世はこれを承諾。

ベルフェバンと共に時計塔にて面会が行われる手はずとなった。

「で、その極秘の会談をなぜ君が知っていたのかについては、もう追及する気も失せたので横に置くとしてだな……」

「それにしても、我らが『グレートビッグベン★ロンドンスター』はともかくとして、どうして召喚科のベルフェバン教授まで面会することになったんです？」

「知っていても君には絶対教えないがな」

「そんなあ！」

フラット・エスカルドスの”無駄なあがき”にいい加減業を煮やしてきたロード・エ

ルメロイだったが、知ってか知らずか教室の扉をノックする音が聞こえてきたので、弟子の追及を一旦は逃れることができた。

ふたりが扉をノックした人物たちの方を注目すると、フラットは目を明るくし、エルメロイ2世はしまったという顔をしつつ、ひとまず客人を部屋に入れることにした。

エルメロイの目的の人物の先頭を切っていたのは赤髪で釣り目の堂々とした態度の少女であった。

彼女はエルメロイ2世の教え子ではなかったが、彼女のことを噂でよく知っていた。

フラットとはおよそ同い年でしかも彼にも負けないほどの才能を持ち、それでいて常識人の優等生。

「エルメロイ先生。ベルフェバン教授と、アトラス院の錬金術師の皆様をお連れいたしました」

「ありがとうございます。ベルフェバン教授もご同行感謝いたします」

「なあに、大した手間じゃないさ」

ベルフェバン教授と呼ばれた老魔術師の男はエルメロイ2世が案内する前に部屋に入ると、先ほどまでフラットが座っていたソファにそそくさと移動して腰を下ろす。

ベルフェバン教授に続いてシャルロットはドアから離れると、いったんその後ろに控えていた一組の紫色の制服の男女を先に教室に入るよう一礼して促した。

エルメロイ2世は二人の服装がおそらくアトラス院の正装なのだろうと考えた。上質な紫色のベストにストライプの入ったシャツ、それに白い手袋。

科学者の独特の意匠が感じられ、一見派手なようにも見えたが、不思議とこの現代のロンドンではそれほど違和感を覚えなかった。

どちらもエルメロイ2世よりは少し若いくらいに見え、男の方は少し髭が濃い。

女性の方はメガネをかけていて、髪の毛まで紫色で丁寧に整えられていて上品な印象を受けた。

「お初にお目にかかります、ロード。私はイザイ・エルトナム。こちらは部下のアンドレ」

「こんにちは、ロード。この度は面会にに応じてくださりありがとうございます」

「……本当にアトラス院からご苦勞様です。長旅で疲れてはいませんか？」

軽い挨拶を済ませると、エルメロイ2世は先にさっさと座ったベルフェバンをしり目にもう一つあるソファの方へと案内した。

「そうも言っていられませんか……」

「それほど事態、ということですか」

さらに表情を曇らせるエルメロイ2世であったが、対照的に彼の弟子は好奇心に身を躍らせるや否や、アトラス院の錬金術師たちにも無礼講と言わんばかりに質問を浴びせ

ようと前に躍り出る。

「あ、あの！ 自分はフラット・エスカルドスと申します！ 教えてください！ どうしてあなた達は突然ロンドンへやってきたのでしょうか！ いったいアトラス院で何が

……」

「やめないか、フラット！」

「……君はエルメロイ先生の教室の？」

「はい！」

「エルトナム氏、どうかこのバカ弟子のことは……」

「いえいえ、元気があってよろしいではありませんか」

止めようとするエルメロイ2世に苦笑いしながら手を振って構わないと彼女は応対した。

「フラット、あなたまた先生に説教なんかさせて、時間を無駄にさせるつもり？」

「そ、それは……」

彼の傍若無人をいさめたのは意外にも、その後ろから入って来たシャルロットであった。

彼女はその理性的な表情を崩さないままフラットに詰め寄ると、冷たい視線を送っただけでフラットを教室の外へと追い出してしまった。

——じーっ。

「うう……その目、苦手だ。シャルロットでもしかして魔眼の持ち主？」
「悪かったわね、魔眼みたいな目の持ち主で」

——ああ、彼女がうちの教室に来てくれたら。

などとロードⅡエルメロイⅡ世は一瞬考えて、すぐにその可能性を諦めた。

彼女は確かに優秀な才能を持った魔術師ではあるが、やはりこの教室にはふさわしくない。

彼女は自分の才能の磨き方を自分で知っている。

あれは本当の天才だ。

「失礼。うちの生徒が粗相を……」

「彼に限らず、時計塔の重役全員が、この面会に緊張していることでしょうか……」

「こうして公式に面と向かって話をするという事態もかなり異例のことだとお聞きしております。それ故にあなた方が一体どのような話を持ち出してくるのか、浮足立っているのでしょうか」

——そういうことにしておこう。普段からあの調子などとは思われたくない。

やはり時計塔の案内はシャルロット嬢に任せて正解だった。

ベルフェバン教授もたまにはいい仕事をするものだ。

そのように感心しつつ、時計塔の重役二人とシャルロットは、この異邦の学徒たちが発する言葉に傾聴していた。

「それでは本題に入らせていただきますが……」

「先日、我々の工房に賊が入り込み、製造中の兵器が強奪された」

「……なんですと？」

イザイ・エルトナムが口を開いてから数秒後、室内に緊張が走る。

ただの盗みであるならここまで室内の空気が凍り付くことも無かつただろう。

だが盗んだ相手が、そして盗んだものがアトラス院からとなれば事情を知る者にとつてこれほど恐ろしいことはない。

世界を七度滅ぼす兵器をも造り上げたと言われるアトラス院、当然そのような兵器が外へ持ち出されないよう、院内は厳重な警備が敷かれている。

それも中に侵入してくる者よりは、外へ出ていくものに対しての警備に多重の仕掛けが施されている。

噂では生体兵器はおろか、幻想種たるドラゴンのような生物まで配置されており、また進入時に二手に分かれていたはずの道が、帰りには三手に分かれているなど、通常なら脱出不可能ともいわれる難攻不落の要塞であるはずだった。

——そんなアトラス院から兵器が強奪されたという事態に、ベルフェバン教授もエル

メロイ教授も、そしてどうやらアトラス院について少しは知識を入れていたのかシャルロットでさえ動揺し、しばらくの間沈黙が流れた。

「強奪の犯人は、現在ロンドンに潜伏している可能性が高い。我々はそれを追ってここに来たというわけです」

最初に沈黙を破ったのは、なおも冷静に話を進めるイザイであった。

「アトラス院から兵器を強奪？」とこれはシャルロット。

「誠に悔しい話ではありませんが、そういうことになります」

イザイがこう答えると、後ろで控えていたアンドレもまた唇を噛んで顔をしかめた。

「この事態の収束に、ぜひともあなた方魔術師たちの力をお借りしたく思っています、まづはこうしてロンドンに参った次第です。どうかホムンクルスの奪還にご協力いただけないでしょうか」

「失礼、少し眩暈が……」

じわじわと事の重大さを示す言葉が頭の中で反芻し、エルメロイ2世は思わずフラついて、右手で頭を押さえた。

「お気持ちは大変わかります。ロードともなれば大変お忙しい身であられるのですから」

——それに、と言いかけてフラットの方を見やったがイザイはそれ以上言わなかつ

た。

「しかしご安心ください。盗まれた兵器は何も世界を滅ぼすほどの力は持ち合わせていません。”今すぐには”ですが」

慰めにもならない言葉がむなしく教室内に響く。

問題はそこよりも、と前うってエルメロイ2世は呟いた。

「アトラス院から兵器強奪をやつてのけるような魔術師が、この世界にいたことも恐ろしい。あなた方の外へ出る者への警備システムはかなり嚴重だと聞いていたので。ロンドンの街はどうなってしまうのか……」

「早急に手を打つ必要があります。ですからこうして特例によって穴倉を出て、協力の要請を申し出たというわけです」

「この兵器奪還作戦について、私からひとつ提案があるのですが説明させていただきます。もよろしいでしょうか？」

今度はイザイの方から提案が持ち掛けられる。

「提案とは……？」

「ホームクルスの強奪犯はかなりのやり手のようです。知つての通りアトラス院の警備は嚴重ですから、通常の魔術師だけの力では突破は困難を極めるでしょう」

「そうでなくては困る！」

「だが、その犯人は我々に正体を知られることも無くこの“偉業”ともいえる盗みをしたとげてしまった。この結果について特別に我々は“トリス・メギストス”の計算能力によつて強奪犯の犯行手口を突き止めることにしたのですが……」

少しの間と、室内全員の魔術師の視線を一齐に受けて、イザイはゆつくりと口を開いた。

「強奪犯が”サーヴァント”を使役した可能性がある」

”サーヴァント”ですつて……?」

次から次へとイレギュラーの連続。

”魔術師がサーヴァントを使役して”アトラス院で盗みを働いたという可能性にエールメロイ2世はこれ以上は倒れてしまいそうなほどの衝撃で三度打ちのめされた。

「それはつまり、サーヴァントというのは……あの”サーヴァント”?」

「こと魔術師たちの一大行事、聖杯戦争の折に、聖杯の力によつて召喚されるサーヴァントの事です」

——なぜ。エールメロイ2世、そして自らも降霊科に籍を置くベルフェバンでさえそのように疑問を投げかけようとする前に、先手を打つようにイザイ・エルトナムは言葉を続ける。

「……まで言えばもうお分かりかと思いません。本来自らの研究成果を人に言うことはご

法度ではありませんが、今回は事が事です故、協力体制のためにも正直にお話しさせていただけますよ。どうかお気を確かに……」

「アトラス院から、聖杯の器として創造されていたホムンクルス……私の研究成果が盗み出されてしまったのです」

「——何者かが、このロンドンで、聖杯戦争を執り行おうとしている」

Ⅱ — アーチャー

英国 時計塔

イザイ・エルトナムのもたらした情報はこの時計塔内の上層部の間でもあつという間に話題になり、ある者はこれから起こりうる自分への重荷や責任に心労で倒れたり、ある者は聖堂教会の仕業だと狂言を振りまき、またある者はロンドンで行われるというその”聖杯戦争”に自分が参加してやると息巻いている。

この面会の後半日もしないうちに時計塔によるロンドンの龍脈の調査結果が出た。

報告者によれば、確かにこのロンドンで、かの冬木市やトウリフアスのような”聖杯戦争”が行われる予兆ともとれる龍脈の変化”が観測されたことが明らかになった。

報告を受けて時計塔は薪をくべられた火のごとく騒がしくなる。

それほどこの”聖杯戦争”というものは魔術師たちにとつての念願、悲願であった。

アトラス院の錬金術師の言葉をいのように受け取り、またこれを機会に聖杯を手に入れようと思惑を巡らせる魔術師は少なくなつた。

もともとアトラス院は時計塔とは長い間袂を分かっていた組織である。

彷徨海ほどでないにしろ、”ほとんど赤の他人”というのが大抵の魔術師の結論であ

り、この奪還作戦に義理を感じている者はほとんどいなかった。

——ならば、手に入れてしまえばいい。もとより聖杯戦争というものは奪い合いだ。

これは多くの魔術師一族にとってあてはまる合理的な決断であった。時計塔の報告を受けて次にぎわめき始めたのは『聖堂教会』である。

聖堂教会は神秘の秘匿や保護という名目でこの聖杯戦争にも重要な役割を担っている。

マスターの保護、そしてサーヴァント戦闘で発生した被害の事後処理などがそれにある。

聖堂教会の監督役は戦場となる土地に派遣され、聖杯戦争の行方を見守りときには取り仕切ることもある。

ところが今回の急な聖杯戦争の開催、それもロンドンで行われるという事態には寝耳に水であったのか、珍しく初動が遅れてしまっている。

今回の聖杯戦争に果たして監督役が必要なのか、という疑問を持ち掛ける者もいた。システムこそ聖杯戦争のようなものの形を呈しているが、景品である聖杯は見つからず大聖杯はすでに先の聖杯大戦で失われているはずだった。

加えて他には不明な点がいくつも存在した。

イザイの発言によれば、盗まれたのは聖杯の器となるホムンクルスであるということ。

彼女はそのホムンクルスにアインツベルンの技術を参考にかんりの改良を加えているしてはいると答えたが、研究は不完全であり願望器ほどの力は備えてはいないとも説明した。

”器 だけでは聖杯戦争は成り立たない。

もつとも聖杯そのものの自体未だ不明な点が多く存在していることは誰しも共感の内にとどめていることではあるが。

何より彼らが注目したのが強奪犯の”目的”であった。

「そもそもアトラス院に侵入するリスクまで背負って、手に入れたいものなんですか？」

「君の言う通りだ。それほどの力を持っているのなら、兵器なんか使わずとも世界を簡単に滅ぼせるような魔術師とサーヴァントがいるということになるのだからな」

アトラス院の錬金術師との面会を終えた後、召喚科ロッコ・ベルフェバン教授とその弟子シャルロット・ロジェは一度自分たちの教室に戻り、状況を整理するために面会していた。

「聖堂教会もさぞや慌てふためくことだろうな。何しろロンドンには聖杯戦争の舞台にし

ては大がかりすぎる。サーヴァント戦闘によってどれほどの被害が起こるかもわからない上に、昨今は情勢不安でスクエマイルや郊外にも移民が増大。夜でさえ眠らない街は多い。魔術協会、聖堂教会たちにとつても”神秘の秘匿”と向き合わねばならない」「かなり危険な状況と言えますね……」

「何かが間違えば破滅だ。一体犯人は何を考えている」

——頭を抱えてうつむくベルフェバン教授であったが次の瞬間、口元が緩むと不敵な笑みをこぼし目の前のシャルロット・ロジエを驚かせた。

「しかしまたしてもこのような事態に出くわすとは、思いもしなかったが……長生きはするものだな、シャルロット・ロジエ？」

「教授……？」

——あ、この表情は。

戸惑いの表情を見せる自分の弟子に対して、ベルフェバン教授は机の向こう側から身を盛りだして”提案”を持ち掛けた。

「折角の機会だ。”課外授業”に挑戦するつもりはないかね？」

「……先ほど聖堂教会からも返事が来た。ロンドンで聖杯戦争を行うことを承諾、監督役も熟練の者を用意するそうだ」

「課外授業……つて、まさか教授」

「君も聖杯戦争がどういうものかはすでに知っているだろう」

「え、ええ。いくらか資料に目を通したことはあります。この時計塔にも第四次聖杯戦争の生き残りの魔術師がいらつしやるとか」

ロード・エルメロイ2世の先ほどの胃痛に耐えるような酷い顔を思い出しながら、シャルロットはベルフェバンの問いに答えた。

「私が、ですか？ 私、が聖杯戦争に？」

恐る恐る教授に尋ねるシャルロット。

その覚悟を持った問いをあつさり打ち返す目の前の老人に、彼女は一層激しく動揺した。

「“こういう時”のために、私は君を手塩にかけて保護してきたのだ、シャルロットよ」椅子から立ち上がると机に両手をつき、ベルフェバン教授はまるで水を得た魚のようにシャルロットに早口になって話をつづけた。

「聖杯戦争」だ。魔術師であればたとえ命を賭けても挑む価値のある、その戦い、魔術師世界でもっとも危険で神聖な儀式に君が参加するのだ。シャルロット・ロジェ」

「……っ！」

己に与えられた使命に対して体を震わせるシャルロット・ロジエ。

しかしそれと同時に目の前の恩師に対して一抹の不安を覚えていた。

「君の魔術の質なら問題なく聖杯に選ばれるだろう。いや、そうでなくては困る。そのため私は君を此処へ置いていたのだから」

「シャルロット・ロジエ。君にはマスターとなつてこのホームンクルスの”争奪戦”に参加してもらおう」

——やはり、そうくるのね。内心がっかりする。

この教授はいつもそうだ。

策略家であり、隙あらば漁夫の利を狙い、自分の利益にしてしまおうとする。

シャルロット・ロジエはその”立場”故にこの教授にはさまざまな恩があつたが、その恩を返すという時は決まって彼の策略を代わりに実行するというものであった。

聖杯大戦の折、彼女は友人に会うためフランスに一時的に帰国していたためで巻き込まれることは無かつたが、彼女の代わりにセイバーのマスターとなつて大戦に参加したマスターは死亡したという話を聞いていた。

聖杯戦争ではそのシステムの都合上、マスターが命を狙われることは珍しくない。

サーヴァントはマスターとパスでつながっていて、マスターから現界のための魔力を

供給されている。

つまりサーヴァントを相手にしなくても、マスターを殺害してしまえばサーヴァントも現界を維持できず消滅してしまうのだ。

——それほどの危険な戦いに、この教授は私を参加させようとしている。とてもじゃないが、気が乗らなかつた。

まだ二十歳にも満たない若輩者であるし、次期当主というロジエ家の重要な役目もある。

それを置いて、この老人は私に「命がけの戦いに出場して賞品を奪い取れ」などと言ってきている。

だが、その一方で、本当に”聖杯”を手に入れられるチャンスがあるのだとしたら。魔術師たちの中でも、目にするのもできずその一生を終えるというその”聖杯戦争”に。

——間違いなくロジエ家にとってこれは掛け替えのない財産となるだろう。

時計塔から”称号”を与えられることだって夢ではない。

命の危険があることは重々承知してはいたが、それだけのリスクを冒す価値は十分にあった。

それほどまでに話に聞いていた願望器というものは魔術師たちがのどから手が出る

ほど欲しいものなのだから。

「条件があります、ベルフェバン教授」

「何かね？」

「私の身に何かがあれば、ロジエ家にできうる限りの支援を行うと約束してください」

一族の保護を求めるロジエに対して、なおもベルフェバン教授は否定的に出た。

しかし、シャルロットはそのまま真剣な表情を崩さずにこう返す。

「……大きく出たな。君が私に何かを頼める立場にあると言うのか？」

「魔術師としてならともかく、人としてならあなたを破滅に追い込むくらいの証拠は揃

えていますよ」

「なんだと？」

「あなたがた年配の魔術師たちというものは本当に現代の技術には疎いようですね

……」

そう言って、スカートのポケットから小さな板状の機械を取り出した。

「これは単なる機械です。なんの魔術的な仕掛けもありません。だからこそ、簡単に”

盗聴”できた」

「盗聴だと……？」

「若者の文化もきちんと取り入れるべきかと、先生。現代の科学力を甘く見ていると足

元をすくわれますよ」

再生ボタンを押そうとすると、危険を察知したロッコ・ベルフェバンの顔が急に青ざめる。

「シャルロット、まさか!？」

「私が死ねばこの“データ”は時計塔にもばら撒かれる。人として終わりたくなければ、私が死なないように最大限のバックアップをしてもらわなければいけません」

「ぐっ……君はこの私を脅そうというのかね」

「悪いとは思っていますよ、先生。しかし聖杯戦争となれば話は別です。この瞬間を待ち望んでいたのは私だけじゃないはず」

ベルフェバン教授は彼女の持つっているものが音声や映像を録音するものだということに気付いた。

——彼女がこのタイミングで交渉材料に持つてくるということはあるのはあの中に入っているのは……。

「シャルロット・ロジエ……!!」

「サーヴァントを召喚するための触媒が必要です。早急に手配してください。聖杯戦争への参戦権は自分で勝ち取ります」

——いいですね、教授?

最後にそう言い放ち、シャルロット・ロジエは研究室を後にした。

英国 ロンドン ハイドパーク

錬金術師たちが時計塔を訪れてから数日後のことである。

実際シャルロット・ロジエが今回の”聖杯戦争”においてマスターとして認められることは、それほど驚くべきことではなかった。

彼女の家系はロードに名を連ねるほどの貴族ではないものの、フランスの一地方で注目を集める由緒正しい魔術師の家系である。

その地域柄を利用してか、ハーブやブドウ等の植物を利用した黒魔術（ウィッチクラフト）にも理解のある魔術師であり、血のように紅いワインを使用した暗示、身体強化、治癒など独特の手法と魔術理論を展開する。

そんな彼女が、なぜ召喚科という場違いな場面にいるのかは時計塔の間でもちよつとした噂になっているとか。

中には彼女とベルフェバン教授との間に”下世話な妄想”を持つ者もいるらしいが、これは彼女の鋭い視線により一蹴されている。

ともあれ、彼女は召喚科のバックアップにより、英霊の召喚についてはレクチャーをしつかりと受け、英霊の召喚に必要な“触媒”の入手に必要なコネクションと財力もあり、簡単にこれを手配することができた。

手の甲に浮かび上がった六角形が三つ並んだ赤い痣を眺め、門が閉じられた夜のハイドパークで、シャルロット・ロジェはその“瞬間”を今か今かと待ち構えていた。

このロンドンに最も龍脈、魔力の流れを観測したデータにより、この時間この土地での召喚が最も機運の高まるコンディションであるようだ。

ハイドパークはロンドン特別区の中でもおよそ中心に位置する主要な公園のひとつである。

かなりの広さを誇っており、昼間は観光客や休憩中の学生、会社員でにぎわっている。自然豊かな場所であり、中央には池、イギリス式の庭園なども見られるのんびりとした場所だ。

当然夜にここをうろつくのはそれこそ浮浪者ぐらいのものだろう。

その彼らにも今夜だけは人払いのルーンで退去してもらった。

——大丈夫。詠唱は何度も練習している。

触媒はベルフェバン教授のお墨付き。

これで最強の英霊を引いてしまえば何も怖くはない。

心の中で繰り返しそう唱えながら、”触媒”を握りしめた赤髪の少女はハイドパークの隅、暗い森の中でじつと立ち尽くしている。

彼女の目の前には仰々しく描かれた召喚陣が敷かれ、英霊の誕生を今か今かと待ち構えているようだった。

「……よし、それでは始めましょう」

——礎に銀と鉄。礎には我が大師 ■■■。

教わった通りに詠唱を始める赤髪の女魔術師。

詠唱開始から早々に、召喚陣の周囲からマナが集まるのを彼女は掌から強かに感じていた。

——すごい。さすがはロンドン、マナの質も桁違いね。さぞや名のある英霊が召喚出来ることでしょう。

「……つとと、降り立つ風には壁を、四方の門は閉じ……」

詠唱を始めてしばらくして、召喚陣の前に置かれたその”触媒”を呼び水にさらに高質のマナの流れが集まってくるようであった。

マナの流れは次第に水たまりのように召喚陣を赤い光で見たし始める。

風が起こり、周囲の草木をざわざわと揺らしていく。

——いける。これならいける！

その光景に確かな確信を得たシャルロットが、さらに声を一段階高らかに張り上げて最後の一節を締めくくると。

「汝、三大の言霊を纏う七天、抑止の環より来たれ……天秤の守り手よ！」

そしてまばゆい光と一陣の風が彼女の視覚と聴覚を一瞬にして覆った。

徐々に光と風が収まっていく。

両腕で光源を隠していたシャルロットだが、徐々にその刺激も弱まっていたことに気が付くと、震えながら両腕をおろして召喚陣の方を注視した。

円形の中心に若い男がじつとしながら立っている。

中世ヨーロッパの装いを思わせる装飾のついた洋服を身にまとい、その肩には派手な紅の紐の装飾ようなものがかけられている。

何より彼女の目を引いたのはその男が湧きを持って支えていた巨大な“砲塔”である。

恐らく180センチは超えているであろう彼の身長をさらに上回っていたが、召喚されるやいなやその“砲塔”を軽々と右手で持ち上げ、派手な金属音を鳴らしながら、剣

や荷物であるかのようにして肩にかけた。

目の前の少女を見やると少しだけ眉をひそめたが、すぐに口角をあげた勝気のある表情に戻ってこう尋ねた。

「サーヴァント、アーチャー。今回はそれが俺の”クラス”だ。それで……」

「あんたが俺の”マスター”ってことでいいのか、お嬢さん？」

男の態度は実に豪快で、大きく開いたコートの前から分厚い胸板の主張が激しい。

勝気な表情のまま白い歯をニイッと出すようにして、胸を張るよう背筋を伸ばして偉そうに目の前のマスターに問いかける。

視線を交わすこと数秒。ようやく事態を受け止めたシャルロットは、頭の電源が再びオンになり。

そそくさと震える手を”アーチャー”と名乗る男に見せた。

彼女の掌に浮かび上がった赤い痣。

これこそ”令呪”であり、”マスターの証”である。

「そうよ、貴方と呼んだのはこの私。そしてここはロンドン、聖杯戦争が行われる戦場」
「若いな。まあ、俺もお前の歳ぐらいには戦争に兵士として出ていたが……ロンドンっていうとイングリランドか」

「そう、2018年。アーチャー、あなたのいた時代より数百年後つてことになるかし

ら」

「……」

「それにしても、肖像画で見ていたのとは少し雰囲気が違うわね……」

「……」

ロンドンという言葉が出たとたん、アーチャーの顔から勝気な表情が失われた。

突然シャルロットから背中を見せるととぼとぼとした足取りでうなだれるように召喚陣の方へ戻っていく。

「……ええ？　なに、どうしたの？」

不審に思ったシャルロットがアーチャーに声をかけたが、次の瞬間アーチャーの男は信じられない言葉を口にする。

「帰る」

「帰るって……ええ？　なんで、どうして？　一緒に戦ってくれるんじゃないのアーチャー！」

目の前の英霊が発した言葉の意味が一瞬理解できず、数秒の間を置いてシャルロットは動揺に上ずった声で抗議した。

召喚陣の内側まで戻ってであぐらをかくと、アーチャーはふてくされたように答え

た。

「たわけが。この俺を忌々しい”イギリス”の土地に召喚するような阿呆がいたとはな」

ため息をついて背中を向けたままアーチャーはつぶけた。

「英霊の強さは時に知名度に左右される。少しばかり勉強が足りなかったようだなマドモアゼル」

「知名度のことなら知ってるわ！　あなたの名前を、このヨーロッパで知らない者はいない！」

「そうだ、この国じゃもつぱら”戦争に負けて捕虜になった男”としてだがな！」

ここでようやく魔力パスの繋がっていることに気が付いたシャルロットが、アーチャーのステータスを確認する。

「わ、悪かったわよ……”皇帝ナポレオン”」

「……まあいい、その触媒もお嬢ちゃんひとりで用意した訳ではなさそうだしな」
「そうだと、俺は戦場を選ばない。戦の天才だからな」

——本当に召喚出来た。

ナポレオン・ボナパルト。彼はナポレオンの英霊をアーチャーという枠に当てはめて召喚されたサーヴァント。

初代フランス皇帝にしてヨーロッパで一時代を築き上げた戦の天才。

かつていち砲兵でもあった彼は当時最新の遠距離武装であった大砲を巧みに使いこなし、ヨーロッパのほとんどを征服した。

ベルフェバン教授がシャルロットに渡した触媒、それは大英博物館で保管されているロゼッタストーンであった。

ロゼッタストーンは生前のナポレオンが遠征の途中で発見し、解読をしたといわれる逸話がある。

このように英霊を狙って召喚するために、その英霊と深いかわりのある所持品などを触媒にしてサーヴァントの召喚を行う事例がある。

だがこのアーチャーが言うようにサーヴァントの召喚とは常に安定して狙った英霊を呼び出せるものではない。

たとえお目当てのサーヴァントを召喚出来たとしても、サーヴァントというものは英霊の性格や側面、さらにはマスターとの相性にいたるまで様々な要因によって決められるくじ引きのようなものだ。

そして、このロンドンで召喚されたナポレオン”アーチャー”はここイギリスでは侵略者としてのイメージが根強い。

故にナポレオンの信念も、この国では『中立・悪』と定められたようだ。

彼はそれが気に入らないらしい。

このヨーロッパじゅうで彼の名前を知らない者はいないだろう。

サーヴァントとしてこれほど有名な存在も他にはなかないだろう。

もつとも有名な英霊であるほど、その弱点も発覚しやすいというデメリットはある。

サーヴァントは元となっている英雄の逸話や愛用していた武器が「宝具」として昇華されている。

宝具は絶大な力を持つ強力な兵器であるが、発動をしなければそこから真名や弱点が露見されてしまう可能性が高い。

そのためマスターたちもサーヴァントを呼ぶときは普通サーヴァントの事を「クラス名」で呼ぶ。

聖杯戦争で勝つために、より強い能力を持ったサーヴァントを狙って召喚する。

マスターたちの戦いはある意味サーヴァント召喚から始まっているともいえる。

「しかし懐かしいものを持ち出してきたな。てつきり愛用の大砲でも使ったのかと思っただが」

自分と呼ぶ縁となった黒い大きな石を興味津々に眺めながら、アーチャーは呟く。

「短期間で用意できたのはこのくらいよ。何せ今回の話は急だったから」

「何か事情が違ったりするのかわ？」

「それについても話す必要がありそうね……とにかく」

あぐらをかいて背中を向けていたアーチャーの正面に回り込んでシャルロットは男に手を差し出す。

「これからよろしくお願いします。アーチャー！ 私と組んだことを公開はさせないわ」

「……いつちよまえに覚悟は決まってるというわけか、マスター？」

「まあ、うじうじしてても仕方ねえ。そういうことなら、今日から俺はお前のサーヴァント、アーチャーだ。よろしく頼む」

「ええ、一緒に頑張りましょう」

「俺がアーチャーってことはネルソンの野郎がライダーで召喚される可能性も高いわけか。気を引き締めねえとな」

「ネルソンって……あの提督ネルソン？ 彼もサーヴァントとして召喚されるの？」

「おう、あいつだけは苦手だな……あとハンガリーの変な爺さんには気をつける。あの爺さんには勝てん」

——ハンガリーの爺さん？

そう問いかけようと思ったが、今は他にやるべきことがある。

「さて、まずはこの状況についてどこまで知ってるか確認しないとね」

シャルロットもまたアーチャーと向かい合うようにして召喚陣の上に座る。

「聖杯戦争なんだろう？ だったらまずは監督役つてのに会いに行くんじゃないのか？」

「ううん、それが今回は聖堂教会も出遅れててね。先にエルメロイ先生のところに行くべきね」

「……どういうことだ？」

「今回私たちが手に入れるのはアトラス院の作った聖杯の器よ。ホムンクルスを盗んだ犯人がこのロンドンにいる」

「アトラス院か……名前は聞いたことがある。そのような組織がエジプトのどこかにあるとな」

「あら、知っていたの。確かにあなたの時代にはすでにアトラス院は存在しているけれど」

「となると、さしづめこれは『亜種聖杯戦争』といったところか」

一通りの説明を受けて、アーチャーはあごに手を当てて考え事にふける。

「理解が早くて助かるわ、アーチャー。さすがは天才ね」

「——このあたりの理解の速さ、状況の判断力はさすがの戦上手といったところかしら。」

「犯人の手がかりはつかめているか？」

「強奪犯がロンドンに潜伏し始めてから、その街で聖杯戦争の機運が高まっているという観測結果が出ている。私がここでマスターに選ばれ、あなたを召喚出来たのもそういうことよ」

「ということは……」

「聖杯戦争のマスターのひとりだが、ホムンクルスを所持している……私はそう睨んでいるわ」

「なるほど、なかなか合理的で賢い魔術師のようだな」

「——このくらい、誰でもすぐに思いつきそうなものだけど。」

「そう言いかけてシャルロットは口をつぐんだ。」

「相手は皇帝。不機嫌になるようなことをわざわざ言う必要もない。」

「どうした？」

「い、いえ、なんでもありません」

「そうか？ とりあえず、まずは他のマスターに探りを入れてみるのがよさそうだな。幸い俺もアーチャーで、偵察向きのクラスだ。キャスターやアサシンには敵わんが、顔

を拜んでおくぐらいならいいだろう？」

「それもそうね。おそらく他にも令呪を発現させたマスターがサーヴァントを召喚していることでしょうし……いい、アーチャー？ 表向きには私たちはホームンクルスをアトラス院に取り戻すということになっているけど……」

「本当の目的はそうじゃないってか。おいおい、いきなりアタリを引いたか？」

夜の公園で会話を続ける二人の前に、突然脇からかけられる声があった。

III
— ランサー

突然二人に投げかけられた言葉。

アーチャー、シャルロット、ともに目を見開いて声の主を確認しようと振り返る。

前身の魔術回路は臨戦態勢のためにを逆立たつように急激に活性化する。

その様子がアーチャーにも伝わったのか彼は自身のマスターの方を見て口笛を得意げに吹いた。

「さすがの反応速度だ。俺のマスターとしちや及第点だが……まさかこんなに早く他のサーヴァントに出会えるとはな」

「やっぱりあれ、どう見てもサーヴァントよね？」

二人の目の前にはこの時代この場所に似つかわしくない格好をした人間が一人。

中世風の鎧兜で顔を覆っていたが、声は間違いなく男のものであった。

粗暴な立ち振る舞いではあるが、構えている二本の剣や鎧には年季が入っており、いかにも歴戦と思わせる風貌であった。

そして正面からはその全貌が見えないものの、背中に甲羅のように白く大きな盾が一枚。

——まさかこんなに早く他のサーヴァントに遭遇するなんて。

思わず警戒してしまったが、このサーヴァントはいつから私たちを見ていたのだろうか。

油断していた。もう聖杯戦争は始まっているというのに。

「二刀流の……」セイバー」ときたか。フン、いきなり最優のクラスであるセイバーに会えるとは、面白くなって来たぜ！」

アーチャーは肩に担いでいた巨大な大砲の砲塔を構えると、砲口を鎧姿の男にしっかりと向けた。

「俺も本当に不本意なんだが、それは違うぜアーチャー」

セイバーと呼ばれた甲冑姿のサーヴァントは気だるそうに首を横にふるうと、堂々とした態度でこう答えた。

「俺は“ランサー”だ。まあ勘違いされるのも無理はねえか」

「二本の剣で“ランサー”？」

——記憶を巡らせようとする。二本の剣でランサー……そんな英雄心当たりがあつたかしら？

が、だめだ。突然の事態に頭が回らない。これから命を懸けた戦いになるっていうの

に！

「こつちにも色々事情があんだよ……それより」

「お前たち、”表向きには”とか言ってたな。それって、どういうことだ？」

「もしかして、ホムンクルスを横取りしてやろうとか考えてるのか？」

シャルロットはそのままポーカーフェイスを維持したが、内心これについてどう説明したらよいかわからない。

今の会話は完全に誤解されるだろう。

いや、誤解はないのだが。

彼女は、自分たちがいずれこの考えにたどり着くのなら、当然他のマスターたちも”

他のマスターが怪しいと考える”ことを失念していた。

現に目の前のランサーはこうして他のサーヴァントに偵察を行い、怪しげな会話をしているアーチャーとそのマスターを発見している。

——私たち、怪しまれている？

「あるいは……盗んだホムンクルスをもってロンドンからトンスラする目算とか、な？」
ランサーの後ろの茂みからもう一人人影が近づいてくるのが見えて来た。

近づくにつれて見えてくるのだが、シャルロットはその姿に少し動揺した。

茂みの中から現れたのはシャルロットよりもさらに若くて小さい少年だった。

ロンドン ハイドパーク

自分よりもさらに幼いマスターの顔を見てシャルロット・ロジエは目を丸くしていた。

自分のことを棚に上げるわけではないが、ランサーのマスターはそれこそ小学生ぐらいの見た目をしていて、三枚の羽のような模様をした令呪がその手の甲をほとんど覆いつくすほどの手の小ささである。

髪の毛や肌にほとんど色素が無く、顔つきがわずかにアジア系であるように見える。

「よう、シャルロット・ロジエ。それがお前のサーヴァントか？ 弱そうだな」

「……あなたのサーヴァントこそ、言葉遣いが汚いわ。野蛮な人ね、あなたに似たのかしら」

「フン、どうだかね」

少年は尊大な態度で立ち振る舞って挑発した。

シャルロットもそれに対して皮肉で返す。

「あなた、どこの魔術師？ 時計塔では見たことない顔ね？」

目の前のサーヴァントから目を離さないまま、シャルロットが尋ねる。

「僕はリヤオ・ファン。ファン家の長男にして次期当主。時計塔からの正式な依頼により、ホムンクルスの奪還作戦に参加する」

リヤオ・ファンと名乗る少年は得意げに挨拶する。

「この聖杯戦争のマスターの中に、ホムンクルスを盗んだ魔術師がいると僕は睨んでいる。フン、どうだ？ お前たちがそうなのか？」

「……今を見ていてそう思っているのなら、本当にあなたは頭の足りないおバカさんね」

「な、なんだと!？」

シャルロットが挑発すると、リヤオという少年は顔を赤くしてこれに憤慨した。

——気取っているように見えても、やはり精神は年相応ね。

安い相手、こんなやつでも聖杯戦争に参加できるなんて少し拍子抜け。

「リヤオ・ファンって言ったかしら？ あなたたち、私がアーチャーを召喚していたところは見ていたかしら？」

「……いや、見ていない。僕たちがお前たちを見つけたのは地面に座って何かを話しているのを見たところからだ」

「マスター、口が軽すぎる」

ランサーに制止されてリヤオ・ファンは慌てて口をつぐんだ。

「えっ、あ、ああ……そうだよな。こ、これ以上は何も言わないぞー！」

「見てたなら、教えてあげるけど」

少しあきれたような表情になって説明するシャルロット。

相手が自分より下と見えて、心なしか彼女にも余裕が戻って来たらしい。

「私がサーヴァント召喚したのはついさつき。ホムンクルスが盗まれたのは何日も前の事よ」

「つまり、俺のマスターがサーヴァントを召喚して、アトラス院から聖杯の器を奪取したって話は無理があるってことだな」

「えっ……」

シャルロットとアーチャーの話を受けて、ようやく理解したのかりヤオ・ファンの顔があごの下から頭のとっぺんまで徐々に赤く染まっていくのが見えた。

早とちりしていたことに気が付き狼狽するが、待て、とそれでも食い下がる。

少年の矛先は次に彼のサーヴァントに向けられた。

「ら、ランサー！ お前だって、僕に言っただじやないか、あの二人が怪しいって……」
「あー……いや、すまん。俺は単純に怪しいと思っただけだ。こいつらが盗人じゃなくても、とりあえず脅せばゲロツてくれるかとも思っただが」

「……くそっ！ お前も少しは頭を使えよ！」

——あなたに言われたくないわ、と思わずシャルロットは心の中でツツコミを入れる。

それにしても大丈夫なの、この少年。聖杯戦争に参加するにはあまりにも……いや、余計なお世話だろうか。

それに。

『マスターの方はともかく……あのランサー、かなりの手練れに見える』

——ランサーの方は異質だ。

強者である気配が十分に感じられる。

剣の構えといい、足取りといい手練れの騎士であることは間違いない。

それでいて“ランサー”ということはあの剣のほかに、さらなる切り札——宝具を隠し持っているということ。

魔力パスでつながっていたアーチャーからシャルロットの頭へ『念話』が送られる。

サーヴァントとマスターでのみ行えるテレパシー会話のようなものだ。傍受の心配も少ない。

『分かってる。ただならぬ気配を感じるわ。それにしてもサーヴァントのステータスがよくわからないわね。何かのスキルかしら？』

マスターであればサーヴァントを一目見て、だいたいのステータスが把握できる。

しかし目の前のランサーを見ても、シャルロットはほとんどのステータスを閲覧することができない。

何かしらの宝具かスキルで見えないようにしているのか、ステータスを見ようと思っても、彼女には数値にノイズが走っているだけの状態でしか見えないのだ。

——資料で読んだことがある。

たとえば「円卓の騎士」ランスロット」がサーヴァントとして召喚される場合、友人のために顔を隠して試合に出たという武勲の逸話から相手に自分の真名を悟らせないようなスキルを所持していたとある。

『ほう……真名がばれるのを防ぐために情報を遮断するスキルか……ますます面白い』

『そ、それよりアーチャー……どうする？ まさか戦いになったりしないわよね？』

『どうだかな……この手の輩はいろいろ面倒だぞ』

二人が念話を続けていると、業を煮やしたのか凄むようにしてランサーが問いかける。

「おい、念話してるんじゃないやねえよ。俺の質問に答えてもらおうか」

「時計塔の連中も浮足立ってたなあ。聖杯を手にするのは自分だと。お前も」その中の一人ってわけか？」

リヤオファンが再び失言をしてしまったことに気付いて、ランサーは兜の中からでもわかるほど嘆息した。

「マスター、お前は喋らない方がいい」

「んな……ランサーお前、この僕に命令するな！」

声を荒げてリヤオファンが指をさして抗議するが、ランサーは彼を無視した。

アーチャーが何かを思いついたかのように顔を上げるとランサーに提案を持ち掛けた。

「なあ、ランサー。さっきの言葉に深い意味はねえよ。俺たちはホムンクルスの奪還作戦に参加する。それだけだ」

「さっきの表向きとかなんとかはどう説明するつもりだ？」

アーチャーは両手を広げて無抵抗の仕草をするが、ランサーはなおも構えた剣を下ろさない。

「私もあなたたちと同じ考えよ。他のマスターと協力してホムンクルスの強奪犯は探す、その一方で……」

「私たちの中に裏切り者がいるのならそいつを倒すわ」

ランサーは兜の向こうからじつとアーチャーのマスターを見据えて、しばらくした後剣をようやく下ろした。

「ふん……まあいいだろう。今はそういうことにしておいてやる」
「わかつてくれたか……うん、それがいい」

「じゃあ命を奪い合いはなしだ。少々つまらないが……続きはホームクルスを取り戻した後でいいよな？」

再び構えられるランサーの不格好な一対の剣。

月光を受けて鈍い銀の輝きを放つ。

「ははははー！なるほどそういうことか。いやすまない、ウォーミングアップぐらいならいくらでも付き合ってやるさ」

先ほどまでの言葉の意味を理解して、アーチャーも笑いながら抱えていた砲塔にぐつと力を込める。

「そう来なくちやな。なんのために死んだ後も英霊として座にいるのか、わからなくなっちゃおう！」

「俺たちはサーヴァント、殺しあつてなんぼの生き物だろう？」

これにはさすがに予想外だったのかシャルロットも慌てたようすで制止しようとする。

だが、アーチャーもランサーも、そしてランサーのマスターでさえもすでに乗り気で

あつたようで——

「そりゃあいい。僕のサーヴァントとお前のサーヴァント、どちらが強いか腕試しと行こうじゃないか」

「この作戦に足手まといはいらない。なんなら僕たちだけでもこなしてみせる！ いけ、ランサー！」

武器を構えてしばらく佇むの二人の静寂。

雲が晴れて月が一層明るくなる。

最初の踏み込み、地面を抉るほどの蹴りでランサーが大きく前進した。

音速を超える跳躍で、聞いたこともないような風音が辺りに響いて周囲を威圧する。

二本の剣をまっすぐ構えると突き刺すような体制でアーチャーに切っ先を繰り出す。

アーチャーはこれに対して手にしていた砲塔の側面ですっかりと受け流す。

苛烈な剣戟が黒鉄の砲塔に当たると派手に火花が散っていったが、アーチャーに攻撃は届かない。

突撃にひるむことなく、受け流した後でアーチャーは手にしている大砲を盾のようにしてランサーの体にバッシュの要領で押し返した。

派手な金属音と共にシールドバツシユを受けると、鎧のランサーは再びアーチャーと距離を取った。

「おつとあぶねえあぶねえ。ペシャンコになるところだった」

「ぬかせ。自分から後ろへ飛んで衝撃を和らげただろうに」

「へへっ……」

次の踏み込み、もう一度アーチャーに突進するランサー。

今度は片方の剣を逆手に持ち替えて、十字に切りつけようとする。

アーチャーは再び剣戟を砲塔で受け流すが、二発目の斬撃が間に合わず体をそらした。

——うおつとつと……あぶないあぶない。

そうは言いながらもアーチャーの顔から笑みが失われることはなかった。

両腕の剣を払い無防備になったところでランサーの鎧に蹴りを入れようとする。

だがランサーの鎧は想像以上に堅く、重々しい金属音だけが響いてランサーにはビクともしていない様子である。

振り下ろしたもう一本の剣が再びアーチャーに舞い戻ってくる。

しかし三回目の斬撃が繰り返される前に、彼の持っていた剣はアーチャーの砲撃で起動をそらされる。

「おいおい、そんなのアリか……？」

ランサーの眼前に大量に繰り出される威圧感のある黒鉄の砲塔。

その一つ一つが彼の方を向いていた。

これには思わずランサーも生唾を飲み込んだ。

——恐怖心からではなく、好敵手の予感に打ち震えた。

「撃てえ！」

そして号令と共に森一行に行われる大規模な砲撃。

轟轟とした爆発音と爆炎がランサーを取り囲んだ。

「ランサーー！」

リヤオ・ファンが顔を真っ青にして爆炎の中にいる自分のサーヴァントの様子をうかがった。

手の甲の令呪はまだ消えてはいない。

そして次第に晴れていく爆炎の中で彼はランサーの姿を捉えることができた。

鎧は煤だらけではあったが、この攻撃をなんとか防ぎ切ったようだ。

ランサーは盾を構えていた。

その盾がアーチャーの砲撃をすべて受け切ったのは明白である。

彼が盾を構えていた部分だけを残して周囲の地面は植物死に絶える焦土と化す。

盾の後ろからランサーが冗談交じりに話しかける。

「おいおい、もう少し加減してくれよアーチャー。さつそく”切り札”を一枚使っちゃまったじゃねえか」

「悪いな、これでも加減しているんだが」

「ほぎきやがれ……」

ランサーが構えていた盾を再び背中にしてしまう。

今度は彼の顔を覆っていた兜も一緒に消滅し、その姿があらわになった。

見た目はアーチャーよりもさらに年上のように見える。

顎に髭を生やしているし、短い黒髪を後ろでまとめている。

その頬や額にはいくつもの傷が見られていて、堀の深いかつい造形であった。

「かーっ！ やっぱりまどろっこしいのは好かねえ。俺もいかせてもらおうぜ！」

剣を下ろすと、開いた両手を前に出して詠唱を始める。

「あ、あれ？」

「どうしたマスター」

ランサーが素顔を晒してからシャルロットは異変に気が付く。

「ランサーのステータスが急にわかるようになったの。どれもパラメータがかなり高いわ……それにこのスキルって」

「なるほど、そういうことか。あちらさんも本気になってくれるというわけだな」
「本気って……まさかそんな！」

「心配するな」

狼狽するシャルロットをよそにどこ吹く風でアーチャーは応えた。

「顔が見られてうれしいぞ」槍兵のサーヴァントよ。本気を出したつてことは、見せてくれるんだろう？ お前のとつておきの”宝具”をな！」

「ああ、せつかく盛り上がつて来たんだ、出し惜しみはしねえさー！」

詠唱を始めるランサーの元に魔力が凝縮される。

やがて可視化できるほどの光が細長い槍の形にまとまりだしたかと思うと、白く輝く”塔”が現れた。

「ま、待て！ ランサー、宝具はまだ温存しろと……」

リヤオ・ファンの声も届かないまま、ランサーはいましがた顕現させた槍をじつと構える。

射殺するような視線をアーチャーに向けて、魔力を一斉放出すると時を待ち構えた。

「ロン……」

——不意にランサーが両手に込めていた槍から魔力が途絶える。

彼は突然宝具の真名を解除するのをやめてしまった。

不発に終わった宝具。練り上げられていた魔力は行き場を失って周囲に霧散してしまっただけだ。

「……あ、あれ？ どうした、ランサー？」

「……誰だ!？」

ランサーが後ろを振り返り、再び剣を構えて気配を窺う。

「あ……まさか”見られた”のか!？」

「見られた……ってまさか、一般人に?」

——しまった。人払いの結界を一度貼ってから時間が経過していて、効力が弱まっていたのかしら。

そんなことを考えているシャルロットだが、こちらも事の重大さをじわじわと理解して、焦りが自己を支配しかけている。

リヤオ・ファンがランサー同様に周囲の気配を窺う。

目を閉じてリーダーのように周囲の気配を感じ取る魔術だ。

やがて気配を察知したのか、青ざめた様子でリヤオ・ファンが喚いた。

「サーヴアント戦闘を見られた……ランサー、跡を追え！」 秘匿の漏洩”はご法度だぞー！」

「……ちつ、仕方ねえか。おい、勝負はお預けだ。また会おう、アーチャー！」

「あ、おい！」

止めようとするアーチャーをよそに、ランサーとリヤオ・ファンは森の中へ消えていく。

アーチャーが指示を求めようとシャルロットの方を見ると、彼女の方もまた額に汗を浮かべて焦りの表情を浮かべていた。

「見られた……神秘の秘匿が……漏洩が……あああああー……」

先ほどまでの理知的な女魔術師の姿はそこには無く。

代わりに頭を抱えてうずくまる情けない少女の姿があった。

IV
— パーサーカー

英国 ロンドン 大英図書館

ロンドンの主要な国鉄、地下鉄駅を保有するセント・パンクラスの街。

駅から数分歩いたところには大英博物館と並び立つロンドンの重要な施設、大英図書館が存在する。

世界で最も重要な研究図書館であり、1億を超える資料がここに集結している。

雑誌、新聞はもちろん、地図、録音、特許、切手や絵画、ゲーム、音楽に至るまで、ありとあらゆるコレクションが内蔵された場所であるというのが一般人にとっての認識だ。

多くの魔術師たちにとってみればそれでもさして興味をもたらずものではないのだが、今しがた此処へやって来たエハッド・ティールマンという男は根っからの本の“ギーク”であり、閲覧室に入るなりその膨大な本の羅列に目をメガネのレンズ越しに輝かせては手当たり次第に振るような本を手にとっては置き、手にとっては置くという作業を繰り返していた。

“キープ”と称して読書用のテーブルに置かれた分厚い本がぎつと数十冊という

ころだろうか、その後も司書の女性に窘められるまで本の選定は勧められた。

「すごい……この量はすごいって。『バーサーカー』はやっぱり”音楽”が聞きたい？」

「街で聞こえて来た、あの音楽は何だ。まったくんでもない奴らだな現代人というの
はー」

「ああ……お気に召さなかったかな？ やっぱり……」

「いや、最高だ。思いのままを吐露するあの姿勢、見事なものだな。ろつくんろーるか
……」

「気に入ったんだ!？」

エハットのすぐそばに白髪で険しい表情の壮年の男性がお供についていた。

現代のヨーロッパにしては少し古めかしいその黒いジャケットとワイシャツにいた
ひらひらのジャボは、周囲の視線を集めていた。

そんなことはつゆ知らず、”バーサーカー”と呼ばれた男と、そのマスターと思しき
青年はあるお目当てのものを探す途中にある。

——そうはいっても、やはり折角来たのだから観光の一つでもしておこう。

そのような軽い気持ちでエハットはサーヴァントを霊体化もさせずに大英図書館を
訪れていた。

「わ、わかっているって……まずは情報収集をしないと。できれば詳細なロンドンの地図

が欲しい。工房を構えるのに最適な場所や、龍脈に富んだ戦場……リサーチするのはこんなところだな」

「しかしマスターよ。此度はバトルロワイヤルではなく、ホムンクルス強奪の犯人を追うだけなのではなかったのか」

「本当に、それだけで終わるならいいんだけどな」

取り出した目録に目を通したままエハッドはそう答えた。

「だが、その後はどうだ？ 俺は今回の事件がただの奪還で収束するとは思えない。聖杯戦争だぞ？ 一生に一度魔術師が経験できるかどうかともわからない奇跡の儀式にくわえて、賞品はなんでも願いが叶う万能の願望器……人間の欲望を舐めてはいけないよバーサーカー」

「つまり、我々は既に“強奪犯からホムンクルスを取り戻した後”に向けて動いているというわけか」

「そういうことだ」

「我々に勝機はあるのか？」

「十分にある。バーサーカーの戦闘力は折り紙付きさ」

『狂戦士』のサーヴァント。

座に登録される者は当然ながら、その英雄が残した逸話や名声に大きくされることに

なる。人々にとってそれが有名なものであるほど、あるいは洗練されたものであるものほど、強大な力を得られる。

一方で神秘の薄くなった近代の世のサーヴァント、あるいは詩人、芸術家といったサーヴァントは本来聖杯戦争には向かないとされている。

そうした戦闘能力を持ち合わせないサーヴァントたちを補強させるために『狂化』とよばれる措置が英霊に施されることがある。狂化を施されたサーヴァントはマスターとの意思疎通が困難になる代わりにステータスが強化され、生前よりもサーヴァントとして戦うことが可能になるのである。

狂戦士を呼ぶ方法はその実簡単。

詠唱に少し文言を加えるだけだ。

だが、エハツドの召喚したこのバーサーカーは到底バーサーカーとは思えぬ理知的な性格と紳士的な立ち振る舞いをしていた。

すでに彼がこの壮年の男を召喚して数日が経過していたが、多少人の話聞かない頑固な性格であるところ以外に意思疎通で困ることは何もなかった。

——もしかして詠唱に失敗したんだらうか。

本人いわく「私の生きざまはまごうことなきバーサーカーだろう」としているし……ううむ。

考え事をしていながらページをめくっていると、やがてお目当ての資料にいきついた。

「あつたぞ……よし、ここまで詳細なら、候補地はいくつか見つかるだろう……バーサーカー？」

ふと隣にいたバーサーカーの気配がなくなつたことに気が付いて、本から顔を上げるエハツド。

顔を挙げた先にいたのは壮年の男ではなく、エハツドと同じくらいの年齢で、本を何冊か抱えた黒髪の青年だつた。

「あつ……えつとすみません」

「い、いえ。お気になさらず……」

バツが悪い表情を浮かべて青年はそそくさとその場を離れていく。

——なんで謝つたんだろう。くそ、それより変な人だと思われたらどうか。

今の顔、日本人ぽかつたなあ。日本ではこういう周囲から見て痛い奴のことをなんて言うんだつたか……。

いやそれより、バーサーカーは一体どこへ行つた？

いくらその”割と溶け込める身なり”でも、さすがに行動如何では面倒なことになる。

急いで探そうと席を立ったエハツドの前に、再びバーサーカーが訪れる。

「うわっ！」

「図書館ではお静かに、だそうだ、マスター」

「誰のせいだと思ってるんだよ！」

「んん？ すまない聞こえなくなってきた」

「お前っ……さつきまで普通に聞こえて……!!」

エハツドが戻って来たバーサーカーの方を見やると、彼は一冊の本を手に抱えていた。

「それは？」

「私の名前の記された本があつたのでな。この私がバーサーカーで呼ばれるとは、後世の歴史家はいつたい私をどのような目でいるのか、非常に興味が沸いた」

「ああ……そう」

エハツドの机の隣にバーサーカーが座ると自分の“真名”がタイトルに書かれたその本の頁をめくり始めた。

何も珍しい本ではない、エハツド自身幼いころに読んだことあるような伝記だ。

どうやらマスターの工房候補地さがしの手伝いをする気はないらしい。

こうなったら彼は本を読み終わるまでここを離れるつもりはないだろう。

——確かにパーサーカーが欲しいとは思ったが……まさか、あなたが呼ばれてくるなんて。

自分の伝記を読むこの英霊を見つめながら、エハッドは自身の境遇に奇妙な心持ちでこうつぶやいた。

「——Thus fate knocks at the door (運命は斯く扉をたたく) か……」

エハッド・ティールレマンはコーンウォールの片田舎に構える魔術師一家の三男である。

魔術師世界では非常に重要な位置を占めているアインツベルンやマキリなどにもひけをとらない歴史を持った魔術師の家系である。

逆を言えば、“歴史”のみである。

彼らの家系は魔術師世界の歴史において特別な偉業を成し遂げたわけではない。

彼らの一族はいつだってその渦中の外にあり、その偉業を羨ましそうに記録し続けるだけの存在であった。

どちらかと言えばいつもその周囲を漂うだけであり、おこぼれにあずかろうとしているような存在であった。

彼らの一族を笑いものにする魔術師も多くいたが、それでも神秘の薄れていくこの新しい時代においても衰退することなく魔術刻印を継承していくことに彼らは誇りを持っていた。

長年一族の中から”ロード”を輩出することもできずにいたティールマンの一族だが、先日から魔術協会への報告に訪れていたエハッドティールマンに文字通りの”運命”が訪れることになる。

アトラス院から訪れていた錬金術師たちとの面会。

ロンドンで行われるホムンクルスの奪還作戦というの名の聖杯戦争。

時計塔での動乱にエハッドも心をざわつかせてその様子をしばらく見ていたが、次に時計塔の上層部からエハッドに対して提案が持ち掛けられることになる。

『ロンドンでの聖杯戦争に参加せよ』

独立してこそいたが、ティールマン家もそれなりに魔術協会に恩を感じてはいた。

魔術協会に忠誠を誓うため、今後の立場のためにも”功績”を求めていたエハッドはこれを承諾。

さいわい長い歴史を持つ魔術師の家系と、上質な魔術刻印を認められたのか、無事に

聖杯にも聖杯戦争の参加者として認められたようだ。

手の甲についたマスターの証、令呪は音叉とそこから響く音波のような美しい形をしていた。

——本当に、常に渦中の外。ド田舎にいても魔術刻印だけは自信があるんだよな。

その代わりにこれと言った成果も出せていないのだが。

過去に行われた冬木の聖杯戦争、そしてアインツベルンの流用から始まった亜種聖杯戦争、聖杯大戦においてもティーレマンはその外側にいた。

だからこそ、時計塔上層部の人間は彼に話を持ち掛けたのかもしれない。

エハツドはそのように彼らを分析していた。

——であるなら、舞い込んできたこのチャンス逃さない手はないよな。

どのみちこのままでは自分の生きている間に大した成果もあげられずに終わっていくのだろう。

家督は自分よりもしっかり者の長女がしっかりと継いでくれたし。後に憂いはない。

紳士的なふるまいを忘れない、意思疎通のできるバーサーカーは今エハツドの隣で黙って書物を読んでいる。

聖杯戦争で召喚されるサーヴァントは、聖杯戦争に関する事柄やある程度の現代の言語機能を知識として与えられる。

聖杯戦争にかかわるものであればより鮮明に、そうでないものは霧がかかったように曖昧な知識である。

故にエハツドも、サーヴァントとの意識の齟齬が無いようにと図書館で情報収集を行うことにしたのだが、

「……大丈夫だろうか、このバーサーカー」

いまいち覇気を感じないこのバーサーカーに一抹の不安を抱えていた。

このサーヴァントの召喚は全くのイレギュラーである。

それも彼に言わせれば、おそらくは「運命」というやつなのかもしれないが。

ルードヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン。

彼に大した神秘性はない。

彼は武勲や武勇に優れた英霊ではない。

しかしながら彼の紡ぐ音楽、それは紛れもなく後世にも残る傑作である。

そうした業績は「座」によって音楽魔術に昇華されたと本人はいうが。

果たして「狂化」というものをどれほど信用していいものか、エハツドには決めかねる問題でもあった。

図書館も閉館の時間が近づいている。

読書室の机も人がまばらになり、残っているのは試験勉強やレポートに追われる学生ぐらいである。

読み終えた本を返そうと本棚に戻るところで、エハッドはふと先ほどの青年とすれ違ひになることを気づいた。

かばんを肩にかけていて、メガネをかけている。

年齢はエハッドより若いくらいで、カバンを肩にかけている。大学生だろうか。

「あ、さっきの……」

「あなたは……」

互いに気づいて目が合うと若干気まずさにはにかんだが、青年の方からエハッドに尋ねる。

「さきほどもたくさん本を置いていましたね。好きなんですか?」

「そうですね。本は好きです。静かに読書出来る時間は至高の時ですよ」

「もしかしてあそこにいる白髪のおじさんはあなたの知り合いですか?」

「え、ええ。まあ、そんなものです」

曖昧な返答に少し目を丸くする青年であったが、その前に今度はエハッドから尋ね

る。

「あ、あなたはどんな本が好きなんです？」

「僕は詩や物語をもつぱら……それこそ世界中のありとあらゆる小説を」

「へえ、それじゃあかなりの読書家じゃないですか」

「いやいや、この図書館の1パーセント分だって読めてはいませんし」

「実は今日は友人に本を勧めようと思って探しているんです。あなたなら何を勧めます？」

「俺が？ い、いや。そういうのは苦手なだけ……ううん、そうだなあ」

腕を組んでうんうん唸りながらふと青年の後ろの本棚に目をやると、目に飛び込んできたタイトルが一冊。

「……あ、じゃあこれとか？」

「これですか……ああ、なるほど。確かに気に入ってくれそうだ」

タイトルに目を通してメガネの青年は納得した様子でその本を腕に抱えた。

「ありがとうございます。じゃあ、これにします」

「本当にこれでいいのか？」

「ははは、ただの気まぐれですよ。それに大抵の本は気に入ってくれましたから、今回も

……」

「そうだと嬉しいな」

そんな会話がが続いていると、いよいよ追い出さんとばかりに館内にアナウンスが鳴り響く。

「おつといけない。もう本を返してこないと」

「ありがとうございました。またお会いできたら、何かお話ししましょう」

——またお会い出来たら、か。そうなるといいんだけど。

先行きは未だ見えず、この聖杯戦争で自分がどのようにかかわっていくかも曖昧ではあるが。

——それでも挑戦してもいいんだろうか。

かつて生前のバーサーカー、”ルードヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン”がそうしたように。

アナウンスにようやく腰を上げる人々。

日はすっかり落ちていて外は暗い。

自分の勧めた本を抱えて青年が入り口の貸出受付に向かうのを見届けた後、エハツドもまたバーサーカーの元へ戻る。

「バーサーカー、それ借りていくか？」

「インスピレーションは既に得ている。この聖杯戦争で、私が何をなすべきかも自明の

「ハハ」

あの肖像画のような険しい表情を浮かべながら、バーサーカーは答えた。

「へえ……どんな使命を帯びているんだ？」

現代に興味津津なバーサーカーを見て、エハッドも好奇心を掻き立てられる。

バーサーカーからの返答はシンプルで意外なものであった。

不敵な笑みを浮かべて。

「英雄たちが我々を待っている。この戦いの行く末を、私は音楽にしたためたい」

「サーヴァントになっても、作家症は治らないってわけか。もしかして作家たちってみんなバーサーカーで召喚されるのか？ モーツァルトは？ 君の師のサリエリは？」

「……フフフ」

「なんだよ、その不敵な笑みは」

怪訝そうではあるが、エハッドの内心は高揚していた。

——なるほど英霊の座というものは、一応マスターの性格に合わせたサーヴァントを寄こしてくるらしい。

「それを語るのももう少し先にしたい。今はまだ前奏曲、序曲、序幕」

「……もし、この聖杯戦争がひとつのオペラだとしてお前もその登場人物のひとりなん

だろう？ 結末はどうするつもりなんだ？」

エハッドはバーサーカー流の言葉を使って問いただす。

バーサーカーの答えは少しひねくれている、それでも簡潔だった。

「著者が主役になってはいけない」なんてくだらないルールだ、一体どこの誰が決めた？」

V
— セイバー

英国 ロンドン 繁華街

——この頃の世界情勢というものは、ここ数十年でもかつてないほどの緊張の中にあると言つても過言ではない。

このヨーロッパの少し離れて北にあるブリテン島でさえ、その影響を少なからず受けていた。

中東での動乱をきっかけに人々は故郷を離れることを余儀なくされ、難民が現れる。

各国が対応に追われている中で、イギリスにも決断を迫られた。

最終的にイギリスにも多くの移民が流れ、ロンドンの人口は増大。

文化の違いから諍いに発展することも多く、現地の住民たちも共生の難しさを経験として持っている。

これらの出来事はすべて魔術とは関係なしに刻まれてきた歴史である。

魔術などなくとも、世界は銃器や爆弾によつてたやすく危機に瀕するものである。

まして世界から隔絶されたはずの、錬金術師や魔術師などという存在がこの世界に露見されでもしたら、世界中の人々は一体どんな顔をするだろうか。

とある軍事国家の首相が、長年の財力と権力をもって実行してきたそれをいともたやすく覆すようなモノが、果たしてこの世の地中奥深くに隠されているなどは想像もしえないだろう。

これからセイバーを召喚し、そのマスターとなつてしまふごく普通の大学生、カナウ・アルバーンは小説をこよなく愛してはいたが、それら“魔法”といったものが多くの場合“偽物”であるという一般的な分別は当然持ち合わせてはいた。

この日は研究室で課題を提出して用事を済ませた後、同学年の友人とカフェでのんびりしていた。

本人曰くなんとも普通な一日になる予定だった。

落ち着いた茶色い木造の空間は、彼らのお気に入りの穴場である。

有名チェーン店のカフェは少しばかり賑やかすぎて、カナウの好みの雰囲気ではなかった。

「ほら、まーたサイレンだ」

「早く捕まるといいね、脱獄犯」

「目撃証言はたびたび出てるらしいが、奴さんはかなりの俊足らしいからな。まるで二ンジャヤ」

円卓に向かい合つて座り、机の上にノートやアイスコーヒーを広げる学生が二人。

この静かな空間にも徐々に浸食を開始するけたたましいサイレンにため息をつきながらカナウと、彼の友人アーサーは気だるげな会話を続けていた。

サイレンの主が離れていくのを確認すると、店には再び静寂が訪れた。

ここ最近毎日鳴っていて、聞きなれたという感じでアーサーは冗談っぽく笑い飛ばす。

「そういえばオカルト好きの間じゃ色々噂になってるらしいぜ」

「噂？」

頭の後ろに両手を回し、枕のようにして椅子にもたれかかりながらアーサーは話し始めた。

「どうもここ最近のサイレンは連続通り魔事件によるものらしいんだ。死亡している者もいる」

「そんなこと、ニュースで全く言われてないけど……」

初耳だとカナウは返す。

「何故かニュースにならないんだよな。ほら、同学年のリサっていただろ？」

「リサ？ そういえば先週から顔を見てないけど……え、まさか」

「実は聞いちゃったんだよ、教授たちが話しているのを……あいつ、入院してるんだと」

——アーサーにしては今回の話はよくできてる。

興味がわいたのか、身を乗り出してカナウはアーサーの言葉に聞き入った。

「運ばれてきたリサが、両親や見舞いに来た教授に言ったらいいんだ。」黒い犬「を見
たって」

”黒い犬”!

目を見開いて、喜々としてカナウは復唱する。

「ああ、そうだ……死神犬だよ。なーんてか情報統制がされているっぽいんだよなあ。
イギリスで死神や幽霊なんて、別に珍しいものでもないだろうに」

「そういうニュースなら喜々として報道しそうなものなのにね」

「ああ、だからこそ連中が期待してるんだよ。『今度は本物かもしれない』って夜中に十
字路という十字路を回っているらしい」

その様子を思い浮かべてニヤニヤしながらアーサーは尋ねた。

「お前も興味あるか、カナウ?」

「でも、死神犬って見たら死ぬんだろ? 仮に本当だとしても危険じゃないか?」

「まさか、いくら犬でもさすがに見ただけで死にはしないだろ!」

「だといいいけど……」

——死神犬か。こう言っちゃなんだが、ロンドンの街を賑わす都市伝説としてはロマ
ンのある話だ。

何より安易に吸血鬼とか、怪人とか持ち出してこないあたりが渋くて、現実味がある。

S F 小説もたまには読むが、最近は悪魔だとか吸血鬼だとか食傷気味だったからな。

「オーケー、とりあえず夜道には気を付けることにしよう。実害も出ているみたいだからね」

「ああ、その方がいいだろう。お前、いつも図書館通いで帰宅が遅くなるんだろ？」

「まあね。今日も行くつもりだ」

「本を借りにか？」

「読ませたい人がいるんでね」

いつの間にか氷が解けて薄くなっていたコーヒを一気に片付けると、カナウは広がっていたノートをまとめてカバンにしまい込む。

「都市伝説がいるなら、ヒーローがいたっていいとは思うんだけどな」

不意につぶやいた言葉が波紋のように自分の頭で反響する。

少し面を食らったような顔をして、アーサーが冗談気味に尋ねる。

「バツ●マンみたいなか？」

「ロンドンってそういうのいないだろ？」

「いるにはいるさ。アメコミほど人気じゃないだけで」

「だといんだけど」

「あー……ええと、今度お前の読んでる本、俺にも貸してくれよ。あんまり長くないやつ」

「ありがとう、今度用意しておくよ。」

友人に手を振ってカナウ・アルバーンは喫茶店を後にした。

浮かない顔をして去っていく友人を窓ガラスの向こうから眺めてアーサーは呟いた。

「しまった……今のコミュニケーションはだめだったかな。カナウは面倒くさいやつだからなあ」

そして自分の分のコーヒーを一気に飲み干した。

——ヤバイ。

——ヤバイヤバイヤバイヤバイ。

バーサーカーの言葉を引用するならば、近道にハイドパークの敷地を横切ろうとして

いたこの瞬間が、カナウ・アルバーンにとつての「運命」の予兆であった。

彼の人生史上で最も早い速度で左右の足を交互に動かし、夜の森の凸凹した道もものともせず、彼はかばんを小脇に抱えたまま脱兎のごとく走り続けていた。

後ろから追いかけてくる得体の知れないバケモノたちから逃げて、” なにも見なかったことにする” ためだ。

だが追つ手は簡単には諦めてはくれない。

彼らもまたカナウにとつて最悪な結果で” なにも見なかったことにさせよう” としていることは明白だった。

——誰だ!?

——あ……まさか見られたのか!

「なんだ……いったいななんだ!」

——時代に似つかわしくない格好の男が二人。『魔術師』という言葉……。

普通の人間ならおとぎ話か、さもなくば漫画の読みすぎだ一蹴されることだろう。

あのサーヴァントたちから放たれる人間離れた武器や奇跡とも言える” 何か” 。

そして殺気。目撃者を残さないとする強い眼光。

彼は瞬時にそれらが” 本物” であることを確信してしまった。

見てはいけないものを見てしまったことにはすぐ気が付いたが、目の前で繰り広げら

れる戦いに足がすくみ、反応が出遅れてしまつていた。

全身から体温が引いていくのを感じると、ようやく無我夢中で振り返り、来た道をダツシユで走り出していた。

まるで一挙手一投足がスローモーションのようだ。

彼の中で走馬灯という言葉がよぎる。

カナウ・アルバーンはあまり運動は得意な方ではない。

どちらかといえば室内で本を読みふけるような人間で、スポーツも大学の講義や友人との付き合いでやる程度のものだ。

これまでの彼の日常はいたつて平凡である。

この日もセント・パンクラスにある大英図書館で数冊の本を借り、それを彼の新しい友人に紹介しようというところであつたが、それが——

——それが、こんなことになるなんて。

——あの男女の魔術師？もずいぶん若かつたな。くそ、もつとそういうのは隠れてやれよ。未熟者め！

彼はもちろん魔術師の事情など知らない。

彼らのかけた人払いの魔術が不完全だったのかどうかはこの時誰にも定かではなかつたが、彼は半ば八つ当たり気味にあの場にいた名も知らぬ四人を心の中で罵倒し

た。

——私を呼べ。

——私を呼ぶがいい、マスター。

——さあ、呼べ。呼ぶんだ。

——お前は聖杯に選ばれた。

しばらくして再び街の景色が見えて来た。

マーブル・アーチ——先ほどカナウが横切つて近道にとこのハイドパークに忍び込んだ方角である。

ロンドンには夜間も賑やかなものだ。

適当に警官か、バスの運転手でも捕まえて、さつさとここから離れてしまえばよいだろう。

——逃げ切れる！

そう確信したのもつかの間。

「……うわっ！」

全速力で走るカナウをもともしないスピード、彼の目の前に一つの影が下りたつて、衝撃と共に土煙が巻き上がる。

突然の出来事に驚いてバランスを崩したカナウはそのまま地面にしりもちをついてしまった。

影の方を見ると、先ほどカナウに対して鋭い視線を向けた鎧兜の男がすぐそばにいた。

両手に剣を構えていて。

「よう、こんなところで何してるんだ？」

「……!!」

走りきったばかりのカナウの体は、動機が収まるどころかさらにその拍動を速めていく。

「お、お前たちはいったい……」

足が震えて立てぬままのカナウ。

「そのセリフからして、お前は“こちら側”の人間ではないな」

恐る恐る尋ねるカナウの言葉にも、ランサーは冷酷に返す。

「それにしても人払いすらしつかりできてなかつたとは、マスターの今後が少し心配だな」

「何か言つたか、ランサー？」

遅れてランサーの後を追いかけて来たマスターの少年。

カナウも同様にこの少年に対してはその幼さに先に目がいく。

「子どもがどうしてこんな……」

「うるさい、僕を子ども扱いするな」

「子ども」という言葉に激高した少年は右手の袖をまくり上げると、ひじから指先にかけて電気回路のような直線が複雑に絡み合う文様が浮かび上がる。

そのまま指先をカナウに向けたかと思うと、次の瞬間銃でも撃つかのように赤黒い

弾丸がバチバチと音を立てて放たれた。

「うわあ！」

弾丸がカナウの肩に直撃する。鋭い痛みと、直撃した個所から徐々に体温が失われていくのを感じていた。

恐る恐る彼が見てみると肉体の方から先が青くなつていて、その色が徐々に広がっていくにつれてカナウの悲鳴は大きくなる。

「な、なんだこれ。なにを、した!？」

「フン、ガンドも碌に対処できないとはな……本当に巻き込まれただけの一般人か。シャルロットのやつ、人払いも碌にできないとは、今後が少し心配だな」

「……」

ランサーはリヤオフアンの方を見て少しため息をついたが、すぐにカナウを視線に戻しながらマスターに指示を仰いだ。

「このままガンドで苦しみ、死ぬだろうが、俺が楽にしてやることもできなくは無いです。いいよな、マスター?」

「だめだランサー。こいつは僕が殺す」

「……了解した」

苦しむカナウを前にしてリヤオ・ファンは半ば独り言のように続けた。

「倫敦の一大事だつてのに、お前たちみたいな平民がのうのと生きているのを見ると、虫唾が走るんだよ」

「どれだけ努力してると思ってるんだ。この崇高なる星の歴史の裏で僕たちがどれほどの活躍をしているのか、お前にわかるか!」

「長く苦しいものだ。あらゆるものを犠牲にして……そんなの割に合わないんだよ」

「せめて僕たちを楽しませるようにして死んでくれたら文句はない。何分あがけるのか

見物だなあ……!」

語尾が強まる。

13歳前後の子どもが言うには、それはあまりに残酷で冷酷な言葉だった。

カナウ・アルバーンは目の前の顔をゆがめた魔術師を前にして、ただただ震えて悲鳴を上げることしかできない。

——痛い。それでいて徐々に意識が薄れていく。肩の先から感覚がなくなっていく。

左手から先は既に何も動かなかった。

青い痣が広がり首筋まで迫っていた。

——嫌だ。こんなところで死にたくない。死んではだめだ。

もがき苦しんでうずくまるカナウ。視界の端でふと抱えていたカバンを捉える。

布のカバンからわずかに漏れ出す光が見える。

——助けてくれ。誰か、誰か助けてくれ。

既に意識を保っているのも限界だったはずのカナウ・アルバーンは、その光に手を伸ばしていた。

目の前の芋虫のようにのたうち回る”ただの青年”を前にしてリヤオ・ファンはただ満足げに、魔術師の何たるかををつらつらと語っていた。

そして、カナウがその光に手を伸ばしていたことにも気が付くことが無かった。

「……」

ランサーだけはその光景をただ静観していた。何かの予兆を感じ取って——

——新たなサーヴァントの召喚を予見して。

そして森に一陣の風が吹いた。

少年が光に手を伸ばすと、光はあつという間に拡散していき、周囲をきつく照らしていく。

よそ見をしていたリヤオ・ファンだったが、突然の光に動揺し悲鳴を上げる。

「なっ……なんだ！ 敵襲か!？」

「いや違うぞマスター……こいつは」

慌ててランサーの場所を確認しようとするリヤオ・ファンとは対照的にランサーは冷静に対応する。

ランサーはこの輝きの中でも決して顔をそらさない。

目の前で、新たなサーヴァント——新たな強敵の瞬間を今か今かと待ち望んだ。

——誰が来る？

——召喚陣も無しで、ただの一般人が、一体何を召喚する？

ランサーは期待に胸を膨らませ、その誕生を一挙手一投足見逃すまいと召喚陣を見つめていた。

英霊召喚の神々しい光が柱となって天まで届く。

倫敦の陰鬱な雲を割いて高みに届くと、代わりに稲妻が下りてきて光の柱は徐々に狭まっていき、その中に人影が増えていることにランサーは気が付いた。

風が止んだ。

代わりに倒れていた青年をかばうようにして一人の「騎士」が剣を地面に突き立てて堂々と立っていた。

ランサーはその体躯に目を見開いた。

召喚されたサーヴァントは鎧兜に身を包んでいたが、顔を隠してはいなかった。

現れたその騎士は、騎士にしては華奢な体躯であった。

頭部は羽のような装飾が付いていて美しさを重視していた。

灰青色の軽そうな鎧に身を包み、手にしていた剣は両手持ちの、豪華な装飾の込められたものである。

そして何より、召喚時に風で吹かれていた長い青の髪の毛、控えめではあるが少し山なりに突き出た胸部の装甲。

そのサーヴァントは女性であった。

「女……?」

ランサーが呟く。

今しがた現界したそのサーヴァントがランサーを見て開口一番言い放った。

「サーヴァント、セイバー。汝らの不正をただすため、ここに推参した誇り高き騎士である！」

VI
— ライダー

ロンドン郊外 ハイゲート

——ヤバイ。ヤバイヤバイヤバイ。

見つかるのは時間の問題だとは思っていた。

男はついに修羅へと足を滑らせた。

街灯もない夜の森を、追っ手から逃れるために男は全速力で走り抜けている。

着の身着のまま何も持たずに外へ飛び出し、潜伏場所にこの墓地を選んだ。

左右から照らされるライトの応酬。今や逃げ場はほとんどない。

普段は静かな夜の森であるが、この夜の大脱走に近くの動物たちは震えてその場ですくまるか、すぐに距離を取って逃げ出すかの二択を迫られている。

すぐ近くで銃声があった。威嚇射撃だ。

続いて響く警官の怒号。

心臓が口から出そうになるほどの衝撃に瞳孔は最大限まで開き、ライトに目をくらませながらそれでも男はひたすらに左右の足を全速力で交互に動かしていた。

「ちくしょう……なんでこんなこと……!!」

息も絶え絶えに悪態をついて、「脱獄囚」はハイゲートの森で命がけの逃走劇を続けていた。

すでに十数人も警官たちに彼は囲まれていた。

男の名前はセルデン・オースティン。

十数年前、妻とお腹の子どもを殺害した罪で捕らえられた囚人である。

当時はシリアルキラーとしてしばらくの間ニュースでトップを飾った大事件の張本人である。

セルデンは一貫して無実を主張したがこれが聞き入れられることはなく、判決はイギリスでは最も重い無期懲役で裁判は締めくくられた。

被害者の遺族、そしてセルデンの両親でさえ激昂した。

裁判結果ではなく、彼の犯行に。

彼の無実を主張するものは彼以外にはいなかった。

警察の調べでは証拠は決定的であり、彼以外に犯行を行うことが可能な者はいなかった。

——魔術師という可能性を除いては。

男はコンクリートの独房で今後の長すぎる時間を過ごすはずだった。

しかしこの世のすべてに絶望した男の前に、ある時現れた老人が彼に復讐の炎を起こさせることになる。

「セルデン・オースティンというのはおぬしのことか？」

「……」

独房には独自のカーस्टがあつた。もはや終身刑ですでに十数年の時を過ごしていった。

彼も入所当時は先輩の囚人たちにこき使われるような小物であつたが、やがてそれもすぐに終わる。

腕つぶしには自信があり、体格も大きく目つきは肉食動物のように鋭かつた。

投獄されて間もなく彼のカーストは頂点へと達するが、それと同時に酷く心を消耗させてしまつていた。

いつそ本当に罪を犯して投獄されていたのならば、諦めもついていただろう。

入つてきたばかりの向かいの独房の老人に礼儀の一つでも教えてやろうかと思ひ立つたセルデンは、起き上がつて老人の方を格子越し見た。

外見の年齢はゆうに100歳を超えているように見えて、生きてるのが不思議にさ

え思えた。

「おいおい、その体でどんな罪を犯したってんだ、あんたは？」

——このじいさんは何をやらかしたんだ。

俄然興味がわいてきたセルデンはカーストの事も忘れて老人に尋ねようとした。

だが、尋ねる前に老人の方からセルデンへ言葉を投げかける。

「セルデン・オースティンというのはおぬしのことじゃな」

「……そうだ」

「十数年前、妻子を殺して終身刑になった？」

「俺は殺してない」

「殺した、というのが世の中の判断らしいがの」

セルデンは老人を驚かせようと、格子を拳で殴りつけて派手な金属音を立てる。

周囲で気弱そうな他の囚人の喚き声上がるが、彼らの気にするところではない。

ところが老人は関せずといった様子で彼の愚行を眺めていた。

「……真実を教えてやろうか、セルデンよ」

「なに？」

老人の言葉から気になる言葉が聞こえてきて、セルデンは再び静かになった。

「お前の愛する妻子を殺した者の正体を教えてやろうと言っている」

「……どういふことだ」

セルデンの表情が一層険しくなる。

「お前の妻子を殺した人物……」魔術師「について教えてやろうと言っている」

再び鉄格子を叩く激しい音に、今度は怒号が飛ぶ。

「おいクソジジイ！ 四股どころか脳みそまでダメになつてゐてえだな！」

「人をイライラさせて楽しいか!？」

「……」

セルデンの怒号に、老人は何も答えない。

しかしセルデンが興奮したあとの息継ぎに一度言葉が止むと、しばらくして再び口を開いた。

「おぬしの妻子は魔術師に出くわし、そして口封じに殺された」

「……それ以上喋ると殺す」

「やれやれ、強情じやのう」

「では、実際に見せるのが早いかのう？」

セルデンはギョツとした。

聞こえるはずのない声が後ろから聞こえてすぐに振り返ると、そこには四股を持った

老人の姿があつたからだ。

両腕で杖を突いて、老人はセルデンのすぐ後ろにいた。

「なっ……！」

目の前の出来事をうまくのみこめずに、セルデンは目を見開いたまま立ち尽くす。

「な、なんだ。刑務官のやつら、俺をだまして笑ひものにしてしようとしているのか？」

「目の前の出来事は紛れもない事実だ。秘匿された存在。これが魔術師というものじゃ」

「ありえねえ……そんなのいるはずがねえ……！ 手品か何かを使つて」

——手品か何か。

セルデンがそのような言葉を口にして老人は突然大声で笑い始める。

明らかにこれまでの様子と違う声量と迫力のある笑い声にセルデンは委縮し始める。

——ビビってる、この俺が？

ふと鉄格子の向こうの、先ほどまで老人がいた側を見やる。

再び老人は反対側の独房に収められている様子が見えた。

そして後ろから杖を突いた老人の姿は消えていた。

取られた目をこすったり、自らの頬を叩いたりしてこれが夢でないかと確認するセルデン。

そんな彼を見て四股のない老人が再びにこやかに微笑む。

「近いうちに、お前にチャンスが訪れるじやろう」

「魔術師たちに”復讐”するチャンスがのう」

枯れた声が独房に響く。

老人の言葉はまるで甘い蜜のようにセルデンの心を突き動かそうとしていた。

「この世の裏側の住人。魔術師たちだ。よく覚えておけ」

「此処を出たらずはハイゲートに行け。復讐するなら、このチャンスを逃さない手はないぞ」

「あんたは俺に復讐してほしいのか……なんのために？」

セルデンの声は未だに興奮と恐怖で震えている。

「……」

老人は何も答えない。

「教えてくれ、魔術師ってやつらのことを！ 教えろ！ クソジジイ！」

老人は何も答えない。

「俺の家族を殺した魔術師はどこにいる！ 教えろ！ さもないと！」

格子をガンガンと揺らして男は老人に迫る。

老人は何も答えない。

騒ぎを聞きつけた刑務官が老人の容体を確認する。

老人は静かに眠っていた。

ほどなくしてセルデンの收容されている独房で信じられない出来事が起きた。

外に出たの囚人たちの運動の時間の時である。

クリケットをしていた囚人たちだが、バッターの一人がボールを信じられないほど飛ばしてしまい、守備をしていたセルデンはボールを探しに刑務所の隅まで走っていた。

そこで彼は見つけた。

刑務所の壁の一部が消失していて”外の世界”へつながっている。

恐る恐るセルデンは壁を見つめた。

水面のようにゆらゆらと壁が動いていたが、誰も何も気が付いていないようであった。

緊張につばを飲み込む。彼はこの後の自分の進退を天秤にかけた。

——このままここにいても、どうせ終身刑でみじめに人生を終えるだけ……。
ならばせめて、”やれるだけやってみる”というのもアリか？

——何より、家族の仇を……魔術師を殺す。そんなチャンスが本当に……。

セルデンは次第に壁に浮かび上がっていた波紋が消えかかっていることに気が付いた。

決断を迫るように外の世界は次第に見えなくなつて元の壁に戻ろうとしていた。

「！」

この出来事がついにセルデンを船へ乗せることとなる。

宛てもない過酷な航海になることは彼も確信していたが、それでも修羅に身を落とすことへの躊躇をついに捨て去つた。

彼は信じられないほどの反射神経を見せると、一気に壁に向かって跳躍し、やがて姿を消してしまつた。

ハイゲート墓地の中心部、老人に言われた場所に向かつてセルデンはひたすらに走つていた。

現代の警察の捜査力を甘く見ていたわけではないが、それでも驚き憔悴していた。

——こうもあっさり見つかってしまうとは。

しかしながら彼の目標地点で合ったハイゲートの墓地にはすでに到達している。

このまま何が待つかもわからない場所へただ継るようにしてセルデンは走り続けた。不意に脇腹に激痛が走る。

痛みによって急に感覚が鋭敏になった。

銃声が周囲で鳴りやまないが、そのうちの一発の銃弾がセルデンの脇腹をかすめたのだ。

アドレナリンが爆発しているためか、それでもセルデンからスピードが失われることはなかった。

投獄前は特殊部隊で国のために身を粉にして働いていた。

この程度の怪我で止まれるはずが無かった。

——バカなことをしたとは思わない。

不思議と正しいことをしている工程完了だけが募り始めていた。

これはただの復讐ではない。真犯人を捉え家族の仇。

そのための一手だ。

——だから、なんとしてでも生き残らなければならない。

「……!!」

ついに原生林を抜けて、開けた通路に場所に出る。

セルデンは大きく目を見開いて、その場所をじつと眺めた。

周囲に墓石がひとつも無い敷地、十字路の小路の上に大きく描かれた赤い円形の陣。見たことも無い字が陣に沿うようにして書かれている。

セルデンもゲームぐらいはしたことがあるので、このような陣に縁がないわけではなかつたが、それを力なく笑った。

——やっぱり、子どもだましか。あーあ、バカなことをした。

——こんな玩具みたいなもののために脱獄までしてここまで走って来たのか。

「……つつ」

熱が冷めるのと同時に脳内麻薬は切れていき、腹の痛みが戻って来た。

ドクドクと血が流れているのを肌で感じる。

特殊部隊にはいたが、彼は銃弾を浴びるのがこれが初めてだった。

それもかつての仲間撃たれて。

「動くなー」

後ろからセルデンに声をかける者がいた。

全身を黒い装甲に身を包んだ機動隊兵士。

セルデンもかつてはあのような制服に身を包んで正義のために戦った。

「それが今じゃ、こんな終わりか……」

機動隊の警告を無視して闇夜に大笑いするセルデン。

次の瞬間、セルデンに向けて大量の銃口が向けられる。

「……魔術師……魔術師……魔術師！」

そして前方の兵士の合図とともに、セルデンに向けてあまたの銃撃が浴びせられた。

「素晴らしい。素晴らしいセルデン・オースティン！ お主はやはり逸材じゃった」

「誰だー！」

銃殺されたセルデンの死体。

銃撃の反動で彼の体は血みどろのまま召喚陣に投げ出された。

機動隊がセルデンの死体に近づこうとしたところで、彼らはもう一人の人物の存在に気が付く。

茂みの中からライトに照らされたまま現れたのは杖を突いた老人であった。

「お主の“復讐心”は素晴らしいものであった。よくぞここまでたどり着いてくれた、

奇跡の逸材よ」

「お主という触媒があれば召喚出来ると思つて負つたわ。聖杯をわが手にする絶好の機会というものよ」

歓喜に満ちた表情を浮かべて、まるでステージの演者のように朗々と死体に話しかけた。

機動隊の警告も無視して、老人は召喚陣に近づく。

「止まれ！　これ以上近づけば……」

「礎に銀と鉄、礎に石と契約の大公……」

召喚陣の前に立つと、ぶつぶつと何かを呟く老人。

やがて召喚陣からは一陣の風と光が放たれ、周囲を眩しく照らす。

危険を察した機動隊員が銃を連射する。

弾丸のいくつかは老人に当たるかと思われたが、弾丸は反れていき魔術師に当たるところはなかった。

そしてまばゆいばかりの閃光のあと、機動隊員たちは目の前の光景に驚愕した。

先ほどまでセルデンの死体があつた場所に代わりに立っていたのは、体長3メートルはあろうかという巨大な黒い犬であつた。

月夜に照らされた黄金の眼が周囲の人間を人ならみすると、鋭い牙の並んだ口を広げて、すさまじい音圧で咆哮をあげた。

周囲の空気が激しく振動した。

あまりの音圧と口から発せられる風圧にあるものは立ち尽くし、ある者はその場で気絶し、ある者は叫びながら錯乱してアサルトライフルのすべての弾丸を黒い犬に向けて発砲した。

黒い犬はその体長からは信じられないほどの敏捷で弾丸をいともあつさりとかかわすと、発砲した隊員の目の前に音もなく降り立った。

「ひ、ひい！…化けも……」

犠牲者はそこから先は言葉を発することができなかった。

黒い犬はそのまま重く地面をけると隊員の頭にとびかかって噛みつき口の中で一気にかみ砕いた。

強い憎悪の念でもって胴体から首を噛んで切り離すと、苦々しい表情をして仲間の足元にそれを吐き出した。

「あ、あああ……ああ」

戦意を喪失した機動隊員を舐め回すように見つめる犬のサーヴァント。

そして次の瞬間、隊員のはらわたが、ポツカリと穴でもあけられたかのようになく

なっていた。

隊員は突然3等身になったかのように体のほとんどを失い、バランスを失った積み木のようにぼとりと地面に崩れ落ちた。

周囲は先ほどもまで生きていた人間たちの肉と血の匂いで充満し、小路の十字路は真っ赤な湖と化す。

地獄もかくやと想像を絶する光景が広がる。

老年の魔術師はその光景に満足すると、黒い犬に向かって歩き、こう呼びかけた。

「召喚は無事にうまくいったようじゃの。ライダー……いや、アヴェンジャー！」

「ふふふ……危険を冒してエクストラクラスの召喚を試みたが、こうももうまくいくとはな」

「噂に聞く最強のクラス。これなら、聖杯戦争にも勝利できる……必ずな！」

老人は自らの皺だらけの腕に現れた令呪を高く掲げてアヴェンジャーに見せた。

口の周りを真っ赤にしたアヴェンジャーのサーヴァントはその令呪を見るや否や、低くうなずいてその場で座りこんだ。

「そうだ！ それでいい、わしがお前のマスターだ。この令呪がある限りお前はワシに逆らえない。よく覚えておけ！ 下僕が！」

『……なるほどな、それを聞いて安心した』

口橋をゆがめて不意に笑う老人であったが、次の瞬間、違和感を覚えて令呪のあつた右腕を見た。

——右腕の肘から先がすでに老人の体から消えていた。

「あ……………いつの間に」

目の前の事実を認識して、ようやく老人の体に激痛が走る。

強烈な痛みを意識を混濁させて、激しくのたうち回るようにしながらも、老人はアヴェンジャーの方を見た。

『探し物はこれか、魔術師？』

赤い痣の入った皺だらけの手を噛み砕きながら、黒い犬は何の感情も込められていない素っ気ない声で尋ねた。

「き、貴様……………！令呪を……………！！」

『まだ奥の手のひとつでもあるかと警戒していたが……………がっかりだぜ』

「ぐうああ……………き、貴様、マスターであるわしに逆らう気か？」

「マスターのわしがいなければ貴様は消滅するんだ！わかつておるのか？」

『逆らうも何も、お前の手ごまになった覚えはない。そもそも俺の敵は“魔術師”だ』

「なんだと……!?!」

アヴェンジャーは腕を飲み込んだ。

すると、右の前足に先ほどの老人の手に刻まれていた“令呪”が浮かび上がった。

『悪い気はしないな。十分すぎる力だ』

『俺の願いは……この世から魔術師を”すべて”ぶつ殺すこと。魔術師を一人残らず殺すことだ』

『そのためならなんだってすると決めた。本物の外道に堕ちたってかまうものか』

老人の魔術師の視界に最後に移ったのは、大きく広げられた巨大な牙を持つ口であった。

——俺をこんな体にしてくれてありがとうよ、クソ魔術師が。

——この体があれば……お前たちの仲間を皆殺しにできる。

闇夜に響く犬の遠吠え。風が吹くと黒い毛並みが焰のように揺らいだ。

そして街灯も届かぬ暗い森の闇へ、セルデンは消えていった。

セルデンの脱獄事件は最悪の形で締めくくられる。

生き残った機動隊員の話は到底普通の刑事たちには理解してもらえないものではなかった。

この事件は英国警察史上にも残る最悪の事件として記録されることとなる。

その姿を見た者は化け物をイギリスの民間伝承にちなんで畏敬の念でこう呼んだ。

——死神犬（グリムドッグ）と。

VII
—
アサシン

ロンドン ベイカー・ストリート地下鉄駅

煉瓦造りの高架が残るベイカー・ストリートの地下鉄駅。

歴史の古いロンドン地下鉄の中でも古くから存在する駅の一つだ。

ミランダ・ウォルフオークがまだ自身の体で歩いていたところからずっと愛用している地下鉄駅でもある。

もつとも幾度かの改装工事によってその姿は様変わりしているが。

ミランダ・ウォルフオークはこの日、その精神だけが街を出歩いていった。

ロンドンには交通監視カメラがいたるところに設置されている。

その数は一日に観光客が100台以上のカメラに写ると言われるほどだ。

聖堂教会はこの事態に対してロンドン警視庁で刑事をしている聖堂教会の者を監督役に任命した。

警察関係者と聖堂教会というふたつの立場を利用した刑事が今回の聖杯戦争における事後処理を行うということで、聖堂教会の本気ぐあいというものが伺えることだろう。

これにより、当面監視カメラに英霊が移りテレビが騒ぎになるというような事態は極力回避されるだろう。

ミランダの精神を乗せた体はそのままベイカーストリートを北上し、ロンドン北東部の小さな教会へ向かう。

セント・ポールやウエストミンスター寺院のように、歴史上その教会が何か特別な意味を持つものではなかったが、その建築物のあり方は他に比べても異質なものであり、人の出入りも、祈りに来る者も少ない。

礼拝堂入り口の古い扉は既に開いていた。

そのまま礼拝堂に入ると、中の様子をうかがう。

内装は外見に似合わず荘厳な様相を醸し出し、祭壇から参列者のための長椅子に至るまで清掃の行き届いたものである。

時刻は既に夕方で、西日がステンドグラス越しに教会内部を金色に照らしていた。

礼拝堂の前から3番目の長椅子に座るコートを着た濃い茶髪の険しい表情の男が座っていた。

彼女はそのまま回り込むように礼拝堂の前まで歩くと、男とは反対側の長椅子に座った。

「今回の聖杯戦争のマスターは、またずいぶんと時代錯誤な格好をしているな」

コートの男は険しい表情のまま忍び込んだ白いドレスの女性に声をかけた。ヴィクトリア朝期の古い様式を思わせるドレスで、現代の街を歩くには悪目立ちする装いだ。

椅子に座ったままコートの襟を正すと、まっすぐミランダの方を見据えた。

「このような姿で失礼いたしますわ。アバーライン刑事……いや、神父とお呼びするべきかしら」

”人形”からは女性の声が出た。

アバーラインと呼ばれた男は彼女の方を見てこう返す。

「どちらでも構わないよ。こういう時のために私は聖堂教会の命を受けて刑事をしているのだからね」

「君が一番乗りというわけだな。ミランダ・ウォルフオーク。サーヴァントはどうした？」

神父の男が問いただと、意外な表情をしてミランダは問い返した。

「どうして私がマスターだとわかったんですの？」

「此処へ来たということはそういうことだ。ここは聖堂教会の息のかかったロンドンの教会の一つだから、普段は人払いの結界を敷いている。ここではマスターの保護という重要な責務もあるしな」

「……そう、私が聖杯戦争のマスターの一人。認めるわ、さすがはアバーライン神父」
真つ白なドレスの裾を掴んで優雅に頭を下げるミランダ。

アバーラインは特に会釈をすることも無く、会話を続ける。

「だがその様子だとまだサーヴァントを召喚していないようだな。何故だ？」

「何故、とはどういうことでしょうか？」

「君のような切れ者が、まだサーヴァントも召喚せずこんなところでぼんやりしているのが不思議に思ってるね」

ミランダはただ黙ったまま微笑む、そしてひとこと。

「サーヴァントならここにいますわよ」

「……まさか」

間一髪、アバーライン神父は体を翻して爪の一撃をかわした。

そのまま鋼鉄の一閃は教会の長椅子を捉えるとバターでも切るかのように真つ二つにして、切断面をドロドロにしてみました。

体勢を立て直した神父がすぐに襲撃者の姿を見ようと首を振ると、彼女の前に黒衣の”暗殺者”が両腕に毒爪を構えていた。

体を大きく振りかぶったその瞬間、黒いフードから白い髑髏の仮面が覗かれた。

「高ランクの”気配遮断”……アサシンか、道理で」

「しかもその髑髏の仮面は……」

コートのポケットからハンカチを取り出して額の汗を拭いたアバーライン。

その間も警戒を緩めておらず、反対側の手は常にフラフラと舐めるように教会を歩くアサシンの体に向かって構えられている。

——よりによつてこの女が”ハサン・サツバーハ”を……？

”山の翁”と呼ばれるアサシンのサーヴァント、あなたも聞いたことあるでしょう。聖杯戦争におけるアサシンのサーヴァントについて」

「……」

髑髏の仮面をかぶったアサシンのサーヴァントは一言も発さず、ただマスターの命令を待っているように立ち尽くしていた。

「心配しなくとも、ほんの小手調べですよ。まさか聖堂教会の武闘派たちが、こんな簡単にやられるわけありませんものね」

「る第八秘蹟会のメンバーに喧嘩を売るとは、ずいぶんと浮かれているようだね？」

やれやれといった表情を浮かべるアバーラインだが、その額に光る汗が見えるのをミランダも見逃さなかつたようで笑みを残したまま和やかに返す。

「浮かれているのかもしれない。何せ、待ちに待った崇高なる聖杯戦争の儀に参加できるといいうのですから」

「アサシンのサーヴァントも、挨拶にはずいぶんと手荒いな。私を殺してその後どうするつもりだったのか」

「……」

アバーラインの問いに、アサシンは何も答えない。

「異教徒とは口を開きたくない、というわけか……まあ、いいだろう」

「私の召喚したサーヴァントはアサシン。どうかお見知りおきを、監督役さん」

「君たちがやりすぎない限りは、傍観するでしょう。我々をあまり怒らせないことだ。ただでさえロンドンでの聖杯戦争などと秘匿の漏洩に慎重になっているところだ」

アバーラインはじつとアサシンのサーヴァントを見つめ、そのあと視線をミランダの手に移した。

おそらく彼女の手袋の下にまがまがしい形の令呪が見られるのだろうとアバーライン神父は確信した。

監督役であるアバーラインも令呪に関する知識は持っている。

サーヴァントに対する命令権、これがある限りいかなるサーヴァントもマスターの指示に従うとされる。

過去の聖杯戦争ではマスターとサーヴァントのそりが合わず、サーヴァントに自害を命じた者もいるとアバーラインは聞かされている。

サーヴァントが必ずしも自分にとって利益をもたらす英霊ばかりではないということとを彼は知っている。

——サーヴァントか。サーヴァントを従えるマスターというのはこれほどまでに傲慢になるものか。

「顔合わせはこんなところでよいでしょうか、アバーライン神父？」

「十分に顔は覚えたさ。聖堂教会は、仮にもし君が身柄の保護を求めた場合、それに応じることとしよう」

それが仕事だからだと、ぶっきらぼうに神父は最後に付け加えた。

「ありがとうございます」

ミランダの方も顔に笑顔を貼り付けて一礼すると、踵を返して教会を後にした。

アサシンのマスターが教会を出て行ったのを見届けた後、ようやくため込んだ息を吐いて呟く。

「さて、一体何をしでかしてくれるのか、ウォルフオークの一族め」

「あのアトラス院の女も要注意だな……：場合によっては教会のため、始末することも考えねばならん」

コートのポケットからスマートフォンを取り出す。

電源ボタンを入れるとユニオンジャックのロック画面が浮かび上がり、日付と時刻、

それからメールの通知を知らせた。

彼のスマートフォンの通知にポップされたのは「死神犬」の件名であった。

「私も一度、ヤードに戻らなくては……既にルール違反を繰り返す不屈きな魔術師もいることだしな」

メールの内容を確認すると、ひとり呟いて、監督役の男もまた教会を出て行った。

「我々の庭で好き勝手出来るとは思わないことだ」

意気揚々と教会を出ていくミランダの後ろを、静かについていくアサシンのサーヴァント。

その仮面の奥で黒い瞳がじっと彼女の姿を捉えていた。

「監督役への挨拶も済ませたことですし、さっそく他のマスターさんにご挨拶に向かうのも悪くないですわね」

「・・・」

「アサシン、少しくらい口をきいてくれてもいいのでは？ あなたの声が聞きたいわ」

「・・・」

「つれないわね。まあ、その方が暗殺者っぽくていいのかしら……」

彼女は、山の翁を召喚したとこの時はまだ確信していた。

だが、これは冬木の聖杯戦争とは一線を画すもの。

アサシンのクラスたるサーヴァントの性質は混とんとしていた。

内に秘めたる復讐心によってのみ動く彼の真名は――

あらゆる毒物のスペシャリストにして、不老不死と謳われた幻想からの暗器使い。このアサシンの召喚が彼女にとってどのような運命をもたらすかは、未だしれず。

Quantum — I

”それ”は緑色の液体に満たされた世界の中で、じつくりと覚醒の時を待っていた。

ごくわずかの布を体にまとい、浮力と重力に身を任せたままのからだにほとんど筋肉はついておらず、最小限の皮が彼女の体をかろうじて人間たらしめていた。

彼女は人間の見た目をしていて。

しかし彼女には自我というものが無かった。

人知れない山中の中にある工房、その一角で調整槽の中のそれは何も言わず、何も考えず漂っていた。

ここはアトラス院。

巨人の穴倉。

来たるべき世界の滅亡に向けて兵器を作り、そして廃棄される場所。

多くの錬金術師がまた、この調整槽の中のホルマリン漬け標本がやがて投棄されることを予見していた。

調整槽に近づく影があった。

紫を基調とした制服の上から白衣を纏い、メガネをかけた女性は調整槽の中のそれを恍惚と眺め、また自身の仕事であるバイタルのチェックを事務的に始めた。

「容体は安定している。問題なし……ああ、それにしても」

チェックを終えて再びイザイ・エルトナムは調整槽を穴が開くほど見つめてため息を漏らす。

「すばらしい、君は本当に素晴らしい。誕生の瞬間が実に楽しみだとも」

「創造主である私のことを一体何と呼んでくれるのか、今から考えるのが楽しみだね」

目を爛々と輝かせたまま、聞こえるはずのない言葉を調整槽に投げかける。

当然調整槽の中のホムンクルスは何も言わない。

「しかし残念だな、まもなくお別れの時間か」

「東洋では”可愛い子には旅をさせろ”とも言うらしい。その時が近づいてきたんだね、”セシリア”」

「ああ、セシリアというのは君の名前だ、先ほどつけることにした」

「君はとっておきだ。非検体番号で呼ぶには味気が無すぎる!」

ホムンクルスの返答など聞くまいといった調子で、イザイ・エルトナムはつらつらと調整槽の前で独り言をつぶやきつつける。

彼女が時計を確認する。

予定していた頃合いが近づいていた。

「さあ、君は外の世界でどんな風に生きる？　どんなドラマを私たちに見せてくれる？」

「健気にもこの試練を生き残り、人間の限界を超えてくれるのか？」

「全てを実現する理想の存在、”願望の人間”へと進化するのか？」

寂しげにライトアップされた調整槽の前で、誰にでもなく声を上げるひとりの研究者の姿が依然としてそこにはある。

その言葉は母でもなく、創造主でもなく、また所有者でもなく、放生を目的とする実験者のものである。

「なんであれ、私は君の人生が今ここから素敵で刺激的なものになるということを祈っている」

「決して運命から逃げてはいけないよ。たとえそれが残酷なものだとしてもね」

調整槽に手をかざす。

イザイ・エルトナムの右腕から僅かだが回路のような文様が浮かび、魔力は電のような光を小さく発し、ガラスを覆った。

直後、調整槽のガラスは粉々に砕け始める。

いくらか派手な音がしたものの、彼女の動向に気付いた者は誰もいなかった。

溢れる液体の中から少女の体をがっちり抱えると、イザイは彼女の背中をポンポン

と叩いた。

「寒かつただろう？ さあ、まずは外を歩いてても恥ずかしくもない、かわいらしい恰好をして……それから旅支度だ」

「……」

「私の可愛いホームンクルス……自己実現の究極、”願望の人間”よ」

さながら宗教画の、子どもを抱く母親のようなイザイ。

それぞれの思いと思惑を胸にサーヴァントとマスターたちは動き出す。彼らの行く末に待つものは果たして――。

ロンドンでいま、最も奇妙な聖杯戦争が始まろうとしていた。

これはサーヴァントの物語ではない。

これはマスターの物語ではない。

これは、人間が願いをかなえる物語だ。

ただし、その願いは彼女にとって誰よりも特別で、ごくありふれたものであった。

Material — アーチャー／バーサーカー

〔ステータス〕

真名：ナポレオン・ボナパルト

クラス：アーチャー

地域／出典：18世紀フランス

信念：中立・悪（召喚された地域の知名度により、侵略者としての側面が補強された）

身長：189cm

体重：92kg

〔パラメータ〕

筋力：B 耐久：A

敏捷：C 魔力：C

幸運：E 宝具：B+

〔保有スキル〕

・騎乗C

調教されている動物であれば大抵は乗りこなすことができる。

・単独行動B

マスター不在・魔力供給なしでも長時間現界していられる能力。

・皇帝特権B

本来持ち得ないスキルを、本人が主張することで短期間だけ獲得できる。

【サーヴァント解説】

真名ナポレオン・ボナパルト。初代フランス皇帝。

中世フランスにおいてヨーロッパのほとんどを征服した將軍である。

その波乱に満ちた彼の生涯から彼の存在は人々の願いによつて変質し、サーヴァントとしての彼の在り方に影響を与えるが、ことイギリスでは侵略者としての側面が強く影響し、彼の信念は悪に変化しており若干通常の状態より性格が悪くなっている……らしい。

【宝具解説】

・「高らかに歌え、凱旋の時を」ランクA+

対軍宝具。

・「我が辞書、不可能の文字なきなり」ランクB

対人宝具。

【マスター】

名前：シャルロット・ロジエ

性別：女性

年齢：18歳

身長：159cm

体重：??kg 痩せ気味

外見：暗い赤髪ショートカット、すこし釣り目、ワインレッドのスカート、白のブラウス

好きなもの：お金

苦手なもの：気弱な人、ウジウジした男

天敵：天然

趣味：格闘技・薬品の調合

特技：柔道（黒帯）

イメージカラー：赤

一人称：私

二人称：あなた

三人称：あいつ、こいつ

フランスの地方を拠点とする魔術師一族の長女。

ワインやブドウ科植物を利用したウィッチクラフトの使い手で、一族にも将来を期待された魔術師。

周りにはクールでポーカーフェイスのような態度をとるが、予定外の出来事に弱く外面が剥がれることもある。

それほどの資質を持っていながら彼女の所属は召喚科である。理由は様々噂されているが不明。

【ステータス】

真名：ルードヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン

クラス：バーサーカー

地域／出典：18世紀ドイツ

信念：混沌・中庸

身長：179cm

体重：80kg

【パラメータ】

筋力：B 耐久：D

敏捷：C 魔力：A+

幸運：D 宝具：A

【保有スキル】

・狂化E

頑固な性格に拍車がかかり、人の話を聞かない。特定の方法以外でのコミュニケーションに難がある。

・音楽神の加護A

音楽史において重要な役割を果たしたパーサーカーは、自らの逸話を音楽魔術として昇華されている。

・鋼鉄の決意EX

耳の疾患を乗り越えた逸話から、彼の屈強な精神がスキルとして反映されたもの。

暗示等や幻覚などに対する強力な精神異常耐性を持ち、逆境におけるほど彼のパラメータは上昇する。

【サーヴァント解説】

真名ルードヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン。

音楽史においてもっとも重要な音楽家の一人であり、「運命」「歓喜の歌」など数多くの傑作を世に残した芸術家である。

耳の疾患に苦しみ、一度は遺書を書き残して自ら命を絶つことも考えたが、自らの不屈の意志によってこれを乗り越えた。

座では彼の生きざまを狂戦士と評し、また狂化によってステータスの底上げがされているが、壮年期の彼は耳がすでにほとんど聞こえないためか、人の話をまるで聞かない（本人談）。

【宝具解説】

・「運命は斯く扉を叩く」ランクEX

対心宝具。

・「高らかに歌え、歓喜の時を」ランクB

対人・対軍宝具。

【マスター】

名前：エハッド・ティーレマン

性別：男性

年齢：24歳

身長：172cm

体重：61kg

外見：茶髪ショートカット、分厚い丸眼鏡、ジャケツトに白のブラウス、赤いネクタイ。

好きなもの：アニメ、ゲーム

苦手なもの：体育会系の男、ギャル

天敵：動物、とくに犬は苦手。

趣味：ネットサーフィン、ノベルゲーム

特技：速筆、暗記

イメージカラー：茶色

一人称：俺

二人称：君

三人称：彼、彼女

イギリスのコーンウォール地方に工房を持つ古い魔術師家系の三男。

ティールエマンの家系は代々、記録や通信魔術を得意としており、様々な魔術師世界の

出来事を編纂、記録している。

オタク趣味があり、日本のアニメや漫画、ゲームが好き。

やや気弱だが、追い込まれたときの決断力はある。

聖杯戦争にただならぬ意気込み持っており、機会があれば聖杯を手に入れようと企んでいる。

そのために戦闘でも有利に立ち回れるバースーカを意図的に召喚したが、彼の期待に反して召喚された英霊は音楽家であった。

第一章 — 穴倉より出ずる

I — 夢想

子どものころから本に囲まれた生活をしてきたというわけではないが、自由な時間があればそれなりに小説は読んで育つてきたという自彼にもある。

日本語、それから英語どちらの言語でも読んできた。

様々な物語に触れ、そして子どもながらの想像力を発揮した。

——彼らの物語を、彼らの生きざまを、彼らの最期を。

”夢”を見た。

巨大な怪物に立ち向かうひとりの騎士が、精悍な馬にまたがって一人立ち向かう姿を見た。

果敢に威嚇するように吠え声をあげて、立派な鎧兜を見に纏って突撃する英雄の姿を、どこか遠くから眺めているような視点だった。

兜をかぶつた騎士の素顔は見えなかったが、とても誇らしげで自信にあふれている様子だけはすぐにわかった。

己の進む道に全く迷いはなく、それでいて正義を篤く重んじる精神。

中世に流行した騎士道文学そのものの姿だ。

「…アーサー王？」

不意に青年の目が覚める。

——うっかり寝言を言っていたようだ。

起き上がってすぐに視界に入って来た女を見て、口を大きく開ける。

これまでの記憶が、眠る前の最後の記憶が鮮明によみがえる。

自分よりも幼い少年と少女の残酷な表情。

「魔術師」という言葉。

あわてて青年は自分の方の辺りを見やる。

黒ずんだ肌の代わりに包帯がまかれていて、その包帯からは生葉を思わせるきつい匂いが漂い、鼻腔を通して意識の覚醒を加速させる。

恐る恐る方に神経を集中させてみる。

——大丈夫。動く。多少鈍くは感じるが。

ホツと一息ついて、カナウ・アルバーンは改めて、ベッドの周囲を見渡す。

見慣れない部屋だ。

決して豪華な様式ではないが、独り暮らしぐらいなら十分なスペースと言える。

清潔感も生活感もほどほどにあるが、床板や壁は古く変色し、どこか古めかしく感じ

る。

鮮明になった視界でもう一度かれはベッドの脇に座る少女の姿を見た。

何を考えているのかわからない目だと、彼はその少女のことを評価した。

一切の変化がない。まるで機械のようだ。

「あ……君は」

「おはよう、ミスター・アルバーン。気分はどうかしら？ 腕は動く？」

「君が治療してくれたのか、どうもありが……」

「そう、それじゃあ早速支度してもらえるかしら。会ってほしい人がいるのだけど、その前に色々知っておいてもらいたいことがあるわ。まず」

「え……」

カナウが口が利けるほど回復したとわかるや否や、少女は矢継ぎ早に用件を話し始める。

今しがた命の危機から脱出したばかりで思考回路もぐちゃぐちゃなまま、彼は彼女の口から事情を聴かされることになる。

「……ということなんだけど、ちよつと大丈夫？ あなた大学生なんでしょう？ このくらいすぐに理解してもらえると思ってただけ」

「……君、もしかして天才すぎて凡人の気持ちかわからないタイプの人？」

「まあ、あるかないかで言えば、才能はあるけど」

——言い切った！ いや、それよりも……。

「どこから尋ねればいいのか……ここはどこで、君は誰なんだ？」

「シャルロット・ロジェ。ここは私の部屋、大丈夫。詳細な位置は機密事項だから教えてあげられない。まあ、外の景色を見れば一発だと思うけど」

シャルロットは顎で窓の方を指す。

つられてカナウが窓を見るとすぐ前方に見慣れた観覧車があることに気が付く。

ロンドン・アイ。テムズ川沿いにあるロンドンの新しいランドマーク。

「君は……君たちは何者なんだ？ あの男は？ あの女騎士は？」

「まいったわね。非魔術師に魔術世界のことをなんて教えてあげればいいか……」

『厄介なことになって来たな、マスター』

カナウの前に突然もう一人の人影が現れる。

昨夜大砲を使っていた「アーチャー」の男だ。

「まさか聖杯戦争に民間人が巻き込まれるだなんて、想像してもいなかったわ」

やれやれと言った調子でシャルロットはアーチャーに返答する。

「セイバー」あなたも姿を見せて頂戴」

シャルロットが虚空に声をかけると、突然ベッドの脇にもう一人。

少しバツが悪そうな表情をして、「セイバー」と呼ばれた鎧の女騎士がどこからともなく姿を現す。

「マスター、お体の具合は？」

「マスター……って俺の事か？」

「そうよ、”セイバー”と”アーチャー”はそれぞれ私たちに仕えるサーヴァントなのよ」

ロンドン 某所

「……それで、”魔法使い”か」

「”魔法使い”じゃなくて、”魔術師”ね。私たちの世界ではこの二つは厳格に区別されているの」

「夢を見ている気分だ」

「浮かれているのはいいけれど、あなたはもつと自分の心配をした方がいいわよ」

「浮かれてなんかいない。とにかくものすごくマズいものに巻き込まれた自覚はできた」

——マズいなんてものじゃないんだけど。まあいいか。

のどまでせりあがって来た言葉を吐きだそうとして、シャルロットは口をつぐんだ。

二人は今ロンドンの街を並んで歩いている。

相変わらず昼間のこの街は観光客であふれかえっている。

シャルロットは先ほどから「時計塔」「魔術師」と魔術世界について話を続けるが、通行人の誰も彼女たちの会話を怪訝に見つめることはなかった。

カナウもファンタジーものの小説を読んだことはあるので、それらがいわゆる“盗聴防止”の魔術か何かなのだろうということは容易に想像がついた。

『マスター、ご心配なく。もしもの時は私が実体化して、外敵からあなたをお守りいたします故』

キョロキョロしていたのを不安に感じ取ったのか、“念話”を通して女の声が聞こえてくる。

「ありがとう……ええと、セイバーさん」

『私のことはどうか“セイバー”とお呼びください、マスター』

カナウは念話ができないので、宙に向かって話しかけているようにも見える。

「念話ができないのって、なんだかわいそうね」

『そう言っつてやるなよマスター。なんだかわいたら、お前が教えてやればいいじゃないか』

シャルロットがカナウの様子を横目に見ていると、シャルロットの方にもサーヴァントから念話が聞こえてくる。

「なぜできないのか私にはわからないから、教えるのは無理よ」

『……やれやれ』

——それにしてもセイバーのサーヴァントか。一体どうして急に？

静かに幕が上がった聖杯戦争、そして昨晩はイレギュラーも起きた。

聞けばカナウ・アルバーンは魔術となんの接点も無いただの青年である。

親族に魔術師がいたという話もないし、魔術師に接触した経歴が一度もないとされる。

そんな彼に、召喚陣も詠唱も無しでサーヴァントが召喚されたというのだから驚きだ。

そのあたりのプライド高い魔術師の耳に入れば卒倒するか、あるいは羨ましさに発狂でもするかもしれない。

ましてセイバーのサーヴァントとえば、数々の亜種聖杯戦争でも勝者になるケースが多いともっぱらの噂である。

”最優のサーヴァント”としての力量を持ち、間違いなく当たりといわれるほどの存在である。

——それだというのに

「真名」がわからない?」

『……申し訳ありません。召喚の折になにか問題があったようで』

カナウの召喚したサーヴァント「セイバー」は自分の「真名」がわからないと来た。

「真名」がわからないというのは、正直かなり不味いわね」

「……そうだよな」

「真名」がわからないということは、サーヴァントの切り札である「宝具」が扱えないということになるのだから」

「自分が何者かわからないなんてさぞかし辛いことだろうな。記憶が元にもどるといいな」

一瞬の間、歩幅がずれる。

思わず振り返るシャルロット、目を丸くした二人の顔が互いの瞳に写る。

「は?」

「え?」

——ちよつとこいつ……

『何も言うなマスター』

何かを口にしようとしたシャルロットをアーチャーが念話で制した。

『でもアーチャー……』

『これはあいつらの問題だ。俺たちの出る幕じゃない』

『ずいぶん冷たいじゃない。でもどうしてセイバーは……』

『……ま、そのうちわかるだろ』

『どうしたんだ、急に黙って？』

『呑気なものね、あなた。殺されるかも、とか思わないわけ？』

「……」

しばらくの沈黙のあとカナウは答えた。

『そうだな。何もわからなくて、この先どうなるかも……怖いよ』

——だからこそ。と彼はつぶやいた。

『色々教えてもらいたいこともあるし』

——こいつはこいつで底抜けのバカなのかもしれない。

『あなたみたいな人、すごく苦手だわ』

視線をずらしてカナウに背を向けると、再びシャルロットは歩き出す。

『お、おい、待ってくれよ』

カナウが後ろから歩幅を取り戻そうと近づいてくるのも無視して彼女はひたすら前を向いて歩いた。

——ああ、これは厄介なことになりそうね。

時計塔 廊下

時計塔でのエルメロイ二世のカナウに対する反応は、思いのほか冷静なものであった。

もつと怒鳴り散らされるか、ネチネチクドクドと説教を食らうものだと思っていたが、事情を説明した後彼からかけられた言葉は意外なものであった。

「君が巻き込んだ民間人だ。責任をもってその処遇を決めること」

つまるところの”保護ないしは監視”ということだろうと、彼女は解釈することにした。

彼女は魔術師ではあったが年齢は若い。

さしづめ成熟した魔術師になるほど割り切れることは出来ず、この何も知らない青年を一方的に蹂躪し、口封じに殺す気にはなれなかった。

——セイバーも無抵抗でカナウが殺されるのを見過ごしはしないでしよう。そうなった場合今セイバーと争うのは危険。

——それよりも、彼女のサーヴァントとしての力量に期待して、私たちの言うことを聞く駒になつてもらいましょう。

そう思うことで自分の冷酷になりきれないお人よしの気質をひとまずだますことにした。

これだけの非日常を目の前にして、魔術師世界の中でも面会することすら栄誉であるはずのロードとの面会を経ても、このカナウ・アルバーンという青年は相変わらず呑気な表情を浮かべて時計塔の内部をしげしげと眺めていた。

「時計塔」の中がこんなふうになつていたなんて驚きだよ。灯台下暗しつてやつだな、魔術師つてのはこうも身近にいたとは驚きさ」

貴族主義の魔術師たちがうろつくこの魔術師至高の学府でこんなことをぼんやりとつぶやく者だから、正直シャルロットも気が気でない腹でいた。

事実貴族主義に名を連ねる、シャルロットも名前を聞いたことがある名門の魔術師たちがこの二人をながめてひそひそと何かを話しているのは彼女にも一目瞭然だった。

——あれが”そう”なの……？

——サーヴァントを召喚したつて……

——目障りなんだよ。なんであんなやつが聖杯戦争に……

ポーカーフェイスを貫こうとするシャルロットではあったが、それが決壊するのも時

間の問題あった。

額に若干の汗を浮かべながら、この青年がこれ以上時計塔の貴族主義の魔術師達を逆なでするような問題発言をしないよう祈るばかりであった。

——ああ、自分の不手際とはいえ、面倒なことになったわね。

——なんでわたしがこんな男の御守りなんか。

そんな彼女の心労などつゆ知らず、彼は興味津々に自身の呼び出したサーヴァント、
”セイバー”のサーヴァントと念話も行わず会話をしていた。

「何か思い出せそうか？ 見た感じ、中世の騎士って見た目だけ……」

「すみません。自分が騎士であるということだけは確信が持って言えますが……」

「そうか……この後街を見て回ってから帰るつもりだし、観光がてらなにか手がかりになるものでも探しに行こう」

「かたじけない。ありがとうございませす、マスター」

「俺のことはカナウでいいよ。これからよろしく、俺は魔術師じゃないから何かと不便かもしれないけれど」

照れくさそうに手を差し出すと、セイバーは申し訳なさそうにこれに応じる。

「では、カナウ。私の方こそ何なりとお申し付けください」

「ありがとう、よろしく」

シャルロットがじつと二人の方を見ていると、セイバーもこちらに気付いたのか彼女の方に振り返って会釈する。

セイバーの顔は中性的で、いわゆる女性受けしそうなタイプの美人である。

眉は薄く色白で、背は高くスラツとしている。

さながら北欧神話における戦乙女のような端麗さもある。

セイバーの姿を見てアーチャーも気に入ったのか、後ろで口笛を吹いた。

「それにしてもお嬢さんもお美しい。さぞや名のある英霊なのだろうが、名前を聞けないとは残念だねえ」

「……アーチャーも、これからよろしくお願ひします」

美しいと評されて若干照れたような顔をするも、また真顔に戻ってセイバーはアーチャーに会釈する。

「聖杯戦争と聞いていたのですが、どうもおかしな状況になっているようですね」

「こうして素敵なマドモアゼルと出くわしても争いにならずにすむというのはありがたい話だな」

「アーチャー、真面目にやってよ」

「別にいいだろうこのぐらい！」

「あはは……そ、それでシャルロット。他のマスター？やサーヴァントたちについて何

か知っているのか？」

アーチャーのナンパに苦笑いしながらカナウは尋ねる。

「あなたを殺そうとしたあの少年、リャオ・ファンはランサーのマスターね」

昨晚の出来事を振り返ってシャルロットは切り出す。

「ランサーのサーヴァント、あれはかなりのやり手ね。妙なスキルに、あの防御力……」

「一応聞くけどセイバー、あなたあの英霊に心当たりは？」

「それが私にも……せめて素顔を見られればあるいとは思ったのですが」

昨晚セイバーが召喚されてからの出来事をセイバーも振り返る。

——突如として現れた“セイバー”の乱入に、その場にいたすべての人間が口を開けて驚いた。

地面に倒れ伏すカナウを守るようにして堂々と立つセイバーには一瞬の隙も見えず、対峙していたランサーのマスターは開いた口がふさがらずただ立ち尽くしている。

「セイバーのサーヴァント?! いったいどうして……」

狼狽するリャオ・ファンをよそに兜をつけたランサーは双剣の構えを崩さないまま。

「ガレス……ではないなお前。女騎士のサーヴァントとは珍しい」

「……」

セイバーはランサーを一目見やると冷たく言い放つ。

「騎士ともあろうものが、剣も持たぬ弱者を一方的になぶるなど……恥を知りなさい、ランサー」

「開口一番説教かよ。面白くねえ、うちの王様そつくりだな」

「王様？」

——おっと、口を滑らせるところだった。

ランサーはニヤニヤしながら口をつぐんだ。

「こつちの話だ。それで、やるのかお前？」

「……」

セイバーはしばらく立ち止まりランサーの方を睨んでいたが、やがて背中を向けて倒れている自分のマスターに歩み寄りかかんだ。

「マスター、もう大丈夫です。お気を確かに」

「……」

セイバーは声をかけるが、カナウからの返事はひどく掠れたものだった。

「治療のできる者は？」

「いかに……いるわー！」

セイバーが周囲を見渡すと、こちらに走ってくる二人の男女を見つける。

先にアーチャーがセイバーの元に到着し、続いてその後ろを息を切らせながらシャルロットが追い付いてきた。

「驚いたわ……あなた、サーヴァントね？」

「あなたも聖杯戦争のマスターか？ であれば……」

「違うのセイバー！ とにかく今は事情を説明してる暇がなくて」

ぜえぜえとしながら、シャルロットはセイバーの方をまっすぐ見た。

話しながらもだんだんと彼女の息が整ってくる。

「とにかく、私たちに戦闘の意思はないわ、今のところ」

「……」

そう聞いてしびしびセイバーは一度カナウから離れる。

代わりにシャルロットが近づいていき、治療魔術の準備を始めるのであった。

シャルロットとセイバーは今その一部始終のあったハイドパークを再び訪れていた。

昨夜とは打って変わって人々の往来が激しい。

おそらく野次馬たちの目的はハイドパークの片隅に突如として現れた巨大なクレイターだろう。

スコットランド・ヤードの刑事と思しき男が警官に何かを支持し、現場がテープで封鎖されているのが遠目から見える。

「結局、応急処置が終わるころにはリヤオ・ファンとランサーもいなくなっていて、あなたの家も知らなかったからこつちに運んできたってわけ」

「あの時は流石に死ぬかと思つたよ」

「死なせないわ。魔術師でない只の人間を死なせるなんて寝覚めが悪くなるじゃない」

「ははは、それもそうだね……」

近くの屋台でコーヒを二人分購入し、カナウはそれをシャルロットに手渡す。

春先の陽気がロンドンを照らし、遠くからはナイチンゲールのさえずりも聞こえてくる。

ロンドンでは珍しい快晴だ。

「本当に助けてくれてありがとう。命の恩人だよ、君は」

「私からも礼を、シャルロット。私も召喚早々に目の前でマスターを死なせてしまうところだった」

「それは違うわ」

セイバーともども彼女に礼を言おうとしたカナウだが、シャルロットは目が据わった様子で彼を見返した。

「あなた達はまだ厳密には崖つぶちよ。エルメロイ先生も言っていたでしょう。処遇は私が決めるって」

「ま、まさか……」

「勘違いしないでほしいのだけど、カナウ・アルバーンさん。私があなただを生かしているの、今のところはね」

——でも、とシャルロットは続けようとして、再び横槍が入る。

「そこから先は僕が説明してやろう」

二人が振り返ると、リヤオ・ファンが後ろに立っていた。

苦虫をかみ潰したような表情を浮かべながらカナウ・アルバーンを睨み、小さな声でボソツと

「クソザコの下級平民が、いい気になりやがって……」

と愚痴をこぼした。

この少年の魔術師の姿を目にして、シャルロットは隣にいたカナウがピンと背筋を伸

ばしたことにすぐ気が付いた。

カナウは緊張で体をこわばらせながら、ランサーのマスターから目をそらさないようにして立ち尽くした。

——そりやトラウマにもなるか。

「お、お前は……」

「……ふん」

リヤオ・ファンの視線はカナウから次にシャルロットとアーチャーの方へ向けられる。

「シャルロット、お前もどういうつもりだ。秘匿はどうした？」

苦々しく顔をゆがめてリヤオ・ファンはシャルロットに詰め寄る。

「セイバーのマスターとして、私の助手として参戦してもらうわ。ホムンクルスを盗んだ犯人がいるのだとしたら、セイバーの戦力も必要になるかもしれない」

彼女もまた臆することなく堂々と答える。

その様子が気に入らないのかリヤオ・ファンはますます機嫌を損ねたように声色を震わせて威嚇する。

「ただの一般人にマスターなんて務まるわけないだろ。令呪の無駄だ。足手まといは……」

「あら、あなた自身が無いの？」

「なんだと？」

無表情がちなシャルロットの顔がその時不敵な笑みに変わったのをリヤオ・ファンもカナウも見ていた。

アーチャーの方は「そういう表情もできるのか」と口笛を吹いて茶化し、セイバーの方は険しい顔のまま様子をうかがうだけ。

「最優のクラスであるセイバーにお株を奪われるかもしれないって不安になってるんでしょう？ あなたの家、長年ロードも輩出できてないし。さすが”没落”寸前の貴族は見苦しいわね」

「この女……！」

リヤオ・ファンの握りこぶしに力が入るのを見て、楽しそうに見ていたアーチャーと、セイバー、そしてリヤオ・ファンのランサーでさえ実体化して臨戦態勢に入る。

それぞれ目が急に戦士の目になったのでカナウはギョツとして後ずさる。

結局リヤオファンが手を挙げることはなかったが、空気は急激に張り詰める。

——それで、こんな少年に聖杯戦争の重荷を。

カナウは合点がいったようにしてこの少年を見る。

その視線に同情の念を感じ取ったリヤオ・ファンがさらに声を荒げる。

「お前こそ、何そんな目で僕を見ているんだ。雑魚のくせに、調子に乗るな！」
「マスターの言う通りだぜ、そこ人間」

ランサーが会話に入る。

「それに、今頃セイバーがいなければアツサリ死んでいたのも事実だ。生きているのが不思議なくらいなものさ。自分の立場をわきまえた方がいい。さもなきや……」

兜を脱いで、ランサーの素顔があらわになる。

傷だらけの屈強な顔がカナウを見下ろすようにして目の前に立つ。

「あの時死んでおけばよかったとすら、後悔するほどの地獄を見る」

「そのような地獄を味合わせたりはしませんよ、ランサー」

二人の間に今度はセイバーが割って入る。

「私がいる限り、カナウは安全です。カナウは実によいマスターですよ。私は彼に仕えて良かったと、心の底から感じています」

「セイバー……」

「ですから、もしあなた方がカナウにちよつかいをかけようというのであれば、私も相應の態度でもってあなた方と相對することになるでしょう」

自分よりも背の高いランサーに対しても、彼女はそう言い放った。

「……そうかよ、じゃあせいぜい頑張んな」

面白くないといった様子でランサーは再び霊体化して姿を消した。

「僕は認めないぞ……お前なんかセイバーのマスターだなんて……」

リヤオ・ファンも最後にそう言い放って、二人に背を向けてまた歩き出した。

角を曲がって姿が見えなくなったところでようやくカナウの姿勢はリラックスしたものになった。

「……苦手だ、あいつ」

「でもアイツの言うことはもつともよ、自分の立場をわきまえなさい」

「いやというほどわかったよ」

「それにしても、君たちの話を聞くにセイバーってそんなに強いのか?」

カナウは目の前のセイバーを目にしながらシャルロットに尋ねる。

「最優のクラスだと、よく言われるわね。過去の聖杯戦争においてもセイバーが聖杯を手にしたという話は聞いたことがあるわ。リヤオ・ファンはそのことであなただけのことを根に持つてるみたい」

「セイバー、剣士のサーヴァントはいわゆる剣の扱いに長けた逸話や聖剣、魔剣を持つ者に与えられるクラスだからね。アーサー王と円卓の騎士、シャルルマーニュ十二勇士なんかはセイバーで召喚されるんじゃないかしら……」

「せ、聖剣や魔剣が実在したって言うのか？」

「魔術師たちを前にして、今更何言ってるのよ。あなただって、アーチャーとランサーの戦いを目の前で見ていたじゃない」

「そ、それはそうだけど……」

——そのような戦いに、何も知らない自分がまきこまれてるなんて頭が痛い。いや、頭が痛いどころですめばいいのだが。

彼はスケールの大きな話だと思わず苦笑した。

ところが、その様子をシャルロットに睨まれて、笑みはすぐに引つ込んだ。

「なあ、シャルロット。セイバーの真名がわからなかったら、その”宝具”つてのも使えないんだよな」

「……」

カナウが心配そうにシャルロットに聞いただす。

「それが一番の問題ね。宝具が使えないサーヴァントは実力を発揮できない……」

「宝具を使えないのはサーヴァントにとっても死活問題よ」

こうした断言にカナウも蒼白した表情で固まるしかなかった。

セイバーもまた何か思うところがあるのか唇をかみしめてその言葉を受け入れた。

II — 死神犬

ロンドン 某所

城を思わせる絢爛な建築様式に彩られたロンドン市内のとあるホテル。

一般市民であればひと晩以上滞在することもままならないようなそのスイートルームのソファに、イザイ・エルトナムは一切の衣類を纏わず寝ころんでいた。

空調は裸の彼女にも快適に感じられる温度に整えられていて、服を着ている者にはかえって暑苦しいほどだ。

磨き上げあげられた調度品の数々も、テーブルに置かれたティーセットにも目も止めず彼女は目の前のタブレットPCを眺めて何かを呟いている。

ディスプレイには何を示すかもわからないような数式が現れては消え、現れては消えていく。

「……」

濡れたままの髪の毛から水滴が画面に滴ると、見かねた様子で彼女の目の前に一つの影が浮かび上がる。

「いくらサーヴァントの目の前でも、多少の分別と羞恥心は持つてほしいのだが……」
「君だつて似たようなものだろキヤスター。裸に布切れ一枚、タオルやバスローブを巻いているのと何が違うんだ？」

「こ、これは他の衣類を身に着けるとローブの魔力が……」

「それでも下着くらいはつけるでしょ普通。私が言うのもなんだけど」

どうつてことはない様子でイザイは何も隠すことなく堂々と立ち上がった。

キヤスターと呼ばれた十代ほどの少女は同性であるにもかかわらず頬を赤らめてうつむく。

彼女の体を覆っているのは年季の入った白いローブのみ。

「いや、というか君たちの世界に下着の概念はあるのか？ 君くらいの頃の外見なら丁度ブラジャーと呼ばれる下着を……」

「やめろ！ 君、僕の真名を理解した上でからかつてるのか？」

声を荒げてキヤスターは抗議するが、これはむなしく部屋に響くのみ。

「……ずいぶんと余裕な態度じゃないか。私はこの聖杯戦争の経緯を君から聞いた時は卒倒するかと思つたけどね」

「まったく神秘も何もあつたものじゃない」

「つまらないもの」に巻き込まれた、と思つているのなら謝ろう」

「はじめから君の一人勝ちじゃないか、他のマスターが知ったらなんて顔するか」「そうとも限らないよ、キヤスター?」

ふてくされるキヤスターに、イザイは優しい声で反論する。

「現にさつそく始まったみたいだからね。先ほど交通システムを監視していたミランダから連絡が入った」

手にしたタブレットの画面をキヤスターに見せながらイザイは続ける。

「セイバーのマスター、魔術師じゃない。ただの民間人がサーヴァントを召喚した。どう思う?」

「何だって……?」

「聖杯戦争の参加者は聖杯が選ぶと言われている。聖杯が間違えてなんの魔術知識を持たない人間に令呪を与えるなんてことがあると思うか?」

「……そのセイバーのマスター、もしかして」

「ああ、おそらく君の考え通りだ」

イザイの顔が明るくなる。

「ともあれ”第一段階”は突破した。そこで次の段階に移ろうと思うが……キヤスター、君の仕事は少し面倒になったな」

「導くことくらい、なんてことはない。いざとなったらこの”指輪”で……」

「いや、宝具は極力温存してくれ。それとは別にもうひとつやらかなきやいけないことがある」

宝具を使うなどというお達しに、さすがにキャスターも表情をげんなりとさせた。

「君はとことん人使いが荒い！ それでもう一つの仕事つて、何だい？」

”死神犬”だ。通行人を片つ端から襲っているらしい、魔術師民間人問わず、ね」

「……穏やかじゃないなそれは」

イザイは自身のサーヴァント会話を続けながら、よくもまあこのキャスターは表情がころころ変わると意外な印象を受けていた。

彼女にとつてこのキャスターもまた座によつてえらばれた英霊の一人であり、出典こそいささか特殊ではあるが偉大な大魔術師として名をはせた人物であることは確かだ。

(これもまた、”あの子”の影響によるものか?)

「遅かれ早かれ、監督役も動き出す。あとはタイミングだ。ライダー討伐のための手法は君に任せる、ただし……」

「それも、宝具は極力使わないで……か。まあ手が無いわけではないよ」

「さすがは私のサーヴァントだ。智慧が回るようで私もうれしい。本に間違いはないようだな」

ソファから立ち上がって彼女は裸のままキャスターに歩み寄る。

キャスターは気恥ずかしそうにうつむいて顔をそらして。

「間違っているとしたら、僕のこの容貌が間違っている！ サーヴァントに排泄や入浴の必要が無くて良かったと、本気で思っているよ」

「座の趣味としか言いようがないな、今のところは」
クスクスと笑いながらイザイは素っ気なく答えた。

彼女が窓の外を見やる。

ロンドンではすでに日が暮れ始めていた。

「外の世界は素晴らしいな。かわいい子には旅をさせるべきだ」

ロンドン 某所

——再び夜がやってくる。

雲からにじむ月の光と街からの明かりが混ざり合い、空は混沌とした色を呈していた。

昼と夜の境も分からない領分で今宵も摩天楼に不気味な獣の遠吠えが響き渡った。

野次馬の喧噪、パトカーのサイレン、群衆の渦中に横たわるのは男性の死体。

目が眩むほどの明かりが狭い現場を照らし、警官たちは一切の証拠を逃すまいと躍起になる。

一台の車が現場の前に止まり、長いコートを首までしっっかり留めた痩せた男が降りて来た。

彼が登場したのと同時に群衆の中からカメラを持った者どもが一斉に押し寄せる。

車からテープの向こう側へはわずか数十メートルの間だが、その間にも彼は何十という報道陣からの質問攻めにあうことになる。

「今回の事件も、例の猟奇殺人と関係があるのでしょうか？」

「一連の事件について、警察が過度な情報統制を行っているとの噂が上がっていますが……」

「本当に“死神犬”の仕業だと、お考えなのでしょうか、アバーライン警部？」

アバーライン警部は報道陣の質問に答えることなく、一切表情を変えないまま人込みをかき分けるようにして現場に入っていく。

——本当のことを話したとして、真に受ける人間はどれほどいるのだろうか。

この世界有数の先進国で、聖杯をかけた殺し合いゲームの参加者が魔術師を殺して回っている、か。

刑事であり、聖堂教会の神父でもある彼にとってこの問題は厄介なものであり、かつ

愉快なものであった。

仏頂面の裏側で周囲をあざ笑っていると、彼の部下のひとりが歩み寄って状況を報告し始めた。

「……今回も、”ライダー”の仕業か。だんだんと新しい体が馴染んできているようだな。厄介なことになりそうだな」

刑事は現場の裏通りに残された血痕と、死体を苦々しく眺めた。

体は異邦人のものようだ。

わずかに残っている人間らしい特徴からアバーラインはそうだと断定した。

体は噛み千切られていて、いくらかの臓器が欠けたまま投げ出されている。

肉はそれがれ、骨や脳が露出していて、非常に損傷が激しいものの、彼はなんともない様子でじつくりとそれを検めた。

やがて立ち上がって部下を呼んだ。

「……何かわかりま……うつぶ」

「マスコミへの対応は私がやる。ミランダに報告しろ、ライダーの”討伐”を提言する。

これ以上かばうのは無理だ。そのうち本当に取り返しのつかないことになるぞ」

「……りよ、了解」

「無理もない。今どき切り裂きジャックでもここまですべて派手に食い散らかさないからな」

刑事が指をさすと、彼の部下は力なく敬礼して現場を離れていった。「残念だ。早くも聖杯戦争のカードが一枚脱落とはな……やはり亜流の聖杯戦争ではこの始末か」

地面を眺めるアバーライン。

石畳の地面に獣の足跡が青く鈍く残滓のように光っていた。

そんな彼のはるか上空で、ビルディングの上を飛ぶように移動する影が二つ。

——どこだ。

——どこだ。どこだ。どこにいる、魔術師。

——食らいつくしてやる、何もかも。

——お前も、お前も、お前の仲間たちもすべて。

——根から絶やしてやる。

”セルデン”は自身でも驚くぐらいにこの体に秘められた力に順応しはじめていた。

人を食らえば喰らうほど体は羽のように軽くなり、そしてまた新たな衝動が彼の四足を駆り立てた。

赤い飛沫の混じった黒い毛皮の犬は都会に吹き付ける風のごとく街を走り去る。

——心地よい。

獲物を前に犠牲者が向ける表情こそ彼の唯一の糧であった。

——憎いか、この俺が憎いか。

——報いだ、これは驕れる魔術師どもへの報いだ。

——もつと憎め。残酷な死の運命を。

——その憎しみが俺をもつと速くするのだ。

ビルディングの凹凸をもものもしないスピードで死神犬は走っていた。

次の獲物はおのずとわかった。

手足が龍脈をたどり、鼻や耳が魔力を感知する。

『……………』

不意に死神犬の動きが止まる。

自らに近づく者の気配を察知してビルの頂上にあるヘリポートの上で待ち構えることにした。

月明かりも朧なその場所で、四方に輝く赤いランプがきつくそのサーヴァントを照らしていた。

「問おう」

直立した老紳士が、ライダーの反対側から歩み寄る。

やがて白髪と赤く照らされた險相が見える。

「お前か、私に待ち受ける」運命「は？」

現れたバーサーカーを前に、答える代わりにライダーは低くうなり眩く。

『魔術師』

「大層な姿だな。”運命”というものは」

ライダーを前にして、バーサーカーは朗々とした声で言葉を続ける。

さながら舞台役者のような言い回しで。

『そうだと、俺が運命だ。死の前触れ、誰にも逃れられぬ運命だ！』

ライダーが言い終わるや否や突進する。

鋭く光った銀色の歯が老紳士をまっすぐにとらえ食らいつこうとした。

だが、死神犬の噛みつきが成功する前に、バーサーカーはたやすく身をひるがえした。

コンクリートの地面は轟音と共に抉れる。

そのまま脇を見せるライダーの脇腹に一撃、右腕のストレートを加えた。

『……!?!』

低い吠え声が上がリ、ライダーは吹き飛ばされた。

ヘリポートを囲むフェンスに直撃して勢いは相殺されたが、フェンスは歪に曲がり次

はない程に変形した。

床に描かれたアルファベットのHは激しく損傷し、床には踏ん張るための爪痕が線を残した。

ライダーは目を見開いて、今しがたこの巨体を殴りつけた敵の存在を観察した。

どう見ても戦闘向きではない時代を感じさせたヨーロッパ風の洋服に身を包むその老紳士に、とうてい巨体を殴り飛ばすほどの芸当があるとは思えない。

「私が傷つくことなど、運命が許すものか」

『…なるほど、お前も俺と同じような存在、サーヴァントつてわけか』

「運命とは時に嫉妬深いものである。天才が夭折するように、運命とは絶頂期にある者に残酷な仕打ちをする」

『……はあ？』

バーサーカーが洋服のポケットから何かを取り出す。

「我がクラスはバーサーカー。お前の運命を、私が乗り越える」

太い腕の先で輝く白い指揮棒。

バーサーカーが右腕を振りかざすと、どこからともなく『音』が響いた。

眼前の敵にひと振り、音は腕のように質量をもち、ライダーを殴りつける。

『がっ……！』

よろめくライダーだが、四股をコンクリートにしつかり食い込ませて持ちこたえる。

「私の音楽魔術はいかがかね。身をもって芸術を知りたまえ、運命よ！」

「おお神よ！ 汝が私に与えた試練を！ いまここに！ 私は両腕でもって抱擁せん

！」

『意味わかんねえ……てめえみたいなのが、一番ムカつく』

「……」

再び指揮棒の一振り、重厚な腕が現れると握りこぶしを作つて上からライダーを叩き潰そうと振り上げた。

だが、腕が振り下ろされるよりも前に今度はそれが真つ二つに断ち切られた。

そこからわずかに遅れて肉の裂く音が周囲に響き、バーサーカーの呼び出した音楽魔術は妨害を受けて霧散した。

「……おお！ いやしくも死というものは付きまとうか、私を！」

上空に浮かび上がる影、バーサーカーが上を向くとライダーがどこからともなく口に大鎌を咥えてとびかかろうとしていた。

『死にやがれ、大根役者が』

そして禍々しい黒い刃の一閃が弧を描く――

大鎌の一撃は軌道を逸らされた。

ライダーの攻撃はバーサーカーに当たることはなかった。

『……………どういふことだ』

「先ほども言ったはずだ。私が傷つくことなど、運命が許さない」

——どう見ても直撃だったはず。

セルデン・オースティンは再びヘリポートの上で距離を取り、この老人の秘密について思案を巡らせる。

魔術師ではない彼にとつても、目の前のバーサーカーの持つ力がサーヴァントに与えられた能力であることに気が付くのはそう遅くはなかった。

——今はまだ情報が足りない。

「流石に気付かれたか……………だが、気付いたところでもう遅い」

「この聖杯戦争……………いけるかもしれない」

「ライダーを倒して、このまま勢いついでに勝ち進む！」

ヘリポートから数百メートル離れた場所、住宅街の公園で一人、眼鏡の青年は握りこぶしを振り上げた。

「俺のバーサーカーは……………最強だ！」

『調子づくのはいいがな、マスター』

意気揚々とするエハッド・ティールマンの窘めるように、バーサーカーの念話が聞こえてくる。

『勝利を確信するのはまだ早い。運命とはいつだつてお前のような者を常に引きずりこむ』

バーサーカーとは思えぬ理知的で冷静な声が伝わってくる。

「わ、わかつてるさー！」

『だが、心意気は良い。その調子だ』

——死神犬、恐るに足らず！

「まず一人、脱落だ。バーサーカー、一気に……!?!」

死神犬へのとどめを命じようとしたその瞬間、エハッドに悪寒が走る。

すぐ近くで急に強大な魔力の気配を感知したからだ。

慌てて振り返って正体を確認すれば、エハッドのすぐ目の前まで砲塔を抱えた大男が立っていたのだ。

「よう！ さっきの言葉から察するに、お前がバーサーカーのマスターか？」

「……あ、アハハハ。何の事かな……」

アーチャーがニヤニヤしながらエハッドに問いかける。

顔から魔術回路にいたるまでを真っ青にして、目の前の青年はただただごまかし笑いをするしかできなかつた。

「……むむ。了解した、すぐに戻る」

『……?』

「運命が決断を先延ばしにすることもある、だが、先延ばしにすればするほど、決断というものはより重大で深刻となる」

『相変わらず何を言いたいのかさっぱりだが、もうやりあう気はねえってことか』

「さーらばー!」

ライダーが最後まで言うや否やバーサーカーはあわただしくへりポートの地面をけり上げて、摩天楼の中へ小さくなっていく。

『……あのバーサーカー、厄介だな』

ふとライダーはバーサーカーが撤退した理由を自問した。

そしてその答えは己を“召喚”したあの老魔術師との一件の中に見出す。

——マスター……魔術師、なるほどな。

死神犬の顔が醜くゆがんだ。
今宵も冷たい遠吠えがロンドンの街に響き渡った。

III — 英雄（エロイカ）

ロンドン 某所

エハッド・ティールマンが振り返る。

彼の眼前に堂々たる立ち振る舞いをした大男の胸板が広がる。

動揺と、焦りと気恥ずかしさがごちやごちやとなつた頭のまま、ようやく振り絞つたような掠れた声が出てくる。

「は、ハハハ……何の事かな？」

（緊急事態だ、バーサーカー！）

念話を通してエハッドは自らのサーヴァントに撤退命令を出す。

だが、エハッドの警戒を気にも留めず、余裕の笑みを浮かべたアーチャーが立ち尽くすのを見て目を丸くした。

——絶好の機会だというのに、このサーヴァント。

マスターを失つたサーヴァントは現界を維持できず消滅する。

それはすなわち聖杯戦争での敗北を意味する。

ここで彼の手に持った砲塔がマスターを狙えば、間違いなく彼は消し炭となつていた

だろう。

「おつと、事情が事情なんぞな。安心しろ、お前たちの命を狙いに来たわけじゃない」

「……お前、アーチャーか？ どういうことだ、マスターはどこにいる？」

「ここからは離れた場所にいる。そこから先はお前の態度次第だ。バーサーカーのマスター」

アーチャーは砲塔を脇に立てて、仁王立ちのままエハッドに提案する。

「名前は？」

「エハッド・ティールマン」

「お前は魔術師だな？」

「どういう意味だ？」

「……いや、それならいいんだ」

アーチャーの問答はエハッドが答えるごとに数秒遅れて帰ってくる。

彼が念話を通してアーチャーのマスターと何かを相談しているのはエハッドにも明

白だった。

「……お前のバーサーカーは？」

「ライダーを追っていた。じきに戻ってくる」

「ライダーのサーヴァント……今、街で暴れているあのサーヴァントか？」

「魔術師として魂食らいを放っておけない。神秘の漏洩という危険性もあるからな」
「ふむ……」

『アーチャー、バーサーカーのマスター、同盟を組むに値するかしら？』

『正直なところ、頼りない。俺がここまで接近しているにもかかわらず気づいていない様子だったしな。戦いに関してははずぶの素人も同然』

『まあ、ティーレマンの一族だものね』

念話を通してシャルロットの落胆した声がアーチャーに聞こえてくる。

「ふむ……」

品定めするアーチャーの視線を余裕と感じ取ったのか、エハッドが反論する。

「そうだよ。俺はティーレマンの長男。のらりくらりと生きて来ただけの田舎者さ」

「おっと……心を読まれちまったようだな」

悪びれる様子もなくアーチャーは返す。

「だが——」

エハッドは続ける。

「俺のサーヴァントは違う……お前がどんな英霊なのかはまだ分からないけど」

「死ぬためにこの聖杯戦争に参加したんじゃない。勝つためだ！」

「舐めるなよアーチャー」

『バーサーカー！』

『……』

エハッドが振り返る。

だがマスターの期待とは裏腹に、ただ何の不意打ちをするわけでもなく、壮年の男はゆつくりとこちらに歩み寄るだけ。

近づいてきたシルエットをニヤニヤと眺めていたアーチャーは、その姿を次第に視認するにつれて元の真顔に戻っていった。

「バーサーカー！ どうしたんだ？ 先制攻撃のチャンスだったのに……」

「……よもや、このような形で出会うとはな」

エハッドの追及を無視してバーサーカーは眉間にしわを浮かべて呟いた。

「お初にお目にかかる、というべきか。皇帝ナポレオン」

「俺を知っているのか。いや、その外見、噂には聞いたことがあるがまさか……」

『アーチャーの真名を見ただけで……!?!』

『ああ、こいつはどうやら——』

「我が真名は、ルードヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン。これも縁と呼ぶべきかな、英雄（エロイカ）」

「そうか、お前がベートーヴェン……」

『大した相手になりそうだな』

ロンドン 某所

『ベートーヴェンですって？ あのベートーヴェンが、バースカー？』

『英霊の座というのは、”縁” ってもんが大好きみたいだな。それにしても……』

「まさかお前が、サーヴァントとはな」

「いつかは相まみえると、私はそう期待していたがね」

少しの緊張と沈黙が続いたが、先に堰を切ったのはアーチャーの豪快な笑い声。

「なるほど、確かにお前の生き様は狂ってなければそう簡単には辿れまい！」

「盲点だったよ。俺はてつきりネルソンでも連れてくるのかとビクビクしていたが」

「……」

笑い声をあげるナポレオンとは対照的に、ベートーヴェンは静かに、ただ一步も動かず立ち尽くす。

薄く開いた目が並々ならぬ意思をもったまま、じつくりとアーチャーを見定めようとしている。

そして、一言、

「……浅はかなものだ。これがかつてヨーロッパを征服した男とはな」と一蹴した。

「言つてくれるじゃねえか。ああ、確かお前は俺の顛末に失望し、曲の題名を書き換えたんだつたか？」

「だがな、”狂戦士”よ。俺にもひとつ納得できないことがある」

先ほどまでの笑い声からトーンが急激に下がる。

空気が緊張し、振幅は増大し、その場にいた魔術師の鼓動を急激に高鳴らせる。

「お前程度の存在が、どうしてサーヴァントになれる？」

「手厳しいな、エロイカよ」

「私がなぜサーヴァントになれたのか、だと？」

「ここでその理由を確かめてみるのも悪くはなからう」

袖に手を伸ばしたバーサーカー、気づけば再び彼の手には指揮棒が握られていた。

「私は”人”の力を見定める者、”人”の力を信じる者。人々の願いであり、守護者であり、運命であるからだ」

「……ほう？」

バーサーカーの敵意を見て、アーチャーも抑えていた魔力を解放する。

濃い魔力の風がせめぎあい、ふたりのサーヴァントと、その後ろの魔術師を強く吹き付けた。

「抑止力……それって抑止力のことを言ってるの?」

「話は後だ、マスター」

「バーサーカー、いけるか?」

「この男には一度説教の一つでもかましてやりたいところだったんで……いつかはそのチャンスが巡ってくると思っていたが」

「抑止力とやらには感謝しなければ。こいつも早く巡ってくるとは。これも運命の導きか!」

そして演奏開始の合図が振り下ろされた。

ロンドン 某所

「……」

夕暮れシャルロットと別れたあと、セイバーを従えた男は帰路を急いでいた。

付近で起きた猟奇殺人事件に気持ちちはやったカナウ・アルバーンは恐怖と興奮を胸

に走り出す。

自分が、魔術師やサーヴァントを相手にどれだけ立ち回れるのだろうか？

聞けばあの殺人事件の犯人は“死神犬”の仕業であるという。

聖杯に呼び出されたサーヴァントでありながら、本来の目的から逸れて街に混沌をもたらす反英雄。

死神犬、見た者に恐ろしい運命を、死をもたらずとされるイギリスの精霊。

事件現場で出会ったアバーラインという刑事が口にしたライダーのサーヴァントが次に誰を標的にするのも考えたくはない。

ロンドン 某所

「Mr. アルバーンだな」

「えっ？」

通りがかった人ばかり、猟奇殺人事件の野次馬に紛れていたカナウは突然刑事の男に話しかけられる。

「セイバーのマスター、カナウ・アルバーンだな？」

「どうしてそのことを…」

「アサシンのマスターから君のことを聞いた。お初にお目にかかる…」

「ひとまず…… おめでとう」といえばいいのかな。それとも「災難だったな」といえば？」

低い声でアバーラインはカナウの応答など気にすることもなく歩み寄る。

「私はアバーラインという。この聖杯戦争の、暫定的に監督役を取り仕切ることになった」

「二応、見届ける身ではあるので、こうしてマスター全員に顔を見せている。ライダー以外はな」

「監督役？」

「聖杯戦争とはいえ、まったくルール無用の凄惨な戦争を行うわけではない、そうさせないために我々がいる」

「もし君が戦争を降りるといふのなら、聖堂協会は君を保護する準備がある」

アバーラインはカナウをじっと見据えて少しだまり、そして続ける。

「ホムンクルスの奪還などとアトラス院は言っているが、高い確率で事態はこじれることになるだろう。様々な思惑を持った人間が、動いている」

「私は刑事として、そして聖堂協会の人間として様々な世界、人間に携わってきたが……」

「これは、君の手に追える案件ではないと考える」

アバーラインはテープで遮られた殺害現場の先を指さした。

「あれは聖杯戦争参加者の仕業だ。ライダー、真名をグリムドック」

「君もイギリス人なら聞いたことぐらいはあるだろう？」

カナウはこわばった顔で首を縦に動かす。

「どういう事情かは知らないが、あれは今手当たり次第に人間を襲い噛み殺す」

「遅かれ早かれあれは己の目的を達成しようとして動き出すだろう。魔術師を喰らい、サーヴァントを喰らう」

「聖杯を手に入れようと、動き出す。いくら命乞いをしようとも獣に言葉は通じない」

「お、俺は……」

「それだけではない」

アバーラインは更に詰め寄るようにカナウに言葉を浴びせる。

「魔術師たちを甘く見ないほうがいい。お前は自分がなぜ死んだのかもわからないままに死ぬ」

「自分が相手にしている存在を、お前も知るべきだ」

ランサーのマスターの、邪悪な笑みが再びカナウの頭に浮かぶ。

「こんなことをして何になる。」

「マスターのひとりりを脅して、脱落させたいのか。この私が、どうして彼なんかを気にかける？」

―決まっている。聖堂教会の人間として、アクシデントに対する最善の対応がこれだと信じているからだ。

アバーラインは自分が目を閉じて思慮にふけていることに気がついた。

不思議そうにこちらを覗き込む無知な青年を前にぼうつとするように彼は立ちつくしていたが、やがて

「今からでも遅くはない。その気になれば、私のところに来い」

そう言い残して再びテープの向こうへ踵を返していった。

人気のない裏路地に入ったところで、アバーラインはコートのポケットからタバコを取り出そうとして、やめた。

どこへ向かってしやべることもなく口を開く。

「いるのか、アサシン」

男の背中で黒々と、古びた衣がたなびいた。

次の瞬間には数センチの距離で、ドクロの仮面が浮かぶようにして刑事の後ろに現れる。

「…バーサーカーとアーチャーが戦い、ランサーはライダーは追っている。キャスターは不明」

「さすがの諜報能力だが…初めて声を聞いた。どういう風の吹き回しだ？」

「面白いものを見つけた」

「面白いもの？」

アサシンはゆっくりと“それ”を指さした。

アバーラインには白い仮面がひどく歪んだように見えた。

ロンドン 某所

そのような脅しを受けたのだから、彼の心はひどくかき乱されていた。

手を握りしめていなければ震えが止まらないほどに、刑事の男の語りは冷静で冷酷だった。

『あの監督役の男、妙な男ですね』

走り続けるマスターの隣で、セイバーが静かに声を掛ける。

「聖堂教会：なんて言う割にはまるでカタギの人には思えない風貌だったな」

『それもあるのですが：いえ、どう表現すればいいものか』

「とにかくつ：急ごう。それで無事ならただの杞憂だって笑い飛ばせばいい」

すでに黒く染まった夜のロンドンを駆ける。

遠くで犬の遠吠えが聞こえたような気がした。

「今のつて…」

『足を止めないで、カナウ！』

「セイバー？」

『……！』

カナウの前方に突然セイバーが剣先を振り抜く。

そのわずかミリ秒後に金属音が剣先で響き、火花に驚いて彼はのけぞるよう尻もちをついた。

「うわっ！」

慌てて周囲を見渡して、火花を起こしたものの正体を探した。

地面に落ちていたのは真つ黒い刃の投げナイフだった。

「ナイフ…… まさかサーヴァントの襲撃か」

「攻撃の瞬間に姿を現す、気配遮断の使い手……アサシンだな？」

セイバは両手持ちの大剣を構えて、前方の襲撃者を見極めようとする。

灯りに当てられ、ガスのようにふわふわと漂う黒い外套に身を包んだドクロの仮面がじつとこちらを見つめていた。

ふたたびアサシンが外套を翻す。

明かりを嫌うように、溶けていくように闇の中へ紛れていく。

「闇討ちとは卑怯なり、アサシン！ 姿を表しなさい！」

セイバーの抗議もむなしく、今度は反対方向からカナウの背中を狙う黒塗りの刃の投擲。

「くっ……！ 失礼！」

セイバーはカナウの肩を思いつきり掴んで脇に投げ飛ばす。

だが、両手持ちの剣は飛び道具をいなすには小回りも聞かず、おもすぎた。

「ぐあっ！」

刃はそのままセイバーの肩に深く突き刺さる。

サーヴァントといえ、痛覚は存在する。痛みに呻くセイバーだったが、次の瞬間。

「……！」

「まさか」

その表情はさらに蒼白とする。

カナウはセイバーの苦しむ表情を見て、それが何であるかをすぐに理解した。

先日自分があの子ども達の魔術師から受けたような、単なる痛みでは収まらない呪いの

ような……

「毒か！」

「……あつけない」

アサシンは初めて彼らの前で口を開いた。ため息混じりの、失望の声だ。

「最有のクラスだと聞いて呆れる。よもや宝具も目にするのができず脱落とは」

アサシンと思しき仮面のサーヴァントが負傷したセイバーを指差して静かに告げる。

「並の医療魔術ではどうにもできない、毒物の生成には心得があつてな」

「放つておいても明日までその体が持つことはない」

「お前は聖杯戦争にふさわしくはない、疾く消えろ」

そして外套の袖から再び黒塗りの刃が飛び出し、アサシンはそれを手に構えた。

「セイバー！ 大丈夫か」

「いえ、まだ大丈夫です。このぐらいの毒、どうつてことは…」

セイバーはよろめきながら立ち上がる。両手に持った剣の切っ先は震えているが、戦意を失つてはいない。

—とはいえ、戦力差は絶望的。

—アサシンのマスターは位置がわからず、こちらのマスターは魔術師ではない。

—加えて私は…。

「……く、やむを得ないか」

セイバーは振り返るとカナウの方を向いた。

そしてアサシンには背を向ける格好となつたが、それを逃さぬアサシンではなかつた。

すつと軽い身のこなしで、刃を投げたアサシン。

―諦めたのか？ 最後にマスターをかばおうという粹か？

黒塗りの刃がセイバーに到達するまでのわずか数秒以下の世界。

アサシンには興ざめの気持ちと、圧倒的な勝敗結果に対する罪悪感すら抱く寸前であつた。

「令呪を持つて命ずる！ 離脱するぞ、セイバー！」

アサシンの落胆は杞憂に終わり―

トドメの一撃は標的に当たることなく夜の闇に吸い込まれていった。

カナウが右手の甲に宿る令呪に力を込めると、軽やかにそれは発動した。

高貴ささえ感じさせる赤の輝きがカナウとセイバーを包み込むと、周囲の世界はあつという間に見えなくなり、代わりに次に見えたのは見慣れた自分の家の前に続く道路だつた。

「……だ、大丈夫かセイバー」

「なんとかか……見事な判断だと感心しています、カナウ」

彼がセイバーの傷を見ると、すでに鎧の隙間から赤黒いシミが広がっている。

刀身そのものはそれほど大きいものでもないにもかかわらず、傷からは流血が止まらない。

「解毒が必要ですよ……シャルロットならあるいは、どうにかできるかもしれません……」
「街は今アサシンに、グリムドッグもいるっていうのに……くそっどうしたら」

カナウはふと自分の右手を見た。使用した令呪一画ぶんの痣がこすったかのように消え去っていた。

——正しい判断だったと思う。あの状態でアサシンと戦っていても勝てはしなかっただろう。

——とはいえ、浅はかだった。自分の油断が恨めしい。こんなにも早く窮地に陥るなんて。

カナウはもう一度令呪を使うことも考える。

もしかしたら、この令呪をもう一画使えば解毒も可能ではないのか、と。

しかしながら彼にその度胸がなかった。

ただでさえ彼にとって謎が多い代物であるし、確信がなかった。

今回の離脱だつて無我夢中で祈りを込めたものが偶然にうまくいったのだから、彼のここまでの戦績ははつきり言つて幸運に幸運を重ねただけの散々な戦果である。

その事実には足がすくむ。この英霊に対して、自分はまだ何も応えてやれていないのだ。

—何が、一緒に真名を取り戻す手伝いをする、だ。

—思い返せばなんと、恥ずかしい。

自分が過去の英霊と対等に会話して、あまつさえ手伝うだつて？

—いけない、今はそれよりも。

「一度応急処置をしておこう。人間の処置がどこまで効果があるのかわかんないけど、それからシャルロットのところへ……」

「あら、私もちやうどあなたに用があったところなのよ、カナウ・アルバーンさん？」

カナウとセイバーが振り返る。

立っていたのはシャルロットとその後ろでほくそ笑む少女姿のローブを纏った魔術師。

笑顔の少女とは対照的に、その声はとても冷たい表情で今にも殺そうとしかねないような気迫が見られた。

「話があるんだけど」

IV — 秘密

ロンドン カナウの家

「話があるんだけど」

恐ろしく冷たい声がカナウに向かって放たれる。

振り返るとカナウとセイバーの前に、シャルロットとアーチャーが立っている。

作り笑いのような表情に問い詰めるような声。

『まるで浮気を追い詰める女房だな』

「お黙りアーチャー」

『おっと……マジギレだったか』

相手が皇帝だろうがお構いなしに黙らせることで彼女の圧力は桁を増す。

「……お茶の一つでも出してくれるかしら？ あなたの ”家” で、”5人分”
ね」

「もう夜も遅いですよ、マドモアゼル」

「ふざけないで！」

この期に及んでとぼけようとするカナウにとうとうシャルロットも我慢の限界が来

たらしい。

以前までのポーカーフェイスはとうに消え去り、怒りに身を任せた少女が両肩に力を込めたまま、ズカズカと詰め寄った。

「……………!?!」

振り上げた拳がカナウに直撃することはなかった。

健気にも割って入ろうとしたセイバーは体をよるめかせる。

そのセイバーを支えるようにシャルロットが抱きとめた。

そのまま手負いのセイバーに手を伸ばしたシャルロットは一度わずかに怒りを沈めて、セイバーを見た。

「セイバーも怪我してるじゃない……………アサシンかしら。はじめから私達に言ってくれれば……………」

「残念だけど完全な解毒は私にも無理だわ。というよりはこれは呪いに近い」

「ものすごい執念を感じるけれど、呪いならかえって解決方法は単純だわ、術者を倒せばいいのだから」

「見ただけでそこまでわかるのか?」

「あら、それほどの相手を目の前にしているってこと、ようやく分かってもらえたのかしら」

続いてカナウに向けられたシャルロットの視線は再びあの恐ろしいものに戻っていた。

「家にながらせてもらおうわよ。話はそこで聞く」

「安心しなさい、殺したりしないわ。今のところは」

「……わかった」

バツの悪そうにカナウは答えた。

ロンドン某所

「フォルティツシモ！」

バーサーカーの指揮棒の一振り、音が質量を持つかのようにアーチャーを殴りつける。

アーチャーがそれを手にした大砲でガードし、今度は反撃とばかりに砲口をバーサーカーに向けた。

派手な砲撃音が周囲にこだまする。しかし砲弾はバーサーカーに当たることはなかった。

「まさか、狂化がこれほどのものとはな……いや、そもそも攻撃が当たらないのは何故なんだ？」

「 ” 運命 ” が私にささやく、まだお互いに倒れるべきでないとな」

「 ” 運命 ” か、好きだなその言葉」

——因果に何らかの影響を与えていることは間違いない。おそらくベートーヴェンの過去にまつわるスキルのことを言っているのだろう。

——攻撃の未来予知というより、 ” 砲弾が勝手に逸れていく ” と表現したほうが当たっているか？

およそ戦いが始まってから数十分が経過したが、両者ともに決定打を与えられず時間が経過していた。

ナポレオンはその間にもこのバーサーカーの得意とする戦いを冷静に分析していた。
——だとすればこの戦い、こちらが不利だ。

「どうにも罅が明かないな。なあ、ここはひとつ引き分けにしないか？」
「……珍しく意見が一致するな」

互いに降ろされる腕、砲塔と指揮棒。

——勝てない戦はするものじゃない。忌々しいが、こいつの力量を甘く見ていた俺に敗因はある。

——それでも負けっぱなしでは、終わらせないがな。

「お、おいバーサーカー！ 勝手に戦闘を止めるな！」

「お前も見えていたであろう。相手に私に対する決定打がないことは明らかだが、それは（こちらと同じ）」

「朝日を拝むことになっても、戦いが終わることはない。 ” 運命 ” がそう囁いている」

「互いに ” 宝具 ” でも使わない限りはな」

バーサーカーは不敵に笑う。

アーチャーはそれを挑発と捉える。

——そうだ、今は互いに宝具を使用していない。

「出し惜しみなんかしなくたっていいんだぜ？」

「……そちらこそ、私のことをただの老人と見ずに、本気を出してもよいのだぞ？」

静かな闘志に満ちるベートーヴェンを前にして、アーチャーもまた再び動き出そうとしたその時、

「誰だ？」

アーチャーとバーサーカーの間に割って立つように、一人の影が音も立てずに舞い降

りた。

無言で着地すると、一言も発すること無くそこに佇んだ。

四方にプロペラの付いた平たくて白い機械だ。

「ドローン？」

「ドローンとは何だ、エハッド？」

「プロペラを使って飛ばすことのできる現代の機械だ……カメラをつけて撮影したりできるとは驚くべきものだ」

「爆発物とかじゃないでしょうね……」

「下がっているマスター」

警戒するシャルロットの前に立つように、アーチャーが慎重にドローンに近づく。

次の瞬間、

『ドカーン！』

「!?」

「んなっ……!」

稚拙な「爆発音」があたりに響いた。

『「なーんちゃって!」』

そしてドローンから女性の姿をしたホログラムが現れた。

『ごきげんよう、お初にお目にかかります』

ホログラムの女性がゆっくりとお辞儀する。

優雅な女性だった。

白いドレスに白い帽子の貴婦人。

「……おい、まさかこのためだけに俺たちの邪魔をしたわけではないだろうな？」

なおもアーチャーはイライラした様子で問う。

「……何者だ、珍妙な使い魔をもつご婦人」

と、これはバーサーカー。

——魔術というより科学だな。

エハッドはこころの中で訂正した。

『訳合つてこのようなお姿で失礼いたします。お二人が争っている様子が見えたので、

止めようかと』

ホログラムの女性にはこやかに続ける。

「申し遅れました。私アサシンのマスターをしております、ミランダ・ウォルフオークと

申します」

「アサシンのマスター!?!」

シャルロット、エハッドの両名がその言葉を聞いて驚愕する。

エハッドは近くにサーヴァントの気配を探そうと首を回し、やがて無駄であったことを悟る。

「気配遮断か……？ まったくわからなかった」

ゾツとした様子でエハッドが言葉を漏らす。

「気配遮断じゃないわ」

エハッドを遮るようにしてシャルロットは答える。

彼女がふと思いついたかのようにドローンに話しかけた。

「ミランダ・ウォルフオーク。 ” 量子の魔術師 ” 、あなたも聖杯戦争に参加していたとはね」

『まあ、ご存知でしたか。若いのに大した女の子ね』

” 量子の魔術師 ” ！

ホログラムのミランダは今度はエハッドの方へ向き直し一礼する。

「魔術師の中でも異質な経歴を持つ一族……魔術による因果を計算として捉える数秘術の一門で、その中でもミランダは天才的な頭脳を持ちあわせており、現在は冠位に最も近い魔術師のひとりとされるけれど……」

「冠位!?! そんなのがどうして……」

——けれど、とシャルロットは続ける。

「誰も彼女の本当の姿を知らない。いつも見られるのは同じ格好。百年以上形は変われどずっと同じ姿をしている」

「最近じゃ ” AI ” じゃないかなんて噂も立っていて、実在しているのかどうかも怪しい」

『まあ、実在なら今こうしてこの場にいることがその証明になるのではありませんか？』
「高度に発達した科学は魔術との見分けがつかない……あなたは科学的には生きているのかもしれないけど、魔術師としては怪しいものね」

『残念ですわ。今どきの若い子はこういうものが大好きだと聞いていたのですが、やはり時計塔の古株は発想が凝り固まっておられるご様子』

時計塔における階位、冠位はその中でも最上級に位置しているが、この階位にたどり着く魔術師は殆どおらず、幻とも言われている。

「思い出した。量子の魔術師、実在したのか……」

ドローンを眺めながらエハッドはため息を漏らす。

「で、俺たちに一体何のようだ？ サーヴァントも引き連れていないのか」

『皆様にひとつ、情報提供をしようかと思ひまして』

「情報提供？」

『ええ、” たまたま私がロンドン全域を監視していた” ときに見つけたんですけどね?』

カナウの家 カナウの部屋

カナウは読書家である。子どもの頃から本を読む、ジャンルは様々ある。

そして彼の部屋には当然のように本が敷き詰められていて、その全ては何度も読んだあとでページがよれていたり日に焼けている。

その本棚に囲まれるように、カナウの部屋の中でもぞもぞと動く人影があった。

お構いなしにシャルロットが部屋に上がると部屋の電気をつけた。

人影の姿が頭になる。

質素な部屋着に身を包んだ少女が怯えるように部屋の方の隅へと這って逃げようとする。

病的なまでに色白で、紫色の髪をした少女が震えながら縮こまる。

カナウはひとことこの少女に「大丈夫だよ」とでも声をかけたかったが、隣に立つシャルロットの殺気を感じてとてもじゃないがそんなことを言える雰囲気でないことを察

する。

——本当に目の前で、殺されたりしないよな？

「あの錬金術師にそっくり。間違いない」

ホムンクルスを見てつぶやく。続いてカナウの方へ振り返る。

「あなた、ホムンクルスを ” 匿って ” いたわね」

「……どうして分かったんだ？」

カナウのその問いは、もはや認めているも同然である。

「……アサシンのマスターからタレコミがあつてね。彼女はこのロンドン全域を監視できるところから」

「聖杯戦争が始まる少し前、彼女はあなたがホムンクルスを発見して匿ったことを目撃していたのよ」

「逃げ場はないってことか」

「どこまでも甘いわね、おめでたいことよ」

——ロンドン全域を監視できるのか。さすがにそれはキツイな。

「ようやく合点がいったわ。なんでもないただの人間がなぜサーヴァントを召喚したの
もね」

「聖杯との縁があつたから、あなたの身を守るようにして、セイバーは召喚されたのね」

次にセイバーを見て、ため息交じりにシャルロットはつぶやく。

「……」

「知らなかったんだ、彼女が『アトラス院から脱走したホムンクルス』だったなんて」
「確かにちよつと普通じゃない感じはしたけど。まさかそんなことになっていたなんて……」

堰を切ったようにカナウが言う。

「時計塔で魔術師たちが話しているのが聞こえたんだ、ホムンクルスが狙われているって」

「あいつら、まるで実験動物みたいにこの子を利用してしようと考えているんだろ？」

「それで、打ち明けるわけにもいかなかったんだ」

「気持ちにはわからなくはないわ。そもそも聖杯の器にわざわざ人間を選ぶことだって趣味が悪いことよ」

「それでも、すぐに打ち明けてくれなかったのは残念だけど」

いつしかシャルロットの怒りは、だんだんと悲しみがこもり始める。

「魔術師にだって色々いる。でも私はそこまで人の心を失ったりしていない」

「あなたがもつと早く打ち明けてくれていたら、私とアーチャーで……」

——私とアーチャーで、何？

——助ける？

——なんで？

「……とにかく、あなたは私を信用せず、私はあなたを信用していなかったてことね」

「……ごめん」

——ここで手負いのセイバーを倒してしまえば、ホムンクルスは私のものになる。

——この聖杯戦争に優位に立てるかもしれない。

「うるさい」

「え？」

「……いえ、なんでもないわ。それより、気になったことがあるわ。どうにかしてそのホムンクルスと会話がしたいのだけど……」

シャルロットが再び部屋の隅で縮こまるホムンクルスを眺める。

「どうも聞いていたのと事情が違うのよね。」盗まれた” つてあの錬金術師からは聞いたけど、あなたにそんな芸当できるはずないし」

「アサシンのマスターの情報からして、あなたはただ匿っただけ……どうしてなの？」

「イザイ・エルトナムは嘘をついている。ホムンクルスが盗まれたと偽ってロンドンで

聖杯戦争を……うーん」

思考を巡らせるシャルロット。そこへしばらく黙っていたアーチャーが助言する。

「アトラス院はそこで作られたものを外へ持ち出すことを禁じられているはずだっ
な。だからこそ、”盗まれた”と表現するしかなかったんじゃないか？」

「そうか、それならある意味ルールを破って外へ持ち出すことができる……狂言誘拐
てやつ？」

「自作自演ってことだな。でも何のために？」

「聖杯戦争を起こして、自分が勝者となるため……」

「……イザイ・エルトナムもこの聖杯戦争に参加している？」

「このホムンクルスが嘘をついている可能性は？」

今も部屋の隅でうずくまるホムンクルスを指差してアーチャーが問う。

「なんとかして、話を聞けないかしら？」

「……やってみる」

カナウがゆっくりとホムンクルスの少女に近づく。

「大丈夫だ、この人達は悪い人たちじゃないから……」静かな声でカナウは声をかける。

「悪い人になるかどうかはあなた達の態度次第だけだね」

「シャルロット！」

「冗談よ」

「わかりにくい！」

カナウの説得もあり、恐る恐るホムンクルスは立ち上がり、二人の前まで歩いてくる。

「ずっとこんな調子で、普段は地下階に隠れてるんだが」

「……あなた、このロンドンまでどうやって来たのか覚えている？」

「……」

ホムンクルスは一言も声を発さず、ただ首を横に振った。

「あなたは誰かに誘拐されてここへ来た？」

「……」

首を横に振った。

「なにか覚えていることはない？」

「……水の中」

「水の中？」

「フラスコ……調整槽のようなものかしら」

「あなたを取り戻そうと魔術師たちが動いていることは知っている？」

シャルロットが問うと、ホムンクルスは突然震え上がるようにして声を絞り出し、怯

えだす。

「い、いやだ……生きたい、生きたい……」

「生への執着はあるのね……」

「……だめね。有益な情報は得られないか。こりやいよいよイザイ・エルトナム本人に聞くしか……」

「なんとか、この子を逃がすことはできないのか？ どこか魔術師の手の届かないところへ」

「無理ね」

すでに時計の針を頂上を越える。

いくつかの問答を終えてシャルロットはきつぱりと答えた。

「時計塔の魔術師がイギリスから出る船、飛行機を見張っている。今まで見つからなかったのでさえ奇蹟に等しいのよ」

——それに、とシャルロットは続ける。

「仮に脱出できたとして、ホムンクルスの寿命は短命なの。そもそも何か用途があつて創られる存在というのは長生きしても仕方のないことだから……」

「どうしてそんな残酷なことが言えるんだ君は……！」

「こんなことで残酷と言っていたらこの先やっていけないわよ、あなた」

不意にシャルロットが腕を振り上げると、カナウ・アルバーンの胸ぐらに掴みかかる。「よく聞きなさい！　そこにいるのは人間じゃないわ、魔術師の目的のために創られ、捨てられていく存在なの！　道具なのよ！」

「違う！　だって……人間の姿をしているじゃないか」

「目を覚ませ！　正義の味方を気取るのは本の中だけにしなさい！　本当に死ぬわよ！」

——どうして自ら地獄へ向かおうとするのか。

「ねえ、どうしてなの!?　数日前に匿っただけの、ただのホームクルスのためにどうしてそこまで意地になるの!」

「困っている人を助けたいと思うのは当然のことだろ!」

怒号の応酬が続く。

その様子をハラハラしながらアーチャーは眺めていて、セイバーは目を閉じる。

「セイバー?」

「……」

傷を抱えたままのセイバーを見つめるアーチャーは同時に彼女に違和感を覚える。

セイバーはなおも傷口を自身の腕で抑えていたが、こころなしか先程よりもその顔色

が明るくなっていた。

—— 昼間は身を挺してかばいに入っていたはずなんだが。

—— 傷のせいか……？ いや、それにしては……なんだ、この違和感は。

—— そうこうする間にも、喧嘩は苛烈を極める。

「そのせいで死ぬかもしれないのよ！ あなたは！ 救う必要のないもののために自棄になつて命を落とすのよ！」

「救う必要のない人なんていない！」

—— ただの人間が。

—— なんでもないひとりひとりの人間が、どうしてそこまで命を張れる？

—— 彼女は怒っている。

—— 言うことを聞かないで、勝手なことばかりするから？

—— 本当にこの男のことを心配しているから？

—— ただ自分の言うことを聞かないから？

何故。何故。何故。何故。何故。何故。何故。何故。何故。何故。

プツンという音がした。

次に自分が何をすべきかは不思議とすぐに分かった。

「アーチャー……」

カナウの胸ぐらを放つて、シャルロットはつぶやいた。

「いいのか、マスター？」

「このままこの男のもとにおいておいて、万一聖堂教会や他の手勢に奪われたら時計塔のメンツは丸つぶれよ」

シャルロットが堂々と宣言する。

「ホムンクルスをぶっ壊す」

その宣言の後、セイバーの目が見開かれた。

シャルロットの宣言から間髪入れずして、冷酷にもその砲塔はホムンクルスに向けていた。

彼にはわかりきっていたことである。

目的達成のために手段を問わない、それがシャルロット・ロジェだ。

だから彼女の合図にいち早く応えるのが筋だと考えていた。

召喚されて間もない時間ではあったが、マスターの行動方針は把握していた。

たとえそれが見た目では少女にしか見えないほどのソレを撃ち殺すことになろうとも。

——自分に悪属性という柵があつてよかつた。

——この俺が、この地で悪者でよかつたと心底思った。

——でなければ俺は戸惑っていただろう。戦争はいくらでもやったが、一方的な虐殺はそれとは一線を画す。

そして何より、アーチャーは予感していた。

必ずこのサーヴァントが何かをしでかすと。

”千里眼”　だなんて大層なことと言わない、こういう勘は人間誰しもが持つものだ。

砲塔から爆音が響くよりも前に、目にも留まらぬ速さでセイバーが剣を抜くとアーチャーが振り上げた砲塔を床に押さえつけたのだ。

遅れて金属の鈍い音が反響し、続いて命を狙われたことを悟ったカナウが反射的にホムンクルスの腕を掴む。

「……………」

「……………」

部屋の窓ガラスに体当たりをする。

派手な音ともにガラスが割れると同時に二人は外へと飛び出す。

「……つたくよお次から次へと、まともに戦わせてくれる英霊がないってのは腹が立つんだよなあ！」

「くっ！」

構うものかと、アーチャーが砲塔でセイバーを押し返す。

——敏捷では負けているものの、筋力では俺に分がある！

「アーチャー！」

「こっちは任せろ！ セイバーのマスターを追え！」

「頼んだ！」

しのぎを削りながら互いににらみ合う両者。

余裕があるのかアーチャーが体を震わせながらも、セイバーに問うた。

「ずいぶん大人しいと思つたら、いつちよ前にタマがついているみたいだなあ、アンタ！」

「……その汚い口を閉じろ！」

「ハッ！ 手負いの分際で生意気言いやがる。状況がわかつてるのか！」

「ぐう……！」

「ここで脱落させるには惜しいが仕方ねえ、悪いが一気にカタをつけさせてもらおう……」
そしてアーチャーの背後から砲塔が一台浮かび上がる。

「ラ・マルセイ……」

「やむを得まい……！」

アーチャーの砲塔を抑えていたセイバーの剣が光り輝く。
叫ぶようにその宝具を叫ぶ。

「クラウ・ソラス！」

「なに!?!」

まばゆい光が暗い部屋の中を突き抜け周囲を照らし続ける。
視界を奪われたアーチャーは立ちつくすしか無い。

「……くそつ、逃げられたか!」

地団駄を踏むアーチャー。そして思考を再開する。

「今の宝具……だが、あいつは真名が……どういうことだ?」

暗い部屋、割れた窓ガラスを呆然と眺めひとり取り残されたアーチャーは未だ閃光に

混濁する意識を正そうと頭を振る。

「何がどうなつてやがる……セイバー、お前は一体何者なんだ」

ロンドン 某所

『状況はどうだい、キャスター?』

「君の推測通り、彼は動き出した。おそらく聖堂教会のところだろう」

『アバーラインは彼を受け入れるだろうか?』

「受け入れるしかないだろう、あいつは監督役なんだ。脱落者を保護する責務がある」

念話を通して何者かと会話をするサーヴアントが立っている。

キャスターのサーヴアントは笑みを浮かべながら走り去るふたりとひとりの姿を見送る。

「もつとも脱落したからと言って助かるとは限らないけどね。それを教えてくれないなんて、あのアバーラインという男も趣味が悪いよ」

『まあそう言うな。やり手なのさ、彼は。何事にも妥協しないのが取り柄だね』

『こちららも先程ミランダ・ウォルフオークから連絡が入った。カナウ・アルバーンがホム

ンクルスを保護していると、ランサー、バーサーカー陣営にも情報をリークしたらしい。これから荒れるぞ』

「楽しいに言ってくれるじゃないか……私の仕事は増えるばかりだよ。その上宝具を使うなどと言うんだからね』

『それは奥の手なんだ。私の計算では彼らだけの力ではグリムドッグはまず御せないからね』

『君なら大丈夫だ。なにせ君は、あの花の魔術師と同等の ” 冠位 ” を持つべきサーヴァントなんだからね』

「買いかぶりは迷惑だ」

そう言いながらもキャスターの口調は明るい。

「さて、それじゃあ小童共の相手をするでしょう。ランサーとアーチャー、どちらも相手にとって不足なし。グリムドッグ戦前の軽い肩慣らしでしょう」

抱えた杖を持ってコツンと地面をつく。

キャスターを中心に魔力が広がる。高次元の陣地作成が行使されていく。

V
— キヤスター

ロンドン北部 某所

カナウと彼に引つ張られる形でホムンクルスは逃避行を続けている。

この時間でなおも人気の多い群衆へと逃げ込み、かき分けるように先へ進む。はぐれることのないように、その手はしっかりと握られて。

ロンドンの夜は寒い。

一日に四季があると言われるほどだ。とすれば現在の時刻は間違ひなく冬だろう。

その上アウトターを羽織る暇もなかったのだから、二人の姿は注目を集める。

——いや、これでいいはずだ。

魔術師というのは秘匿の漏洩を嫌う。

これほどの監修がいる中で、サーヴァントと魔術師が動こうものなら、きっと彼ら以上注目を集めるに違ひない。

この状態の自分たちをどうにかできる存在がいるとも考えにくい。

そしていざとなれば令呪がある。

何かあったときにセイバーを呼び出せば、また戦える。

「……セイバー」

息の上がつた調子でカナウはつぶやいた。

唯一の心残りはセイバーをおいてきてしまったことだ。

セイバーは宝具が使用できない。

シャルロットによれば宝具が使用できないのではサーヴァント戦闘において圧倒的に不利だという。

恐る恐る彼は手の甲の令呪を確認する。令呪はまだ消えていない。

次に自分の連れてきたホームクルスを確かめる。

思えばずっと走りっぱなしだったが、今になって急にこの病弱そうな存在の危機を感じ取った。

「……はあ……はあ」

ホームクルスの少女はカナウ以上に息が荒れていた。フラフラとした体を思わず抱きとめる。

「ごめ……大丈夫、じゃあないよな……?」

——あの場を脱出できたのはいいが。

彼らは完全に行き場をなくしていた。

アサシンやアーチャーの襲撃を考えるとどうかつに友人を頼ることもできない。

とりわけあのアサシンの性格からして、関係のない人間を手に掛けることは日を見るよりも明らかだ。

汗を浮かべて次の手を考えていると、ふと、ホムンクルスの少女がカナウを注視していることに気づく。

不安と恐怖の入り交じる表情がそこにはあった。

「どうする……どうする……考えろ……！」

ときに人間が死の直前走馬灯を見るのは、これまでの人生で得た経験から、自分が生き残るための手段を探るためだと本で読んだことがある。

彼はひとつの方法を思い出す。

「聖堂教会……！」

再び少女の手を掴む。

——なにせ教会だ。まさか駆け込む人間を追い出すような真似はすまい。

「もう少しだけ、頑張ってくれないか」

少女はただ黙ってうなづくのみ。

言葉はないが、カナウにはその瞳が出会ったときよりもいくらかの光をともしているように見えた。

思えば少女は保護されてからの間ほとんど眠っているか、本を読んでいるだけだっ

た。

眠ることで体力を回復しているのだろうか？

そして、こころなしかその体は保護したときよりも成長している。

——成長が早いのか……？

「つて……何をジロジロ見ているんだ俺は」

頭を振って邪念を払う。

息を整えて、再びカナウは走り出した。

ロンドン 教会

「……か……」

二人が走り始めてさらに数分、闇夜の中に北東部の小さな教会を視認する。

敷地内に続く門が閉じているが、うっすらと明かりがっている。

「後少しだ……」

シャルロットの話では聖堂教会は魔術協会と水面下では対立しているらしい。

であるならば、ホムンクルスを魔術協会から守ってくれるに違いない。

「聖堂教会の保護があれば魔術協会もうかつに手を出してこれないはず……」
だが、教会の正門まで後少しというところで、最後の障害が立ちはだかる。

「……!!」

門に手を伸ばそうとしたところで、カナウの腕を掴む。

彼が驚いて振り返ると、ホムンクルスがカナウの腕を握りしめていた。

首を横に振り、何かを訴えようとしたその時。

「よう、こんなところで何してるんだ？」

カナウの前に二本の剣を腰に差したサーヴァントが現れる。

あぐらをかいて、余裕の表情で正門の前にランサーがいた。

「う、うわー！」

驚いて後ろに飛び退く。

慌てて間に入り、背中に彼女を隠す。

「まさか、本当に聖堂教会に逃げ込むとはなあ……アサシンのマスター、一体何を考えてやがる？」

「ま、お前が聖杯戦争を降りようと、本当は俺には関係ないが……」

「そのホムンクルスを聖堂教会に引き渡すってんなら話は別だ」

ランサーが兜を脱ぐと、鬼のような形相でカナウを睨む。

「そこをどいてくれ、ランサー。あなたも人類史に名を残す英霊であるなら、こんなこと間違つてると思うでしょう?」

「狂つてる! 魔術師も、あなたのマスターも、魔術協会も、アトラス院も……」

「こんなことあつていはずがない……こんなことつて……」

カナウが怒鳴るように訴えるが、ランサーは表情ひとつ変えない。

「あいにくと俺は、そんな御大層な使命を持った英霊じゃなくてな」

「どちらかといえばバカなことばかりして生きてきた。 ” 蛮勇 ” と呼ばれることも

あつたな」

ふとランサーは過去の記憶を懐かしむ。

「俺は考えない人間が嫌いだ。過去の自分がそうだったからな」

「だからこそ、大切なものの存在に気づけず兄弟を手に掛けちまった」

「なにっ……?」

ランサーの言葉にカナウは驚愕する。

「なあ、セイバーのマスターよ。俺は英雄に見えるか?」

「お前のサーヴァントは本当に英雄か?」

「お前が思い描く英雄は、本当に誰も殺さない、そんなやつばかりに見えたか?」

空気が凍りつく。

誰もこの場を動かない。

「英雄がいればかならず討たれる者がいる」

「獅子は獲物を狩るために駆け、蛇は食らいつこうと欺く」

「数々の犠牲の上に、英雄は立っている」

「誰もがそうだ。例外などない」

「だが、我が王は……俺を罰した」

ランサーの脳裏に浮かぶ騎士王の影。

贖罪を命じられ、ブリテンを旅した苦渋の記憶。

流れ着いた地での、最後の決闘。

——忌々しい。

「俺の体は呪われている。蝕まれている」

「英霊の座によつて今も、縛られている」

「俺はお前が嫌いだ。絵空事ばかりの、理想ばかり語るだけのお前がな」

「聖堂教会が本当にホームクルスを保護すると思うか？」

「お前は彼らの何を知っている？」

二本の剣を構えたまま立ち上がるランサー。

どこからともなく兜が現れると、それをかぶる。

それでもなお、兜の隙間から殺意が漏れ出すように溢れている。

「お前を殺し、聖杯を手に入れる」

「神聖なる儀式を台無しにしようとしたその罪、死で贖え」

カナウは動けなかった。

目の前で圧倒的な威圧感を放つ騎士を前になすすべがない。

ゆつくりと近づくと、甲冑の騎士。

片腕に握られた剣が振り上げられる。

「そこまでだランサー」

「……あん？」

ランサーの背後で声がした。

「剣を収めてくれないか、この私の顔に免じてね」

「……そりやぜびとも拜んでみたいね」

ランサーが振り返る。

視線があわず顔を見下ろす。

ランサーよりも数十センチは低いローブを纏った少女がぼつんと立っている。

「……誰だ」

「キヤスターだ。君と同じサーヴァント」

「……お友達がいっぱいで良かったなあ、セイバーのマスター」

ランサーは嘲笑する。

「てめえ一人じゃ何もできねえくせに、ああ……全く虫酸が走るぜ！」

次の瞬間振り上げていた腕はキヤスターを名乗る少女に振り下ろされた。

「危ない！」

石畳の小路は粉碎されて煙が舞う。

「チィ、すばしっこいやつだ……」

先程までキヤスターが立っていた場所には蜃気楼が浮かんでいる。

「さすがは ” 蛮勇ベイリン ” だ。言葉が通じないらしい」

声のする方を見る。

ローブを翼のようにしたのはためかせたキヤスターが宙に浮いている。

「なぜこの男の味方をする、キヤスター？ お前も聖堂教会とグルってわけか？」

「いや、この世界の教会に興味はないよ。ただ私のマスターの命令でね、今彼を死なせる

わけにはいかないんだ」

羽ばたいた翼でもってキャスターはゆっくりとカナウとランサーの間に降り立つ。

「お前のマスター……?」

「こちらにも事情があつてね。私からすれば君たちの方こそよつぽど賊っぽい動きをしているけれどね」

「なるほど。お前達はご丁寧にも、これがまだ仲良しこよしの奪還作戦だと思つてゐるわけか?」

「ホムンクルスはアトラス院に帰す、それが私のマスターの望みだよ。問題ないだろ?」

キャスターは不敵に笑う。

「だから君みたいのに勝手に行動されては困る」

「そもそも君たち、聖杯を利己的に利用する気満々じゃないか」

「魔術師なら、与えられた手札、あらゆる手段で目的を達成して当然のことだろう?」

この場に現れるさらなる声。

声の主はランサーのマスターだった。

リヤオ・ファンは悪びれる様子を全く見せず言い放つ。

「俺たちは根源への到達を諦めては居ない。そこらの三流魔術師とは違うんだよ」

「目の前に転がってきた聖杯を、みすみす見逃すバカがどこに居るんだよ」

勝ち誇つたように幼いマスターは続ける。

「甘ちゃんなんだよ、どいつもこいつも。協力関係なんて成り立つはずがない。なんで錬金術師なんかと」

「おや、仮にも時計塔の代表の一人としてこの作戦に参加している君が、そんな事言うとはね？」

キャスターは挑発するかのように問いただす。

リヤオ・ファンはなおも勝ち誇ったように凄む。

「その手には乗らないぜ。この聖杯戦争の ” 真実 ” に僕が気づいていないと思っただのか？」

「真実だつて？」

カナウ、ランサー、キャスター、そして少女の注目がランサーのマスターに集まる。

「妙だとは思っていたんだ。アトラス院に侵入するならともかく、脱出できるはずがない。アトラス院はその構造上、外へ出るにはかなりの困難を極める迷宮らしいからな。だから、兵器を盗めるやつはこれまで居なかつたんだ。それが突然、そんな弱つちいホムンクルスがアトラス院を抜け出したなんて、いくらなんでもおかしいだろ？」

「だから盗み出されたのではないか？」

「さつきも言ったが、盗めるはずがないのさ。そもそもあんなところから盗みを働いて、かつ生きて出てこられるような存在がいるなら、兵器なんか無くとも世界を滅ぼすのは容易いのさ」

「それはアーチャーのマスターも不思議に思っていたことだな」

「まあまあ、ここからだよランサー」

得意げにリヤオ・ファンは続ける。

「ならば何故、そのホームンクルスがここにいるのか」

「簡単だ。手引したやつがいるんだ、アトラス院の中に」

「ほう……それは誰だ？」

事情が変わったとばかりにキャスターが微笑む。

リヤオ・ファンはゆっくりと腕を上げると、その人物を指差した。

指を刺されたのは、キャスターだった。

「僕が知る限り、ロンドンで召喚されたサーヴァントは4基。ランサー、アーチャー、バーサーカー、それからセイバー」

「この4基は僕が実際に召喚されているところを見た」

「そしてアバーラインという監督役の男の話ではライダーのマスターは召喚と同時に死

亡している」

「アサシンのマスターはミランダ・ウォルフオーク。量子の魔術師とも呼ばれるが、彼女はアトラスの錬金術師ではない」

「つまり……」

指差す腕に力を込めるリヤオ・ファン。

「キャスターのマスター、お前がアトラス院の錬金術師なんだ。そして……」

「ホムンクルスを外へ持ち出し、この聖杯戦争を起こした張本人だ」

「……」

——沈黙。

やがて吐息の音。

次に……笑い声。

キャスターが愉快そうに笑みを漏らした。

「素晴らしい。君を侮っていたよ、リヤオ・ファン」

「さすがは名家の出だな。頭はキレるようだ」

「いや、情報収集を頑張ったというべきか？ 聖杯戦争を勝ち抜くための下調べはぼつちりということだな」

「この聖杯戦争のために僕は何度もシミュレートした。ランサーを召喚したことだけがぼくにとってイレギュラーだったが、それでもやることは変わらない」

「……」

「僕はこいつのようなポット出とは違う。出たとこ勝負などナンセンスだ。情報を制するものが勝負を制する、兵家の基本だ」

——それで？

キャスターは尋ねる。

「私がアトラス院のサーヴァントと知って、これからどうする？」

「認めるんだな。アトラス院が時計塔のあるこのロンドンで聖杯戦争を起こすと、そう言っているんだな？」

——なるほど。ランサーのマスター、ずる賢く頭が回るらしい。

「これはアトラス院の『時計塔に対する挑戦』だ。歴史に残る大事件だ」

「時計塔はいかなる手段を持ってして、お前たちキャスターとそのマスターを追い詰める」

「覚悟するんだな。アトラス院の錬金術師！」

そして勝ち誇ったようなリヤオ・ファンの高笑いがこだまする。

次の瞬間、空気は豹変する。

「……！」

聖堂教会の周囲の森から一斉に輝く魔法陣。

質量を持った光弾がキャスターを囲うように放たれる。

「ふせろー！」

キャスターが叫ぶ。

ランサーがリヤオファンの首根っこを掴みむりやり地面に叩きつける。

少し遅れて同様にカナウとホムンクルスの少女が伏せる。

「痛ッ！ おい、ランサーー！」

「すまん、だが、優しくする暇がなかった」

「時計塔の懲罰部隊、気が早すぎる！ せめて僕らが戦線離脱したあとで……」

キャスターに降り注ぐ光の矢。

直撃していればサーヴァントとはいえ無事ではすまないだろう。

だが、魔術は一つとしてキャスターには当たらなかった。

キャスターの周囲を取り巻くように球形の結界が広がりそれらを防いだ。

「退魔力!? キャスターがどうして……」

驚愕した表情でリヤオ・ファンが叫ぶ。

「自己紹介が遅れたが、私はこれでもイスタリ（魔法使い）でね」

「本当なら君たちで言うところの ” 冠位 ” を戴く資格を持つのだが、事情が事情で

ね……」

「冠位だと!? バカを言うな!」

「疑うのは勝手だがね……さて」

キャスターが杖を一振りすると、球形の結界は範囲を広げていく。

結界がすっぽりとカナウたちを包み込むと、キャスターは歩いて二人に近づく。

「怪我はないかい?」

「あなたは一体……?」

「その説明もしてやりたいんだが、あいにくと時間がない。君を追って猛スピードで近づいてくる鬼の形相をした少女がいるが、彼女は君の敵か?」

——シャルロットだ。ここまで追いかけたのか。

少し悩んで、カナウは首を横に振った。

「ふっ……ハハハハハ！　そうかそうか、いや君は本当に面白い男だな」
業を煮やしたのか、茂みから飛び出す複数の影。

時計塔の懲罰部隊がキャスターを囲う。

「サーヴァントといえど、これだけの魔術使いを相手にすれば……」

スーツを着た懲罰部隊のひとり、魔術使いが叫ぶ。

「一斉攻撃だ！」

魔術礼装と思しき剣を取り出して、キャスターに斬りかかる。

キャスターはその攻撃を身軽な動作でかわす。

「アゾット剣か。いいものを拵えているな」

キャスターが何かをつぶやくと、彼女の手にも一振りの小さな銀剣が現れる。

再び襲いかかるアゾットの剣戟を受け止めるようにキャスターも銀剣を振るった。

懲罰部隊の男が持つアゾット剣が銀剣にぶつかり、アゾット剣はまたたく間に粉々に砕かれた。

「何?！」

「悪くない硬さだが、この件の前では無意味だ」

そのまま銀の剣を押し込み、男の頭部を柄で殴りつける。

頬骨の折れる音がして男の輪郭は歪み、悶絶しながらその場に倒れた。

ひとり、またひとりと懲罰部隊の応酬が迫る。

鎌、斧、銃、はては宝石。

キャスターはひとつひとつの武器をすべて銀の剣で打ち砕くと、全員を柄で殴り倒す。

魔術を受かっている様子はまったく見えない。

「嘘だろ……キャスターが白兵戦だけで魔術師たちを……う？」

立ち上がるリヤオ・ファンとランサー。

蒼白した表情のリヤオ・ファンとは対象的に、ランサーは興奮した様子でキャスターを見た。

「少しはやるみてえだな……」

「ざっとこんなものさ……それより」

キャスターが杖を下ろし、教会の方を見る。

つられてその場に居た全員も教会を見る。

聖堂教会の正門が開かれ、そこにコートを着た男の姿があった。

「神の御前である。争いをやめよ」

低い声で、アバーラインが諫めた。

「全員揃ったようだな」

「歓迎しよう。聖杯戦争の参加者諸君」

「君たちに私から提案がある。中へ入り給え」

そう言つて、再び教会の方へと戻っていく。

「……あの神父、苦手だ」

苦々しくリヤオ・ファンは答える。

「同感だな、マスター」

ランサーは霊体化する。

「君たちも行かないのか？」

「……………どうして俺たちを助けてくれたんだ？」

教会の前で一人残るキャスターに、カナウは尋ねた。

「さつきも言ったが、私のマスターの方針でね。君たちには生き残ってもらいたいんだ」
「……………すくなくとも、ある瞬間まではね」

先程の軽い口調とは一転してキャスターの言葉は重かった。

「本当は ” グラムドリング ” まで使う必要はなかったんだが、ランサーに私の力を誇示する必要があった」

” グラムドリング ” ？」

グラムドリングという言葉を聞いて、カナウは目を見開いた。

「それじゃあ、あなたは『灰色のガンダルフ』？」

「おっと……………知っていてくれたとは嬉しいねえ」

「いかにも、私の真名はガンダルフだ。どうだい、キャスターとしてこれ以上にふさわしい奴もそうはいないはずだ」

——それにしては姿形が妙なことになっているが。

「ガンダルフは髭の生えた老人だと……………」

「ああ……………それがなんだかおかしな事になっていてね」

照れくさそうにキャスターはごまかした。

「まあ私の容姿のことは気にするな。よくある話さ」

「……？」

「話を戻すが、私のマスターは君に同盟を申し出たいと思っている」

「期間は聖杯戦争のサーヴァントが君のセイバーと私だけになった時まで、だ」

「このバトルロイヤルの中で、味方ができることは心強いと思うのだが、どうだろうか？」

——マスターと同盟。

現状考えるに願ってもないことだろう。

だが、素直にこのマスターの言うことを聞き良いものか。

「……」

考えあぐねているところへ、二人の元へ駆けつける影が現れる。

「セイバー！」

「カナウ、ご無事でしたか！」

セイバーが現れる。

セイバーは二人の顔を見て安堵したが、同時に一緒にいるマスターを見て、再び警戒する。

「マスターだ。俺たちを助けてくれたんだ」

「キャスター……?」

「やははじめまして、セイバー。君、怪我してるのか?」

キャスターがセイバーの肩を指差す。

アサシンから受けた傷が侵食しているように見える。

「アサシンの毒だ……シャルロット……アーチャーのマスターは呪いのようだとも言っていたけど」

「ふむ、私に見せてくれないか?」

セイバーをはじめは警戒を解こうとしなかったが、やがてもうどうにもならないと悟り、傷を見せた。

——どうせこのまま死ぬのならキャスターに賭けてもいいか。

キャスターは呪いの状態を見ると、ローブから黄金に輝く指輪を一つ取り出した。

「本当はこの時点で宝具を晒すつもりはなかったんだ。出血大サービスだよ」

「……ナルヤよ。頼んだぞ」

指輪は魔力を開放する。

優しい光が広がって、セイバーの体を包み込む。

「ナルヤ……3つの指輪のひとつだ。治癒力を高め、精神を癒やす」

「この呪いは特定の者にのみ効く。制約」を設けることで威力を増しているらし

「い

「呪いを取り巻く負の感情をこの指輪で相殺する」

セイバーの傷口から侵食していた呪いが光りに包まれて消えていく。

「すごい……」

——ガンダルフの持つ宝具、グラムドリングだけでなく、指輪まで。

——彼女が仲間に加われれば、この少女を守れるかもしれないのか……？

「感謝します、キャスター。恩に報いたい」

「であるなら、私に協力してほしいキャスター。悪いようにはしないよ、君もそのマスターも、そのホムンクルスもね」

「よし、交渉成立だね。よろしく、カナウ・アルバーン」

「ところで、あなたのマスターは……？」

「出不精ですまない、だが必ず君たちの前にいつか姿を表すと約束しよう」

申し訳無さそうにキャスターは答える。

セイバーの傷を癒やして立ち上がると、手を差し伸べる。

「カナウ・アルバーン。君にこの先も辛い現実が待ち受けるかもしれないが、私からとにかく『諦めるな』としか言いようがない」

「なにせ私はサーヴァントで、君たちの世界の道理などを教えといても仕方のない存在なのだからね」

「だが、それでも君がこの聖杯戦争に巻き込まれたことが、この世界にとって何か新しい意味を持つのではとも感じている」

「新しい意味？」

カナウは確かめるように繰り返し問い返す。

「私のマスターはいつだってそういう人間の進化、世界の進化するさまを見たがついてるんだ。何世紀も生き続けてね」

「この聖杯戦争は魔術師の世界を変えるって、今も信じているよ」

「その中心が君たちだ」

キャスターはカナウとセイバー、そしてホムンクルスの少女を見る。

「どうしてそんなことがわかる、キャスター？」

セイバーが不審そうな顔で尋ねる。

「君と他のマスターたちとのやり取りを見て、なんとなくそう思っただけさ。深い意味はないよ」

「でも、君がそのホムンクルスを保護してくれて良かったと思っただけさ。本当さ」

「セイバー……うんうん、やはり姫を守るのは騎士でなければね」

「キャスター、あなたはもしかして……」

セイバーが何かを言いよどみ、押し黙る。

「セイバー？」

「いえ……」

「フフフフ…君も大いに悩むがいいさ、セイバー。だがいずれにしても——」

「——君も向き合わなければならぬ時が来る。自分の正体について、ね」
そう言い残してキャスターもまた、教会へと足を運んでいった。

ロンドン某所 聖堂教会

礼拝堂を重苦しい空気が支配していた。

カナウたちが扉を開くと礼拝堂に鈍い音が響き渡る。

礼拝堂の一番奥、祭壇の前にアバーラインが立ち、その前の椅子にサーヴァントとマスターたちが集まっていた。

月光がステンドグラスを通して入り込み、宝石のように乱反射した後光で、監督役の

男は存在感を放っている。

——不思議な光景だった。

先程まで争っていた者たちが、このアバーラインという男の前で姿勢を正して座っているというのはなんとも理解し難い光景だった。

カナウは順番に聖杯戦争の参加者を見る。

リヤオ・ファンとランサー。

キャスターが言うには、ランサーの真名はベイリン。

アーサー王伝説の中でも黎明期、円卓の騎士が発足される前の騎士だ。

蛮勇と恐れられ、ラモラックやランスロットに並ぶ屈指の実力者だったとされる。

そしてアサシン。

ドクロのお面をつけた黒衣のサーヴァントがひとり、マスターも見せずぼつんと座っている。

そのとなりにキャスター。

やはりキャスターのマスターも姿を見せない。

そしてそこから少し離れたところに座っていたのは……

「君は………図書館で会った」

「まさか、あなたも魔術師だったなんて!？」

「ロンドンって狭い街なんだねえ……」

バーサーカーとそのマスターは穏やかに会釈する。

「エハッド・ティールマンだ。よろしく……ってなんだか変な感じだ」

「こいつはバーサーカー。一応真名は秘密ってことで」

ヨーロッパ風の装いに身を包んだ頑固そうな表情の壮年の男がふんぞり返っている。

「楽しみはあとにとっておくとしよう」

カナウとセイバーも座る場所を適当に見繕っていると、再び礼拝堂の扉が開かれる。

シャルロットとアーチャーが現れた。

「シャルロット……」

「遅くなりました。おまたせしてすみません」

カナウの呼びかけをシャルロットはかき消すようにアバーラインに大声で話しかける。

「構わないよ。シャルロット・ロジエとアーチャーだな、君たちで最後か」

シャルロットもまたアバーラインの前の椅子に座り込む。

座り込む直前でようやくカナウと目が合う。

「……」

許さないと云わんばかりの軽蔑の眼差しだった。

「最後ね。まあ、ライダーはあんな調子だしな……」

エハッドが苦笑いする。

「今日はそのライダーの件で、我々監督役である聖堂教会から提言がある」

両腕を背中に回し、直立したまま、アバーラインが堂々と宣言する。

「ライダーの討伐司令を下す。貢献したのものには時計塔から報奨が与えられる。参加されたし」

Quantum — II

ロンドン 某所

夢を見た。

いや、夢であったのかどうかも定かではない。

暗い闇の中で浮かぶ自分の体を、後ろから引つ張る影があつた。

自分と全く同じ姿をした何かがいくつもいくつも、折り重なるように現れ、膨れ上がる。

口々に呪いを吐いては引きずり込むようにもたれかかり、取り込もうとする。

「どうしてお前だけが」

「なぜなんだ」

「私達も連れて行け」

目に光はなく、体はねじ曲がり、血を吐き、嘔れ、崩れ落ちる。

その光景になすすべもなく、恐怖し、震え上がり、声も出ず。

調整槽で目が冷め、怯えた表情でガラスを叩く裸の彼女を、アトラスの錬金術師は恍惚と眺めていた。

工房は暗く、調整槽や周囲のディスプレイが放つ明かりだけが周囲を照らす。

「人間で言うところの生存本能か、あるいはもつと高次のサブイバース・ギルトか……」
「この段階で意思を持った行動が伴うのは初めての事例だな。ふむ……」

イザイ・エルトナムは腕を組みぶつぶつと呟く。

錬金術師の声はホムンクルスには届いていない。

——助けて！　ここから出して！

それはホムンクルスの声も同様である。

液体の中は息苦しさこそない。

しかし寝ても覚めても不安を訴えるほどには異質な空間であるということとは彼女にも分かった。

「ホムンクルスとはいえ、君は私の ” 娘 ” のようなものだ。教育方針を誤るわけにはいかないな」

「より人間らしさを獲得することが君の課題だからね……そのためには、本を読ませるのがいいか？」

「いや、学校が良いかもしれない。そうだな、学校だ。学校が良い」

——ドン、ドン。

目の前の娘の訴えを気にすることもなくイザイは独り言を続ける。

「いや、学校はダメだ！ 近頃は問題行動を起こす教師も生徒も多いと聞いている」「いじめなんか合えば、この子の人格形成に多大な影響を与えることは間違いない」

——ドン、ドン。

「家庭教師を雇うにしても、こんな辺鄙なところにまで人間がやってくるとも考えにくい」

「……私の結婚生活、私の子どもとの暮らしはそれは散々なものだった」

「私は母親に向いていないのだと、痛感させられた」

「ああ、思い出しただけで恥ずかしくなるなあ。興味本位とはいえ何故私は……」

「あんなに不合理で、非効率的で、面白い経験、アトラス院ではどれも得難いものだった」

——ドン、ドン。

「……外の世界が気になるかい、イザイ・エルトナム？ 新しい私、新しい人類？」

「旅を試みたいのか？」

彼女の反応に対する錬金術師の態度は、母親というより、実験動物に対する科学者のようだった。

「だが、逃げるためだけに旅をするというのはオススメできないな」

「……旅には目的がないとね。宛のない航海に送り出すほど私も毒親ではない」

——ドン、ドン。

「それに女の子の一人旅は危険だ。分かっているのかい君？」

——ドン、ドン。

「わかったよ……それじゃあ、旅に出すでしょう」

「実を言うと、行き先はもう決めてある。私も大好きな街だ。治安は……めちやくちや良いとは言えないが」

駄々っ子に困り果てたような調子で、イザイ・エルトナムの独り言は続いた。

手元にあつたディスプレイを指で操作すると、調整層の液体に何かが入りこまれる。

——ドン！ ドン！

ガラスを叩く手が強くなる。

目を見開いたホムンクルスが恐怖を浮かべた表情で何かを訴えかける。

——いやだ、もう夢は見たくない。

しかし抵抗も虚しく、再びあの闇が訪れるのだ。

——ここから出して、ここから出して……ここから。

そして再び意識が途切れる。

「……!?!」

膝を抱えて座り込んでいたその少女は、夜中、突然覚醒する。

声を発することはなかったが、呼吸が乱れている。

——またあの時のことを。

止めドメなく自分の周りを満たす緑色の恐怖、その中から眺める景色とはうつてかわり、現在少女の周囲には月明かりに照らされたわずかに薄暗い静寂が満たされていた。

感覚が戻ってくる。尻に敷かれたカーペットの感触、インクの匂い、遠くで聞こえる車のエンジン音。

隣の部屋から聞こえる規則正しい寝息。

頭を上げて周囲の安全を確かめているのを見かねて、薄暗い奥から一人の女声が近寄ってきた。

「どうかしましたか」

優しい声から降りかかる。声の主は ” セイバー ” だった。

——セイバー、というのだけ。

聞けばこのセイバーに随分と助けられていると、ホームクルスの少女はそう感じてい

る。

外の世界、見たこともない景色、音、匂い、人々に怯え、情報の波に酔う彼女を、セイバーとそのマスターは助けていた。

「ご心配にはお呼びません、私が見張っておりますから、どうぞ安心して眠るのが良いでしょう」

「あなたは寝なくていいの？」

「サーヴァントに睡眠は必要ありません。それに……」

「姫をお守りするのは騎士として当然の努めです」

セイバーはなぜか、自分のことを「姫」と称する。

「ここへ来てから童話をいくつかを読んだわ。私は姫じゃない」

「むむ……まあ厳密にはそうかも知れませんが」

指摘されるとセイバーは困ったように腕を組み考え事をする。

「いやしかし、困りました。でなければ私の存在意義が……」

「存在意義？」

「ええ、あなたがいるからこそ、私がいる」

「あなたという守るべき存在がいるから、こうして私がここにいます」

ぽかんとするホームンクルスの少女を前に、セイバーはなおも言葉を続ける。

「私は実のところ、英霊としてはひどく不安定な存在なのです」

「存在するためには誰かの ” 願い ” 強い ” 理想 ” がなければならぬ」「存在するための証明を必要としている。つまり見届ける者が要る」

——英霊としてはひどく不安定な存在。

自分で自分の言葉を反芻する。

——惨めなものだな。

「とはいえ、それは私の都合。あなたの生きる理由にはなりませんね」

「どうでしょう、姫。あなたには何かやりたいことがありますか？」

「わからない……突然生み出されて、突然放り出されて、ここにいる」

確かに出たいと言ったものの、その先の世界ののことを彼女はあまりにも知らなかった。

初めての重力に、自らの自重を足で支えることさえ苦悩している姿を、セイバーはさぞ哀れんだことだろう。

ふとセイバーは少女の周囲に目をやる。

カーペットに置かれたままの本一冊を手に取ると笑みがこぼれた。

「ほう……この本は」

「知っているの？」

「生前読んだことがありましてね……なるほど」

ペラペラとページを捲り、そしてしばらくして閉じる。

「あなたはあなたなりに、この世界を捉えようとはしているのですね」

「外の世界は私には刺激が強すぎる」

「だから、まずは本で知識を吸収しよう?」

「カナウ・アルバーンはいいい人ね……毎日新しい本を借りてきてくれるの」

「ええ、素晴らしいマスターだと思います」

この異常事態に巻き込まれて数日、カナウ・アルバーンは顔色ひとつ変えること無く、侵食されつつあるこの日常を維持している。

並の人間ではありえないことだ。

何が彼をそうさせるのか、セイバーにとってはひとつの大きな関心事であった。

——だというのに私は未だに。

「どうか、傷つくことを恐れないでください、姫よ」

「今はまだページを捲るだけでも、ともに歩んでくれる仲間がいます」

「そして見つけるのです、あなたの夢を」

「この部屋から飛び出すその時を我々は讚え、また守り通す。この剣に誓ってね」

セイバーの持ち出した剣は、ありふれたものだった。

特別な力は一切ない、ただの剣である。

あるのは持ち主の ” 夢想 ” のみ。

「この宝具は私の夢を叶えるもの、あなた方の夢を叶えるもの」

「サーヴァント、セイバー。あなたがたの夢を叶えるもの。それが私です」

「海を裂き、山を削り、都市を生み出し、悪を払い、秩序を生み出す。あらゆる ” 理想

” が私の宝具」

—— 違う。

—— 私は卑怯者だ。臆病者だ。

—— 私は嘘をついている。

—— 私は狂っている。

—— 私が見ているものはすべて幻なのだ。

「すぐには言いません」

「でも、いつか必ず決断しなければならぬ時が来る」

「あなたがどう生きるのか、その瞬間、私達も一緒にいるとは限らない」

言葉の一つひとつに高揚感を感じた。

それはどの本からも得難い経験だった。

優しく力う強い声、目の前で膝をつく凛々しい姿。

きらびやかな装備と大きな剣。

すべてが少しだけ彼女を勇気づけた。

「セイバー……あなたは自分の真名を、” 思い出せない ” のではなく、” 隠しているの ” ?」

「……さすがに見破られてしまいましたか」

ふと、気になっていたことについて、ホムンクルスの少女は指摘する。

苦笑いするセイバー。

「笑わないで聞いてくれますか、姫よ」

「あなたがそう望むなら」

「実は……」

——彼女が勇気を出したのだ。

——ならば私もその勇気を見せなければならぬだろうか。

——わたしはいつか、カナウに真実を話すことができるのだろうか？

——全てが現実に戻ったとき、私の存在はどうなるのだろうか。

不安が尽きないのは実のところセイバーも同じであった。

——だが、せめて今この瞬間だけでも。

セイバーはその理由を語り始める。

あまりに愚かな騎士道の、その真実を。

秘密の会話は夜がふけるまで続いた。

Material — キャスター／セイバー

【ステータス】

真名：ガンダルフ

クラス：キャスター（冠位の適性あり）

地域／出典：『指輪物語』より

信念：中立・善

身長：142cm

体重：36kg

【パラメータ】

筋力：D 耐久：A+

敏捷：B 魔力：EX

幸運：A 宝具：EX

【保有スキル】

・陣地作成E

魔術師として自らに有利な陣地「工房」を作成できる。

ただし本人は放浪を好み、ひとつの拠点に長居していることはほとんどない。

・単独行動E X

マスター不在・魔力供給なしでも長時間現界していられる能力。

・魔杖の支配者E X

多彩な魔術礼装を操るキャスターとしての在り方を示すスキル。

魔術系の攻撃にボーナスが付与される。

・扇動E X

数多くの大衆・市民を導く言葉と身振りを習得できるスキル。

特に軍勢に対してはカリスマA+相当の効果がある。

個人に対して使用した場合はある種の精神攻撃として働く。

【サーヴァント解説】

真名ガンダルフ、通称「灰色のガンダルフ」

”中つ国”を覆う冥王サウロンへの驚異として派遣されたイスタリ（魔法使い）

またホビットやエルフ族たちを導き、中つ国の浄化にも貢献し、指輪戦争を導いた。

本来「至福の地アマン」は”彼方”に存在しており、異世界では時間の概念も異なる

ため座からの召喚は不可能であった。

ところが大聖杯がジークによって“彼方”へ持ち去られたとき、二つの世界にパスが繋がったことにより、

ガンダルフはイスタリとしてこの世界の歪みを正すべく顕現した。

その魔力はともにこちらの世界では凶ることのできないほどの規模であり、冠位を以てしても、その枠に収まらないほどの大魔道士と噂される。

異世界の魔術系統に影響を与えることを恐れており、呪文を使いたがらないのは本人の言。

なにせ呪文は囁むからね。

【宝具解説】

・「励起する炎の指輪」ランクEX

ナルヤ、所持しているだけであらゆる傷と呪いを癒やす指輪。

その中でも炎の指輪は対象の精神力、治癒力を高め、まさしく対象を奮起、励起させることに特化している。

・「其はすべてを打ち砕く剣」ランクEX

グラムドリッグ、「打ち砕くもの」の異名を持つ銀色に輝く剣。

切れ味こそ並だが、あらゆる剣を打ち砕く能力を持ち、白兵戦において最強の性能を

誇る。

【マスター】

名前：イザイ・エルトナム

性別：女性

年齢：??歳

身長：175cm

体重：??kg 痩せ気味

外見：暗い紫色の髪セミロング、紫色のアトラス院制服、メガネ。

好きなもの：少女、日本酒、タバコ

苦手なもの：なし

天敵：なし

趣味：計算、テレビドラマ

特技：工作、トランプパワーをつくること

イメージカラー：紫

一人称：私

二人称：君

三人称：彼、彼女

アトラス院の錬金術師、院内でも位の高い存在であるらしい。

得意分野は人形遣いとホムンクルスの創造。

目的のためには手段を選ばないマッドサイエンティスト。

過去に結婚。子どももいたが、本人の性格に難あり、家庭は崩壊、現在は独り身らし

い…？

錬金術師だが、いくらか魔術も扱うことが可能。

【ステータス】

真名：???

クラス：セイバー

地域／出典：???

信念：混沌・善

身長：161cm

体重：52kg

【パラメータ】

筋力：C 耐久：A

敏捷：C 魔力：EX

幸運：C 宝具：???

【保有スキル】

・騎乗C

調教されている動物はたいてい乗りこなせる？

・守護騎士A

何者かを守る戦いにおいて絶大な防御力を発揮する。

・騎士の王道EX

白兵戦において強力な戦闘能力を誇る。

戦闘続行と信仰の加護の複合スキル。ただし信仰の対象は神ではない。

【宝具解説】

・「■■■■」ランクEX

???

【サーヴァント解説】

カナウ・アルバーンによって召喚された謎のサーヴァント。

【マスター】

名前：カナウ・アルバーン

性別：男性

年齢：20歳

身長：164cm

体重：58kg

外見：黒髪ショートカット、タレ目、黒のジャケット

好きなもの：小説など

苦手なもの：気の強い女性、酒

天敵：人の気持ちかわからない人

趣味：読書、カフェ巡り

特技：紅茶を入れる

イメージカラー：青灰色

一人称：俺

二人称：君

三人称：彼、彼女

イギリス、ロンドン市内に住む非魔術師の青年。カレッジに通う学生。

第二章 — 死神犬討伐指令

I — 討伐指令

聖堂教会 ロンドン支部

魔術師たちの言う”聖堂教会”は非魔術師の想像するそれとは全く異なる形態を持つ。

教義に反する者は、”異端狩り”と称して排除する。

その規模は世界最大であり、騎士団をはじめとする強大な戦力を所有する。

主の御名の下に人類という種の知識の全てを管理を目的とし、これを収める。

そのために魔術を嫌い、長年魔術協会とは争いが絶えない組織の一つであった。

それでもなお、このロンドンにも聖堂教会の支部が存在できるのは表向きには協定が結ばれているからだ。

だから、時計塔の魔術師がこうしてロンドンの聖堂教会に足を運ぶこと自体は何ら問題がない。

また魔術師の根源到達に關しても一応認めているというのが現在のスタンスだ。

最もその水面下では、現在も殺し合いが続いているという噂も絶えない。

魔術協会も聖堂教会も、現在ではその動きも活発ではないが、その組織の巨大さ故に、末端まですべての記録を把握することは困難だった。

だが、“聖杯”となれば話は別だ。

それが神の血を受けた本物の杯であるか否かに関わらず、“聖杯”と称されたそれを見すみす見逃す聖堂教会ではない。

教義によって神秘を収める。

使い道のないものはあとで棄てれば良い。

結果として聖杯“候補”と呼ばれる代物が聖堂教会には数多く存在する。

その多くもまた、時計塔を始めとする他の魔術師組織との血みどろの戦いによって得られたものであるかは明白だった。

その実争いのために聖遺物を求めるのか、聖遺物のために戦うのかを混同し、狂気に走る人間もいた。

——私はどちらだろうか。

集められた聖杯戦争参加者を端から準に観察しながら、アバーライン刑事兼神父は自問した。

——セイバーのマスター、カナウ・アルバーンか。

冴えない外見の一般人、ありふれたロンドンの学生。

不思議な名前をしているが、れっきとしたイギリス人らしい。

この魔術師たちによる異常事態にも発狂すること無く、この戦いに参加する意志が見られる。

常人ではあり得ない精神力だと、アバーラインは評する。

——自棄を起こしたのか？

——とづくに正気など失っており、気力だけでこの場にいるのか？

——それとも、私が人間の精神というものを過小評価しているのか？

人間観察が好きな彼にとって興味の尽きない点であった。

「君がこのような決断をしてくれたことを、今となつては嬉しく思う」

「へっ?」

鉄面皮のアバーラインが突然切り出したので、カナウはあつけにとられて情けない声で反応した。

「サーヴァントに対抗できるのはサーヴァントだけだ。私も聖堂教会の中ではそれなりに武闘派であると自負してはいるが、それでも聖堂教会の戦力には限界がある」

「紛いなりにもセイバーを召喚した君にも、今回の作戦に加わってもらえることはなん

とも頼もしい。なにせ……」

一息置いて、アバーラインは今度は全員を見るようにして口を開いた。

「ライダーを討伐するにおいて、コマは多いほうが良いからだ」

「……いま、討伐すると言ったか？」

アバーラインの提言に反応して声を上げたのはランサーだった。

「そのとおりだ」

アバーラインは肯いた。

「本件は神秘の秘匿ならびに異端の排除を目的とする、聖堂教会と時計塔の合同で行われる討伐指令である」

「これより、マスター、サーヴァントによる戦闘行為を一旦禁止とし、各々ライダーの討伐に専念されたし……」

淡々と言葉を続ける。

「これはライダーの消滅が確認されるまでを期間とした特例の措置である。ライダー討伐後、最も貢献したとされるものに、時計塔から褒賞が与えられる」

「そのライダーってそんなにやばいやつなのか？ 監督役さんよ」

ランサーが尋ねる。

「ライダー、真名をグリムドッグ……だがその霊基は通常のサーヴァントからいささか

逸脱しているようだ」

「調べによれば召喚の折にそのままマスターを殺害、回路ごと食らったことで体に令呪を宿しているらしい」

「延命のために魂喰らいを続け、特に魔術師を嗅ぎ分けこれを食らい付くしている。犠牲者はすでに数十名」

「すうじゅ……!?!」

数を聞いてカナウは絶句する。

通常サーヴァントはマスターの存在なしに現界できない。

しかしサーヴァントがマスターからの魔力供給無しで現界するには様々な方法がある。

そのうちの一つが魂喰らい。つまり、魔力を持つ人間を襲い、直接糧とすること。

「当然グリムドッグは秘匿などお構いなしにこれらの殺人を続けている」

「私が警察側に入り込みなんとか情報統制を試みているものの、噂も広がりつつある」

「すべてが白日のもとに晒されるのも時間の問題だろう」

——そこで、だ。アバーラインはシャルロット・ロジエを一瞥する。

「ライダーから聖杯戦争の参加権を剥奪し討伐することでこれを防ぎ、聖杯戦争を続行する」

「……ちよつといいかしら、アバーライン？」

どこからか声がする。

よくよく声の出どころたぐってみると、それはアサシンがちよこんと膝に載せた白いドローンだった。

「私達は、これが『ホムンクルスの奪還作戦』だと、イザイ・エルトナムから聞いていたのだけれど」

「ええ、ライダーの討伐の目的はわかりましたわ、でも……」

「もう目的は達成されたのだから、聖杯戦争を行う理由もないのでは？」

ドローンから映し出されたホログラムの女性はまっすぐカナウと、その隣の少女に向けていた。

「勇敢な一般市民がホムンクルスを保護し、アトラス院に護送、返還する。それでこの物語はおしまいでしょう？」

「……おつと、そうだったな」

悪びれた様子もなくアバーラインは訂正する。

「もちろん彼はライダーを討伐したあとでホムンクルスをアトラス院に返還する。それでロンドンでの騒ぎは集結する」

「……っ！」

すべてのマスターの視線がカナウに集まる。

「……この子はどうなるんですか？」

「わかりかねる」

震えた声で叶うが尋ねる。だがアバーラインの返答は事務的だった。

「ここで変な気を起こすなよ、凡夫」

立ち上がって抗議の声を上げようとするが、彼は彼の思う一番意外な人物に止められる。

リヤオ・ファンが警告する。

「聖堂教会と時計塔の魔術師が集っている今ここで暴れて、どうなっても知らないからな」

「リヤオ・ファン……？」

「キャスターのときは敷地の外だったからな。でもここは違う」

「僕たちは今ようやく、利害の一致という最も信頼できる条件で結託しようって言ってるんだ」

「いい加減現実を見たらどうなんだ。だいたいお前はいつもいつも、出たとこ勝負にた

またま勝つてるだけの一般人だろ」

「せいぜい、セイバー現界のための電池としておとなしくこき使われてればいいんだ！」
「……くそっ」

——言葉とは対照的にあの生意気な少年がこの場では随分と冷静だ。

自分よりも年下の男に咎められて、悔しく思いつつもようやくカナウは状況をよく理解した。

——やっぱり狂っている。時計塔も、聖堂教会も。

「ライダー討伐にあたってもう少し、情報が知りたいのですが……」

新たに手を上げたのはエハッド・ティーレマンだった。

「グリムドッグって……あの死神犬のことですよね？」

「そうだ。運命の予兆、死の前触れを意味するヨーロッパに伝わる伝承だ」

アバーラインは続ける。

「イギリスにおいて、墓地に最初に埋葬された人間は死神犬になるとされる。古い十字路に出没し、出くわした人間に死をもたらすとされる妖精だが、そのあり方には様々な

通説がある」

「ひとつは“ワイルドハント”、そして妖精王オベロンの配下、それから」

「シェイクスピアによれば、女神ヘカテの猟犬を起源とする場合もある」

「妖精王だって……？」

「イギリスの妖精……知名度による補正は計り知れないでしょうね」

シャルロットは冷静に分析する。

「召喚されるサーヴァントはその地での知名度に影響を受けることがあるものね」

アーチャーを尻目に彼女はつぶやく。

「バーサーカーはすでに、ライダーと戦闘になったと聞いている、どう思う？」

アバーラインは今度はバーサーカーとそのマスターに問う。

ランサーが口笛を吹くが、アバーラインに睨まれ口笛を止める。

「そういえば、バーサーカーにしちやあずいぶんと大人しいなこいつ……何者なんだ？」

「……」

「おい」

「……」

アバーラインの問いかけにも、ランサーの問いかけにもバーサーカーは答えない。

「バーサーカー、聞かれてるぞ」

「むむ」

情けないいびきが聞こえて、バーサーカーは目を開いた。

「お前、寝てたの……？ この状況で？」

「ここは静かすぎる。耳の聞こえにくい私には地獄のような場所だ」

「……ハア」

「そうだな……かの死神犬の身体能力は群を抜いている。攻撃力、スピードともにかなり上位クラスと思われる」

腕を組んでバーサーカーが以前の邂逅を思い出す。

「この地における死神の権能を存分に振るっているのだろう。やつは爪と牙、その他に魔力を大嫌に具現化させることができる」

「まさしく死神、恐ろしい死の予兆である」

「魂喰らいも続いているせいで、現界のための魔力を補うどころかささらに肥大化させている。いくつかの通り魔事件において現場検証を見て回ったが、すでに時計塔でも名を馳せていたフリーランスのエリートたちも犠牲になっている」

この報告は主に、時計塔のメンバーに重い影を落とす。

「そ、そこまでかよ……」と、リヤオ・ファンがため息を吐く。

「死神犬の弱点……思いつきそうなものはあるか？」

「バーサーカーが言うには、ライダーはおそらく近接戦闘に特化したサーヴアクトだ。であるなら、中遠距離からの攻撃を得意とするサーヴアクトが中心になって動くべきだ」

アーチャーが椅子から立ち上がる。

親指を立てて彼は自信満々に自分を指名する。

「俺なら、あれに一発かましてやれる」

「……フン、驕るなエロイカよ」

アーチャーの提案をバーサーカーは嘲る。

「アレはとても素早い、そんな品性の欠片もない重たいだけのガラクタに、あれを捉えることなどできまい」

「何だよこの野郎……！」

「まあまあ、ふたりとも落ち着けて」

喧嘩になりそうなところをエハッドが鎮める。

「私がアレの動きを鈍らせる。それならば当たらぬ砲弾も当たるといふもの」

「大した自信だな」

「運命に魅入られたものとして、死の運命というものがいかほどのものか、実のところ興

味は尽きない」

低い声でバーサーカーは続ける。

「ライダーへの牽制私が行う。動きで鈍らせたところを近接戦の得意なサーヴァントで叩くのが良いだろう」

「ライダーに対して有利な宝具を持つものはいるか？」

「俺の槍なら……あるいは」

声を上げたのは、ランサーだった。

「ロンギヌス……神を貫いた槍か。広義には死神も神の一種と言えなくはない」

思い出したかのようにアバーラインが解説する。

「セイバーはどうだろうか？ ……もつとも、真名を思い出せないのでは宝具も……」

「……」

セイバーは黙ったままだった。

「へえ、お前真名が思い出せないのか」

ランサーは嘲るように口を開いた。

セイバーは目を閉じて無言の肯定。

「せっかくのサーヴァント様が、台無しだぜ。どこまでも足を引っ張るやつだぜ」

——つまんねえ戦い。

「……とにかく、作戦の大まかな方針は決まったようだな。くれぐれもライダーが討伐されるまで仲間割れはしてくれなよ」

重たくなった空気を払うようにアバーラインが話を戻す。

「私は再びスコットランド・ヤードに戻り、情報収集を行う。何かわかるかもしれない」

「作戦は三日後に行く、各自魔術礼装の準備などに努めよ」

そしてその場は解散となった。

カナウ・アルバーンとホムンクルスの少女は他のマスターたちが教会を出た後も、立ち上がる事ができずにいた。

3日の猶予が残されたことに安堵するべきか、この状況をどうにかするための時間が3日しかないことに焦燥するかを彼は考えあぐねている。

——3日間の間に、できる限り遠くへ逃げる？

——いや、境界線は監視されているんだったか。

——他のサーヴァントに奇襲を仕掛ける？

——おそらくは失敗に終わるだろう。セイバーは宝具を使用できない。それは圧倒的に不利ということだ。

「……くそっ」

膝に拳を叩きつける。そんな様子を見かねてか、声をかけたのはエハッド・ティーレマンだった。

「君の気持ちは分からなくもないよ。カナウ・アルバーン」

「守りたいものがある時、必ずしも自分にその力が運良く備わっていることは極めて稀だ」

「運命はこちらのタイミングや事情など、考えてはくれないからね」

そう言ってからエハッドは自分のサーヴァントの口癖がうつっていることにいくらかの気恥ずかしさを覚えた。

「って……バーサーカーみたいなのを言ってしまった」

「……俺の家系は魔術史の記録編纂を生業としてきたんだ」

隣に座り、話し続ける。

「君の思う通り、魔術師世界ってのはとんでもなく過酷で、そういう血塗られた記録を子ども頃から嫌というほど見ていた」

「この世界に君たちの思い描く英雄はいない。俺は魔術師だけど、客観的に見てもそう思う」

「そういうのに嫌気が差して、逃げ出した者もたくさんいるんだ」

エハツドの言葉の一つ一つが重くのしかかる。

「そいつらはどうなったのかはわからない。恨まれた挙げ句、惨たらしく死んだり、それ以上のひどい目に合わされたのかもしれない」

「いつしかそれが普通の認識になってしまったんだ、だが……」

彼は言葉を止める。

カナウが重たい頭を持ち上げて、エハツドの次の言葉を受け入れようとした。

「認識を改めるだけの何かが起これば、まだ世界は変わるかもしれない。そうだよな
ベートーヴェン」

「そのとおり」

エハツドから次はベートーヴェンへ言葉が移る。

「いつだって世界を変えるのは外からの者だ。かつての私がそうだったようにな」
腕を組んだままバーサーカーは答える。

カナウはふと自分のサーヴァントを見やる。

セイバーは目を伏したまま静かに座っていた。

「セイバーのマスターよ、お前はまだ自分のサーヴァントをよく理解していないのではないか？」

ふとバーサーカーは尋ねる。

「理解も何も、セイバーは自分の真名を……」

「真名がわからずとも、彼女がお前にしてきた数々の行動は決して幻ではあるまい」

バーサーカーの視線はセイバーに向けられる。

「サーヴァントは使い魔であると同時に、聖杯戦争を共に勝ち抜くためのパートナーである」

「頼りにするのはいいが、お前のサーヴァントが何を求めているのか、お前もよくよく考えるべきなのだ」

「……そうだよな、バーサーカー」

カナウはハツとしてうなだれるように答える。

「俺はずっとセイバーに頼りっぱなしで、この先の自分のことばかり頭に入っていて、そのせいで怪我を負わせたりして」

「マスター失格なのかも」

「まさか魔術師に人間のあり方を諭されるとは思わなかったよ……ああ、いや魔術師を

バカにしているわけじゃないんだけど」

「……プツ」

エハッドは笑い出す。

「どこまでも真面目だな君は」

「君のような男が魔術師だったら、さぞかし面白い記録になりそうだ」

エハッドはカナウの隣に座り込む。

「俺は魔術師じゃない」

「いいや、案外わからないものだけど、少なくとも魔術の素質があるのは間違いない。家族の中に実は……ということもある」

「俺に家族はいないよ」

しばらくの沈黙。

「そりや……悪かった」

バツが悪そうにエハッドが謝る。

「気にしないで、昔の話だし」

「生まれた時には家族は死んだと、教えられた」

「魔術師がそう簡単にくたばると思えないし……やっぱり俺は普通の人間だよ」

「そうでもないぜ。いくら魔術師やサーヴァントだって、銃やミサイルで撃たれりや死

ぬ」

「だからこそ、ミランダみたいに用心深い魔術師はめつたに自分の正体を表さず、ああやって人形や投映を利用するけど」

「ミランダ……ティールマンさんはアサシンのマスターのこと知っているのか?」

「エハッドでいい……そうだな」

エハッドは記録を頼りに話す。

「『量子の魔術師』と呼ばれている。数秘術の一門で、数式を媒介にした魔術を得意とする。現代の科学技術すらも取り込み、未来の演算を試みているとも言われる」

「一族としてのあり方は特殊だし、彼女の家系をやつかむ人間も数多くいるよ。魔術を冒流しているとね」

——未来の演算、か。まるでアトラス院みたいだな。

エハッドは自分で説明しながらその言葉をよく反芻した。

「……いや、まさかな」

「?」

「俺たちも明日に備えておくか、行くぞベートーヴェン」

「さらばだ、カナウ・アルバーン」

「ありがとう、エハッド、それからベートーヴェン」

「私のことをもつとよくしりたければ、音楽を聞け、若造」

「はいはい、余念がないねあなたは本当に」

教会が静かになったところで、再びカナウたちの前にキャスターが現れる。

「セシリア」

「……?」

ホームクルスを見てキャスターがその名前を呼ぶ。

「私ですか?」

「セシリアというのが君の名前だ。名前があつたほうがいいだろう?」

「……あなたは何者なの」

「僕は雇い主の命令に従つて、君たちのことを守護するよう動いている」

「そういうことじゃなくて!」

「……まいったな。それ以上でもそれ以下でもないんだ、本当に」

「何のために?」

じつと眺めるセシリアに根負けし、キャスターはため息を付きながらもなおも拒む。

「頼む。そんな目をされたって教えてあげられないよ。ただ……」

「生きることに、それがいちばん大事なんだ。僕にとつても、あの人にとつてもね」

腕を組んだまま、ガンダルフは続ける。

「バーサーカーのマスターも言っていただろう？　運命はこちらの事情など待つてはくれない」

「セイバーの力を信じて、戦い続けられない限り、君たちに未来はない」

「君たちが立ち上がるというのなら、僕は喜んでその手を掴む……だが」

「つかむための、その重たい手を持ち上げることは、君にしか出来ないんだ」

冷たい声で、そう言い放つ。

「あと少しだよ、カナウ・アルバーン。すべてが繋がるその時までもう少しだ」

「まずはライダーの討伐戦、君はなんとしてでも生き延びろ」

——これはまだ新しい世界を創り出すための、ほんの序章に過ぎないのだから。

——全人類の救済、その序章に。

Ⅱ — ユグドミレニア

ロンドン警視庁 会議室

「範囲を拡大して捜査を……」

「目撃例が多数……」

「被害者の身元が不明……」

「死神犬の正体について専門家は……」

ロンドン警視庁は未曾有の事態に一晩中踊らされていた。

捜査を担当しているアバーラインは現在会議室のひとつを外部記者向けの会見場に
拵えている。

ロンドン・タイムズほか、様々な記者、報道陣からの質問に、この男は表情を変えず
淡々とそれらに答えていた。

——不気味な男だよ。

ロンドン警視庁に何度も出入りする記者たちは、口を揃えて彼をそう評価する。
捜査官にとって一定の冷静さは不可欠なものである。

それでいてなお、彼の会見中の説明は一切の感情が感じられない、ある種コメンテ

ターヤリポーターとしてその姿は完全であるが、その実多くの人間がテレビに移る彼の姿に言いようもない恐怖を感じていた。

そして、彼自身にその自覚はある。

今どき時代遅れもいいカメラのシャッターを何度も押しして、時折レンズから目を離しては目の前の被写体を肉眼でも見比べる。

首にかけられたIDにはこの国で最大のマスメディアを示すロゴマークがプリントされている。

「凶悪事件のスポークスマンはいつもあの男だ。何者なんだ？」

記者のひとりがつぶやく。

「一度密着取材を頼んだが、断られたよ。長官の話では優秀な捜査官らしいが、一切の素性が不明と」

「あの仏頂面が逆に社会不適合者みたいで恐ろしいよな」

「おいおい、マスメディアにとって不適切な言動が聞こえたが？」

「実際のところこの会見映像を見て、彼が犯人に見えて仕方ないって視聴者もいるって
ヤ」

「ああ、アレは確実に何人かやつちまつてるって顔だよな」

苦笑いしながらカメラマンの男はつぶやいた。

その視線の先で壇上に上がったアバーラインは、会見を続けている。

——しかし、どうしたものか。

秘匿の漏洩について、これ以上隠し通すのは困難であるというのが、アバーラインの見解であった。

今もこうして可能な限りの質問に答えて入るが、ほとんど中身のある回答とは言えなかった。

マスメディアの問いかける語調に苛立ちが感じ取れるのがわかる。

聖杯戦争の参加者に協力を仰ぎ、グリムドッグの討伐を指示したのが昨晚のことである。

アバーラインは敬虔な教徒を自称し、また自身が根っからのイギリス人であることを自覚している。

マナーにうるさく（かと言って空気も読まずにそれを口に出すことはしないが）、しかしながら狡猾で利己的である。

が、その全てが胡散臭い人間であった。

なにかに矯正されたのかのようにその男は生きている。

何人かの人間は彼の本質を見抜いており、彼を不気味と評価した。

その評価すらを残念に思う気持ちすら、彼は機械的に所持していた。中身のない会見を続けながら、アバーラインはふと遠くを見た。

記者会見中の記者たちの首筋をなめるようにして霊体化した「なにか」の気配を目で追う。

「不可解だし、不愉快だな」

記者会見を終え、会議室で一息ついたアバーラインは、不機嫌そうにふと虚空に語りかけた。

すると、虚空の中から実体化したアサシンが姿を見せる。

「どうにも、お前には私の気配がわかるらしい」

ドクロのお面をつけた東洋風の男が話しかける。

「お前の気配遮断はレベルが低い……いや、隠す気がないと言うべきか」

冷静にアバーラインは説明を続ける。

「本物の”山の翁”の気配遮断はこの程度ではない。お前の真名は、山の翁ではない」

「……しかしそれだけでなぜわかる？」

「憎悪だ。アサシン、お前から漏れ出す憎悪がそれを隠せずにいる」

アバーラインはこのアサシンから漏れ出る常人とも言えない憎悪を敏感に感じ取っていた。

「かつて山伏に育てられた時期があつてな。感覚を研ぎ澄まさなければ、山で生きてはいけぬ」

「お前のその憎悪が、臭うのだ」

アバーラインの答えに、アサシンは満足そうに称賛する。

「素晴らしい」

——だが、とさらに続ける。

「何故だ？」

「……何故というの？」

「それほどの力を持ったお前が、なぜ聖杯戦争に参加しない？」

「聖杯を私物化する趣味はない、あれは聖堂教会の……」

「そうではない」

「は？」

アサシンは指をさす。

「それは聖堂教会という枠を与えられたお前の建前だ」

「お前はアレが欲しくはないのか？」

「万能の願望機を前にして、それも冷静にいられるのか？」

「……理解できないな」

アサシンの挑発も、アバーラインは一蹴した。

「お前には望みがないのか？」

「与えられた組織と使命に力を尽くすことだけが私の生きがいだ」

「そこにお前の幸福はあるのか？」

突然大きく、わざとらしくアバーラインはため息を吐いた。

「お前は精神科医か？ カウンセラーなのか？」

「かつて同様の質問をされたことがあるぞ」

「彼らは私を”やばい人間”だと決めつけるんだ。自分たちのメソッドに合わない、自分たちの常識にあわない、そういった存在を間違いだと勝手に思い、矯正しようとしてくる。挙げ句に、その助けを求めているんだと余計な気を回すのだ」

「かわいそうなやつだと、自分たちの知っている枠に、形がゆがむまでなんども当てがい、捻じ曲げ、最終的にボコボコになりながら枠にハマったそれを”私が完成させました”と周囲に自慢するのだ」

「お前の問答は、その”自称精神科医”のやりかたと同じだ」

少し喋りすぎた、とアバーラインはここまで喋り、自らを制した。

「……すまない。サーヴァント相手に、面白くもない話を」

「素晴らしい」

アサシンはただひとつつぶやいた。

「素晴らしい、やはりお前は逸材のようだ」

乾いた空間に冷淡な拍手が再生される。

「私を試して何になる、アサシン……お前の目的は何だ？」

なおもイライラした様子でアバーラインは尋ねる。

アサシンが仮面に手をかけた。

その素顔を晒すと、先程とは明らかに異なる声のトーンでアバーラインに答える。

「私のマスターになれ」

——しばらくの沈黙。

アバーラインはしかし表情を一切変えずに、問いただした。

「理解不能だし、拒否もする」

「あえて理由を答えるならば、3つある」

三本の指を立ててアバーラインは説明する。

「いちから説明する必要が本当にあるのか？」

「ひとつに、私は今回の聖杯戦争の監督役だ。マスターになることはまずありえん。公平性を欠くことになる」

「ふたつめに、その聖杯戦争もすぐに収束する。ホムンクルスを奪還したあと、お前たちサーヴァントには自害でもなんでもさせて座に還らせるのだから」

「みつつめだ。そもそもお前のマスターであるミランダ・ウォルフオークはどうするつもりだ？ このことを了承しているのか？」

——嫌な予感がする。

サーヴァントの中には単独行動スキルにより、マスターが不在あるいは遠いところにおいても魔力を維持することができる者もいる。

本来であればこのスキルはアーチャーのサーヴァントが所持しているスキルである。アバーラインはしばしばこのサーヴァントが自分に付きまといているのを思い出す。

近くにミランダの気配はなかったし、彼女のドローンをもつてしてもそれを経由した魔力供給は不可能のはずだ。

——このアサシンは高次の単独行動スキルを所持している。

——なんて凶悪なサーヴァントを引き当てたか。

仮面を脱いだアサシンの顔は以外にも老いていた。

泥鰌髭をはやした東洋風の老人だった。

「私のことはドクターと呼ばたまえ」

「ドクター……？」

「そうだ、お前を治療するもの、お前に悪の喜びを教えてやるものだ」

老人の表情は穏やかに歪んだ。

上品でありながら、掴みどころのない無味毒のような悪意を滲ませていた。

憎悪は徐々に、アバーラインの精神を否応なしに蝕もうとしていた。

ロンドン 時計塔

「……そうか、グリムドッグの報告どうもありがとう、ミス・ロジエ」

「お役に立てて光栄です。ロードⅡエルメロイでしたらきつと大丈夫だとは思いますが、夜道には……」

「二世だ……それが、ちょうど適任者と思われる私の弟子はルーマニアに旅立っているな」

「ルーマニア？ それにお弟子さんって……」

「そうだ」

シャルロットは思い出す。

確かにフードをかぶった少女がいつもエルメロイ二世のそばについていた気がするが今はいない。

時計塔の一室でエルメロイ二世とシャルロット・ロジェがソファに向かい合っており、情報交換をしている。

「今回の件が起きてからすぐに、かつての亜種聖杯戦争……聖杯大戦が行われたトゥリファスという街で調査をさせている」

「私も仕事を終えたあとで、同行しようと思っていたところに死神犬の騒動だ」

エルメロイ二世はため息を吐いて悪態をつく。

自分に不相応なFワードが聞こえたのでシャルロットは意外そうに目を丸くしたが、我に戻ってすぐに言葉を返した。

「それは災難でしたね……それにしても、今更トゥリファスに行って何をするのですか？」

「気になることがあつてな……君はトゥリファスでの出来事をどのくらい知っている？」

葉巻に火をつけながらロードエルメロイ二世は眉間にシワを寄せたまま問いかける。

「今回の聖杯戦争にあたつて公開されている資料には一通り……犠牲者やユグドミレニアの魔術師たちのことも」

「そのユグドミレニアの一族の者がひとり、うちの教室にいることは知っているな？」

「ええ、カウレスのことですね」

——そうだ。エルメロイは肯定する。

かつてトゥリファスで起きたユグドミレニアの一族による魔術協会への挑戦、聖杯大戦は今でも時計塔の中で話題となっている。

一族の人間であればどの学科も手放しに歓迎するとロード・エルメロイ二世は言うが、それは結局の所体の良い人質ということであった。

その人質であり、本来ならユグドミレニアの最後の当主であるカウレス・フォルヴェツジは時計塔に在るべきはずなのだが、その彼は現在、ロードの指示でトゥリファスに出向いているという。

「カウレス・フォルヴェツジはユグドミレニア側のマスターとしてトゥリファスの聖杯大戦に参加し、生き残った」

「今や全世界に拡散された亜種聖杯戦争だが、我々魔術協会が確認できている限りあの聖杯大戦は唯一の成功例と考えて間違いないだろう」

「そこで今回の聖杯戦争の起りについてなにか手がかりを得られるかもしれないと、トゥリファスにカウレスと 그레이 を向かわせたのだが」

「ここまで言つて、エルメロイ二世はやはりため息を付いて首を横に振るつた。

「今の所有力な情報は得られてはいない……だが」

「"ない"ということ事態はある種の可能性を示している」

「可能性？」

シャルロットは首を傾げてエルメロイ二世に問うた。

「どういうわけか、トゥリファスからはほとんどの霊脈が失われていた。まるで根こそぎ掘り返されたかのようにだった」

「城塞は荒れ果て、大聖杯はもちろんかけら一つ存在せず、そこにユグドミレニアがいたのかも怪しいほどに」

「この騒動の黒幕が、トゥリファスの聖杯大戦を参考に行っていることは間違いないだろう」

——でも、とシャルロットは食い下がる。

「そのカウレス・フォルヴェッジの事情聴取では大聖杯は消えた」と

「そうだ、大聖杯はジークと名乗るホムンクルスによつてこの世界の届かないどこかへと運ばれたと、カウレス・フォルヴェッジは証言している。それは嘘偽りでないということも保証できる」

「では、もはやトウリファスの大聖杯を使った聖杯戦争のシステムを参考にするのは無理があるのでは？」

「そこなんだ、ミズ」

髪の毛をくしゃくしゃとかきながら、エルメロイ二世は悩ましげにぼやく。

「肝心の大聖杯がないのでは、聖杯戦争は行えない。そもそも聖杯自体、そう簡単にいくつも手に入るものではない」

「……そんなときに、突然アトラス院特性の聖杯が現れた。ホムンクルスという形でな」
「聖杯、ホムンクルス、トウリファス……全てが共通している。偶然とは思えない」

「だが、最後のピースが……足りないのだ」

しばらくの沈黙。

次に口を開いたのはシャルロット。

「私には何がなんだか……すみませんロード」

困惑したままシャルロットは申し訳無きそうに答える。

「いや、まだ結論を出すには早いだろう、何にせよ、弟子たちが新たな発見を……」

——突然教室の扉が勢いよく開かれる。

驚いて二人が扉の方を見て、そして絶句して、呆れ顔でため息を吐いた。

「ノックをせんか馬鹿者」

「先生！ 大発見です！ トウリファスに向かったカウレスから連絡が！」

フラット・エスカルドスが飛ぶように部屋に現れると、シャルロットのことなどお構いなしにソファにドサツと座り込み、持っていたスマートフォン画面をエルメロイ二世に見せつけた。

「……これは」

「一体何を見つけたのよ」

ちようどよくスマートフォンに着信が入る。

画面にはカウレス・フォルヴェッジの名前が写っている。

フラットからスマートフォンをひったくると、恐る恐る画面のアイコンをタッチして、エルメロイ二世は電話に出た。

「カウレス、今送ってきたこの画像……」

『魔術関係の礼装は根こそぎ大戦直後の協会の調査で持ち去られちゃいましたからね……でもどうやら、ただの”これ”には彼らは目もくれなかつたようです』

スマートフォンの方こうから青年の声が聞こえる。

「なるほど、目の付け所が冴えている。大きく前進したようだ……それにしても、大きく出たものだな連中は」

スマートフォンを一旦顔から遠ざけ、今一度エルメロイ二世は、送られてきた画像を確認する。

『ユグドミレニア城塞の、ダーニツクの書齋で見つけました。床に無造作に捨てられていたのが急に気になって見てみたんですけど……これは』

「ああ、想像以上に入り組んだ事情がありそうだ。もはや偶然とは呼べまい」

画像に映るのは何十年も昔を思わせる一枚の古い写真立であった。

三人の男女が並んで写り込んでいる。

カウレスはこのうちの一人の男を知っている。

当然、ダーニツク・プレストーン・ユグドミレニアである。

かつて聖杯大戦で同じ黒のマスターとして戦ったかつての上司。

しかしその服装は軍服であった。

もう二人の女性もまた、エルメロイ二世は知っている。

なぜならつい最近その顔を見たばかりだからだ。

ダーニツクと並んで立っていたのは、イザイ・エルトナムとミランダ・ウォルフオークであった。

『ダーニツクはともかく、他の二人も年をとってない……』

緊張した様子の声がスマートフォン越しに伝わってくる。

「不死を求めた三人の魔術師、いやひとりには錬金術師か……旧友だったとはな」

——だがこれでつながった。

エルメロイ二世はスッキリした様子で、しかし慎重な様子でシャルロットに警告した。

「イザイ・エルトナムと、ミランダ・ウォルフオーク。二人は危険だ」

ロンドン某所

『マスター』

「……！」

はつと我に返つた瞬間目の前を猛スピードで車が通り過ぎていった。

見上げると赤い信号が点灯し、歩行者に危険を知らせている。

時計塔という魔術師世界から再びロンドンに降り立ったシャルロット・ロジエ。

言いようのないもやもやが、未だに彼女の頭を重く垂らしていた。

『交通事故で脱落なんて、勘弁してくれよマスター』

アーチャーの念話が響いてくる。

言い返す事もできず、シャルロットは黙り込む。

『いつもの態度はどうした？』

「うるさいわね……」

『今どつちのことを考えてた？』

「どつちつて？」

——とぼけるなよ。アーチャーが鼻で笑う。

『セイバーのマスターと、あのアサシンのマスター、どつちの方だ？』

「なんで私がああ男なんかのことを」

『へえ、そうかよ……じゃあ、それでもいいけどよ。どうするつもりだ？』
横断歩道を渡ろうとして、再び足が止まる。

運転手は不審そうにしながら目の前を通り過ぎていく。

返答に困っている間に再び横断歩道は封鎖される。

「どうするって……それは、ホムンクルスを……」

『ま、そうだよな……』

念話で聞こえてくるアーチャーの声はほとんど生返事だ。

「不満そうね。マスターとしては、サーヴァントであるあなたとの関係性はできる限り正しておきたいのだけど」

『……それじゃあ言わせてもらうがな、マスター』

『はつきり言って不満だね。つまらないと断言してもいい』

「今の状況がってこと？」

『今の状況も、お前も、何もかもだ』

アーチャーはきつぱりという。

『俺たちがどうして、英霊として存在しているか、知らないわけじゃあないだろう』

「……聖杯に託す望みを持って、ここにいるから」

『そうだ、俺の望みだ。俺は ” 勝ちたい ” 何もかもに勝ちたいんだ』

通りから公園に入り、人氣が少なくなつたところで、アーチャーは実態を表す。

「勝利こそが俺の生きがいだ、征服こそがこの俺の生きた証だ」

「なのに、景品は没収ときたもんだ」

「俺は何故此処にいる？ オレたちは何故ここにいる？」

——落とし前をつけろ。

アーチャーは声には出さなかつたが、目が物を言っている。

ここでのナポレオンのあり方は侵略者であり、悪である。

このときはじめて彼の苛烈な性格をシャルロットは垣間見た。

ここにいるのはサーヴァントであってもフランス皇帝である。

流血により開かれた道、近世ヨーロッパの礎、戦争の天才、冷酷な指導者。

——いや、だとしても違う。

「余はフランス皇帝として、参謀である我がマスターに問う」

かしこまった口調でナポレオンは問うた。

「お前が世に捧げられるものとは何だ？」

——違う。

「……さつきから黙っていれば、偉そうに」

「ああ？」

「それが何よ、あなたはナポレオンじゃないわ」

「本物のナポレオンは何年も前に死んだんだから」

訝しげに睨むアーチャーを、シャルロットは挑発的な表情で言い返す。

「私はあなたを否定する」

「ほう……ではここにいる男は？」

「歴史の影法師、サーヴァント、アーチャー。それ以上でもそれ以外でもない」
シャルロットの魔術回路にビリビリとした電流のようなものが流れる。

危機感、圧倒的な胸板と、迫るサーヴァントの殺気。

周囲の空気が鉛のように重くなる。が、

「偉そうにしたって駄目よ。あなたのことは知っている」

「あなた、女という生き物が苦手なのね」

「何だと？」

少し驚いた様子でナポレオンは声を荒げた。

「あなたは私を征服しようとしている。自分の元において、コントロールしたいんだわ」
「あなたに私は征服できない、私はそんな女じゃない」

——知っているわ、こじらせ過ぎたナポレオンさん。

——だから、私はあなたの愛人にはならないけれど。

「あなたを現代に呼び出した者の責任として、約束はする」

「このままでは終わらない」

しっかりと頭を上げると、シャルロットはナポレオンを睨み返した。

「私は私のやり方で、この戦いに勝利すると誓うわ」

「いっちょまえに言いやがるが、まさか無策じゃあるまいな、指揮官殿？」

「あなただって、私の年の頃には戦争に出ていたそうじゃない」

「それはそうだが……で、それは面白くなるんだろうな？」

睨み返した視線が和らいで、笑みが溢れる。

「これよ、こういう関係を私は待ち望んでいた」

「お行儀の良い外交はもうやめにするわ、私は何に対してもこびたりしない、恐れはない」

「この聖杯戦争を”征服”する。誰にも私の覇道は邪魔させない」

そしてそれは告げられた。

「ホムンクルスだろうが、アトラス院だろうが、関係ない」

「私達が皇帝になり、この聖杯戦争を『征服』する！」

このとき再びシャルロットは何故ロッコ・ベルフェバン教授が自分にロゼッタストーンを触媒として与えたのかを思案した。

敵国イギリスでわざわざ彼を呼ぶことの意味を見いだせなかったが、今は。

このサーヴァントこそ、自分にふさわしいトップサーヴァントであることは間違いない。

ヨーロッパの征服者、その参謀として、ロンドンをかき回す存在であるということを彼女はとうとう自覚した。

Ⅲ
—
告死十字

ライダー討伐作戦まで あと2時間

ロンドンの北部、ハイゲイト墓地にて死神犬は体を丸めて眠る。

サーヴァントには睡眠の必要ない。

しかし奇妙な肉体を手に入れてなお、セルデン・オースティンだったその存在はかつての習慣を忘れていなかった。

セルデンは本を読む人間ではなかったが、自身がどういった存在であるかを理解していた。

かつて子供の頃におとぎ話で読んだような妖精の存在を、己の身をもつて証明させられたことに当初は戸惑っていたが、今となつては彼はこの姿でいることを極めて冷静に受け入れていた。

先程も魔術師の体を脊髄を中心にカーペットにでもするかのように器用に引き裂いた。

その時彼は自分が生前お気に入りだったヘヴィメタルの鼻歌を諷んじていることに気がついた。

しつかりとその心臓を飲み込んだあとにもかかわらずセルデンはそのような残酷な自分が恐ろしくなった。

かつて冤罪で陥れられたはずの自分が自ら殺戮に、安々と加担しているなんて。

しかしながら自分を抑えることは不可能に近い。

乖離したと思われるサーヴァントとしての体は絶えずエネルギーを求めていた。

—あの老魔術師の言うところの ” 魔力 ” を。

不思議とその方法をセルデンは野生の勘とでも呼ぶべきもので理解していた。

生き残るためには喰らえばいい。

実際のところ、その眠りは浅いもので、体の興奮を抑えられない状態が長く続いている。

—気が休まらない。

—もつとだ、もつとくらわなければならぬ。

閉じた瞼の裏に浮かぶ老魔術師の顔。

魔術師。魔術師。魔術師。魔術師。魔術師。魔術師。

魔術師魔術師魔術師魔術師魔術師魔術師魔術師魔術師魔術師魔術師
 魔術師魔術師魔術師魔術師魔術師魔術師魔術師魔術師魔術師魔術師
 魔術師魔術師魔術師魔術師魔術師魔術師魔術師魔術師魔術師魔術師
 魔術師魔術師魔術師魔術師魔術師魔術師魔術師魔術師魔術師魔術師
 魔術師魔術師魔術師魔術師魔術師魔術師魔術師魔術師魔術師魔術師
 魔術師魔術師魔術師魔術師魔術師魔術師魔術師魔術師魔術師魔術師
 魔術師魔術師魔術師魔術師魔術師魔術師魔術師魔術師魔術師魔術師
 魔術師魔術師魔術師魔術師魔術師魔術師魔術師魔術師魔術師魔術師

まぶたを開いてなお、目の前に広がるのは静寂と闇。

月は出ておらず、雲もない。ただただ空洞のような夜空。

—なら星は？

セルデンは星座を殆ど知らない。

—いや、知っているものもあつたか……ええと、この季節だと。

家族とキャンプに出かけた頃のことを思い出す。

セルデンの妻は掴みどころのない女性であつたが、星の動きにはやたらと詳しくかつ

た。

まるで占うかのようにひとつひとつの天体の位置を確かめて、仕事についてアドバイスをされる日もあった。

セルデン自身は冗談半分ですれを聞いていた。

彼女の占いの的中率はこのお世辞にも高いとは言えないからだ。

キャンプサイトの星は見事なものであった。

娘と妻、家族で語らうあの時間はかけがえないものだ。

夢想の中で人間の体を取り戻したセルデンはふと上空の夜空から愛する家族の顔へと視線を下ろした。

彼女らの顔はまるでピントがボケたかのようにそこに写って見えたが、セルデンにとってはそのことなど気にする必要もなかった。

彼はいわゆる軽度の相貌失認と呼ばれる状態にあった。

人の顔をすぐに判断区別できない奇特な体質にある。

すぐに、というのは完全ではないということだ。

彼の相貌失認には程度があったが、この程度の原因について人々は様々な悪意でもつてとらえた。

人間関係の形成はとても難儀なものであったことは間違いない。

彼が殺人鬼のソシオパスであるというメディアの吹聴はいとも簡単に流布されたことはいうまでもない。

妻子の顔すら思い出せないことに、セルデンは自嘲した。

そして胸につつかえた居心地の悪さが彼を覚醒させる。

セルデンの獣性はピークに達し、飲み込まれようとしていた。

世間の目が、人の声が、己を駆り立てる。

俺が人を憎むのではない。

世界が ” 俺が人を憎むこと ” を望んでいるのだ。

であるならば、この命が尽きる限り、それに ” 応えて ” やるとしよう。

望まぬ死、望まぬ追放を受けた、満たされぬ者の最期のあがきを、ありありと人間の記憶に刻みつけてやるのだ。

— 覚悟するがいい人よ、魔術師よ。

そこに程度の差はあれ違いはない。

誰であろうと平等に襲いかかるもの、それこそが死という概念の化身であるセルデンにふさわしいあり方だ。

『……来る』

数百メートル先から漂う匂い。

魔術師を食らうときに何度も鼻にしたあの匂い。

セルデンはひと吠えすると立ち上がり、来訪者に備えた。

ロンドン 某所

市内のホテルの一室。

以前に泊まっていたホテルからはグレードが落ちているが、彼女は気にもとめていない。

以前の部屋の感覚で前を見ないまま歩き回るせいで、彼女の肢体にはいくつかの痣さえ見える。

これは当然服を着ていないせいでもあるが。

「念の為」というキャスターの提言により、防衛の簡単な構造のホテルに彼女は移り代わっていた。

イザイ・エルトナムはその日も一日中情報端末のタブレットから目を離さずにいた。

当然ロンドンじゅうの交通監視システムをチェックするためだ。

これらの映像はミランダ・ウォルフオークから送られてくるものである。

もはや二人の同盟関係は強固なものであると両者は信じて疑わない。

「……ほうほう」

「今朝からずっとそれ眺めているけど、ライダーの動向はなにかわかったのかい？」

タブレットを見てつぶやくイザイに、キャスターが背後から声をかける。

「ライダーなら最後にカメラに写ったのがハイゲート付近で、それきり終えてはいないよ。おおかたどこかの森で休息しているんじゃないか？」

「これから討伐作戦だが、やはり君は他のマスターに会うつもりはないのかい？」

「先日のランサーのマスターの件があるからね」

キャスターの方を向くことなくイザイは答えた。

「リヤオ・ファン、東洋の魔術師一族で、かつてはロードに名を連ねる貴族の末裔か」

「今でこそ落ちぶれつつあるが、時計塔での立場はあいも変わらず強固だ」

「彼が一声かければ小遣い稼ぎに何人もの懲罰部隊が喜んで彼のために働くぐらいの力はまだあるということさ」

—それに。イザイは続ける。

「彼の今の立場からしても、なんとしてでも聖杯を手に入れたはずだ。それもセイバーの召喚に固執するくらいにね」

「聖杯に託す願いは当然、一族の再興。ただし……」

「再興そのものを願うのではなく、あくまで根源到達のための手段を得たいというもの」「手段のみを欲しているというあたりはさすが元貴族のプライドというわけか」

高揚した様子でなおもつぶやく。

「高みの見物をしているつもりだろうけど、君だって危ない立場にいることは自覚してほしいね」

呆れた様子でキャスターは諫める。

その後ため息を吐いて、申し訳無さそうに続ける。

「……一つ報告。セイバーのマスターに真名を見破られた」

「君は最善の選択をしてくれたよ、ガンダルフ。アサシンの襲撃は少し早計だったな。ミランダも逸る気持ちを抑えられなかったのかもしれない」

「ミランダにはなんて説明するんだい？」

暗い声でキャスターは不安そうに尋ねる。

「……手違いがあつた、とだけ。深く考慮する必要はない。そのまま同盟関係を続行する」

「次もアサシンがセイバーを狙うなら？」

「セイバーが倒され、ホムンクルスがミランダのもとで利用されるのならそれはそれで

問題ない」

—不老不死を求めた仲なのだから、そのような結末になったら暖かく彼女を祝福してやるとも。

—もつとも、その不老不死が彼女にどのような結果をもたらすのか、それすら私の好奇の対象であることは言うまでもないがね。

「しかしスペアを用意するのも簡単ではない。できる限り今回で彼女には“完成”してもらわなければならない」

「つまり君にとってあらゆる事象は、ただの研究であり、結果でしかないのか」

ふいにキャスターが漏らす。

「まるでコンピュータだな。情緒のかけらもない」

「情緒を獲得しようと思ったこともなくはないが……」

「その言い方がもうダメダメなんだよなあ」

「ふふふ……今日は珍しく饒舌じゃないか、ガンダルフ」

思いがけない一面を見た、イザイは目を丸くした。

「マスターは知らなかったかもしかれないけれど、これからライダーの討伐作戦なんだ」

皮肉交じりにキャスターは強調する。

「だから一応その……万が一のこともあるし、最後のあいさつをしておこうと思って」
「柄にもなく弱気じゃないか？」

「万が一だよ。私は死ぬつもりはない」

—どうせ今回も遠くで見ているだけなんだろう？

臆病者と一言罵つてやりたいところだったが、ガンダルフはぐつとこらえた。

その言葉を言う資格は自分にはない。

「短い間だが、君という存在は私にとつて非常に面白いものだったと思う」

「良くも悪くも常識はずれの、ネジの外れたスーパーコンピュータとでも呼ぶべき君が見せるその世界」

「“全人類の救済”それが実現した世界を、私も”彼方”から見届けてみたいものだな」
キヤスターが手を差し出す。イザイはそれに応える。

「私が救済するのではない。人間が自らを救済するのさ」

「そのためにまずは”死の運命”を乗り越えなくては」

ロンドン 某所

暗い闇夜をフクロウが翔ける。

やがてどこかの公園の木で止まると、それは目を光らせながら、書状の受取人を待ち構えた。

奥から一人の青年が現れて、ポケットからライトを取り出す。

チカチカ何度か音を立てて合図を送ると、フクロウは眼光を明滅させてそれに応える。

「アバーライン神父からだ。ライダーの位置がわかったのかもしれない」

「……いよいよか」

エハッド・ティールマンが腕を上げると、ちょうどよくフクロウが止まり、足につけた書状をこれみよがしに見せつけた。

エハッドは書状を受け取るとすぐにそれを広げて読み始める。

「ハイゲートの墓地か……墓地。死神犬にとってはテリトリーのようなものだな」

「分が悪くはあるが、夜の街よりはマシだろう」

「まったくロンドンでは真夜中でも人がちらほらだからな。やりづらいたらありやしな
いよ」

エハッドの脇にバーサーカーが現れる。

あいも変わらずムスツとした表情で、腕を組んで立ちつくす。

「色々あったが、ひとまずはこのライダー討伐戦がターニングポイントになることは

間違いない」

低い声でバーサーカーのマスターは説明する。

「この際ライダーのことはランサーやアーチャーに任せておけばいい。力をほどほどに出しつつ、その後に備えるのがいいだろう」

―決してこのバーサーカーの実力を心配しているわけではない。

しかしこの戦いで深手を追うことは好ましくないこともエハッドは承知していた。

「ランサー……とそのマスター。彼らは今この聖杯戦争に参加している中では最有力候補と言っている。そして……」

「聖杯をアトラス院から奪うと公言している。であれば、この作戦に乗じて他のサーヴァントに危害を加えることも考えられる」

「ランサーに警戒しつつ、5割の力で死神犬に挑もう」

「それには賛成しかねるなマスター」

しかしバーサーカーはこれを拒否した。

「なっ……どうしてだよ、バーサーカー?」

「あれこそは、私が求めていた ”運命” そのもの」

大げさに両腕を広げて、バーサーカーは叫ぶ。

「そう、”運命” だ! 逃れられぬ宿命と呼ぶのもいい! であればこそ、あれは私が乗

り越え、打ち碎かねばならないだろう」

「相手は死神だぞ。生前のお前も、モーツアルトでさえも、古今東西のあらゆる英霊でさえ打ち克つことのできなかつた相手だ」

「それがどうしたというのだ」

「あれは概念としてそれを保有している可能性がある。ある意味じゃ、ハデスやタナトスと同等の存在だぞ」

—ならばこそ、とバーサーカーは強調する。

「ますます私の力が必要となることだろう。ひとまずはあの ” 皇帝風情 ” に一泡吹かせつつ、群衆を導くこともときに必要であるな！」

—こいつは何を言っているんだ？

エハッドは困惑した表情で仰々しく大手を振るうこのサーヴァントを見つめた。

「バーサーカーの宝具って……ようは対心宝具だろ？ どう考えても真正面から戦うタイプのものじゃあ……」

「ふふふ……楽しみは後でとっておけ。かのシエクスピアやゲーテの性悪な宝具とは違うところを見せねばな」

バーサーカーがその屈強な両腕を勢いよく打ち付けると、乾いた音が夜の広場に響いた。

「開演は近い！」

ロンドン 某所 カナウの家

玄関で身支度を整えるカナウ。

刻限はやがて作戦開始を告げる時間に迫りつつあった。できる限り、動きやすい服装を着た。

—これで少しは生存率が上がる、はずだといいいのだが。身軽になると、今度はセイバーのサーヴァントを呼ぶ。

「セイバー、準備はいいか？」

「……」

声をかけてみるが、セイバーからの返事がない。

彼女は窓から外の景色をぼうつと眺めている。

「セイバー？」

「ん、ああ……すみません。少し考え事を」

「大丈夫か？」

「心配いりません、戦闘には全力で挑むつもりですから」

カナウを心配させまいと、セイバーは微笑んだ。

「……真名、まだ思い出せないか？」

おそらく答えはわかっていたが、カナウは思わず聞いてしまった。

聞いてから彼の中で罪悪感が膨れ上がり、バツの悪い表情を思わず漏らす。

「……すみません。私は、サーヴァントとしては失格かもしれないですね」

「ごめん、そんなつもりじゃ」

「わかっています。カナウの人柄はこのわずか数日間でも身にしみて理解しています」

—だからこそ、あなたに失望されることが。

—私はこんなにも辛い。

「……宝具は使用できませんが、いくつか私に策があります」

—嘘だ。本当は既に宝具は使用されている。

「あとはアーチャーやバーサーカー、ランサーが前衛で戦ってくれるでしょう」

—ずっとずっと、騙し続けているのだ。

「6対1であれば、いくら地域による補正を受けた死神犬であっても……」

—騎士としてこれほどの辱めを今も背負って。

「力を出せないことを心配しているんじゃない、前にも言っただろ？」

ふいにカナウからの言葉が、まるで異なる方角から急に吹いた風のように、セイバー

をハツとさせる。

「自分が何者かもわからないまま生きるのは、耐え難いことのはずだ」

「たとい自分が何者であっても、自分の存在を肯定してこそ人間だろ？」

—ああ、いや、今はサーヴァントなんだけど。

苦笑いしてカナウは付け加える。

「自分の存在を……肯定する」

「そのためにまずはやっぱり名前だと思っただよな」

顎に手を当てて考え事をするようにカナウは続ける。

「この名前すら、本当の両親がつけた名前ではないんだ」

「自分が何者なのか、本当のところ、俺自身もわかっていないんだと思う」

「だからこんなふうに、流されるようにいつも生きているんだ」

—そんなことはない！

心のなかでセイバーは反論する。

しかし声が出ない。

「いつか、セイバーの本当の真名が知りたいものだね」

そしてフツと微笑んだ。

「……戦力を温存しておきます」

不意にセイバーは霊体化する。

粒子状になる寸前、セイバーの目が目元が少し光っているように見えた。

(余計なことを言ったか?)

そんなふうに考えていると、家屋の奥からもうひとり少女が現れる。

ホムンクルスの少女だ。

「……少しでかけてくる。朝までには戻るよ」

「行くのね」

「ああ……大丈夫、かならず生きて帰ってくる。そうしたらまた、新しい話を持ってくるよ」

このホムンクルスの少女を匿ってから数日。

彼女は本を読めば読むほどよく喋るようになったと、カナウは考えていた。

「ねえ、カナウ」

「何だい?」

ふと、ホムンクルスの少女がカナウを呼び止める。

「本当は辛いんじゃないの？ 怖いんじゃないの？」

疑問に思っていたことを彼女はぶつけてみた。

「……怖くないさ」

少し考えて、カナウは答える。

「本当に？」

「怖くないね」

「不思議」

「どうして？」

「人間は死を恐れているのではないの？」

—そうか。これも物語から得た知識で。

「そうだ。恐れている」

—でも。

「でも実際のところ、死ぬより怖いことなんて、この世にはいくらでもある」

「それらに比べたら、死ぬことなんて、些細な不幸のひとつさ」

—そうさ、死ぬよりも恐ろしいことなんてこの世にたくさんある。

—いちいち怖がつてなんかいたら前に進めない。

「俺は前に進みたい。失った自分の名前を取り戻したい」

「そのために命を落とすことになっても、最後には笑えるだろうから」

「まるで英雄のような勇敢さね」

不意に少女はつぶやいた。

「そうだ、俺は英雄に憧れている。でもスーパーマンみたいな誰かの望みを叶える英雄じゃない」

「自分自身で、自分のために苦難を乗り越える、そういう英雄さ」

「……わかった」

少女はなおもカナウに何かを告げようとして、あるいは何かをしようと、片手を振り上げてカナウを指差したが、結局その手を下ろした。

「な、なに？」

「なんでもない」

「そうか……」

「……つとそうだ、キャスターがこの家に結界を張ってくれているんだ」

「ここでじつとしていてくれ、なるべく部屋から出ずに隠れているんだ。いいね？」

今日の朝のこと、キャスターが現れてカナウたちに魔力の込められた布石を渡していった。

この布石が部屋を囲い、結界となって防衛してくれるらしい。

「なにせ灰色のガンダルフだ。実力は折り紙付きだろう」

「安心して、ここで待っていてくれ」

そう言い残して、カナウは玄関の扉を開ける。

冬に近い冷たい風が体を覚醒させる。

古い路地に降り立つ。人の気配は既がない。

「……よし、いくぞセイバー」

そしてコートの襟を立てて、カナウは歩き出した。

IV
—
運命は斯く扉を叩く

ロンドン 墓地

墓所にて、打ち上がる獣の咆哮。

聞くものすべてを震え上がらせる魔の音響が響き、戦場を思わせる血の匂いがあたりに立ち込める。

ここより先は死神の領域である。

イギリスにおける亡霊の行進、ワイルドハントの先鋒を務める角笛の如き叫びがここを地獄と定義した。

古来より、十字路とは力の交わる場所と信じられていた。

それが小路であれ、都心の交差点であれ、力の大小はともかくとして、そこに流れが交わることに差異はなかった。

それは主流に交わる小さな川の流れが、あるいは何日も降り続くイギリスの陰鬱とした雨が、やがて大きな流れとなるように。

かつて人であり、冤罪によって人々から打ち捨てられ、人々によって早すぎた土葬を強いられたこの男。

魔術師と人間が水面下で髪の毛一本ほどまで肉薄された街であるからこそ起きた悲劇の犠牲者。

人々の“復讐者たれ”という身勝手な無意識の泥や土を被せられ、ついに復讐者たる死神犬へと変貌を遂げる。

—人が彼を恐怖するのなら、俺は喜んでそれに応じるとしよう。

—我が身は既に騎兵にあらず。我が身は既に復讐者なり。

ヒースと呼ばれる荒れ地に立ち上がる一匹の死神犬。

魔術師の心臓を刈り取り続けたその巨体はゆうに全長6メートルを越えようとしていた。

大きく立ちほだかり、またそれでいて素早く、突然吹き荒れる風のように、おぞましい瘴気を伴う疫病のように。

蔓延する衰弱の霧が広がるその外で、討伐作戦の集合時間を待つ一組の陣営がいた。

「……死神犬の魔力、ここまで増幅していたとは。マスターがいらないとは思えない」
「魔術師をあれだけ食らったんだ。加えてここは奴さんの“城”みたいなものだからな」

荒れ地の隅、背の高い葦の中で、ランサーのマスター、リヤオ・ファンは出方を伺っている。

「くそ……他の連中を出し抜いてやるつもりだったが、さすがにこれほどのサーヴァントを相手にするにはランサーだけじゃ困難……」

「悔しいが、それには同意だな。その後のことを考えると、深手を追うことは避けるべきだ」

リヤオ・ファンが愚痴をこぼすと、ランサーも忌々しさを顔に出しながらも答える。

そんな様子のランサーを見て、リヤオ・ファンは小さく舌打ちをした。

「おいおい……」

「だいたいお前が……」

—お前がセイバーだったのなら。

そう言いかけてリヤオ・ファンは口をつぐんだ。

その先を言う前に、ランサーの雰囲気は刺すような強烈な視線で彼の喉元を抑えたからだ。

「その話はどういいたろ。マスターであっても、コレばかりは譲れない」

「……ファン」

リヤオ・ファンはランサーから距離を取る。

背中を向けて、不満そうに座り込み、時計を見る仕草をしたまま動かない。

「一つ聞いていいか？　なぜお前はそこまでセイバーに執着する」

「……ただの願掛けさ。セイバーのサーヴァントは最優と言われている。現在世界の各地で行われているとされるアインツベルンの猿真似——つまり亜種聖杯戦争で剣士が勝利したという報告は圧倒的に多い」

「しかし、必ずしも勝てるというわけではないだろう。現にアーチャー……ナポレオンやあのキャスターのように、セイバーでなくてもインチキじみた戦闘能力を保有する連中はいくらでもいるし、そもそも過去の英霊という靈気に縛られている以上、サーヴァントには弱点が存在し、相性というものが存在する」

ランサー、ベイリン自身はその記憶を持っていないが、座によってその英霊の名を刻まれている以上、彼もまた数々の亜種聖杯戦争で召喚されどこかの世界で戦っているだろうということは彼も確信していた。

「俺だつて、ランサーのクラスではあるが、そんじよそこの奴らに遅れを取ることはないと思うが」

——このおチビは、あのランスロットやラモラックと並ぶ円卓最強の騎士を引き当ててなお、ご不満であるらしい。

「ジnkクスに気を取られて、現実から目をそらすのでは、勝てる戦も取りこぼすぞ」
「……………うるさい」

—お前に何がわかる。セイバーのカードを引けなかったこの僕の気持ちだ。

リヤオ・ファンは夢想する。

セイバーのサーヴァントを召喚する魔術師の偉業がどんなものであるかを。

リヤオ・ファンがロンドンから遠く離れた東洋の辺境で誕生したとき、彼の一族は既にある種の“黄昏”を迎えようとしていた。

かつてロンドンの時計塔で名を馳せており、西洋出身の魔術師有利な環境にしながら一介の貴族とは一線を画していたはずのその家系は、一族の始まり史上はじめての苦境に立たされていた。

それでも貴族、生活に苦しむことはなかったが、だからこそ失われた栄華を取り戻そうと躍起になる彼の両親は幼い少年には目に余るような悍ましいものであった。

彼の両親が亜種聖杯戦争に目をつけたのもそのときだった。

アインツベルンの技術が世界各地に広がってからというもの、亜種聖杯戦争はその成否に関わらずあらゆる地域でその噂を耳にするようになっていた。

リヤオ・フアンの父もまた、この戦いに介入するべく、貴族としてのあらゆるものを賭して参加券を他の魔術師と奪い合ったという。

亜種聖杯戦争における情報収集のなかで、両親はセイバーというクラスの優位性にいち早く気づいた。

彼らは血眼になって、その候補となりえる英霊召喚の触媒を求めて中国全土を東奔西走した。

彼らはついに、一振りの蕃刀を手に入れることに成功した。

だが彼らは結局亜種聖杯戦争に勝利することはなかった。

多額の資産と権威を失い、フアンの一族はついに没落の窮地に立たされる。

残された魔術回路のみを誇りに思う反面、今度は分家でさえ「魔術回路と宗家の座を譲れ」と疎まれる屈辱。

我々が優れているという誇りさえ、いつしか失われようとしていた。

「もつとも、その亜種聖杯戦争が最終的に機能したのかはもう誰にもわからない」

「願望器である聖杯、その存在も不確かなものにさえ、僕の一族はすべてを賭して挑もう

とした」

「僕たちの聖杯に願う強さは他の貴族たちとは比べ物にならない。背負うものが違う」

立ち上がってリヤオ・ファンはランサーと向き合う。

「なればこそ、ランサー」

「お前に証明できるのか？ お前が槍でも最強である証を僕に見せてくれるのか？」

いつものそそっかしい様子とは打って変わって、リヤオ・ファンの目は動かさず据わった様子でランサーを見ていた。

「ふん、いいぜ」

— 戦士の顔だ。ようやく仕えるべき主の顔になった。

ベイリン卿という存在はその実、王や権力者に仕えるという柄ではなかったかもしれ
ないが。

彼の生き様、もたらした数々の歴史への爪痕が後の円卓の礎になることも彼は嫌いで

はなかった。

—こいつはこいつなりに考えがあるってことか。荒削りだが。

そしてこのマスターもまた、己の使命が後の一族の夢に続くと思っていてここに立っていることを知ることができた。

何も考えていない、ただその神秘に惹かれて参加するようなマスターとは違う。

ふつと笑うとベイリンは片膝をついて頭をリヤオ・ファンに下げた。

「お前に使われてやるぜ、生意気なマスター坊や」

「戦士というのは守るべきものがあってこそだ。お前の願い、しかと受け止めた」

再び立ち上がるベイリン。腰につけた番の剣を握り締め、瘴気漂う霧へ向き直す。

「そうと決まれば、早速いくとするか。お前の夢の第一歩だ」

「お、おいおい正気か？」

「このぐらいの相手、ひとりで御することもできなければどのみち、覇道を極めることは無理だ」

「話を聞いてたのかよ、僕は別に覇道だなんて……」

「リヤオ・ファン」

ランサーはマスターの名前を呼ぶ。

「勝つぞ」

「……ああ！」

リヤオ・ファンはポケットから札を取り出して、詠唱を始める。

年季の入った紙が黄金色に光ると、周囲の陰鬱な霧を半径数十メートルほどまで切り払う風が吹いた。

霧は完全には晴れないが、視界を確保するのに十分であった。

「ライダーを倒すのは僕たちだ。連中の鼻を明かしてやり、ランサーの最強の名を他のサーヴァントに見せつけてやれ」

金色がかつた林の向こうからのつそりと歩く死神犬。

ついにその姿を目に捉えた。

「……サーヴァント、二本の剣……セイバーか？」

「生憎とランサーだ……まあランサーとはいっても」

腰の番の剣を抜く。

かつて「愛するものを殺す」と予言されたその剣がセルデン・オーステインだったソ

レに向けられている。

「ワンちゃん相手じゃ、この玩具で十分」

「ほらほら、おいで！ 骨がほしいかよ？」

鋭い牙の軋む音が響き、死神犬の憎悪が剥き出し、顔を歪にする。

「ハッ！ 犬小屋で随分と瘴気を蓄えてたようだな。相手にとって不足はないぜ！」

そしてベイリンは突撃する。

ハイゲート墓地 某所

「やれやれ、やつぱりこうなったか」

ベイリンとグリムドッグが戦闘を始めたその数百メートル離れた場所で、キャスターは空中にあぐらをかいて、ため息をつく。

「ブリテンの騎士つてのはどうにも血気盛んなやつが多いのかい？」

「アヴァロンの古い友人を訪ねたときも……まあいいか」

夜風にはためくローブ掴んで抑えると、キャスターも地面に降り立ち、歩いて戦闘の現場に向かうことにした。

その後ろを大きなショットガンを構えた男が近づく。

月明かりにできた木陰からインバネスコートを着た男が現れた。

「アバーライン」

「今回もマスター不在か、ミランダといい、まったく怠惰な女たちだ」

「その言葉には全面的に同意するよ。並のキャスターなら怒り狂うし、そうでないやつは狂喜するだろうけど」

ふと、ガンダルフはアバーラインのソードオフ・ショットガンを見やる。

「そんなものがサーヴァントに通用するとは思えないけど？」

「……銃の方は、たしかにそうだな」

アバーラインがコートの前を開くと、弾薬ベルトからひとつ弾丸を取り出して、ガンダルフに見せる。

「『励振火薬』。魔力を込めることで発火する特別性の弾薬で、魔獣を狩るのに適している」

「へえ、聖堂教会も便利なものを持つてるんだねえ」

「……魔獣を狩る、か」

アバーラインの言葉を復唱し、ガンダルフは不敵な笑みを浮かべた。

「あれはもう、なんていうか。神の部類にも思えるけど」

「……なんだと？」

「アバーライン、君はどこまでいっても人間で、しかもマスターではないのだから、あのサーヴァントのもつもつと恐ろしいものに気が付かないのかもかもしれないが……」

ガンダルフは説明しながら、なにかに気づいたかのように声色を変えて、続ける。

「……憎悪だよ。死神犬に向けられた憎悪が、実によくあの男に馴染んでいるんだ」

「もはやその霊基はライダーにとどまらない。あれは『復讐者』の域に達している」

「復讐者？」

聞いたことがないと、アバーラインは動揺しながらその聞き慣れない言葉をオウム返しにするしかない。

「死神犬はその名の通り、他者の死を知らせる、告げるもの」

「であればそれは、死を司るもの、死神の権能と言ってもいいだろう」

「あれは歪んではいるが、紛れもない神性を持った存在になりかけている」

「ギリシャ神話というハデスのような、そんな存在にね」

アバーラインの顔がゆがむ。

「ばかな、神霊をサーヴァントとして呼び出すなど……」

「本当にね。イギリスの地脈との親和性か、何かがああ男をそこまでの存在にさせた。

興味深いところではあるよ」

―ただし。

ガンダルフはさらに続ける。

「死の運命を乗り越える、そんな存在が偶然にもカウウンターのように、ここに存在している」

「この戦い、キーとなるのは“バーサーカー”だろう……」

「それから……」

魔力の伝播を感じ取ったガンダルフは、この墓地に集結しつつあるサーヴァントとマスターたちの顔を思い浮かべる。

「あの記憶喪失の騎士様はどうでるかな」

「僕たちも行こう。アバーライン、死ぬなよ」

「……我々の庭で好き勝手できるとは思わないことだ、”魔獣”よ」

蔑むような言葉を吐き捨て、ガンダルフの後をアバーラインが続いた。

「ちよつと何あれ！ もう始まつてるじゃないの！」

「ランサーのやつ、張り切ってるな」

「出遅れたわ、私達も急ぐわよ」

墓地の小高い丘で、シャルロットとアーチャーが立っている。

「まずは軽く、砲撃支援といくか！」

そして片腕で軽々と砲塔を死神犬に差し向けた。

次の瞬間、爆音が響き、直径数十センチはあろうかという魔力の砲弾が発射された。

「!？」

ランサーとの交戦中に高濃度の魔力気配を察知したセルデンは即座に後ろ足をけると、器用にも砲撃をすり抜けた。

「あんなでかい図体しておいて、ずいぶんと身軽なもんだ」

ナポレオンは冷や汗を浮かべながら苦笑いする。

「骨が折れそうだな！」

しかしめげずに、もう一発、二発と砲弾を叩き込む。

「英霊共が揃いも揃って！」

順応した四足の体で起用に地面を踏み鳴らし、死神犬は舞踏するかのごとく攻撃をかわしていく。

怒りに満ちた表情に犬の顔を歪めさせるが、ステップを踏み込んだその直後にあら手の攻撃がさらに迫る。

「フォルティッシモ！」

タイミングを見計らったように、今度はバーサーカーの魔術が死神犬の足元で炸裂する。

小規模の爆発が地面で発生すると、死神犬はバランスを崩して横転した。

「弱拍が甘い。お前のステップは隙だらけだ。ライダーよ！」

指揮棒を取り出したバーサーカーは得意げに語りながら、なおも音楽魔術を繰り出す。

「お前に味方はいないぞ！ 今宵、汝という死を乗り越えて、歓喜の音楽は完成するのだ！」

「ほざけ！」

放射状に広がる、輝く音楽の波状攻撃。

しかしながらグリムドッグもまた、その場で力強く咆哮を上げると、音楽はどす黒い雲のような咆哮にかき消されて聞こえなくなった。

「絶望の音楽！ それもよいだろう！」

「感心してる場合かよ、バーサーカー！」

―なるほど音に対しては音か！　なんて賢くて面倒くさい…。
バーサーカーのはるか後ろでマスターのエハッドは歯噛みする。

再度死神犬は咆哮を上げる。周囲の気配は黒い星雲が広がり、視界を悪くする上に、魔力の結界をまとうようであった。

たなびく豊かな漆黒の毛皮がより、死神犬の形を歪ませ、巨大化させ、際限なく広がるように思えるほどその威圧感を強めた。

次の瞬間、地面を大きく蹴る。音速に近い速度であつという間に距離を詰めると、目の前に立つナポレオンめがけて牙を向いた。

しかしながた紙付きの一撃は間一髪で冷たい鋼鉄の砲身に阻まれる。

「うおっ…速い！」

衝撃に後ずさりし、バランスを崩すナポレオンだが、四肢を地面にしつかりと付けるセルデンが追撃とばかりに今度は前足の爪を繰り出した。

前足の爪が赤黒い稲妻のように肥大化し、ナポレオンの肩を浅く切り裂いた。

「ん…」

反撃を試みるアーチャーだが、それよりも先に、妨害の一手が脇から迫る。

ランサーの投げた剣はそのままグリムドッグの脇腹を突き刺した。

突然の衝撃にバランスを崩すと、セルデンもうめき声を上げて、一度後退した。

雨に濡れた犬のように、体を大胆に振り絞ると、突き刺さった剣はすぐに抜け落ちた。

「武器を投げるとは…」

思わずセルデンが動揺する。

しかしながら、痛手というほどのダメージではないらしい。

「少しばかり面倒だな…ならば」

死神犬が再び強く吠える。声色が先程とは異なる。

「なんだ？」

「…さつきとは声色の違う魔力の咆哮だ…？」

墓地に降りる夜空の帳に変化が生じていく。

漆黒の空から星の光が失われ、ここでの光は死神犬のどす黒い稲妻のみとなる。

稲妻がなにかの形を形成していく。

それらはやがて、セルデンよりも一回り小さい犬のようにも見えた。

猟犬の軍団がセルデンの前に無数に現れると、隊列をもして前進し始める。

さながらワイルドハントのように。

「…ちい！ 器用なことしやがる！」

ランサーも剣を拾い上げると、今度は二刀に構え直して迎撃する。

獵犬の軍団が波状に迫る。

ベイリンは一匹ずつ獵犬を切り捨てていくが、数匹を取り逃す。

取り逃した獵犬の向かう先は……

「マスター！」

「う、うわあああ！」

間一髪小さな斥候がリヤオ・ファンに迫ろうとしたが、光の障壁がこれを防いだ。

「防御なら任せてよ」

キヤスターが詠唱を行うと、即座にマスターたちに障壁に展開され、ワイルドハントの襲撃から保護し始める。

その一方でアバーラインは障壁の向こう側からショットガンを打ち鳴らし、獵犬の群れを撃退する。

「自分の身は自分で守る、構わずやれ」

「ふふふ、聖堂教会の人間は黒鍵と呼ばれる礼装を使うって聞いたけど？」

「あんなものは時代遅れだ。より効率的な武装があれば、私個人としてはこだわる理由

は皆無」

引き金を引くと、シヨットガンからは奇妙な形状の弾丸が飛び出す。

猟犬に直撃すると、小規模の爆発を起こし、猟犬の姿を年度のように歪めさせ、破裂させていく。

猟犬の群れは続いてシャルロットやエハッドにも迫りくる。

しかしながらこの襲撃も障壁に阻まれる。

が、向こう見ずなサーヴアントも中にはいるようで。

「はあああー！」

障壁に阻まれ立ち往生している群れに、大剣の一振り。

どこからともなく乱入したセイバーがマスターたちを襲う猟犬たちを強烈な斬撃で振り払った。

「セ、セイバー！ あなた達もきたのね！」

「シャルロット、ご無事ですか……おや、この障壁は？」

「キヤスターの結果があつて助かった。ライダーは……倒せそうか？」

シャルロットの後ろからカナウ・アルバーンが息を切らせながら走ってくる。

一瞬だけシャルロットと目があい、少し気まずそうにしながらカナウはつぶやいた。
「なにか、力になれると思つて……」

「私はまだ、許したつもりはないわ」

きつぱりと一言、それだけ言つて、シャルロットは再びアーチャーの補佐に集中する。

「マドモアゼル……いやセイバー！ マスターの防御はキャスターに任せておけ！」

セイバーに遠くから呼びかけるアーチャー。

死神犬と最前線で、ランサーとともに攻撃を続けている。

「アーチャー、ランサー！」

剣を構え直すと、セイバーもまた前線に走り出す。

「ようやくか！ おせえんだよ！」

ランサーが歯を見せて二つと笑うと、セイバーもまた不敵な笑みを返す。

「三騎士集結つてところだな。お前、ちゃんと戦えるんだろうなセイバー？」

「来たつてことは、勝算くらいあるんだろ？ お前の力を見せてもらおうか？」

ランサーとアーチャーの脇からの野次にセイバーは応えない。

かわりに精神統一するかののように、なんの変哲もないその剣を顔の前に向けると目つきが騎士のそれに移り変わる。

「我が名はセイバー！　この世の不正を正す騎士道の探求者である！」

セルデンの奥の手も、数ある英霊たちの総攻撃には不利も同然であった。

地脈を最大限に生かした戦術で、多数を相手によく戦っているが、相手は歴戦の英雄たちサーヴァント。

いくら墓場の死神犬であっても、押されるのは時間の問題であった。

―殺してやる

殺戮の欲求が血の巡りを加速させる。そしてセルデンは思いつく。

地面をしつかりと支える四股に力を振り絞り、グリムドッグは再度咆哮を上げた。

霧のように濃い瘴気の霧が周囲に広がり、周囲の景色を蝕もうとする。

「今度はなんだ…?」

「逃がすかよ！」

霧の中に隠れるように見えたランサーは、死神犬を逃すまいと霧の中に突撃した。

しかし霧の中でランサーは、死神犬もろとも姿が見えなくなってしまった。

「……あれって固有結界!？」

目を見開くシャルロット。

―サーヴァントの宝具等に代表される術者の心象風景を現実に具現化する結界。

―個と世界、空想と現実、内と外を入れ替え、現実世界を心の在り方で塗りつぶす魔術の最奥。

「死神犬の固有結界……まさか!」

「アーチャー! 待って!」

何かに気がついたアーチャーはランサーを追いかけようにして霧へ突撃する。

そのままシャルロットの制止も気にせず、霧の中へと消えていった。

「むう……まづいな」

バーサーカーが余裕のない表情で霧を見てつぶやく。

「ランサーとアーチャーが固有結界の中へ……?」

「あの中は危険だ。ランサーとアーチャーは武闘派だが、それ故に、あの類の魔術への対抗手段に乏しい」

「どういふことだバーサーカー?」

エハッドがバーサーカーに迫る。

「マスター、令呪を! 我々も結界へ突入する」

「れ、令呪まで使うのか!」

「ここで無策にランサーとアーチャーを失うべきではないだろう！ 誰にも死神犬を止められなくなる」

「……」

「バーサーカーには何が見えているんだ。」

「エハッドは召喚してからのバーサーカーが見ている展望が理解できていない。」

「しかしながら、その表情は真剣そのもので。」

「あとでちゃんと説明してもらおうからな！」

「そしてエハッドは手の甲を差し出して叫んだ。」

「令呪を持つて命じる！ バーサーカー、あの固有結界へ突入し、死神犬を倒せ！」

「手の甲から赤い光が燃え上がる。」

「魔力の帯が剥がれるようにエハッドの手の甲から離れるとバーサーカーの体を包み込む。」

「込む。」

「今行くぞ！」

「そして赤い光をまといながら、バーサーカーが高速で靄への侵入に成功した。」

「アーチャー！」

「セイバーもまた靄へと侵入しようとする。」

「しかしながら、魔力の障壁に阻まれてしまう。」

「くそっ……」

「せめて ” 聖剣を開放 ” すればあるいは。

「いや、だめだ。 ” この状況を打破できる聖剣は持ち合わせていない ” ……。
 歯を食いしるセイバー。」

「剣を構えたまま、黒霧の前でじつと立ち尽くすことしかできない。」

「私が行っても足手まといなだけか」

「— 本当に？」

「くそっ……」

バーサーカーの侵入を最後に黒い霧は完全に外部の侵入を遮断したようだった。

「アバーラインがショットガンに再び励振火薬を込めて打ち出す、霧は弾丸を飲み込んだまま一切の変化が見られない。」

「アーチャー……」

「ランサー……」

シャルロットとリヤオ・ファンは自身の手の甲を見つめる。

令呪は消えていない。つまりサーヴァントとのつながりを証明するもの。

「固有結界……死神犬のもたらす風景か……」

ひたいに汗を浮かべてアバーラインがひとりつぶやく。

「死神犬は古来より十字路に現れる。十字路は魔力の交わりを意味する。邂逅する運命……」

—であれば、死神犬がもたらす風景とは。

「……まさか、お前まで割り込んでくるとはな、バーサーカー」

「その光、令呪まで使って固有結界に割り込んでくるとは、大した度胸じゃねえか」

遅れて侵入してきたバーサーカーにニヤリと笑いながら、ランサーがアーチャーと向き合う。

「それにしても……ずいぶん辛気臭い場所だな」

バーサーカーが周囲を見渡す。

青い月明かりに照らされた、薄暗い古い街道の中、十字路の三人はいた。

「こりゃああれか、死神犬の伝説、十字路——」

その瞬間、アーチャーの背後から殺気をまとった気配。

振り下ろされた大鎌は間一髪でアーチャーの砲塔に阻まれる。

派手な金属音が響き、火花が巻き起こると、殺気の持ち主を妖しく照らす。

先程までは見えなかった死神の大鎌を啜えた死神犬がまつすぐこちらを見据えていた。

毛皮を燃え上がる炎のようにたなびかせ、復讐に目を滾らす死神がそこにはいた。

「へっ……骨までくわえちゃってよ。遊ぼうぜ！」

ランサーの剣の一振り。

しかしながら斬撃は空を切り、再び死神犬は姿が見えなくなった。

「お前たちがどこまで死の運命に抗えるか、試してやろう」

「ここは俺の領域。」 酷死十字 死神の権能。逃れられぬ運命の前触れ」

古い街道の結界。低い声だけが周囲に響き渡る。

「戦えるのか？ 音楽家風情が」

「……お前たちの方こそ、この結界と解く器用さがあるとは思えんな」

「……行つてくれるぜ」

バーサーカーが中に手を伸ばすと、どこからともなく指揮棒が姿を表す。

「……運命よ。おお、死の運命よ！ 私を飲み込もうとするならば飲み込めばいい！」
「そして私に出来ることは何か？ 運命以上のものとなることである！」

掴んだ指揮棒は徐々に金色の光をまとい始める。宝具発動の機運が高まる。

「バーサーカーの宝具か……何をやる気だ？」

ランサーが不思議そうにバーサーカーに尋ねる。

「……しばしの時間をいただこう。前座……いや、前奏曲くらいにはなるだろうか？」

「この俺を前奏曲扱いとはね……できるんだろ？ な、ベートーヴェン？」

「フツ……」

再び黒い影からの大鎌の一振り、今度はランサーが両手の剣で大鎌を防ぐ。

「ぐう……なんてパワーだ。さつきよりも重たくて強い！」

「ああ、それに……これはどういうことだ」

大鎌の一振りは次第に鋭く、次第に深く、えぐるようにしてサーヴァントへ迫っている。
。

徐々に防御が間に合わなくなっている。まるで斬撃に偏差が啜えられているかのよう。
う。

「攻撃を受ければ受けるほど、死に近づいているのが実感できる。これが固有結界の力か！」

攻撃を受け流すランサー。その表情は次第に苦しいものになっている。

死神犬にアーチャーの砲撃が炸裂する。しかしながら砲撃は再び空を切る。

「ここでは実態がないのかこいつ！」

「まるで呪いのようだ……手応えがない！」

苦勞するランサーとアーチャーをよそに、バーサーカーは目を閉じて、じつと魔力を編み込んでいるようだった。

「ときに英雄（エロイカ）よ。メメント・モリという言葉はご存知だろうか？」

「あん？ こんなときになんだよ急に！」

不意にバーサーカーがアーチャーに尋ねる。

「メメント・モリ……!! 死はいつでも訪れる。皇帝にそう言うことで、常に気を引き締めるよう諫めた人間のことか？」

「うむ、死はいつでも訪れる。お前の皇帝時代はどうだった？」

「こんなときに昔話かよ！」

「ふざけている場合かよバーサーカー！ 俺たちが死んだら次はお前だぞ！」

ランサーが激昂する。

「必要な処置だ！」

対してバーサーカーも怒号する。

「音楽の邪魔だ！ 黙っていろ蛮勇風情が！」

「お、おう……」

バーサーカーが指揮棒を振り上げる。空間に金色の文字が浮かび上がり、やがてそれらは記号となり、数字となり……音符となる。

一つの楽譜が中に書き上げられていくかのようだった。

「イメージしろ、征服者の達成感を。皇帝の全能感を！ ここに！」

「いざ開演のとき！」

金色の楽譜がくらい十字路の中で輝く。

まばゆい光が、空間を塗り替えるように広がる。

「我が宝具の題名は、運命は斯く扉を叩く！」開演！」

グリムドッグにはすぐには事態を飲み込むことができなかつた。

自身の展開したはずの宝具、固有結界がバーサーカーを中心にした光によって上書きされつつあつた。

闇の帳は徐々に狭まり、次第にその姿が顕になった。

優しくも雄々しい金色の光に照らされて、アーチャーは自然と魔力が高まるのを感じた。

彼の脳裏によぎるのはヨーロッパ征服の記憶。戦争に勝利し、名声を高め、栄華を手に入れた在りし日の記憶。

—これは皇帝時代の俺か。

すべてを奪い、全てを手に入れた俺の栄華。俺の凱旋。

そういうことかとアーチャーは納得する。

—粹な宝具じゃないか。バーサーカーのくせに。

アーチャーが砲塔を構える。

砲塔が突然異音を上げると、彼の砲塔からは虹色の光が漏れ出し、砲塔はより長く、大きく変貌した。

「力が集まってくる。バーサーカーの音楽魔術で、おれの大砲の威力がブーストされているのか」

「お前も英雄ならば、人々の願いに答えてみせろ！　そして乗り越えてみせろ、死の運命を！」

「無茶言ってくれりぜ……だがまあ……」

「どこでいつ死ぬかは、俺が決める！ 死神なんぞお呼びじゃないねえ！」
アルク・ド・トリオンフ・ド・レトワール
 ”凱旋を高らかに告げる虹弓!!”

砲撃は虹色の光になって、まっすぐグリムドッグへ浴びせられた。

「グウウウウウ!!」

おぞましい野獣の咆哮が響き渡り、グリムドッグは砲撃を浴びて爆発が起こり、大きく吹き飛んだ。

やがて古い街道の固有結界はテクスチャが剥がれ落ちるかのようになり、ひびが入る。

「ランサーー!」

「任せろ!」

すかさず両手の剣を腰にさすランサー。そして両手を胸の前に持っていくと魔力を込めて詠唱を始める。

「聖槍、抜錨!」

ランサーの目の前で巨大な聖槍が現れる。

強く握りしめると、結界のヒビに向かって勢いよく突き出した。

”聖槍ロンギヌス” ロンゴミニアドとも同一視される光の塔。であれば、世界を切

り離し、崩すことも可能！」

「まさに穴を見つけた今、この固有結界を崩壊させることも容易いだろう！」

「崩壊の嘆きを知るがいい、”崩落^ロすべき嘆^キきの塔^ス”！」

ベイリンが宝具の真名を開放する。

輝く黄金の光が突き出され、固有結界は完全に崩落を始めた。

「世界をつなぎとめる柱、それを崩す”聖槍”の力か。お見事、ベイリン！」
崩落する固有結界の中、バーサーカーが大喜びで拍手を送る。

そして、光は完全に暗闇を払った。

V — 喜劇の英雄

— ナポレオン・ボナパルト、英雄よ。

— ヨーロッパの征服者、フランス皇帝。

— 私の憧れだった存在。

あらゆる苦悩をもつともしない戦の天才。

革命児、民衆の英雄（エロイカ）よ。

— なぜだ。

— 結局は彼も俗物に過ぎなかったというわけか。

— やつが戦っていたのは人のためではなかったのか。

— 人々の願いに応え、不可能を可能にする…そのような英雄ではなかったのか。

そしてベートーヴェンは、「ボナパルト」と描かれたそれを破り捨てた。

「友よ拍手よを。喜劇は終わった！」

振り払われる死の闇。死神犬の固有結界 ” 告死十字 ” は崩壊した。

”虹”がかかる。
 ロンギヌスがまばゆい光で闇をかき消し、そこにはナポレオンが宝具で打ち出した

—なんと美しい光景だろうか。

崩壊する固有結界の中で、ベートーヴェンは虹に魅了されていた。

”運命は斯く扉を叩く” はバーサーカーであるベートーヴェンが保有する ”対心宝具” である。

シエイクスピアやダ・ヴィンチといった作家、芸術家が、時にサーヴァントとして召喚されることがまれにある。

戦いに関する逸話を持たない彼らがサーヴァントとしてどのように力を持つのか。

彼らは自身の創り上げたものを宝具として昇華され、その身に宿すことがある。

ベートーヴェンが保有するものもまさしくそれである。

対象の持つ歴史、過去を音楽魔術として再現し。力を与え、鼓舞する。

単体としての性能はそれだけのことである。

しかしながらこの宝具が与えるのは栄華だけではない、時にそれは ”挫折” を相手にフラッシュバックさせ、”心を折る” ことにも用いられる。

古今東西様々な栄華、逸話、葛藤、挫折、絶望を持った英雄たちがいる。

ベートーヴェンはそれらすべてを蘇らせる。

宝具の発動を通して、ベートーヴェンはナポレオンの中に可能性を見た。

生前は和解することのなかったこの俗物皇帝だが、なんであれ人々の願いに答えようとする無限の彩色を見た。

—この男の持つものをすべて知りたい。

—もう一度この男を試してみたい。

憧憬の念でもってその後ろ姿を見送る。

そしてアーチャー、ランサー、バーサーカーの3人は再び元いた墓地に戻ってきた。

「固有結界が……崩壊する」

「アーチャー……無事よね？」

「……」

リヤオ・ファン、シャルロット、エハッドが固唾を吞んで見守る。

闇が完全に払われると、そこからは4つの影。

死神犬は全身の毛皮を力なくたれながらも、四肢でもって未だに立っている。

固有結界の維持もできないほどに体力を消耗し、黒い毛皮にべつとりと血がまとわりついている。

「許さんぞ…許さんぞ…クソ魔術師共があ!!」

咆哮にもかつての勢いはなかった。

しかし満身創痍になりながらも死神犬は復讐の炎をなおもたぎらせる。

「おいおい、まだやる気かよ」

「固有結界などなくとも、ここはあいつのテリトリーだ。死神のためのエネルギーなんて掘り出せばいくらでもでてくるんだろ」

膝をつくアーチャー。

宝具の開放でこちらも魔力を消耗しているようだ。

ランサーもまたロンギヌスをしまうと、息の上がった様子で、死神犬を睨みつけていた。

「ランサー！ 大丈夫か…？」

「ああ、宝具を使ったからな…ま、今更真名がどうのこうのって場合でもないだろ？」

「そうか、ロンギヌスで固有結界を…」

「ああ、バーサーカーのおかげで……隙ができた」

魔力をほぼ使い切り、息を切らせたランサーだが、表情は穏やかだ。

「バーサーカーが？」

「話はあとだ。それより……やつこさん、まだやる気みたいだぜ？」

アーチャーが力なく笑う。

—死の運命からは逃れられない？

—そうかもな。だが。

「俺たちの役目は終わりだ。あとは……」

アーチャーが目をやる。彼らの前に立つ騎士が一人。

「……」

「セイバー？」

セイバーが死神犬の前に立ちほだかる。

ランサーが動揺のあまり叫ぶ。

「おい、冗談だろ？ お前一人で何ができるっていうんだ」

「ベイリン卿、あとは私に任せてください」

「ああ？」

ベイリンは不意に違和感を感じた。

「ベイリン卿」とセイバーは今自分を呼んだのだ。
「俺をそう呼ぶのは……。」

「なんだ……今の違和感は」

「無茶よセイバー！ 宝具も使えないのに、グリムドッグ相手に……」

「……」

シャルロットの制止も聞かず、セイバーは何も言わずにアーチャーとランサーを守るように立つと、静かに剣を構えた。

「セイバー……う？」

カナウは恐る恐る言葉をかける。

セイバーの表情はこわばっており、どこか悲壮感の漂うものだった。

「私の、最後の願いを聞いてくださいますか、カナウ！」

突然セイバーが声を上げる。

「令呪を使うのです。この私に ”宝具を解除しろ” と」

「……えっ？」

— 宝具の解除？ それってつまり…。

動揺するカナウをよそに、死神犬の反撃が始まる。

恐るべき脅力であつという間にセイバーとの距離を詰めると、口にくわえた大鎌で一振り。

鈍い音がしてセイバーが衝撃で吹き飛ぶ。

かろうじて刃の斬撃は剣で不正だが、力量差は明らかである。

「……ぐうっ！」

死神犬は何も言わず、獣の咆哮を上げる。

目を赤くたぎらせ。捕食者の表情にかつての人間の面影はもはやない。

「完全に意識を飲まれたようだ。死神の権能を制御する理性ももう……」

バーラインが冷や汗を浮かべてシヨットガンを構え直す。

— セイバーがやられれば次はアーチャー、ランサー、キヤスター、そして自分か……。

「キヤスター、ここまで来て何もしないというのはさすがの私も……」

「大丈夫だよ、アバーライン。セイバーの秘策が見られるようだ」

「秘策だと？」

— あの状況から何をするつもりなんだ？

「セイバー!? どういうことなんだ?」

カナウの困惑をよそに、死神犬の猛攻は続く。

大鎌の一振り、爪の一撃は苛烈に、凄烈にセイバーを追い詰める。

「……っ! カナウ! セイバーの言うとおりに!」

「エハット?」

何かに気づいたのか、エハットがカナウに叫ぶ。

「サーヴァントを信じて! 君の召喚に応じたセイバーだ! きつと何か策があるんだ

!」

「……!」

—セイバー、真名を思い出したということなのか?

—それとも。

「令呪を持って命じる!」

そしてカナウの手の甲から赤い光が剥がれるように宙に広がり、帯となってセイバー

を包み込む。

「宝具を解除せよ！」

「そう、それでいい。カナウ」

理性を失った死神の大鎌が再び迫る。

再び斬撃はセイバーの剣に阻まれる。

しかし今度はセイバーの体が吹き飛ばされることはなかった。

令呪の輝きを得たセイバーが、堂々とした立ち振舞で攻撃を受け流す。

赤い光に包まれた剣は、次第に青い光に輝きだす。

剣は形を変えると、金装飾がまばゆい、洗練された姿の青い聖剣に変わり果てた。

「何が起きている？」

「あの光……まるで」

アーチャーは訝しげにセイバーを見つめる。

ランサーは動揺のあまりに開いた口が塞がらない。

「湖の光！ あの剣はまさか！」

「アロンダイト！　なんで!？」

ハツとするシャルロット。

シャルロットが見たセイバーのステータスが、以前に見たものとは変わり果てている。

「いや、ステータスが変わったというより、書き換えられている…?」

「宝具でランスロットの力を呼び起こしたとでもいうの!」

「ランサー、どうということなんだ!　あのセイバーは一体?」

「いや……あいつは、円卓の騎士とも、王様の部下とも違う。でもアレは確かにアロンダイト……」

「輝きは水面の如く。爛々と燃え盛れ我が聖剣!」

周囲の同様など構うはずもなく、騎士は立つ。

セイバーが詠唱すると、青の輝きはさらに増す。

まるで湖面に差す光のように。

死神犬が最後の突撃をしかける。

牙が、鎌が、爪が、死がそこまで来ている。

”縛鎖全断・過重湖光!”

そして湖の輝きが墓地を青く照らした。

湖の輝きは死神犬の体を大きく切りつけた。

体に切りつけられた傷から美しい青い輝きが広がり、魔力が拡散していく。

「グルルル……!!」

巨大なエネルギーの斬撃にあてられた死神犬が断末魔を上げる。

爆発が起こり、周囲の景色を吹き飛ばす。

爆風が収まったところに、死神犬がなおもよろめかせながら立ち尽くしていた。

「セイバーの宝具、すごい……」

「しかし……死神犬はまだ生きている」

エハッドが目を見開いて、戦況を見守る。

バーサーカーはいたって冷静で、死神犬の耐久力に畏怖する。

「ハア……ハア……」

セルデン・オースティンはすでに限界を迎えていた。

とつくに立ち上がる力はないが、執念とも呼ぶべきそれが彼の体をそうせていた。

—こんなところで。

—こんなところで、くたばってたまるか！

—俺の復讐が、こんなもので……！

「……む？　な、待て!!　どこへ行く気だ!」

最初に異変に気づいたのはアバーラインだった。

あとを追いかけようとショットガンを数発打ち込むが、セルデンには届かなかった。

セルデンは最後の気力を振り絞ると、踵を返して、サーヴァントたちから背中を向けて逃亡を始めた。

「逃げられる!　どこへ行く気だ!　サーヴァントたちよ、追うのだ!　ここでしとめない」と……」

「心配するなアバーライン。あれはもう霊核を破壊されている。森から出られずに消滅していくだろう……」

「……」

そういつて体をひきずって逃げ出すアヴェンジャーの後ろ足を指差すキャスター。体を維持できない部分が金色の粒子となって戻るかのように天に消えていくようだった。

死の運命はひとまず振り払われた。

剣を片手に立ち尽くすセイバー。

いつの間にか握っていたアロンダイトはもとの姿に戻っていた。

恐る恐るカナウがセイバーに近づく。

「セイバー……大丈夫か？」

「……マスター」

振り返るセイバー。

「あなたに謝らなければならぬことがある」

悲痛な表情を浮かべて、セイバーは打ち明けた。

「私は真名を思い出せないではありません。 ” 言いたくなかったのです。 ”
「だから、宝具を使っている素振りも、その真名も隠していたのです」
「あなたに、失望されると思っていましたから」

” アロンソ・キハーノ ” それこそが私の本当の名前である。

本名を言われても、この人類史でおそらくピンとこない人間のほうが多いだろう。

しかしこう言えばわかるだろうか。

” ラ・マンチャの騎士 ” ドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャ。

己を遍歴の騎士と自称した騎士。

しかしながら構えた槍はポロポロ、乗っているのは馬ではなくロバ。

騎士と呼ぶにはあまりにもみすぼらしい、ただの気狂いの老人である。

「ただ己が騎士である」という思い込み、狂気にも近いその信念で世界を旅したという喜劇の騎士。

しかしながらあらゆる騎士道文学を読みふけり、その伝説に触れ、ときに友人である

かのように吹聴し振る舞うその姿を、英霊の座が ” 騎士道の探求者 ” として解釈したものである。

アロンソ・キハーノは召喚され、その名が喜劇として現代で語り継がれていることを知った。

みすばらしい老人で、みつともない醜態を晒して周囲の人間を笑いに誘う道化のような存在。

彼女は己の存在を恥じた。

自分には英霊としての資格がないのではないかと落ち込み、悩んだ。
命のやり取りが行われる聖杯戦争。

そんな中で世間の笑いものでもある自分が召喚されたらマスターはどう思うのだろうか？

「私は怖かった。あなたに失望されることが」

うつむきながらセイバーが重たい口を開く。

「私には私自身の力などない。この宝具は私の知る騎士道の英雄たちが持つ聖剣を一度のみ ” 再現 ” するだけ」

「私にできるのは過去の英霊の力を借りて、戦うだけ」

「私は英雄などではない。私はまともな騎士ではない」

「私はただの偽物の英霊、気狂いの老人なんだ……マスター」

私はどうしたらいい？

許しを請えばいいのだろうか？

—カナウは私はどう思っているのだろうか？

「ドン・キホーテ……なるほどそういうことか」

「バーサーカー、ドン・キホーテってあの？」

「スペインを起源とする遍歴の騎士。騎士道文学の読み過ぎで自らを騎士と自称するようになった女か」

「ドン・キホーテって女だったのか？」

驚いた様子でエハッドがつぶやく。

「彼女は遍歴の旅の途中で様々な”屈辱”も受けたという。文学にするにあたって、”女性のそのような姿”を描写することを避けるために、現代では男として書かれているようだがな」

「ああ、そういうえば……結構ひどいのもあったよな」

それにしてもドン・キホーテがセイバーのサーヴァントときたか。

確かに広義で言えば、彼女も騎士と言えるだろうか……？

「いや、しかし。喜劇の主人公がまさか、聖剣使いたい放題のトンデモサーヴァントになつてるなんて誰が予想できる？」

「アロンダイト……ランスロットの聖剣を、一度きりとはいえ使ったのか」

ランサーもまたじつとセイバーのサーヴァントを見据える。

「ランサー、あのセイバーは危険だ。はやいところ僕らで……」

「いや、だとしても俺達の敵ではない。手負いの死神犬も倒せないほどのランクにまで下がってる」

「おそらく ”再現” するにしても、ランクは数段下がっている。

—本物の湖の聖剣の力はこの程度ではすまない。

「しかし、聖剣を再現か……いや、さつき認識阻害の宝具を解除してからアロンダイトを使用していた。ということは再現できるのは聖剣だけでなく逸話もだ」

「前提としてアロンダイトの使用には ”宝具の封印” が必要となる。宝具解除後にセイバーのステータスが変化したということは、セイバーは情報を隠蔽するスキルで、

ずっと正体を隠していたということだ。俺のこの兜のようにな」

―もつとも、この聖杯戦争じゃ、情報隠蔽のスキルは対して役に立ちそうもないがな。
「だが、マスターにすらそれを隠していたとは……サーヴァントとしては三流もいいところだ」

「まず間違いなくハズレのサーヴァントだ。聖杯戦争で生き残る可能性は低いだろう」
「どうで……セイバーのマスター」

「セイバー」

カナウが声をかける。

「もつと早く言ってくれたら……」

「申し訳ありません、マスター」

うつむいたままアロンソ・キハーノは謝罪する。

「どうして謝るんだ、アロンソ・キハーノ」

「私はあなたを騙していたのです。騎士としてこのような」

「何も恥ずかしいことじゃないさ、セイバー」

カナウは続ける。

「君がいなかったら、死神犬は倒せなかった。君は騎士としての役目を果たしたじゃないか、今ここで！」

「カナウ……しかしそれは」

「俺は確かに今、ここで君の騎士道を見届けた。そこに何の疑いもない」

「君は騎士道を見せてくれたんだ。もう自称の騎士なんかじゃない！」

「誰がなんと言おうとセイバー、君が俺のヒーローなんだ」

「もつと夢を見ていいんだ。夢を見ることが君の力なんだと思う」

セイバーは目をみ開いてカナウを見つめる。

カナウもまた真つ直ぐセイバーを見て、答える。

「こんな私でもサーヴァントとしてそばにお仕えすることを許してくれますのですか？」「あたりまえだろ！」

——私はこのマスターのことを心の底から信頼できていなかったのかも知れませんが、——しかし彼になら、彼こそが私の。

「カナウ……では私は、これからも貴方をお守りする騎士として、ともに歩きましょう」
膝をつくアロンソ・キハーノ。頭を深々と下げて、そして忠誠の誓いをたてた。
周囲のサーヴァントは、セイバーの ” 進化 ” を感じ取り、様々な思惑で二人を見ていた。

「まったく無茶をしたわね、アーチャー。魔力もこんなに消費するなんて……」

「バーサーカーの宝具がなければ、あいつに一撃食らわせることは不可能だっただろう」
—イギリスで、征服者として召喚された俺が、まさか ” 人々の願い ” なんてものに感化されるとはな。

一人苦笑いするナポレオン。

墓地で小さな鍋を広げるシャルロット。薬草魔術、ウィッチクラフトは彼女の得意分野の一つである。

「細菌による感染症の心配は無さそうね、さすがはサーヴァントだわ」
煮汁を染み込ませた包帯をアーチャーの肩に当てる。

「おお、こりゃいいな。お前にこんな特技があったとは」

「バックアップなら万全よ。あなたはこの後のことでも考えてなさい」

「この後のこと？」

「死神犬は倒した……ということは私達はまた敵同士。アバーラインの進言で今日のところは休戦つてことだけど、正直アサシンとかキャスターとか怪しきマックスよ。あいつらがどう出てくるのかまるでわからない」

— それにランサーとリヤオ・ファン。彼とは個人的に決着をつけたくはあるわね。「バーサーカー、ベートーヴェンはどうなんだ？ あいつもなかなか厄介そうだが」

アーチャーが固有結界の中で来たことをシャルロットと共有する。

「悪辣な精神攻撃宝具つてことね……嫌らしい」

「ところが、使いようによつては他者を鼓舞することもできるらしい。真名を掴まされてる俺達には悪用されたら厄介だな」

「あなたが宝具を使われるとしたら、敗戦の記憶とかかしら？」

「いや」

アーチャーは自信ありげに答える。

「女にフラレた時の方がもつと辛い」

アバーラインはコートからスマートフォンを取り出すと、どこかの番号へかける。

「……ライダーの討伐戦は無事完了した。消滅を確認したわけではないが霊核は破壊した。そのうち消滅するだろう」

「ああ……これから聖堂教会の方に戻る。ヤードへの対応も私が……ああ、了解した」
電話を終えると、今度はタバコを取り抱いて一服する。

—サーヴァント戦闘をこんなに関近で見られるとはな。

監督役という職務上、こういった機会も訪れるのではと内心期待していたアバーライン。

人智の及ばぬ力を使いこなす英霊たちに驚嘆の息を漏らす。

まだ明けない夜の中、遠くを眺めてぼんやりしていると、後ろから機械の羽音が近づく。

「魔術師とは思えない珍妙な手だな、ミランダ・ウォルフオーク」

「ここはカメラがありませんし、使い魔のゴーレムはかえって怪しまれます」

「知っていますか、アバーライン？ 高度に発展した科学は魔術と見分けがつかなくなるのだとか」

「……フン」

「それで、当面の脅威であったライダー……もといアヴェンジャーもいなくなったこと
ですし、ホムンクルスをアトラス院に返還するべきでは？」

「後日改めてカナウ・アルバーンを尋ねる予定で、そこで引き渡し、アトラス院に返還と
なる」

「のんびりしてらっしゃいますわねえ」

「カナウ・アルバーンは非魔術師の青年だ。彼にも心の整理をつける時間が必要だろう」
「まあ、神父様。なんてロマンティックなのでしょう」

スピーカー越しにミランダの声が響く。

「でも職務怠慢も考えものですよ。でないと私のアサシンがまた勝手に動き出してしま
いますから」

「アサシンは何を企んでいる？ 討伐司令にも参加しないとは……」

「ふふふ、さあて、ね。でももう関係のないことですね」

「なんだと？」

スピーカー越しにわかるほどミランダの声が低く、不気味になる。

「明日のニュースを楽しみにしておいてくださいいね、Mr. アバーライン」

その声を最後に、ガタガタという音を立てて、ドローンは動かなくなった。

「……」

—嫌な予感がする。

ランサーのマスター、リヤオ・ファン。

アーチャーのマスター、シャルロット・ロジエ。

バーサーカーのマスター、エハッド・ティールマン。

セイバーのマスター、カナウ・アルバーン。

四人のマスターはまだ若い、そしてこの聖杯戦争での立ち位置についてはアバーライ
ンもようやく把握仕掛けてきたところだ。

—しかしながら、残るはミランダと、キャスターのマスター。

—アトラス院の錬金術師にして、自らの奪われたホムンクルスを探すというイザイ・
エルトナム。

「彼らの思惑は一体……」

表立った動きがないだけに、彼にとってはこの二人こそが悩みの種であった。

「何を企んでいる、イザイ・エルトナム……」

聖杯戦争の開始からおよそ一週間が経とうとしていた。

Quantum — III

第二章 Quantum — III

??? 某所

乾ききつた金色の風が流れる荒野。

涼しいが、砂も混じり快適とは言えない。どこかで見たヨーロッパの風景。

黄昏を告げる夕日が荒地を赫奕と照らす。この世の終わりとも思えるような赤の世界にそびえたつ影があった。

吹きすさぶ砂にびくともせず、悠々と立ちはだかる。それは白き巨人のようであった。

体中の脈が強く跳ねる。恋焦がれたかのような感覚に押され、アロンソ・キハーノは駿馬を走らせた。

手にした剣はららんと輝き、頭には輝かしい栄光の兜を構えて。

砂風を咲くようにまつすぐ突き進む騎士。

己を鼓舞せんと吠え声をあげる。握りしめた剣が金色に輝くと、それらは光の帯と

なつて駿馬の目前の道を照らす。

周囲から音楽が聞こえてくる。英雄の詩。讚美歌。戦いを告げる高貴な金管楽器の
歓声。

近づいてきて、ようやくその遠望がハッキリと見える。

塔のようにそびえたつ無機質な白亜の魔人、その表面を覆うのは、一つ一つが苦し
うめくような人間の体で構成されていた。

表面に均等に植え付けられた菱形の真っ赤な眼球、その一つ一つがアロンソ・キハ
ノを見ていた。

（見たことのない……これが ” 悪魔 ” というものなのか？）

しかしながら彼女の進軍が歩みを止めることはない。

どこからともなく、声が聞こえてきた。

——見果てぬ夢の終わりを知るがいい。

目の前の悪魔がそう囁きかけたようだった。

「騎士として私が歩みを止めることはない」

そう叫び、彼女は拒絶した。

ところが再び構えた剣を目の前にして、彼女は愕然とした。

彼女が持つていたのは聖劍などではなく、なんの神聖性も持ち合わせないただのおんぼろの槍。

彼女が乗っていたのは駿馬などではなく、年老いた駄馬。

彼女の体は衰えていき、もはや馬に乗るほどのバランスもとれず、彼女は無様に落馬した。

いつのまにか金管のファンファーレは調子はずれの音で彼女を嘲笑していた。

「こんな、はずでは……」

悪態をつく彼女。恨めしく立ち上がろうとする。今にも真つ二つに折れそうな貧弱な槍を杖のようにふらふらと立ち上がる様を、白き巨人はそのすべての赤い眼で追っていた。興味と好奇心の目。見下すような嘲笑と、背けたくなるような憐みの視線がそこにはあった。

アロンソ・キハーノ、偽物の英雄、偽典の英雄。

彼女に才覚はなく、彼女に力はなく、彼女に功績はなく、彼女に未来はない。頭の片隅で悪魔の言葉が離れない。

しかし夢から覚めるといふことは、おのれの矮小さを認めることでもあった。

”狂気”から解き放たれば、それは彼女が普通の人間でしかない。

”狂気”だけが、彼女を彼女たらしめる力であった。

「私は……」

—私はどうしてここにいます？

私はなぜ、英霊としてここにいます？

喜劇の英雄にとつて、この世界はあまりに過酷だった。

力がなく、それでもその力に頼つて、私はこの戦いに参加せざるをえない。

誰が…私を召喚してと頼んだ。

恐る恐る現界し、目を開いて見えたものは、どこにでもいるようなただの青年だった。

気が付けば体が動いていた。

そして、自らに紐づけられた能力をすぐに理解した。

騎士道の体現者、何をばかばかしいと、彼女は自身を否定した。

そして、知られてなるまいと、己の力を隠した。

「見果てぬ夢か」

ふとアロンソ・キハーノはつぶやいた。

この体は一晩に見た夢のようにもろく、曖昧としたものだ。

私では聖杯戦争には勝てないだろう。

私は私のマスターを失望させることを望んではいなかった。

だがせめて、たとえこの身を盾にしても、マスターだけは守る。

であればせめては、英雄とは名乗れなくとも、騎士として名乗れなくとも。

ひとりの人間として、彼らに残せるものがあるだろう。

負けるとわかつていながら、自ら破滅に向かって、それでもこの巨人に挑み続ける。

これもまた一つの騎士道なのかもしれない。

「ああ、少し救われたような気分だ」

腰の曲がったぼろきれをまとった老人がふいに笑い出す。

しわがれた声でアロンソ・キハーノは笑い出した。

「クツクツクツ…カーカツカツ!!」

「どうか、どうか笑ってくれ! この老いぼれの恥ずかしい告白を聞いてくれ!」

大きく上げた口から金色の砂が入り込む。夕日に当てられ一粒一粒が輝いていく。

口が砂で満たされようとも、アロンソ・キハーノはいつまでも口を開いて狂うように

笑い続けた。

いつの間にか、悪魔はいなくなり、そこに立っていたのは連なる風車の塔のみであった。

ロンドン警視庁 会議室

「事件が解決したというのはどういうことなんですか！」

「なんの説明にもなっていない。国民がそれで納得できると思っっているのか!？」

飛び交う怒号と罵声の中心に、今宵もまたロバート・アバーラインは立ち尽くしていた。

聖堂教会の一員でありながら、ロンドン聖杯戦争の監督役であった彼は、必然的に、このところ市街地で頻発している様々な（表向きには）事故の原因究明を担当する刑事という認識が、この記者会見場にいる記者全員に共通していた。

だからこそ、この（表向きには）連続殺人事件について得られる情報源というのが、インターネットの眉唾な都市伝説を除いて彼にしかなく、事実として彼だけがこの場で、この事件の真相を語ることできる人物であった。

普段から感情を表に出すことが少ないアバーラインではあるが、彼も人間であり、職場であるこのロンドン警視庁でも様々な人間関係の問題を持っている。

記者会見場でしゃべるといふことも、これまで彼は何度も経験があったが、この二つの相容れぬ立場からどのように、彼らの納得のいく説明を組み立てることができるの

か、本心でかなり参っていた。

結果として記者会見場には異様な空気が漂っていた。

(一刻も早くこの無駄な時間を終わらせたい)

心の中にあるのはその言葉だけだった。

すべてが不合理、すべてが無意味、すべてが非効率。

チラッと会議室の時計に目をやる。まもなく今日という一日が終わろうというところだった。

(明日のニュースか)

—明日のニュースを楽しみにしておいてくださいね。

ふと、アバーラインは昨晚のミランダの言葉を思い出していた。

ミランダの言動には最新の注意を払っているアバーラインだが、この言葉の意味をいまだ推測できずにいた。

今朝はいつも通りの時間に起床し、いつも通りの時間に出勤した。しかしながら、「楽しい」と思えるようなニュースや報告はいまだにない。

事故があったとか、暴力事件があったとか、彼のイメージする通りの”ありふれた人間”の姿がそこにはあった。

さすがに昨日の今日ということもあつてか、聖杯戦争参加者たちの間にも目立って大

きな動きはないようだ。

グリムドッグが召喚されてからしばらくはなかった、恐ろしく静かな夜になろうとしていた。

自分で紡いだ言葉なのに、彼自身の耳には一ミリも届いていない薄っぺらい言葉。

当然記者たちが納得できるはずもなく、中には警察関係者が犯人であるがゆえに、事件の詳細を公表できないなどと陰謀論を問う声すら現れた。

しかし、アバーラインにとってみればこれはむしろ好都合であった。

——一番ありそうな展開だ。私にとってロンドン警視庁のメンツなどどうでもいいことだからな。

アバーラインはそこで珍しく表情を作ることにした。凶星をつかれた、かのような焦りの表情、あきららかに動揺したかのような声の調子、そして汗。

すべてをコントロールして、彼はたやすく「ボロが出そうなスポークスマン」に変わり果てた。

「おい、あの表情」

「凶星、つてかんじじゃあないか？」

一斉にカメラのフラッシュが炊かれていく。記者たちは納得のいくシナリオを導いたようだ。

(ようやく終われる…)

土曜日の夜ということもあつてか、この日の記者団たちはいつてもより追及が甘い。

さつさと切り上げて日曜日を目いっぱい楽しむことにすでに頭が動いているに違いない。

会見の終了を進行役の刑事が告げると、記者団たちは興奮冷めやらぬ様子で会議室を後にした。

「君たちは先に帰るといい、後片付けは私がやっておく」

「し、しかし先輩。かなり疲れているように見えますし…」

「この顔は生まれつきだよ」

「し、失礼しました！」

「冗談だ、気にするな」

部下を先に帰らせて、会議室にアバーラインひとりとなった。

この一人の時間が今はとて心地よい。建物内が禁煙でなかったらもつとよかつたのだが。

「……」

アバーラインはふと会議室の何も無い空間を見た。

なぜか目が離せない、言いようのない直観に従って、声を発する。

「アサシンか？」

何もなかったはずの空間に突然男が現れた。

壁に墨汁のような黒いしみが浮かび上がり、それらが影のように人の形を形成すると、次の瞬間にはアサシンが会議室の片隅で腕を組みながら壁にもたれかかっていた。無言で。

全身を黒い布でまとい、表情のないドクロの仮面をかぶった、声を出さなければ男とも女ともわからぬ姿のアサシンがこちらをじっと見ている。

「私の気配遮断スキルはそれほど高くはない……だが、それでもお前の直感というものは人間離れしていることはわかる」

アサシンが口を開いた。

——声の雰囲気は男……それも少し年を取っているような、壮年といった雰囲気だ。

「改めて、私はミランダのサーヴァント、クラスはアサシン」

「以後お見知りおきを」

「……」

アバーラインの内心は穏やかではない。

アサシンは聖杯戦争においてもっとも気を許してはならない相手なのだから。

ましてそのアサシンの姿に共通するドクロの仮面となれば、おのずとその危険度は跳ね上がる。

数々の亜種聖杯戦争にて、アサシンの姿はおおむね共通している場合が多い。

ドクロの面と、体を覆い隠す黒の外套。

彼らは聖杯戦争でしばしばアサシンのクラスとして召喚される暗殺教団の頭領、山の翁の姿である。

常に死の気配を漂わせる危険な存在だ。

「ミランダの遣いか？」

「ああ、そうだ」

「殺しに来たのか？」

「いいや、殺さない。今は、そして私は」

「どういうことだ？」

「この後お前が身動きが取れなくなる前に、話がしたいと思ってな」

— 話だといや、身動きが取れなくなるとはどういうことだ？

「・・・」

全身の魔術回路が警鐘を鳴らしている。

—何を企んでいるアサシン？

少しの沈黙の後、アサシンが口を開いた。

「私はこの異教徒の産物たる聖杯を疎んでいる、そして、その聖杯から呼び出されたという事実について、私は耐え難いほどの屈辱をもつてここにいる」

「ああ、山の翁…暗殺教団にとつてはそうかもしれない、だが…」

アバーラインは慎重に言葉を選び続ける。

「それでもお前たちが聖杯に召喚されるというのは、少しばかり違和感もある。召喚されたからと言ってわざわざマスターのために聖杯を手に入れるために戦う必要はないのだからな」

「だから、山の翁たちは、この戦いを疎んではいながらも、同時に好機だととらえているんだ」

「己の持つ願望、それが破滅的なものであれ、私欲を満たすためのものであれ、機会をうかがっているんだ」

「お前たちアサシンはリアリスト…目的のためなら手段を択ばない…」

「そうだ、利用できるものはすべて利用する。少なくとも私はそういう風に考えている。」

「聖杯戦争においては、もつとも合理的な戦術を得意とするのがアサシンだ」

「おほめにあずかり光栄だよ、アバーライン」

アサシンが笑った。満足げな声の調子で提案する。

「私の見立て通りだ、アバーライン」

「いかがか？ 私と契約して”アサシンのマスター”にならないか？」

「……は？」

「すまない、聞き間違いかもしれないからもう一度聞く」

「私の、アサシンのマスターになれと言っている」

ドクロの面をかぶったそのサーヴアントはもう一度同じ言葉を繰り返した。

「お前、どういうつもりだ？ ミランダは？」

「むろん、わがマスターは了承済みである」

「私がミランダの手先になるということか？ ますます意味が分からんぞ！」

額に汗を浮かべて、狼狽した様子でアバーラインが叫ぶ。

彼のこのような様子はおそらく同僚でも見たことがないだろう。

「わがマスターの考えは、おまえにも予測できないだろう。しかし、聖杯戦争において、

マスターは勝つためならどんな手段もいとわない女だ。私はそこが気に入っている」
「マスターの”令呪”が今どうなっているか、お前にわかるかアバーライン？」

アサシンは試すようにアバーラインに問いかける。

令呪とはマスターが手の甲などに発現させるマスターの証であり、サーヴァントに命令を強制できるリソースである。

「当然、ミランダの手の甲にあるのだろう」

「では、そのミランダは今どうなっていると思う？」

「不老不死と引き換えに……彼女は外の世界に出ることができないと聞いているが」

—実際にこの目で見たことはないが、現在の彼女はさしずめホルマリン漬け標本のようないでたちなのだろう。

「考えてみれば不思議なものだ。そのような姿になっても聖杯戦争のマスターになれる資格があるというのか」

ふいにアサシンが街頭から真つ黒な袋を取り出した。

アバーラインに説明する。

「ここに彼女の令呪がある」

袋から取り出されたのはしわくちやの、ミイラのような切り取られた人間の右手だった。

その右手の甲には確かに赤く輝く刺青のような文様が浮かび上がっていた。令呪とは魔術師の魔術回路に影響されるもの。

そして彼女の令呪はとげとげしく、角の生えたハート形のような左右対称の文様を表していた。

なるほど左右対称ではあるが、生命の象徴、心臓ともいえるハートは歪み、異形の存在となっている。

美しいようにいびつ。彼女らしい令呪と言えなくもないだろう。

—いや、問題はそこではない。

「……そ、それはまさかミランダ・ウォルフオークの？」

「そうだ、彼女が私に託した、アサシンの令呪だ」

「彼女の覚悟はこれで分かっただろう。決して冗談などではない。マスターはお前が私のマスターになることが、この聖杯戦争において決定的な奇策となると確信している」

「……」

アバーラインは高速で思考をめぐる。

聖杯戦争においてマスターとはサーヴァント以上にその存在を狙われやすい存在である。マスターを殺害してしまえばサーヴァントは消滅してしまうからだ。どんなに強いサーヴァントであっても、それは変わらない。いかにして他のサーヴァントからマ

スターを守るかもこの聖杯戦争において重要な要素である。

だからミランダの言うように、マスターを偽装するという手段も十分に有効な手であることはオーバーラインにも容易に合点がいった。しかしだからと言って、令呪を明け渡ししてしまえば、それはもはやマスターの資格そのものを譲渡しているようなものである。

「……理解不能だ。やはりあの女は危険すぎる」

「ここで私が令呪を手に入れて、ミランダを暗殺させることだってできるのではないのか？」

「命をなげうつような、危険な……いや、賭けにすらなっていない！」

——残念ながら。アサシンが遮る。

「それはできない」

「なぜだ！」

「この私にも、マスターが今どこにいるのかを分からないのだからな」

「……」

——おぞましい。あの女にはこの聖杯戦争の局面がどこまで見えているのか？

彼が趣味でやっているチェスの話を思い出す。チェスは駒も盤面も少ない。プロのチェスプレイヤーなら突き詰めていけば序盤のゲーム展開であればすべての駒の動き、

何百万という序盤の展開をすべて覚え、まるでコンピュータの計算のように最適な手を導くことができる。彼女の言動には人間味が感じられない。

「わずかだが、彼女とのパスはこのロンドンの地下深くに向かつて続いているのがわかる。しかし、ロンドンの地脈が入り乱れて流れている間にこのパスの行方は突き止めることができなくなっている」

「居場所がわからないというのか……アサシンにも」

「そうだ。だから、お前にマスターを殺すことはできない。たとえその腕をめった刺しにしようとも、酸で溶かしたとしても意味はない」

「わがマスターはすでにほぼすべての肉体を捨てているのだからな。その手は彼女にとつてただの部品に過ぎない」

「彼女を殺すことはできない」

「……吐き気がする」

さきほどかたづけけたパイプ椅子を再び取り出し、すがるようにアバーラインは会議室

にひとり座り込んだ。

疲弊した様子のアバーラインを慰めるかのように、あるいはせかすようにアサシンは凄んだ。

「お疲れのところ申し訳ないが、考えている時間はもうないようだぞ、アバーライン」

「……断つたら殺すということか？」

「フツ……殺さないさ、だが」

疲れからか、表情の読めないアサシンのドクロの面がゆがんだように、アバーラインには見えた。

「死ぬよりも面倒くさいことにはなるだろうな」

会議室に突然鳴り響く激しいドアのノック音。

勢いよくドアが開かれると、間髪入れずに武装した警官が大量に会議室になだれ込む。

中にはアバーラインの見知った上司や、同僚の姿もある。

アバーラインは目を見開いて狼狽し、アサシンと警官の群団を交互に見た。

——一般人にサーヴァントの姿を見られている。

「あ、アサシン貴様！」

「ロバート・アバーライン！ 両手を頭の後ろについてひざまずけ！」

一瞬彼には言葉の意味を理解できなかった。

アバーラインはわけもわからず叫んだが、アサシンは意に介さずといった様子でこの成り行きを見ていた。

「……………、これはどういうことですか！ なぜ私が！」

アバーラインが警官たちに口を開こうとした瞬間、乾いた発砲音が響き、背後の窓ガラスに穴が開いた。

発砲したのは彼がよく知るロンドン警視庁の後輩だった。

彼の頭から血の気が引いた。

もともと血の巡りの悪い不健康な相貌ではあったが、その姿は今にも死にそうな青色を呈していた。

同僚に銃を向けられるというのとはある意味で現実的で、昨晚の死神犬よりも彼にとつてダメージの大きい光景であったのだ。

聖堂教会、ロンドン警視庁、どちらの立場も崩れていくかのようであった。

「アバーライン、貴様を猟奇殺人事件の容疑で拘束する！ さっさとひざまずけ、次は一斉射撃だ！」

「……………」

ぐらぐらとした視界の中、アバーラインはそれ以上何もいうことも、何かを起こすこともできず成り行きに身を任せた。

膝について、愕然としながら、ふいにアサシンと目が合った。

意識を失う直前、アバーラインは何かをつぶやいた。

そして、アサシンがドクロの面を取ったかと思うと、細長い髭を蓄えたアジア風の男の相貌が一瞬うかがえた。

—ああそうか、これは確かにビッグニュースだ。

それからアバーラインは意識を失った。

時計が真夜中の0時を告げようとしていた。

ロンドン カナウの家

そこから数キロ離れた場所、カナウ・アルバーンの家。

つかの間の休息、ロンドンの裏通り、下町の静寂を破る来訪者の影。

カナウの家はそれほど大きなものではない。現在は一人暮らしたがかつては家族と暮らしていた。

使われてない部屋はいくつかあり、客人をもてなすくらい設備はある。

そんなごく普通の、イギリス式の一軒家のダイニングテーブルで。

「おい、もうちよつと大きな椅子はないのか？」

「人の家に入り込んできたかと思えば……その態度を小さくすれば椅子に収まるくらいにはなるのでは、アーチャー？」

「言ってくれるじゃないか、”英雄もどき”のセイバーが」

「ところでセイバーのマスター……ここに酒はないのか？」

「いや、お酒はほとんど飲めないから……ああそうだ、コーヒーでよかつたら」

「カナウくん、バーサーカーのことは気にしなくていいから」

「どうかあなたたち、狭いんだから霊体化してくださらない？」

「セイバーはともかく、アーチャーもバーサーカーもデカすぎて暑苦しいのよ」

ダイニングテーブルに座り込むシャルロット。両側を厚い男の胸板に挟まれて、ウンザリといった様子で悪態をついた。

「別にいいじゃねえか、俺としてはお前たちと今の気持ちについて問うてみたいことが

山ほどあったんでな」

「今の気持ち？」と、これはカナウ。

彼はすっかりこの家のホストとしてこの好き放題な客たちに飲み物を入れて回っていた。

なこの小さな一軒家に、小さなダイニングテーブルを囲んで、セイバー、アーチャー、バーサーカー、シャルロット、エハッドが集っていた。

アーチャーとバーサーカーは体格が大きいので、このダイニングテーブルでは不釣り合いなほどだった。

古今東西の英雄がテーブルを囲んで、紅茶やコーヒーを片手に談笑しあうという奇妙な光景がそこにはあった。

各々が指をさし、様々な表情で語り、揶揄する様はルネサンスの宗教絵画のようにも見えた。

昨日までの緊迫とした空気はそこにはなく、好き放題に話したがる英霊と魔術師たちの光景だ。

「とういかなんでこんなことに…」

ひとり呟くエハッド・ティーレマン。こうなった原因を探ろうと記憶をよみがえらせる。

ライダー討伐指令の翌日のことだ。

Material — ライダー／アヴエンジャー

【ステータス】

真名：グリムドツグ

クラス：ライダー／アヴエンジャー

地域／出典：イギリス『死神犬伝承』より

信念：混沌・悪

身長：350cm

体重：90kg

【パラメータ】

筋力：A+ 耐久：A+

敏捷：A 魔力：C

幸運：D 宝具：A

【保有スキル】

・復讐者 A

復讐者として、人の怨みと怨念を一身に集める在り方がスキルとなったもの。

怨み・怨念が貯まりやすい。

そして人から向けられた負の感情はより強力なエネルギーとなる。

・忘却補正 C

人は忘れる生き物だが、復讐者は決して忘れない。

時がどれほど流れようと、その憎悪は決して晴れない。

たとえ、憎悪より素晴らしいものを知ったとしても。

・ワイルドハント EX

周囲に災厄を振りまき、死をもたらす魔性の存在としてのスキル。

ワイルドハント姿の一つともされるグリムドッグは、暗闇の中対象の命を奪いに荒野

から姿を現す。

【サーヴァント解説】

死神犬、グリムドッグ。イギリス伝承に伝わる妖精であり、人々に恐ろしい運命、死の前触れをもたらす。

本来グリムドッグは英霊に足るほどの存在ではない、しかしながらとある老魔術師によつてその幻霊を復讐者として定義させることにより、人々が憎む負の感情を人間の器に注ぎ込むことによつて生まれたサーヴァント。

セルデンという男は猟奇殺人犯として人々からの憎悪を一身に受けている。

その男にとある老魔術師によってイギリスの墓地に漂う負の感情、死者の怨念が注ぎ込まれた結果誕生した。

本来ライダーの召喚枠であつた彼は怨念によつて浸食され、後にアヴェンジャーとしてクラスが再定義された。

ライダー討伐指令ではその意識のほとんどを復讐者の本能によつて浸食されていたが、

ランサーたちの活躍により致命傷を食らい姿を消した。

【宝具解説】

・「告死十字」ランクA

デッド・クロス。死神犬がもたらす簡易固有結界。

対象を古い十字路の様相を呈した固有結界にひきずりこむ。

十字路の中でグリムドッグと相対した者は、グリムドッグにとって都合の良いように攻撃に偏差が加えられてしまう。

こちらの攻撃は死神犬には届きにくくなるよう、そして死神犬の攻撃は対象に届きやすくなるように。

すべての一挙手一投足が死神犬に有利に働くよう因果に干渉することができる結界

である。

・「驕れる者たちへの斬罪」ランクA

デス・サイズ。死神犬が持つ死の権能。

死神にとって命とは穀物の穂のようなもの。

ゆえに死神が命を刈り取るときは必ずこの鎌のような様相となる。

グリムドッグはこれを口に咥え、器用にも振り下ろすことができる。

実体に対する切れ味はもちろん、霊魂に対しても効果がある。

前述の「告死十字」と組み合わせることで対象に絶対的な死をもたらすことができるが、相手の対魔力によっては結界のほうを破ることで生き残る術はある。

第三章 — 時計塔戦争

I — 三帝問答

ロンドン カナウの家

セイバーのマスター、カナウ・アルバーンの家。

その家のダイニングテーブルに、かつてのフランス皇帝ナポレオンが紅茶の淹れられたティーカップを片手に、ふんぞり返るように座っていた。

この家で最も効果と思われる椅子をダイニングに抱えてくると、悪びれた様子もなくドカと置いたものだ。

その偉そうな姿のアーチャーのすぐわきで、窮屈そうに彼のマスターであるシャルロット・ロジエが今しがたまで座っていたが、やはり暑苦しい男2人に板挟みにされて耐え切れなくなったのか席を外し、カナウと一緒にティーカップを手にしたまま後ろで立ち、この英霊3人の奇妙な同盟について思慮を巡らせた。

「それにしてもあのユーロとかいう紙幣にはたまげたものだよな」

「まさかユーロッパの国中で連合ができてるなんて、だれが想像できるってんだ」

そしてアーチャーの隣に座るのは壮年の風貌を残すバーサーカー。

真名はベートーヴェン。こちらはマグカップに入ったコーヒーの香りを丁寧に楽しみながら、時折ズズズと熱い飲み物を啜るように音を立てて飲んでいる。

「それでいてなお、戦争も絶えないと聞く。やれ人間の未来を憂いたくもなる」

「まったくだ。武力でも、音楽でも結局俺たちの望む秩序つてのは得られないらしい」

（若者に愚痴をこぼすニユース番組のご意見番みたいなこと言ってる……）

最後にそのふたりと向かい合うように座るのがセイバーのサーヴァント。

今しがた判明した彼女の真名はアロンソ・キハーノ。

またの名を”ドン・キホーテ”。

飲み物がのどを通らない。

「人の家に入り込んで、ずいぶんと好き放題やりますね、皇帝というのは」

「別にいいじゃねえか。召喚されてからほぼずっと戦いつばなしたんだ」

「そういえばアーチャー、もうこれでキャスターとアサシン以外すべてのサーヴァントと一度戦っていることになるのかしら」

ふとシャルロットが思い返して呟く。

アーチャーの戦績はランサー、セイバー、ライダー、バーサーカー。

どのサーヴァントとの戦闘でも引けを取らない戦いでここまで来ている。

（敵地イギリスでの召喚にもかかわらず、皇帝ナポレオンはここまで一定の戦果を収め

ている。サーヴァントとしての知名度、能力もそうだが、やはり聖杯戦争のマスター。シャルロット・ロジエの采配はすさまじいようだ」

ティーカップ片手に指折り数えている20にも満たない少女を横目にエハッドは目の前のマスターの力量に目を覆う。

（いや普通に強いなこいつら……仮にこれが普通の聖杯戦争だとしたら一番の優勝候補かもしれない）

「つていうかこの状況は何なんです？」

座り込む3人の英霊、そのそれぞれのマスターは後ろに立って事の成り行きを緊張した面持ちで見守っていた。

耐えられず口を開いたのはカナウ・アルバーンだ。

ライダーの討伐指令の翌日。

バーサーカーのマスターであるエハッドから「同盟の誘い」が提案された。

「発案はバーサーカーなんだけど……確かに、ここまでの状況についてお互いに情報を整理する必要があるんじゃないか？」

冷静にエハッドはそう発言した。

「それについては私も同意見ね」と、これはシャルロット。

「この聖杯戦争、ホムンクルスの正体、キャスターとアサシン……いまだ不穏分子が多い

のは確かね」

「このままホムンクルスをアトラス院に引き渡して終わり……とはならないでしょうね」

「そもそも引き渡した後、サーヴァントたちはどうなるの？ このまま消滅するのかしら」

「それは少し、不完全燃焼だな……せめてランサーとは命を懸けた殺し合いをだな……」
「順を追って情報を整理していこう」

エハッドがノートパソコンを取り出してソフトウェアを立ち上げる。

画面上にチエスボードのような盤面が映し出され、マウスで操作しながら盤上にいくつもの駒がおかれた。

盤上の中心に、金色の聖杯の駒がおかれている。

「それじゃあまず、ここまでの経緯を振り返ろう」

「イザイ・エルトナム・アトラシア……まず彼女の通達により、このロンドンでアトラス院の兵器を奪った犯人がいるとして、ロンドン市内で犯人を包囲するべくマスターたちが選ばれた……」

「そうね。私はその場において、イザイやロード・エルメロイたちの話を聞いていた」

当時のことを振り返るシャルロット。

「イザイが言うには、盗まれたのはホムンクルスで、それは聖杯戦争における聖杯のための器として製造されていたものだったと確かに彼女は言っていた」

「ああ、そのことなら僕も時計塔つてに聞いている」

「この状況は確かに聖杯戦争の形を成していると……言えるのかしら」

「聖杯の行方が聖堂教会にもわかっていないという点を除けば、概ねそうだといえるかもな、それで……」

画面上のボードに浮かび上がる聖杯と、並べられる7基の駒。

「イザイの申し出により、時計塔とアトラス院の共同による、ホムンクルスの奪還作戦が組まれた。選ばれたのが七人のマスター……」

『アーチャーのマスター、シャルロット・ロジェ。時計塔のマスターとして参戦』

「……とということでもいいんだよな？」キーボードをたたきながら苦笑いでエハッドが尋ねる。

「監督役の話によると、ライダーのマスターは死亡したみたい。召喚時にトラブルがあつたみたいで」

「私は確かに時計塔の魔術師としてこの作戦に参加しているわ、ひとまずはそのつもり

「よ」

「ひとまず、ねえ……」

「アーチャーの召喚はロンドンで行ったわ、ホムンクルスの事件より後のことだから、盗んだのは私じゃないわよ」

「というか、ここにいるんだよな。あの子」

ふとエハッドは部屋の外のドアを見た。

カナウの家の一室、あのドアの向こうにマスターたちの探しているホムンクルスがいる。

「それで、エハッド・ティールマン。あなたのこと聞きたいのだけど」

「俺も時計塔の魔術師としてこの作戦に参加している。そして、ホムンクルスは奪還してアトラス院に帰すべきだと確信している」

「かわいそうだとは思うけどね、と付け加えるエハッド。

「所詮はホムンクルス、魔術師の創造した道具のようなものだ。そんなものに憐みの感情を抱くほうが魔術師としてどうかしてる……俺はこれでもそれなりに力のある魔術師の一員であると自負している。そして功績をあげて名乗りを上げることも俺の代のつとめ、一大事業のようなものだとも思っている」

「だから、その時になれば俺は君たちと争うことになる」

エハッドはそう言いながらセイバーたちを見る。
重苦しい空気が再び色を濃くする。

「バーサーカー……本気ですか？」

セイバーは神妙な面持ちで尋ねる。

対してバーサーカーは沈黙を守った。

「……」

「……まあ、それは今は置いて、だ」

エハッドは再びキーボードをたたき始める。

今度はセイバーとランサーの駒がボードで動き始める。

「俺も聖杯戦争の話を受けて、ここ、ロンドンでサーヴァントの召喚を試みた。アーチャーがロンドンに現れたのと同時期くらいだ」

「それを証明できる？」

「ああ……一応証人なら」

「リヤオ・ファン、ランサーのマスター……と出くわしてな」

「ああ……あなたのところにも来てたのね」

あきれ顔でシャルロットがつぶやく。

「ちなみにカナウがセイバーを召還したのもその直後、証人は私とリヤオ・ファンよ。私たちの目の前で召喚されたから」

「オーケー、わかりやすい」

『セイバーのマスター、カナウ・アルバーン。非魔術師のマスター。未知数』

「リヤオ・ファンは、俺たちの中にサーヴァントを召喚してホムンクルスを強奪した犯人がいると考えている。それもかなり積極的に行動している。ふたりとも聖堂教会前での戦闘を覚えているか？」

「あいつ、時計塔の懲罰部隊まで借り出していた」

「リヤオ・ファンが合図をすると、魔術礼装で武装した時計塔の魔術師が数人現れたのを覚えている。

「いくら精鋭だとしても人間の魔術師がサーヴァントに勝てるはずがない、おそらくけん制のつもりだったんだろうが……」

「キヤスター……本当に自らをガンダルフと名乗ったのか？」

エハツドの視線がカナウに集まる。

「あの銀の剣、魔術使いたちの武器を一度打っただけで粉々にしてしまった。」グラムドリンク”は切れ味こそ大したことないが、相手の武器を必ず打ち砕く性質がある最強の魔剣だ」

「白兵戦において最強の魔剣というわけか……厄介な」
「それにあの”指輪”も……」

—ガンダルフが取り出した指輪は確かにセイバーの傷を即座に回復させてしまった。
「指輪物語」によれば、中つ国のガンダルフはいくつかの魔力の込められた指輪を駆使して、エルフたちを導いたと本で読んだことがある。

「しかし、”灰色のガンダルフ”がまさかあんな女の子の姿で召喚されるとは思わなかったよ。というか彼はイスタリ（魔法使い）なんだろう……なんなら冠位の適正すらあるんじゃない……」

エハッドはキーボードをたたく。

『キヤスター、灰色のガンダルフ。宝具多数、要注意、マスター不明』

『ランサー、ベイリン。宝具「ロンギヌス」 要注意、マスター：リヤオ・ファン』

「キヤスターといえは……」カナウは続ける。

「キヤスターが気になる言葉をいくつか残していた」

「……キヤスターのマスターが？」

「セイバーたちに生き残ってもらいたい……ってどういうことだ？」

アーチャーは怪訝な表情でカナウとセイバーを見る。

「まるで心当たりがないんだ……」

「その言い草だと、キャスターのマスターはホムンクルスのことを知っているように思えるが」

バーサーカーは冷静に分析する。

「そういえばキャスターの召喚時期はまだわかっていない。そしてマスターも不明……」

「なあ、もしかしてキャスターのマスターはイザイ・エルトナムなんじゃないか？」

「ええ、イザイがキャスターのマスター？」

意味が分からない、とシャルロットは反論する。

「イザイなら、ホムンクルスのことも知っているし、ホムンクルスが時計塔の手に渡らないようにカナウに協力するという筋書きは理にかなっていると思う」

エハッドは相変わらずキーボードをたたき、確率を計算しようとする。

「そもそも、ホムンクルスを奪還するよう頼んだのはイザイじゃない。どうしてそんな回りくどい真似をする必要があるっていうのよ」

「……そもそもおかしいと思っていたんだ」

エハツドは説明する。

「なあ、普通に考えてアトラス院から無事に脱出なんてできるはずがないし……それほどの実力がありながら盗んだのはただのホームクルスひとりだぞ？ リターンがなさすぎる」

「でも、イザイが自らホームクルスを脱走させたとなれば……」

「なるほど、一理あるわね。と、シャルロットはうなずく。

「狂言誘拐、みたいなものかしら。でもそうする目的は何？」

「わからない……」

ため息をついてエハツドはうつむいた。

「だが、キャスターのマスターについて探りを入れるという手はありだと思う」

紅茶を完食したアーチャーが腕を組みながらつぶやく。

机に指をトントンとたたきながら持論を展開する。

「どちらにせよ、キャスターとアサシンはきな臭い部分が多い。あいつらには協力する姿勢が感じられないし、別の目的を持って動いているのはまず間違いないだろうからな」

「まずはキャスターのマスターだな……」

エハツド、バーサーカー、シャルロット、アーチャー、の視線がカナウに集まる。

「は、はい」

「キヤスターと接触を図ることはできるか？」

「わからない……連絡手段がないから」

「同盟といった割には、ずいぶんとほったらかしだな」

やれやれといった様子でアーチャーはため息を漏らした。

「しかし相手は冠位適性もあるキヤスターなのでしよう。こちらが会いたいと一声かければ向こうから姿を現してくれるのではないですか？」

セイバーは提案する。

「何せガンダルフだからな……あながちありそうなのがまた怖い」

コンピュータに打ち込まれていくデータ。

「ともあれ、今後の動きとして、我々はまずキヤスターのほうに探りを入れるということ
でいいかな？」

データを打ち終えてエハッドがモニターから顔を上げる。

「問題ないわ。キヤスターのマスターたちには私とカナウの二人で調査する」

「え？ 俺は？」

困惑した表情でエハッドは自らを指さし尋ねる。

「あなたはアサシンのほうをお願い。聖堂教会の監督役なら何か知ってるかもしれない

「い」

「監督役……アバーラインのことか」

盤上に神父の姿をしたデフォルメのキャラクターデータが生成される。

『アバーライン、聖堂教会の監督役。強そう』

「なるほど、確かにアサシンのマスターと接触している可能性はあるな」

「アサシンのマスター、ミランダ・ウォルフオークなのよね？」

三人は顔を見合わせる。

「アバーラインの話ではそうらしいが」

「ミランダ・ウォルフオーク……噂はいろいろ聞いているけど、所在は不明だ」

「彼女は特に用心深い性格だからなあ。工房にこもりっぱなしなんだろう」

「サーヴァント、マスター、そろって厄介な相手だよ」

「彼女はどちらの味方だと思う？」

「正直キャスター以上に目的が分からないよな」

『ミランダ・ウォルフオーク、アサシンのマスター、所在不明、要注意』

「ライダー討伐戦にサーヴァントすら姿を見せなかった。ちよつと非協力的すぎないか？」

「明らかに怪しいわよね。私たちの争いから漁夫の利を狙っているのかも」

「アサシンの気配遮断スキルは厄介だ。いつ寝首を書かれるのかもわからない、恐ろしい連中だよ」

狡猾で合理的な魔術師がアサシンのマスターになる、これほど恐ろしいことはない。

「監督役からなにか話が聞ければいいが……そつちは俺とバーサーカーが行くことによろう」

「うむ、こちらは任せよ」

「さて、それでは我々の今後についてもひと段落したことだし……」

ノートパソコンを閉じて、エハツドは大きく伸びをする。

時刻は真夜中を回ろうとしていた。

「俺たちは一度帰るとするよ。これからよろしくな、二人とも」

「……」

シャルロットとカナウは何も答えなかった。

「おいおい、何か言ってくれよ」

「あ、ああ。いや……」

「今は同盟だけど、私はやっぱりあなたたちとは最後には戦うことになるのだと思う。だから安易に仲良くするべきじゃないと思うの」

シャルロットはいつもの冷たい調子で答える。

「……そんなこと、わかってるさ」

「だが、それでもお互いのことを今は信頼していかなきゃいけない」

—そうでなければ。

「そうでなければ、きつとこの戦い、誰も何も得られずに終わる。いや、得られずに終わるのならまだいい」

「これまでの亜種聖杯戦争がどのような終わり方をしたのか俺もすべては知らないよ、だけど……」

「こうして魔術師たちの歴史を振り返れば自ずと推測できることだ。この歴史に幾度となく発生の報告されている聖杯戦争で、成功を具体的に収めたことがわかる魔術師はごくわずかしかないんだ」

—でも俺たちなら。

「でも俺たちならもしかして、まだ誰も見たことがない歴史を手に入れることだってできるんじゃないか？」

「その歴史が人間にとつてどんな意味をもたらすのかはまだわからない……でも」

「俺は一族の名に懸けて、どんな結末になろうともそれらすべてを刻んで生きていく」

「この瞬間に俺は立ち合いたい。そのために生きてきたといつてもいい」

「だから最後まで思つた通りの道を突き進むよ」

「お前たちはどうなんだ？」

エハッドは真剣な表情のまま、テーブルに集う英霊に問う。

「アーチャー」 ナポレオン、「バーサーカー」 ベートーヴェン、「セイバー」 アロンソ・キハーノ

「人類史の英雄たち、お前たちはこの世界にとつて何者で、何を遺す？」

「私は……」

アロンソ・キハーノはうつむいて何も答えられなかった。

「……」

ベートーヴェンは何も答えず目を閉じた。

「……フン」

ナポレオンは気に入らないといった様子でただエハッドをにらみ返した。

三人の態度がそれぞれの思惑からくる違いであることはこの場の誰もが理解した。

「私は偽物の英雄です。そのような私が、この世界に遺せるものなど大したものではありませんよ」

ふいにセイバーが口を開いた。

セイバーは自嘲気味に自らを卑下した。

「私が向かうところは、ただひとつ」

胸に手を当ててセイバーは目を閉じて、しかし力強く答えた。

「マスターであるカナウと、彼女の助けに応じ、彼らを最期まで守り抜くこと、私を騎士として呼んでくれるすべての人々のために戦い抜くこと、それだけです」

「いかなれば私が遺すものは人々の……個々の思い……それだけだ」

—私という安い存在で、彼らの平和が得られるというのなら安いものです。

—もとより私などその程度の価値しかないサーヴァントなのだから。

「セイバー」

カナウはセイバーを切なそうに見るだけだった。

「セイバーには悪いが、俺にはある。聖杯にかける望みつてやつがな」

次に答えたのはナポレオン。

「フランス皇帝となるといふ俺の選択は間違っていない。すべての人間に、それを証明する」

「それが侵略者たるこの俺の野望である」

「再びヨーロッパを手にする。俺が人々に与えるのは秩序だ」

自ら指差し、力強くナポレオンは答えた。

「過去の英雄だろうと、歴史の遺物だろうが関係ない。力のあるやつだけが人を導く！」
”力”だ。力は秩序を生み、秩序は平和をもたらす」

「俺は再びこの世に肉体を手に入れ、ヨーロッパ……いや、この世界すべての征服者となる」

「ほ、本気かナポレオン？」

苦笑い気味にエハッドが茶化そうとして、シャルロットと目が合う。

彼女の目は決して笑っていないかった。

「マジ？」

「大マジよ、このフランス皇帝」

「ハツハツハ、この俺がイギリスに召喚されたのもある意味じゃ運命なのかもな」

「すべての歴史を塗り替える偉業だ。ぬかりなくやらせてもらうからな」

「バカバカしい理想だ。ラ・ベルリアリانسを忘れたのか、俗物め」

腕を組みながら聞いていられないといった様子で、ベートーヴェンは口をはさむ。

「死者の力が未来に影響を及ぼすなど言語道断」

「この世界はこの時代を生きる者たちだけのものだ」

「なら、お前は英霊として、この世界に何を遺す？」

”種”だ」

「種？」

——意外な答えだ。全員がベートーヴェンを見た。

「それらはただ存在するだけの木だ。力はない。だが……」

「木々は木陰をつくり、果実を実らせ、災害を防ぎ、人々を守る屋根や壁となる」

「私は死んでも、私というあり方そのものが人々のよりどころとなる」

「力で支配する必要などない。人間は自らで歩む生き物なのだから」

「私はこの世界に種を残す。それをどうするかは、お前たち若い者の選択次第なのだ」

「さすがは……あの”合唱”交響曲を作曲したベートーヴェン」

「なんとというか、一番説得力のある事言ったわね。本当にバーサーカー？」

シャルロットとカナウは最も納得したという様子でベートーヴェンを尊敬のまなざ

しで見た。

「おい、マスター。お前は俺とベートーヴェン、どっちの味方なんだ？」

「わかってるわよ。私たちの野望だつて崇高なものだわ」

「力でねじ伏せるなど、もつとも野蛮な行為です。騎士としてそれはたださせてもらいません」

「ふん、できるものならやってみろ、偽物の英雄ドン・キホーテ」

机を挟んでセイバーとアーチャーがにらみ合っていると、突然ダイニングのドアが開いた。

「……」

「君は……」

やせ細った紫色の髪の少女がドアを開けてダイニングに入ってくる。

「彼女が……アトラス院のホームクルス？」

エハッドがカナウに耳打ちして尋ねる。

「ああ、そうだ」

「……なんていうか、人間の姿をしているけど人間離れた雰囲気もあるな」

「—いつもは人が来るとおとなしく隠れているのに、珍しいな。」

カナウは疑問に思いながらも、ホムンクルスの少女に近寄る。

「どうしたの？」

「英霊たち……人類の光、人類の遺産……空に輝く星々」

「あなたたちは何者なの……？」

「この子は何を言おうとしている？」

カナウがふとホムンクルスの目を見た。

目の奥で混沌とした色彩の、炎のような揺らめきが沸き上がるのを見た。

体が輝き始め、そこだけ重力がなくなつたかのように空気が彼女の周りにまとわれ浮かび上がる。

「なんだ、何が起きている？」

「わからない……ホムンクルスが……」

ふとカナウは彼女の体が最初に見た時よりも成長していることに気づいた。

「体が大きくなっている……これもホムンクルスの力なのか？」

「いや、いくらホムンクルスでもこんな急成長することってあるか？」

3人がかたずをのんで見守っていると、成長はある時突然止まった。

「……私は叶える。人類のすべての願いを」

「私は祝福する。人類のすべての在り方を」

少女はつぶやいた。そして光がおさまったあと、そのまま床に倒れ伏す。

「それはいったいどういう……」

エハッドが言葉の意味を咀嚼する。

「待って！」

シャルロットが慌てて倒れた彼女に立ち寄る。

手を当てて、ホムンクルスの少女の額に手を当てる。

額に当てられた手はひどく冷たい。

息遣いが荒く、苦しむようにせき込んだ。

体中に張り巡らされたホムンクルスの魔術回路は弱弱しく光っている。

「エネルギーが付きかけている……このままじゃ彼女、活動停止する」

II — ホムンクルス

ロンドン カナウの家

「活動停止って……死ぬってことか!？」

「でも……アンドロイドじゃないんだし、そんなバッテリー切れみたいことが起こるものなのか?」

「魔術回路の流れが著しく低下してるわ。このホムンクルス、おそらく成熟する前に調整層から叩き出されたせいで、出力が低すぎて自力で生命活動を行うことが困難なんだわ。この程度の強度でしかないのも無理ないわね……」

「ハア……ハア……!」

ダイニングで突如倒れたホムンクルスの少女。

異変に気付いたシャルロットはすぐに彼女の手を取ると、体に浮かび上がったその魔術回路をじつと見つめて分析を始める。

「—同調、開始」

シャルロットが自分の左腕を右手でつかみ、何かをつぶやくと魔術回路を通して指先から光が伸びていく。

物体の構造を把握するための簡易な魔術である。

「……」

彼女が目を閉じると、脳内にホムンクルスの構造が浮かび上がる。

魔術回路の一本一本のパスをたどる。

しばらくして光は収まり、シャルロットはため息をついた。

「ダメだわ。構成材質はおろか、基本骨子も何もかも理解できない」

がつくりとした様子で、額に汗を浮かべてつぶやいた。

—確かに人形遣いやホムンクルスは専門外だけど。

—こんなに何もわからないなんてことある!?

「アトラス院のホムンクルスだ。アインツベルンのそれとは違うってわけか……どうする?」

「エネルギーって要は魔力ってことか? なら俺の魔術回路から……」

エハッドが提案する。

「それはダメ」

「どうして!」

「構造が分からなさすぎる。自動車にもレギュラーとかハイオクとかあるでしょう? A型の血液型にB型の血液型が入ったらどうなると思ってるのよ」

シャルロットがきつぱりというのと、エハッドもより慌てた様子で、シャルロットとバーサーカーとを交互に見詰めた。

「シャルロット、あなたのウィッチクラフトで、実際の人間と同じように治療を試みるのは……」

セイバーが思い出したかのように提案する。

「……やってみる。カナウ、エハッド、彼女をベッドまで運んで」

シャルロットは声を振りしぼって二人に指示を出したが、声の調子からしてその望みは明らかに薄いようであった。

「ああ、分かった！」

「よし、運ぶぞー！」

時計は12時を超えたところだ。

ベッドに寝かせたあとも、少女の容体はよくならなかつた。

体を走る魔術回路は弱弱しく明滅を繰り返し、高熱を出した子どものように息を荒くして苦しそうにしていた。

「一体どうしたら……」

ベッドのすぐわきにカナウが座り、不安そうに少女を見つめている。

「せつかく生き残れるかもしれない希望ができてきたのに……」

少女の手を握り締めて、カナウはただただ祈り続ける。

シャルロットは自身の工房から持ってきたウィッチクラフトの材料を床に広げて、すでに調合を始めている。

ある程度の有機的な治療法は効果もあることがわかり、シャルロットはその方向からホムンクルスの延命措置を施す。

しかしながら根本的な問題の解決にはなっていないようだ。

その脇でエハッドとセイバーが様子を見ていた。

「姫……」

「セイバー、あの子のこと、姫と呼んでるのか?」

ふいにセイバーがつぶやいたので、エハッドが尋ねる。

「ドウルシネア……私の敬愛すべき姫の名前です」

「そうか、ドン・キホーテの旅の目的。ドウルシネアの高貴を世に伝える遍歴の旅、だったな……」

「本当に、私は無力ですね。こんな時に何をすることもできないなんて」

「そんなに自分を卑下するな、セイバー。ライダーに最後のとどめを刺したのは君じゃないか」

「……」

「イザイを探しましょう」

セイバーが提案する。

「イザイを……?」

「彼女を創ったのはイザイ・エルトナム・アトラシアでしょう? 彼女なら姫を治すことができるに違いありません」

「だが、それはつまり……」

「それはつまり、アトラス院の錬金術師にこのホームクルスの少女を引き渡すということだぞ。」

「ええ、でもこのままじゃ確実に活動停止するわよ」

シャルロットもセイバーに同意する。

冷静な目から冷たく言い放つ。

「……どうするカナウ?」

「……」

「命がかかっている、やるしかないだろ」

カナウはしぶしぶ了承した。

「けど、イザイに会うにはどうしたらいい?」

「私がロード・エルメロイに頼んで時計塔に呼び出す」

シャルロットが答える。

「と、時計塔に!?!」

エハッドは驚いて上ずった声で反論する。

「それはマズいだろう! 俺たちが犯人と一緒にいると、時計塔の連中に知られたら

……」

「ふふふ……本当に、おかしいわよね。私が何でこんなこと……」

自嘲気味にシャルロットが笑う。目だけが据わっていた。

「でも、一周回って安全だと思おうわ。アトラス院と時計塔の監視の下で、安全に秩序だつてイザイと交渉ができるかもしれない」

「交渉だって?」

「交渉するの。時計塔でアトラス院と。ホムンクルスの少女の再調整を、時計塔で、ロー

ドたちの前でさせれば、ほかの魔術師たちは手を出せない」

「お前は時々……とんでもないことを言い出すな……」

シャルロットの提案に対して、エハッドもまたただ苦笑いする。

「……シャルロット、僕にイザイと交渉させてくれないか？」

カナウが力強く言う。

「カナウ、本気なの？」

シャルロットはじつとカナウを見て確認する。

「魔術師相手にあなたに何ができるっていうの？」

「僕は時計塔の魔術師でも何でもない。だからこそ、魔術師世界のしきたりなんて気にせず、なんとも連中に言っただけでやるさ」

「あなたね……」

「錬金術師、魔術師たちに言わせてくれ。僕はもう何も怖くない。お前たちなんか怖くない。あいつらが僕を全力で殺そうというのなら、僕は全力で生きてやる」

「生きて生きて、全力で生き延びてやる！」

「*ハッ*ぶしを強く握りしめて、*叫ぶ*。」

「……いいわ、その提案に乗ってあげる」

「カナウ・アルバーン、ようやく聖杯戦争のマスターらしい顔つきになったわね。」

魔術師相手に何ができる。そう言いながらもこの男とセイバーのサーヴァントは修羅場を潜り抜けてきた。

幸運程度では説明のつかないこの青年から湧き上がる覚悟や意志の硬さがそこにはあった。

「時計塔の魔術師として、民間人であるあなたの監視を務めるものとして、できる限りのバックアップはするわ」

「ははは……面白くなってきたな。そうでなくちゃな」

手をたたいて、エハツドは震えた声で叫ぶ。

「魔術師世界がひっくり返る大ニュースだ！ ただの人間が、時計塔で、アトラス院の錬金術師相手に、交渉するだなんて！」

「やるぞベートーヴェン、時計塔に乗り込むんだ」

「運命が変わる時だ！」

ふいに部屋のドアが開いて、アーチャーとバーサーカーが現れる。

「話は聞かせてもらったぜ、お前たち！」

「見事な心意気だ、セイバーのマスター！ 我々も全力でサポートする」

「やりましょう、カナウ。もしもの時は必ずやあなた方をお守りいたします」
「みんな……ありがとう」

カナウは律儀にサーヴァントたちに頭を下げる。

(その低姿勢な感じは、なんとかしてもらいたいわね)

—魔術協会、時計塔の魔術師たちに一步も譲つてはダメ。

—さもなければあつという間にあの”魔物たち”に体を食いちぎられてしまうもの。

団結するサーヴァントたちを後ろから見ながら、シャルロットはひとり気を一層引き締めた。

シャルロットに促されて、カナウとセイバーは一度部屋を出て、自分の部屋に戻ることにした。

聖杯戦争が始まってから、彼を取り巻く景色は何もかもが違って見えた。

死の危険と隣り合わせの世界に置かれ、大学のレポート用紙や、趣味に読んでいた本の数々はそのまま、床に散乱していた。

ベッドに倒れこむと急に疲れが表出し始める。

ふとナイトテーブルわきに置かれた写真立てに目をやる。

カナウの家族の写真だ。

「……」

カナウ・アルバーンは四人家族の次男として生まれた。

彼の姉、両親は、カナウが小さいときに失踪したと彼は聞かされていた。

この家は彼の母の友人が、カナウのために援助してくれたものだ。

この恩に報いるために、カナウは特待生の資格を得るために勉学に励んでいた。

「レポート……提出しなきゃ」

「……あいつら、心配してるかな」

「セシリア……姉さ……」

「……おやすみなさい、カナウ」

セイバーはベッドで横たわるカナウの毛布を整える。

月明かりが寝室に差し込み、カナウの顔を照らした。

セイバーは立ち上がると部屋のカーテンを閉める。

「戦士の休息です。このあとはもっと忙しくなりますから……せめて今夜だけは」

そうしてじつとマスターの傍でその眠りを見守っていた。

「それにしても意外だったわ」

「何がだ？」

「アーチャーまで、時計塔での交渉に乗り気であるなんて」

「そのことか」

最大限のウィッチクラフトは、ホムンクルスを一種の冬眠状態にした。

消費エネルギーを最小限にとどめることに成功した彼女は、そのままの状態でホムンクルスを眠りにつかせた。

ホムンクルスの容体が小康状態に入ったので、シャルロットとアーチャーは夜の街で外の空気にあたっていた。

シャルロットが買い与えた現代風の服装に身を包んだアーチャー。

一番大きなサイズのシャツがはち切れそうな胸板の主張が暑苦しい。

実のところ、すでになんだかボタンをはじき飛ばし、そのたびにシャルロットが縫い直している。

「今夜は泊りね」

コンビニエンスストアで日用品を購入して回りながら、シャルロットとアーチャーは

今後の動向を話していた。

話はやがて、アーチャーの話題となる。

「あなたわかつてる？ イギリス魔術師世界の中枢に乗り込もうっていうのよ、フラン
ス皇帝が」

「ああ、ワクワクするよな。連中の驚く顔が今から楽しみだ」

邪悪な笑みを浮かべて、アーチャーが答える。

「まさか、それだけの理由で？」

「……なあシャルロット、知ってるか？」

「何よ？！」

アーチャーが不意に優しい口調になり、シャルロットもまたすこし身構えるように尋ねる。

「俺が負けたのは、実は魔術協会の仕業なんだ」

「な、なんですって！」

シャルロットが目を見開く。

「俺はあの時ワーターローで敵の連合軍の中に魔術師たちが控えているのをこの目で見た」

「あの戦いで俺の覇道が終わるといふことは、奴らの言うところの歴史で決まっていたことらしい」

「俺が天候を読み間違えるはずがない。俺は戦の天才だからな」

「奴らは天候でラ・グランダルメの行軍を惑わし、結果として自然な形で戦いに敗れたと思わされていたんだ」

「それがワートルローの真実だったってこと……?」

震えた声でシャルロットがつぶやく。

「そもそも俺がヨーロッパを支配しようとしたのも、魔術師による支配に対抗するためだしな」

「そんなの初めて聞いたけど!」

「そりや言っていないし、歴史にも残っていないからな。俺たちの時代の魔術師はもつと容赦なかったぞ」

「確かに、今の時計塔は昔より平和だって聞いたことがあるけど……」

「歴史つてのは所詮勝者のものだ。今更俺が暴れたところでもうどうにもならんだろう。そこは理解しているつもりだ。だが……」

アーチャーが立ち止まる。振り上げた腕を見つめて続ける。

「お返しをしてやらないと俺の気が済まないんだ。ほら、イギリスは紳士の国なんだから」

う？」

そしてまたニイと笑った。

「心配するな、今となつてはそれほど連中を恨んでいるわけじゃあない。それでも連中がお前にちよつかいをかけてくるようなら俺も全力で応戦するが……」

「……いいわよ。別にぶつ壊しても」

「本気か？」

「ええ、本気」

—だって。

シャルロットは振り返り、アーチャーのほうを見て笑った。

「魔術師世界が崩壊しても、あなたが私たちを導いてくれるんでしよう、皇帝陛下？」

「……俺のことを否定したり、今度は皇帝陛下と呼んだり、都合のいい女だ」

—シャルロット・ロジエ。

—俺がヨーロッパの皇帝に就いた時には、お前を俺の……

ふいに聞きなれない電子音が鳴り響く。

その音源は彼女のポケケからだった。

取り出したのはスマートフォンだ。

エハッドが自作したもので、マスター同士で連絡が取れるものだ。

「エハッド？ さっそく連絡が来るなんて……」

スマートフォンを取り出して、シャルロットが画面を確認する。

呼び出したのはエハッド・ティールマンだった。

「もしもし？」

「エハッドだ、早速の連絡ですまない。今どこにいる？ カナウは一緒か？」

「外にいるけど……」

「そうか、わかった」

スピーカーの向こうでエハッドが息を吸い込むのが聞こえた。

震えた声でエハッドは説明する。

「いいか、落ち着いて聞いてくれよ。アバーラインが指名手配されてる。ロンドン警視庁で警官数十名を殺害、猟奇殺人事件の容疑者として逮捕状が出たらしい」

ロンドン 採掘都市マギスフェア

暗闇の広大な空間に調整槽の中からひとり笑う女がいた。

金色の液体に満たされた逆さ吊りの量子の魔術師の笑い声はそばに付属したコンピュータの合成音声によって代弁されていた。

「うまくいった……聖堂教会の犬を手なずけたわ。素晴らしいわアサシン！」

「暗殺教団にこのような能を持った存在がいるとは。正直期待してなかったのだけど……」

ミランダの精神がコンピュータに接続されると、ひとりの連絡先を指定した。

「イザイ・エルトナム、聞いているか。計画の第一段階を遂行した」

『こちらは今、ニユースで見たよ。しかしあのアバーラインという男、なかなかの野心家のようだ』

デイスプレイに浮かび上がるイザイの顔。

『それにしてもまさか令呪の腕ごとくれてやるとは大胆な』

「アサシンはすっかり私の信頼を得たと浮かれていますことでしょうね。利用されているとも知らずに」

『私がアサシンなら、性格がねじ曲がりそうだな。かわいそうに』

彼女の体の、唇がわずかに歪み、気泡がコポコポと浮き上がる。

イザイは素晴らしいながらも、表情がたいして憐れんでいないようだった。

「計画を第二段階へ移行する。イザイ、セイバーとホムンクルスの様子はどうなってい

る」

『もうじきセシリアも活動限界時間に到達するはずだ。そうなれば向こうからやってきてくれるはずさ』

「セシリア？」

「ああ、言つてなかったかな。あの子の名前さ」

不審に思ったミランダが尋ねる。

照れたような表情でイザイは返した。

「ホムンクルスに名前だと？」

ミランダは鼻で笑う。

『あの子は私の大事な娘だからね』

イザイは大まじめに答える。

『君は出産をしたことがあるか、ミランダ？ あれはとても神秘的で興味深い現象だよ』

「出産など、魔術師が跡取りを作るための儀式のことだろう。あんな非効率的な行為に興味はない」

興味はない」

「一族にとつて何よりも大事なものは血ではなく、魔術回路だ。魔術回路さえ維持できれば跡取りだろうが、養子だろうが関係ない」

きつぱりと言い切る。

『さすがは量子の魔術師だ……まあいい、とにかく』

『私の計算ではそのセシリアがまもなく力尽きる。あの子はきつと助けたい一心で私を探すことだろう』

『そうすれば、再びアーチャーとバーサーカーのマスターも現れるだろう』

『どちらかのサーヴァントを奪うことに成功すれば、盤石だろう』

—サーヴァントの強奪。やはり型破りな思考だ、ミランダ・ウオルフォーク。

—マスターを殺すのではなく、サーヴァントを奪うこのやり方、過去に例を見ない作戦になる。

「大仕事だ。アサシンにはこのまま盛大に暴れてもらおうとしよう。ただし私の引いた糸の下で」

スピーカーから相も変わらず合成音声か鳴り響く。

ディスプレイが閉じ、再び暗闇にひとり浮かぶミランダ・ウオルフォーク。

彼女の精神はコンピュータでネットワークにつながっている。

ロンドンじゅうの監視カメラを彼女は見るができる。

ロンドンの地下世界に広がる大迷宮。

かつて星の内海を目指した巨大竜の亡骸、その地下都市の深奥から、彼女はロンドンの魔術世界をのぞいている。

III
— フェイカー

魔術協会、時計塔。

アトラス院の錬金術師がここを訪れてからというもの、時計塔はいまだこの騒動に落ち着きを取り戻すことができずにいる。

魔術師たちは逸る気持ちを抑えきれず、この聖杯戦争に一枚かみたいという意気込みを持った野心家であふれていた。

魔術師における神聖な儀式、聖杯戦争あるいは聖杯大戦。

万能の願望器たる聖杯は誰もが求める栄光である。

もはやこの状況を「ホムンクルスの奪還作戦」ととらえている魔術師は少数派であり、大半がどのようにアトラス院の錬金術師を出し抜くかという段階に差し掛かっていた。

しかしこの状況は奇しくも、シャルロット・ロジエにとっては好都合であった。

この日の朝、シャルロット・ロジエは、背後にナポレオンを（あえて実体化させた状態で）従えて、ロード・エルメロイ二世の部屋を目指していた。

廊下を歩いているだけで彼女は魔術師たちの注目の的であった。

「それじゃあ、あの背後にいるのがサーヴァント？」

「大男だな……クラスはアーチャーらしいぞ」

「強そう……」

「聖杯を手に入れるのはやはりシャルロット・ロジエか？」

「いやいや、あのランサーのマスターも……」

「すっかり人気者だな、マスター。まあこの俺をサーヴァントとして引き当てたんだから当然だよな」

「その自信は本当にどこから来るの」

「いいじゃないの……それにしてもみんな若いな。これが現代の魔術師か」

アーチャーはアーチャーで、時計塔を歩く魔術師たちを品定めするようにキョロキョロとしてる。

シャルロットはひそひそ話など気にも留めないといった様子で時計塔の廊下を進む。やがて懐かしい扉の前にたどり着く。

一息深呼吸すると、シャルロットはドアをたたく。

ドアを開けたのはフードを被った灰色の髪の気弱そうな少女だった。

「こんにちは……あなたは」

「こんにちは、私は師匠の……」

「来たか、シャルロット・ロジエ。はいりなさい」

少女の後ろから聞きなれた声がある。ロード・エルメロイ二世が顔をのぞかせる。

「グレイ、フラットと共に少し出ていなさい。彼女と話がある、くれぐれもフラットにこの会話を盗聴させるなよ」

「かしこまりました。さあ行きますよ、フラットさん」

「ええ、そんなあゝ!! あ、もしかしてあなたはサーヴァントさん!? いいなあシャルロット! ねえ、僕にも紹介してよ! とりあえず真名とか! 有名人なんですか?」

涙目になりながら引きずられて外へ出ていくフラットを見送り、シャルロットとアーチャーは代わるように部屋に入る。

「よう、お前がロード・エルメロイか」

「お初にお目にかかる、皇帝ナポレオン。私のことは二世と呼んでもらえないか」

「二世? よくわからんが、わかった!」

小さなテーブルをはさんで、シャルロットとエルメロイ二世が座り込む。

「それで、話というのは何かね?」

「……」

— 覚悟はしていたけど、やっぱり緊張するわね。

シャルロットが黙っていると、エルメロイの方から口を開いた。

「塔内の魔術師たちのうわさで聞いたことだが、すでにホムンクルスの居場所を突き止めているようだ。取り戻すのも時間の問題というわけだ」

「さすがは南フランスの天才、シャルロット・ロジェだな。ミスター・ベルフェヴァンもさぞかし誇りに思うことだろう」

「君のような学生がうちの生徒であったのなら、思わずにはいられない」

「ああ、こいつは最高のマスターだぜ、エルメロイ二世さんよ」

「ライダーの討伐に成功したのも、俺たちの尽力によるところが大きいってものだ」

「魔術協会からは、君と、ランサーのマスターであるリヤオ・ファン両名が最もこの討伐作戦に貢献したとみなし、一族に褒賞を与えると申し出ている。後で手紙をご実家に送るつもりだが……」

「どうも浮かない顔をしているな……聞かせてはくれないか、その理由を」

「ロード・エルメロイ二世、先生にお願いがあります」

両手を膝の上で握りしめて、意を決したようにシャルロットが説明する。

「……そうか、ホムンクルスが」

「はい、このままでは彼女は活動停止するでしょう。しかし製造者であるイザイ・エルナムならどうにかできるはずですよ」

「私ではだめでした……エネルギーの消費を最小限にとどめるくらいしか」

「君の専門ではないからな。無理もないだろう」

エルメロイはすべてを聞くと、葉巻を置いて一息つく。

エルメロイは目を細めて、低い声で続ける。

「君も感じているだろう、この時計塔のいやな熱気を」

「魔術師たちは浮足立っている。少しでも隙を見せれば食らいつくという、ハイエナの群れに満ちている」

「そんなところに、ホムンクルスを連れてくるというんだ」

「どこかで何かがはじければ、この時計塔をも巻き込む戦争になる。」

エルメロイの心中は穏やかではない。

「私はこの時計塔のロードとして、この場所と生徒たちを守る義務がある」

「イザイ・エルナムの特殊性については私も先のトゥリファスでの調査で把握している。私もロードとしてこの事態に対して責任を果たすつもりでいる」

「そ、それじゃあ……」

—しかしだ。

エルメロイはこうも答えた。

「この件はもはや私一人の手におえる状況ではなくなっている。これは下手をすれば魔術協会全体に影響を及ぼす」

「私のような若輩のロードでは、できることなどせいぜい限られている」

「イザイ・エルトナム女史には私から連絡を入れることにするが、あまり期待はしないでほしい」

しばらくの沈黙。シャルロット・ロジエは言い返せないでいた。

「失礼します、ミスター」

突然部屋のドアが開く。

「あ、あなたは……」

ドアが開いて入ってきた人物を見て、エルメロイ二世は驚愕する。

つられてシャルロットが振り返ってドアのほうを見ると、紫色の制服を着た男性が立っていた。

「あなたは確か……」

「アンドレです。私もアトラス院の錬金術師」

「ああ、エルトナム女史の隣にいた」

「覚えていてくださったとは光栄ですロード」

アンドレと名乗った男はそのまま二人のところへ近づいて語り始める。

「突然の来訪で失礼いたしました。主任……イザイ・エルトナム・アトラシアから、シャルロット・ロジエに伝言があつて私が直接赴くことになつたのです。ほら、時計塔は外部からの使い魔禁止だし」

「私に？」

「ちよつと待つて、私がここへ来るのも筒抜けつてこと？ 尾行は……されてはいないはず。どうして」

アンドレは不敵に笑うと、ポケットから手紙を取り出し、読み上げる。

「読みます……」アーチャーのマスター、セイバーのマスターもそこにいれば、両名に告げる」

「ホムンクルスの受け渡しに合意する。つきましては時計塔のロード・エルメロイ二世立会いの下、互いに安全を保障したうえで交渉に応じる」とのことです」

（時計塔との交渉は昨日決めた話よ！ 監視されてる……!?!）

昨晩の行為を思い返す。アーチャーとの買い物中、怪しい影は見当たらなかつた。

——落ち着いて、よく思い出して、シャルロット・ロジエ。

映像を再生するかのようになり、精神を集中させて、彼女は昨日のアーチャーとの会話を思い出す。

記憶の映像、その片隅にある物体に意識が向かう。

「……交通監視カメラ！」

「ロジエ？」

（どうして今まで気づかなかったのかしら。そうだ、ロンドンには交通監視カメラが数百万台もある）

（イザイもミランダも、監視カメラのシステムに干渉して私たちを監視できたんだわー！）

「やられた……！」

「……つきましては、ロードの立会いの下、時計塔の講堂をひとつ借りて交渉がしたい」と

「交渉は極秘に行われることを、主任は望んでいます」

「今主任が時計塔を訪れるのは極めて危険でしょうから」

「確かに、最新の注意を払う必要があるでしょう。それにしてもまさか本当に時計塔で行うつもりとは……！」

—交渉はできる、それはいい……けど。

—何なの、この不気味な感じ。嫌な予感がする。

シャルロットの魔術回路が危険信号を送っている。

それと同調するように、アーチャーの体もまた緊張しているかのようだった。

『わかつているな、マスター。こいつは……』

『ええ、アーチャー。100パーセント畏』

念話で二人の意見は合致する。

シャルロットはロード・エルメロイの顔を見る。

エルメロイもまた同じ空気を察知したのかシャルロットを見る。

しばらくの沈黙のあと、エルメロイが肯く。

「イザイエルトナム女史に伝えてくれ、明後日、講堂をひとつ抑えておく。極力被害の及

ばないよう、片隅の小さな講堂だが用意できる」

「快いお返事ありがとうございます。帰って主任に伝えます」

「ああ、ご苦労様」

アンドレが部屋を出た後、エルメロイ二世は頭を抱えてつぶやく。

「まったく、我々の拠点で好き勝手を言うな、錬金術師め」

「先生、どうか無理はなさらないように」

「無理できないわけがない！」

机をドンとたたいて、エルメロイは激昂する。

「やはり聖杯戦争は危険で最低な儀式だ。本当にロクなことがない！」

「こんなことのために私は若い魔術師たちを導いているのではないのに！ クソ

！ クソ！」

両手で頭を覆うエルメロイ。

(ロードがこんなに取り乱しているの初めて見た)

「シャルロット・ロジェ……これでもまだ交渉するつもりか？」

「はい。交渉するのはセイバーのマスターですが」

「セイバーのマスター、あの非魔術師の子が？」

「はい」

「……交渉が成功する確率は、1パーセントというところだろう」

「それでもやります」

「何故？」

うつむいたままエルメロイはシャルロットを問いただす。

「未来のために、です」

「未来だと？」

「エハッド・ティールマンは言いました。これまでの亜種聖杯戦争、そして聖杯大戦はすべてが失敗に終わったと」

「もとよりこの戦いに未来などなかったのかもしれませんが。でも今……」

震える声で、シャルロットは続ける。

「カナウ・アルバーンの存在は、これまでの亜種聖杯戦争にはなかったイレギュラーです」

「私は見たい、魔術師の歴史が変わるその瞬間を」

「ただの人間が化けるその瞬間を」

「人間が魔術に頼らなくても自分の願望をかなえるその世界を実現できるとしたら」

「その世界はきつと、今の魔術協会が敷く秩序よりもより美しいものになる気がする。て。」

「ああ、やり方こそ違うけれど、かつてそのような大志を抱いて時計塔に宣戦布告した一族がいたっけ。」

「私たち魔術師が生き残るため、私たちはもう一度この万能の願望器と向き合わなければならぬんです」

「そうでなければ、この戦いで死んでいった多くの魔術師たちの無念を晴らすことはできません」

「資料で読みました、あなたが聖杯戦争に参加した時のことも」

「あなただって、その後悔をずっと抱えて生きてきたのでしょうか？」

エルメロイは目の前の少女の熱い答えに胸を打たれた。

よみがえる聖杯戦争の記憶。

戦友たち、ともに戦ったサーヴァント。そして敵。

自らが原因となって、命を落とした自分の師。

「……シャルロット」

「すみません、先生。失礼なことを……」

「いや、君の言う通りだ……懐かしい、いろいろと思い出したよ」

突然エルメロイは両手で顔をパチンとたたく。

その様子にシャルロットが目丸くしていると、エルメロイは力強く答える。

「交渉に立ち会おう。ロードとしての使命を果たす。何が起こっても私がすべての責任を取る」

「シャルロット・ロジエ、アーチャー。君たちは君たちの思うままに戦うがいい！」

「へっ、いい先生だなアンタ！」

アーチャーが得意げに笑う。

シャルロットは右手を握りしめて決意を固める。

「さあ、やるわよ！」

アンドレが扉を開けて、部屋から出てくる。

そこから数メートル離れたところで壁にもたれかかる、一人の少年。

「ふうん、時計塔でホムンクルスの引き渡しか……」

ランサーのマスター、リャオ・ファンがアンドレの後姿を見ながら不敵に笑う。

「これはいいよ、チャンスかもしれないな」

「なあランサー、この機会に裏切り者を一気に掃除してやろう、僕たちでな」
「……ああ、そうだな」

リヤオ・ファンの後ろでランサーが体を実体化させる。

「シャルロット・ロジエ、カナウ・アルバーン、時計塔に反旗を翻す危険分子どもが……」
「一族にケンカを売ったことを後悔させてやる」

「お前たちで一族の名は終わりだ。すべてぶっ壊して、ぶっ殺して、首をテムズの泥川で洗ってやる……!!」

憎悪に満ちた表情で次第に声を震わせながら、リヤオ・ファンはひとり強くこぶしを握り締めた。

『……というわけよ。罠の可能性は十分にあるから、用心してちょうだい』
「わかつてる。ありがとう、シャルロット、この交渉必ず成功させて見せる」
『魔術師のことを甘く見てはだめよ。魔術師たちの妨害が入る前提で動くこと。いざとなったら令呪を使うのも一つの手よ』

「ああ、気を付ける」

『それから昨日も言ったけど、外に出ちゃだめよ。アバーラインの件もあるし』
「わかってるって」

『それじゃ、あとでホムンクルスの様子を見に来るから、あとでね』

「うん、またあとで」

カナウはスマートフォンの通話を切る。

そのままポケットに入れると、自分の部屋を出てセイバーと合流する。

「セイバー、明後日時計塔へ向かう」

「いよいよですね、カナウ」

ホムンクルスが眠っているベッドの脇から立ち上がると、セイバーが振り返る。

「いざとなれば私の命に代えてもあなたの方のことはお守りします。それが私に与えられた使命」

「セイバー……相変わらずだね、その自己犠牲の精神」

カナウは苦笑いしながらも、続ける。

「自分が喜劇の英雄だなんて、そんなこと気にしなくなっちゃっていいのに」

「あなたのおかげで僕はこうして生きてる。騎士としての務めなんかもう立派に十分すぎるくらいに果たしている」

「自分をそこまで卑下しなくてもいいじゃないか」

「……いえ、私はそれでも、どこまでいっても『偽物』の英霊なのです」
「この体でさえ幻想が生み出したもの。この剣も力も」

セイバーは苦しそうに答える。

「私は聖杯戦争に勝てない。勝てないとわかっていながら、それでも前を向いて進まなければならぬ」

「ふいに正気に戻ることがあるんです。そしてそのたびに生きているのがこんなに苦しいことであるものかと笑いたくなる……」

劣等感にあふれ出すかすれた叫び。

セイバーは自分の手で顔を覆い隠した。

アロンソ・キハーノは狂気で自分を偽る。

正気に戻れば、彼女は気狂いの老人である。

いつ正体が現れるかともわからない恐怖を抱えながら、力を一つ一つ、戦いの中で使いつぶして生きている。

この前は北欧神話の魔剣クラウ・ソラス、そしてこの前は円卓の魔剣アロンダイト。

—いつか私を取り巻くすべての騎士道を終わらせたとき、何が残るか。

—あるいは何も残ることはなく消えていくのだろうか？

「アロンソ・キハーノ、君が正気に返り故郷の村へ帰ったそのあとのことは知っているか？」

カナウはセイバーの脇に座り込む。

「私は、病気にかかり、失意の中死んだのでしょうか。一人で寂しく、むなししい、ありふれた人間の最後ですよ」

「ドン・キホーテ」の中で、君の死を知った村の人は口々にこうも言ったんだ」

まっすぐセイバーの目を見て、カナウは口を開く。

「ドン・キホーテの冒険譚をもう聞くことができないことを知り、村の人間たちは悲しんだそうだ」

「その勇氣、騎士道が人々に夢を与えていたことを、後になって村の人たちは知ることになる」

— そうだ、ドン・キホーテは何も残せなかったわけではない。

「ドン・キホーテは、人々に夢を与える英雄なんだ。少なくとも僕はそう信じてる」

「だからセイバー。何も残せないなんて言うな」

「誰が何と言おうと、セイバー。あなたが僕のヒーローなんだ」

「きつとまだ、納得がいけないこともあるんだろうけど……あなたの生きざまが後世の

誰かに影響を与えているんだ」

「喜劇の英雄としてでなく、その生き方は間違いなく高潔なものなんだ」

「カナウ……!」

—私が人々に夢を与える？

—私がこの世界に何かを残す？

「それに」

カナウは意地悪っぽく笑うと、きつぱりと言いつつ切った。

「偽物が本物に敵わないなんて道理はない。自分が偽物だと思ふのなら、堂々と、その偽物の剣で本物の悉くを凌駕して、すべてを叩き落としてやれ」

砂漠の荒野に一人立ちつくす気狂いの老人。

手にしたおんぼろの馬上槍をふいに天に掲げる。

なんの力もないはずの、そのなまくらが、強く握りしめた掌の中で再び脈動し始めた。

明後日の朝、カナウの家の前に一台の車が止まった。

玄関に立つカナウ、シャルロットそこへ車を運転してきたのはエハッド・ティーレマ
ンだ。

「おはよう」

車の窓を開けて、エハッドが顔をのぞかせる。

「準備はいいかい二人とも？」

「問題ないわ」

「大丈夫だ」

「よし、それじゃホームンクルスを車に運ぼう」

車を降りて、エハッドは二人と合流する。

エハッドがカナウの家に入ると、すでにパーカーを着込んでフードで顔を隠したホーム
ンクルスの少女が玄関に座り込んでいた。

エネルギーを温存していたことで活動時間が延び、多少は動くことはできるようだ。

「……」

「心配するなお嬢ちゃん、ちよつと医者に診てもらうだけさ。よくなつたらすぐに帰れ

る」

エハッドは優しい言葉をかける。

「……」

ホムンクルスは何も答えず、シャルロットに連れられて車に乗り込んだ。

「緊張しているのか？ まあいいさ」

アーチャーが現れると、車の前に先行して立つ。

「アーチャー、バーサーカー、車の護衛お願いね」

シャルロットが声をかけると、ふたりは霊体化する。

アーチャーは車から離れ、高く飛び立つ。

バーサーカーのほうは車の上部でとどまる。

「配置についたな。ここまでする必要はあったのか？」

「相手は時計塔の魔術師と、錬金術師よ。むしろこれでも足りないくらい」

「使えるカードは全部切った。まったく昨日は大変だったのよ。いろんなところへ行つて私が頭を下げて、大金を使って工作したんだから」

—あなた達の方は？

睨むようにシャルロットが尋ねる。

「交通監視システムに細工を加えておいた。通信魔術はうちの十八番だからな。今日は

全てのカメラシステムがダウンしている。いくらカメラを盗み見ることができても、カメラそのものの不調を遠隔から魔術で修復させるのは不可能。俺たちのルートは目視以外にはつかめないはずだ。アサシンについても……ベートーヴェンの勘でなんとなる」

「勘、ですって?」

「いやすまん、言い方が悪かった。ええと……」音楽神の加護」というやつさ」
得意げにエハッドが説明する。

「ベートーヴェンには”死”という概念が見えるんだ、死とは運命であり、ベートーヴェンとは運命を乗り越えるもの、だからな」

「そ、それってもしかして直死の……」

「そんな大層なものじゃないよ。だから”勘”なのさ」

エハッドはバーサーカーのこの特異性については実はかなり早い段階から気が付いていたと自負している。

初めてライダーと相対した時のバーサーカーは器用にもライダーのふるう死神の権能をことごとくかわわして見せたのだ。

本人はそれを”運命”と表現しているが。

「だから、アサシンはなんとかなる。ほとんど情報がないのだけが痛手だが」

車のエンジンをかける。レンタカーのようだ。

シャルロットが納得いかないといった様子で助手席に座る。

「ベートーヴェンのくせに、とんでもなく強いじゃないそれ」

「俺のバーサーカーは最強なんだ。なんならナポレオンにだって俺たちの勝機は十分に
ある」

「それはどうかしらね」

「ふん、強がっちゃってまあ……」

「ふ、ふたりともケンカしないで」

にらみ合う二人をカナウが制止する。

「そういうカナウも、昨日はいろいろ準備してたんだろ？」

「まさか”あんな提案”をされるとはね、かなりビックリしたけど」

「だが、いい作戦だ。”キャスター”が裏切者でなければ、の話だけどね」

”キャスター”なら大丈夫だ。昨日会ってみて、そう感じたよ」

カナウは安心したかのように口を開く。

ホムンクルスの少女と共に後部座席に乗り込む。

「大した自信だ、その意気だ」

エハッドはスマホを取り出して、ルートを確認する。

「ルートの最終チェックだ、問題ないよなシャルロット」

「ええ、問題は時計塔についた後、講堂でロード・エルメロイと合流するまでの間」
シャルロットもまた、スマホを取り出して作戦の全貌を再確認する。

「時計塔の南側に駐車して、イザイの指定した講堂までは200メートル。そこまでアーチャーとバーサーカーを護衛につける」

「魔術師たち相手ならサーヴァントで楽勝……アサシンはバーサーカーが対処する……
あとは」

「ランサーね。彼らの乱入だけが不安」

ランサーのサーヴァント、ベイリン。

アーサー王につかえ、円卓結成前の騎士たちの中で、ラモラックと並ぶ豪傑。
加えて彼には、ロンギヌスの槍がある。

「どうせこちらの行動は筒抜けでしょう。リヤオ・ファンたちは必ず来るわ」

「もしそうなったら、セイバーとアーチャーが頼りだな。二人がかりでなら……」

「勝機はある……と思いたいわね」

しばらくして、車は時計塔の下までたどり着く。

いつも歩いているはずの通りなのに、シャルロットには空気が重く感じられた。

——いよいよね。

車から降りる。

目の前にある時計塔の門は、魔術師たち以外には見えないように魔術で、何の変哲もない石壁のテクスチャが張られている。

その200メートルの回廊の先、ロード・エルメロイ二世はすでに講堂で3名を待っていた。

ここから先は、魔術師たちの領域。

IV
—
時計塔動乱

ロンドン 時計塔

3人の魔術師と、サーヴァントたちが時計塔に現れる。

門をくぐって建物内の回廊に入ると、人影はなく不気味に静かであった。

「誰もいない……」

回廊の壁から先の様子をのぞき込むシャルロット。

普段ならこの時間は生徒たちはそれぞれの授業に出席していて、もとより回廊を歩いている生徒数は少ない。

そうであるにもかかわらず、この日回廊を歩いている魔術師は一人もいなかった。

覗き込んだその先、会合の場所に指定している講堂の入り口がある。

「このまま突っ切るか？」

「それがよさそう。授業が終われば魔術師たちに見つかる。今のうちね」

彼女が合図を送ると、まず霊体化したバーサーカーが飛び出し、先まで周囲の様子をうかがう。

「トラップの類は見られない。死の運命はここにはない」

「よし、先へ進もう」

バーサーカーが答えると、エハッドも前に出る。

回廊を進むエハッド、シャルロット、カナウ、少女のホムンクルス。

そしてその背後から殿にアーチャーが進む。

一行は特に誰にも出くわすまでもなく、静かに講堂の前までたどり着いた。

ドアを前にしてエハッドは緊張気味に尋ねる。

「さすがに静かすぎないか……生徒の気配がまったく感じられないが？」

「……バーサーカー、この先の気配はどう？」

「……部屋の空気が混んとしている。誰かが部屋に魔術をかけてジャミングしているようだ」

バーサーカーは冷静に答える。

「ロード・エルメロイがやったのか？」

「わからない……こういうのが得意そうな魔術師は一人知ってるけど」

—フラット・エスカルドス？

—まさか事の重大さも知らないで、首を突っ込んでいるとでもいうの、あのバカは。

「どちらにせよ、進まなくちゃことは進まないわ」

「開けるわよ」

そして講堂のドアは開かれた。

「随分と遅かったじゃないか」

講堂の中で三人を待ち受けていたのはロード・エルメロイと、イザイ・エルトナム。

そしてランサーのサーヴァントであった。

ランサーは兜をかぶり、手には剣を構えてイザイ・エルトナムの首に剣を突き付けていた。

ロード・エルメロイは意識がなく、うつ伏せで床に倒れ伏している。

「き、君たちか……」

苦しそうにイザイが口を開く。

「ランサー!?!」

「こいつ、なんてことを……!!」

「水臭いじゃねえか、お前ら。この俺を差し置いてみんなで密会とはな」

兜の中から、ランサーの強気な声が行動に響く。

剣を持つ手に力が入る。

張り詰めた空気の中、シャルロットが尋ねる。

「あなた、まさかロードを……」

「心配するな、気絶しているだけだ。ちよつと邪魔になりそうだったんでな」

「もつとも、お前たちの態度次第では、ここから生きて出られる人間の数は減るだろうな」

兜の奥から邪悪な笑みが垣間見えたようであった。

「ホムンクルスをこちらによこせ。お前がこの場でホムンクルスを修復しろ。この交渉は俺が仕切らせてもらう」

エハッドは行動の隅から隅まで目をやる。マスターであるリヤオ・ファンの姿は見えない。

「リヤオ・ファンのやつ。こんな大胆な手に出るとは……」

悔しそうにエハッドが悪態をつく。

「どうする、シャルロット……？」

カナウ、シャルロット、エハッドは互いに顔を見やる。

ホムンクルスの少女は何も言わないまま、前に出ようとする。

「……イザイを解放しないと、どのみちこの子は死ぬ」

「だが、ランサーに引き渡すのは……クソツ！」

カナウは頭を抱える。

「それもあるけど……ロードの身の安全もかかっているわ」

「渡すしかないでしょう……」

「ランサー、ひとつあなたに尋ねたいことがある」

「質問なら早くしろ、俺は気が短いんだ」

ランサーに問いかけるシャルロット。

「あなたのマスターはホームンクルスをアトラス院のために奪還することを目的として、この作戦に参加していたはずよ」

「でもこの行動ははつきりと当初のあなたたちの目的とは逆行している」

「それどころか時計塔でさえ冒読するような悍ましい逆行行為よ」

「自分がどういうことをしているのか、あなたは……あなたのマスターはわかっているの？」

「その言葉、そっくりそのままお前たちに返す」

ランサーは無慈悲に、一切の容赦もなく答える。

「お前たちはホームンクルスを手に入れたにもかかわらず、それをアトラス院に報告せず

隠し持っていた。この聖杯戦争を私物化するためにな！」

「それは違うわ！」

「嘘をつくな」

ランサーの剣を握る手が強くなる。

「逆はお前たちのほうだ。ホムンクルスを修復させてその次はどうする？」

「まさかまた、生きて帰れてよかったねと連れ帰るつもりか？　ここは病院じゃねえんだぞ」

「それともまさか本当に、その道具が人間に見えちまったのか？　魔術師が、ホムンクルスを人間扱いとはお笑い草だな！」

「惚れたのか？　なあ、セイバーのマスター！」

「ただの人間のお前がこんな魔術師の世界にまで首を突っ込んで、正義のヒーロー気取りか？」

—虫唾が走る。ランサーはきつく言い放つ。

「てめえみたいな何の力もないくせに、理想や自信だけを語る人間にこの場に立つ資格はない」

「せめて最後に、男を見せてみる」

「守ってきたものを犠牲にする覚悟、切り捨てる覚悟。俺に証明してみせろ」
ランサーがカウントを数え始める。

カウントを数えて3のとき、カナウが口を開いた。

「わかった！」

「カナウ……！」

エハッドが焦ったような表情で、カナウを止めようとする。

「いいのかよ、カナウ……最後までほかに方法がないか……！」

「向こうは人質二人だ。こうするしかない」

「でも……」

「僕だって悔しい。こんな汚い手に屈するしかないなんて……」

— 円卓の騎士、ベイリン。蛮勇だとは知っていたがまさかここまでとは。

— そこに騎士としての誇りは微塵も感じられなかった。

カナウは意を決して、講堂の前に出る。

フードを深くかぶったホームンクルスの少女の手を引くと、そのままランサーの前まで歩いて進む。

「……」

「……」

シャルロットとアーチャーは何も言わなかった。

「おい、シャルロットまで……」

エハッドは怒ったような、諦めるような声で二人を咎めようとした。

「……ごめんなさい」

シャルロットがつぶやく。

カナウが前に歩いてきたのを見て、ランサーもまたイザイを抱えたまま前が出る。

両者の距離はわずか数メートル。

近くにサーヴァントを連れていないカナウの前に、歴戦の猛者が頑として立つ。

プレッシャーと殺意に飲まれて、体は震えているようだった。

「ん？ お前、サーヴァントはどうした？」

「……」

ランサーが尋ねるが、カナウは何も答えなかった。

「……妙だな、なぜセイバーがいない」

「……」

—まだだ。もう少し。

カナウは息をのむ。

「セイバーは……自分の無力さに耐えられず逃げ出したよ」

「……ハッ！ そうかよ！ あの腰抜け野郎！」

ランサーは大笑いして天を仰いだ。

「ごめんセイバー、もう少しだけ耐えてくれ。」

額に汗を浮かべて、今か今かとカナウはそのタイミングを待った。

「お前もかわいそうな奴だよな。同情するぜ……だが、俺は手を抜いたりしない」

ランサーの剣は、いまだイザイ・エルトナムから動かない。

「一切の譲歩はない。お前が先に、ホムンクルスをこちらに引き渡せ」

「そうしたら、この錬金術師は解放してやる。お前は俺たちの目の前で、こいつの再調整をするんだ。もともとそのためここに資材を運び込んでいたようだからな」

ランサーが行動の隅をみやると、確かに見たことのない魔術道具、礼装と思しき資材の箱が積み上げられている。

「……」

カナウは連れてきたホムンクルスの腕を引っ張り、ランサーの前へと送り出す。

フードを被ったホムンクルスの少女は何も言わなかった。

とぼとぼと歩いて、ランサーの傍まで歩いた。

それを確認したランサーはようやくイザイ・エルトナムから剣を下ろす。
「……………」

解放されたイザイ・エルトナムはのどに手を当てて呼吸を確認する。

長い間ランサーの殺意にあてられて気を参らせているようだった。

「もたもたするな。始めろ……」

「後悔するぞ、魔術協会、時計塔の連中も……」

イザイが悪態をつくくと、フラフラとしながらも、ホムンクルスの少女を抱えて、彼女を講堂のテーブルに乗せた。

魔術で講堂の照明を落とすと、ろうそくの火だけがこの空間を照らした。

—ドカン。

—その瞬間。講堂の外から爆音が鳴り響いた。

「な、なんだ？」

エハッドは驚愕して、講堂のドアの方へ目をやる。

つられるように、全員が音の下方向へと視線を向けた。

ただ一人、シャルロット・ロジエだけがランサーを見ていた。

ランサーの意識がそれるその瞬間。

「セイバー！」

シャルロットが力強く叫んだ。

机の上に寝そべっていたはずのホームクルスの少女は恐ろしいほどのスピードで立ち上がると、来ていたパーカーを大きく翻して、飛び上がった。

蜃気楼のような影が次第に実態を取り戻していく。剣を持ったセイバーがランサーに勢いよく斬りかかった。

間一髪。

ランサーはセイバーの斬撃を白い盾で防いだ。

兜が解かれ、驚愕の表情でセイバーを見る。

「ば、バカな……ッ！」

「……!!!」

セイバーが、ランサーと激しく鎧を削る。

その迫力と、意外性に圧倒されて、ランサーは一步も動けない。

「なぜだ！ サークヴァントの気配を全く感じさせないなんて……！」

「あなたにだってできるでしょう、ベイリン。姿を隠し、素性を隠す」

「まさか……!?!」

「己が栄光のためでなく」……誰の宝具だったか、あなたならもちろん知ってるわ

よね、円卓の騎士ベイリン！」

シャルロットが勝ち誇った顔で叫ぶ。

「それはランスロットの……!!」

「ロードが参加した聖杯戦争の資料、読み込んで正解だったわ……さすがは円卓の騎士、タレントぞろいの最強集団ってところかしら？」

聖杯戦争開始前、いくどとなく読み込んだ過去の聖杯戦争の資料。

バーサーカーとして召喚されたランスロット。

その英霊が所持していたという宝具を見て、シャルロットは閃いた。

――交渉にイレギュラーが発生した場合、最後の保険をかける必要があった。

—この逸話をセイバーに再現させれば、ランサーたちを出し抜くことができるかもしれない。

ランサーは激昂する。目の前に突如として現れたセイバーに対して、年端もいかぬ少女の魔術師に出し抜かれた自分に対して。

「貴様ア……!!」

「まあ、セイバーだけの力じゃ、さすがに違和感がすごかったから、今回はもう一人に協力してもらったんだけどね」

シャルロットがそこまでいうと、どこからともなくシャルロットのすぐ脇から突然サーヴァントが現れる。

「こういうことでよかったのかい、カナウ・アルバーン？」

キャスターが突然この場に現れる。手には指をはめている。

「セイバーの”己が栄光のためでなく”を僕の指輪でさらに幻術を強化する。よりリアルに、より鮮明なイメージになるように」

「まったく信じられないな君は。本当に前まで一般人だったのか？」

少女の姿をしたガンダルフが、感心した様子でつぶやく。

「まあそういうわけだ。ベイリン、立場は逆転しつつあるな」

「これから君はここで、アーチャー、バーサーカー、セイバー、そしてこの私キャスター

を相手に立ち回ろうというんだ」

「それだけじゃない」

ガンダルフは講堂のドアを指さして続ける。

「時計塔は今、ホムンクルスを血眼になって狙う魔術師たちと、君のマスターが招いた懲罰部隊の魔術使いで溢れかえり、乱闘騒ぎになっている。君のマスターは今どこにいるんだろうね？」

「……時計塔にやけに人が少ないと感じていたのは」

—ガンダルフの幻術か！

ベイリンの表情に焦りが増していく。

「この借りは必ず返す……!!」

ベイリンの体が赤く光る。

次の瞬間光となって講堂から出ていきどこかへと矢のように去っていった。

「リヤオ・ファンが令呪を使って呼び戻したのか。やったぞ、今頃大混乱の時計塔で慌てふためいてるに違いない！」

エハッドが笑みをこぼす。

「それにしてもハラハラしたぞ。どうして俺には教えてくれなかったんだ、セイバーが

宝具ですつとホムンクルスのふりをしていたなんて」

「ごめんなさい、エハッド。でもできる限り事情を知っている人は少ないほうがうまくいくと思ったの」

シャルロットは走ってロード・エルメロイに駆け寄る。

「よかった……気絶しているだけみたい。ロードは無事よ！」

「なんとか……乗り切ったな」

セイバーがホムンクルスのふりをして、ランサーの隙を突く。

これは昨日になってカナウがキャスターに出会い、提案したものだ。

キャスターのすぐわきに、本物のホムンクルスの少女が立ち尽くしている。

外の世界に慣れておらず、体を震わせている。

「さて、それじゃ、みんなに暴れてもらっている間にマス……イザイ・エルトナム！」

キャスターは錬金術師の名前を呼ぶ。

「交渉だ。彼女の再調整を頼むよ」

ニッコリとウインクする。

「……すぐに始めよう」

イザイ・エルトナム・アトラシアがホムンクルスに語りかける。

少女は眠っていて目を覚まさない。

「ふむ、冬眠状態のようなものか。たしかにこれなら活動限界時間を延ばすこともできる。見事な判断力だ」

「このままここで彼女の再調整を行う。誰もこの部屋に入れないように、邪魔が入ればこの子の命も危ないだろう」

彼女が資材の数々を広げると、それらを魔術で固定し、工作でもするかのように操作していく。

その工程の何もかもが、シャルロットたちには到底理解のできない所作であった。

ドアの向こうでは相変わらず、何者かの罵声と爆発音のようなものが絶えず聞こえてくる。

そして、突然講堂のドアへ激しい打撃音が続く。

何者かが外からドアを開けようとしていた。

「今日時計塔に來ているような連中は、聖杯を手に入れるためなら手段を択ばないような魔術師ばかりよ」

「気を抜かないで、来るわよ！」

ドアが蹴破られる。

黒いスーツやシャツに身を包んだ魔術協会の懲罰部隊の魔術使いだ。

入るなり、短い詠唱を行うと、魔術使いたちのそれぞれの両手から青い炎が上がり、カナウ・アルバーンめがけて放出される。

「セイバー！」

「はあッ！」

カナウの掛け声と共に、セイバーが前に立つ。

「我が騎士道の夢想にこたえよ……アトラント！」

両腕を掲げてセイバーが叫ぶと、虹色に光る盾が浮かび上がり、マスターたち全員を守る盾となった。

魔盾から閃光が放たれると、魔術使いたちの動きが鈍る。

「ぐあああ！」

「アトラントの魔盾だど!？」

「アーチャー！」

「おうよ！」

セイバーの後ろから、アーチャーが飛び出る。

構えた塔から勢いよく砲丸が発射され、ドアの前の魔術会たちを全員吹き飛ばす。彼らの断末魔は爆発音でほとんど聞こえない。

しかし爆風の先からも次々と、時計塔の防衛用のゴーレムがスクラムを組んで迫る。

「彼らをここにへ入れるな！」

イザイが手を動かしながら叫ぶ。

「バーサーカー！」

「フォルテツシモ！」

バーサーカーが講堂のドアの前に仁王立つ。

一体、また一体と、思いこぶしの一撃を与え、次々とゴーレムを再起不能にする。

両腕を構えて、叫ぶ。

「来るがよい、運命よ！」

迫りくるゴーレムの腕を、つかみ上げると、そのまま相手の勢いを逆手にとつて、放り投げる。

放り投げられたゴーレムは衝撃に耐えきれず爆散した。

「ここいつら、リヤオ・ファンの雇った懲罰部隊か！」

「セイバー、バーサーカー！ ランサーのマスターを探せ！ ここは俺たちに任せろ！」

この講堂は回廊の突き当りに位置している。直線に続く、障害物のない廊下はアー

チャーにとって絶好の地の利であった。

進軍する魔術使たちに容赦のない砲撃を浴びせていく、アーチャー。時計塔の廊下ははやくも、見るも無残な姿になり替わろうとしている。

「ハツハツハ、気分がいいな！ このままワートルローまで吹き飛ばしてやりたいぜ！」
「キャスター！ お前もサーヴァントなら、協力してくれ！」

「私の出番など必要ないだろう……だがそうだな……ふむ」

キャスターが杖を一振りすると、アーチャーの砲塔が金色に輝きだす。

「魔力消費を抑えられるようエンチャントを加えた。これでどうかな？」
ニヤニヤしながらそう返す。

「お前たち！ この時計塔でこんなことをして、ただで済むと思うな！」
階段を上って、次の廊下へ。

セイバー、カナウ、エハッド、バーサーカーがリヤオ・ファンを探して突き進む。

道中に、時計塔の魔術師たちの一団が顔を青くして、二人を罵倒する。彼らを止めようと魔術を行使する魔術師が現れるも。

「邪魔するな！」

ベートーヴェンが瞬く間に魔術使いたちをつかみ上げると、放り投げる。

「うわあああ！」

「リヤオ・ファンはどこへ行った!？」

走り続け、魔術師たちをなぎ倒し、次の階へ。

また走り続け、魔術師とゴーレムをなぎ倒して次の階へ。

「待って！」

エハッドがふと、一つの部屋の前に立ち止まる。

静かに近づいて、ドアに聞き耳を立てて、ハツとする。

「バーサーカー！」

「おう！」

バーサーカーの剛腕で教室のドアが破られる。

教室の中の光景を見て驚愕する。

「君たち！」

教団の下で男女が十数人、赤色に輝く鎖にまかれ拘束されていた。

エハッドが助けようと駆け寄ると、天井から降り立つが影が迫っていた。

「エハッド!」

間一髪のところ、爪の一撃はバーサーカーの剛腕でいなされる。

アサシンが両腕に爪を構えて、エハッドの首を描き切ろうと待ち構えていた。

「アサシン!?!」

エハッドが驚愕する。

「……」

アサシンは奇襲に失敗するや否や、煙のように再び姿を消してしまった。

黒い煙は教室を出て、やがて行方が分からなくなった。

「び、びつくりした……アサシン、やはり時計塔に来ていたのか……!」

「無事か、エハッド」

「あ、ああ。バーサーカーがいてよかった」

—それにしてもなんてやつだ、攻撃の直前まで俺には全然気配がわからなかった。

—それにあの爪。おそろく毒が仕込まれているだろうな。

カナウとエハッドはそのまま学生たちのもとへ駆け寄る。

セイバーが剣を構えると、器用に鎖だけを切り裂くことに成功した。

愚者の鎖——古代から存在する魔術師専用の拘束具型礼装だ。

「ありがとうございます、ティーレマンさん！」

捉えられていたうちの一人の少女が礼を言う。

「俺の名前をどうして？」

「シャルロットさんからお話は伺ってます。私たち、今日のために時計塔で準備をして
たんです！」

「ねえ、もしかしてさっきのサーヴァントがアサシンなんですか！ あつという間に僕
たちを力でねじ伏せちゃった。これは本当にすごいことだよ、グレイ！」

「このわたくしにこのような仕打ち……たっぷりお返しをしてやりませんと！」

——ん、この金髪縦ロールのお嬢様。どこかで……。

グレイと呼ばれた灰色の髪の少女の隣で青年がのんきな調子で声を上げる。

「お、おう……なるほど、シャルロットが言っていたのはこういうことだったのか」

「あ、あの……師匠は、ロード・エルメロイ二世は無事なんですか!？」

「無事だ、今のところはな。動けるか？」

「大丈夫です。自分の身は自分で守れます！」

「面白れえことになってきたな、グレイ！」

グレイのコートの中から、不思議な声が聞こえてくる。

「アツド！ 笑い事じゃない！」

コートから籠を取り出すと、かごの中から箱型の奇妙な生き物がしゃべっている。

「すみません、この子のことは気にしないでください」

「時計塔じゃよくあることだろ。気にしてないさ」

エハッドがにこやかに答える。

「ロード・エルメロイとシャルロットは下の階の隅の講堂にいる。加勢に入ってやってくれ！」

「了解！」

ぞろぞろとエルメロイ教室の学生たちが次々と教室を出ていく。

「よし、味方が増えた……それにしてもリャオ・ファンのやつはどこへ行った？」

「もう一つ上の階へ行ってみよう」

「……次の階は貴族主義の魔術師たちばかりのフロアだ」

再びエハッドとカナウはリャオ・ファンを探しに走り出す。

「ロジエ！」

「ル・シヤスール！」

「んん〜！ 素晴らしい響きですこと〜！」

エーデルフェルトがシャルロット課したに時計塔戦争への加勢の条件。

それは彼女のことをハイエナではなく、”狩人”と呼ぶこと。

シャルロットが手を挙げてアーチャーに攻撃を制止させる。

アーチャーが砲撃を止めると、エルメロイ教室のメンバーたちが講堂に入り込む。

「ロードの二世二代の立ち回りと聞きましたは、支援しないわけにはいきませんもの」

エーデルフェルトと呼ばれた金初の少女は得意げな表情でロジエにこたえる。

「この殿方があなたのサーヴァント？」

アーチャーを見上げながらルヴィア・ゼリツタ・エーデルフェルトは尋ねる。

「そうよ」

「ごきげんよう、マドモアゼル。美しい女性はいらただけで兵の士気があがるつてもんだ

〜！」

「まあ、口がお上手ですこと」

「アーチャー！ 口説いてる場合じゃないでしょ〜！」

〜でもね。

ルヴィアが手に宝石を手を取って言う。

「守られてばかりが淑女ではありませんのよ」

「ほう、ではお手並み拝見と行こうか！」

「師匠！」

「先生！」

エルメロイ教室のメンバーがロード・エルメロイ二世に駆け寄る。

ロードに息があることを確認して安堵すると、周囲を見渡して状況を確認する。

「おや、エルメロイ教室の学生諸君か」

「あなたはアトラス院の……」

フラットが無礼にも指をさして口を開く。

「この方が錬金術師？」

グレイが驚いたように声を上げる。

「ずいぶんにぎやかになってきたな……」

「イザイ・エルトナムは彼らのほうには目もくれず、ホムンクルスの調整に集中している。
る。」

「すまない、今は手が離せなくてね……君たちのロードは気を失っているだけだ」

「キヤスター！ アーチャーたちの様子はどうなってる？」

「エーデルフェルトのご令嬢が加勢に入った。この講堂は今のところ安全だ。懲罰部隊

の攻撃も収まってきている！」

「こちらの調整も間もなく終わる。キヤスター！ セイバーのマスターたちをここへ」

「人使いが荒いなあ！ わかったよ」

キヤスターは指輪で姿を消すと、煙のように講堂を出て外のフロアへ向かう。

時計塔 某所

「ハア……ハア……くそが！」

とある教室の中、ランサーを従えたリャオ・ファンがイライラした様子で机を蹴り飛ばす。

振り返って、今しがた呼び戻したランサーのほうを振り返って罵声を浴びせる。

「お前のせいだ！ お前のせいだ。僕の完璧な作戦が台無しだ！ どう責任取ってくれるんだランサー！ 役立たず！」

「すまないマスター……ガンダルフの幻術、想像以上のものだった」

「敵に感心している場合か、馬鹿野郎が！ ああ〜クソ！クソ！クソ！」

息を荒げて、リャオ・ファンは自身のサーヴァントの無能さを並べていく。

その言葉の一つ一つをランサーはただ黙って聞いていた。

「これだから、ランサーなんか……円卓の野蛮な騎士なんかアテにならねえんだよ！」

「どうして僕は……セイバーを召喚できていれば……あいつらなんか……あいつらなんか!!」

「……」

リヤオ・ファンの言葉にランサーはただ兜で顔を隠してうつむいていた。

「マスター、退却しよう。向こうはサーヴァント4体に、時計塔の魔術師たちまで加勢についている。懲罰部隊の魔術師もほとんどやられた」

「……」

ランサーの顔面にこぶしが振り上げられる。

こぶしは兜に阻まれたが、鈍い金属音がしてランサーはよろめいた。

こぶしの威力ではなく、思ってもいかなかったマスターからの体罰にランサーは激しく動揺する。

とうぜん人間のこぶしごときでサーヴァントが傷つくことはない。

それどころか、強固な鎧にリヤオ・ファンのこぶしは激しく傷つき、血が流れ、ひどく腫れだす。

「もとはといえばお前のせいだろ……」

「……マスター」

怒りに我を忘れようとしているリャオ・ファンにランサーは目を見開いて、ただ見ていることしかできない。

「お前も英霊なら、聖杯戦争での敗北が何を意味するか、分かっているだろう！」

「僕は一族の最後の希望なんだ！　ここで負けたら何もかもが終わりだ！」

「もう手段を選んでいる場合じゃないぞ。わかってるな、ランサー!?」

リャオ・ファンはきつい口調で、次の指示をランサーに与える。

「誰だ！」

気配に気づいたランサーはとっさにリャオ・ファンの前に立ち、守ろうとする。

その瞬間、何も無いと思われていた空間からアシンが巨大な鋼鉄の爪を抱えて浮かび上がった。

「こんなに近くにサーヴァントの気配……気配遮断か！」

「姿を見せろアシン！」

煙のように一転に黒い霧が集まると、それがだんだんと人の姿を形作る。

二人の目の前にアシンが現れる。マスターも見せずに。

実体のない霧は瞬く間に素早く動き、リャオ・ファンに斬りかかろうと迫る。

「させるかよー」

ベイリンが白盾を構えると、周囲に対魔力のフィールドが形成される。

高ランクの防御力にアサシンの気配遮断が阻まれるが、かまわず爪を振りかざして突進する。

不快な金属音が響き、爪が深々とベイリンの盾に食い込む。

食い込んだ爪先から黒い炎が燃え上がり、盾を包み込もうとする。

「この野郎……」

盾に食らいつくアサシンを蹴り飛ばして突き放す。

アサシンは空中に飛ぶが、勢いを簡単に殺し、難なく距離をとって着地する。

ランサーは盾の異変に気が付く。

アサシンの攻撃を受けた部分から、炎が徐々に侵食していくようだった。

「なんだこれは……呪いか?」

仕方なく、盾を床に置いて、今度は腰に差した二本の剣を構える。

「このアサシン、何か妙だ。」

「……」

アサシンは両腕の爪をランサーに向かって突き立てる。

挑発するようにクイクイと動かす。

「もとより手加減するつもりはねえ。全力で行かせてもらうぜ！」
「ら、ランサー！」

ランサーは突撃する。そのまま十字にアサシンの体に斬りかかる。

アサシンはランサーの剣を爪の間で器用にいなす。

続く二度目三度目の斬撃、突きを独特の体術でいなしていくと、教室の外までアサシンはランサーを誘導していく。

回廊で続く、アサシンとランサーの攻防。

アサシンははじめこそ、ランサーの剣戟に対応するが、ランサーとはやはり練度の差は一目瞭然。

足さばきのスキについて、柔軟に切り口を変えるところはベイリンをはじめ、騎士の技巧である。

一撃一撃、アサシンの布の服を切り裂き、浅いながらも次第に傷を増やしていく。アサシンは防戦一方へとなっていく、回廊の隅まで追いやられる。

その工房を後ろから走ってリヤオ・ファンが追いかける。

「ランサー、お前が無能でないことを、証明して見せろ！ アサシンをころ……！」
「少し黙ってろ！」

「な、ランサー!？」

リヤオ・ファンに対して強い口調でランサーが制した。

イライラした様子でランサーはきつく言い放つと、再びアサシンのほうを向き、憎悪した表情で剣を構えなおす。

「……」

アサシンは何も言わなかった。

呼吸一つ乱れた様子はなく、恐れているといった様子もなく、じつと仮面の向こうからランサーを見つめていた。

「西洋の将、浅ましき者、終わりを迎える者よ」

「お前たちの戦いはここまでだ」

仮面の奥からアサシンの声がする。

この世の終わりのような憎悪と、勝ち誇ったようなゆがんだ嬌声。

「ランサー!」

「うるさい、静かにしろと……」

「君の負けだ、ベイリン」

ベイリンに降りかかるもう一つの声。

彼は恐る恐る振り返る。

リヤオ・ファンの頭部に突き付けられていたのは大口径のショットガンだった。

ロバート・アバーラインがショットガンをリヤオ・ファンに突きつけ、こちらを見ていた。

コートは血で汚れ、髪の毛は手入れがされておらず、ひげが生えている。

長い間眠っていないように思える目の下のクマと、不健康な顔色が迫力を増していた。

「励振火薬って知ってるか？ 魔術師の魔力に反応して発火する弾薬、たとえお前が高速で私の腕を切り落とそうが、首をはねようが、反応した魔力の弾丸は即座に起爆し、射出された金属のボールがリヤオ・ファンの頭を蜂の巣にする」

「アサシンは人間の心理をよく知っている。アサシンの言葉は人をもてあそび、扇動し、姿を覆い隠す。焦りや怒りは周囲を簡単に見えなくするのだ。これを“気配遮断”という」

リヤオ・ファンは驚愕した表情で額に汗を浮かべて、何も言うことができないでいた。この人間からは彼は何も感じ取ることができなかつた。

(殺意すら感じない。こいつ……化け物か?)

「お前、聖堂教会の人間だろ……? なぜアサシンの肩入れをする?」

ランサーもまた緊張した面持ちで尋ねる。

「決まっているだろう。私がアサシンのマスターだからだ」

当然といった様子で、何でもない様子でアバーラインは返した。

彼がコートの前を開けると、その鎖骨の下に、トゲの生えたハートの形の令呪が浮か
び上がっていた。

「ランサー、君にアサシンの手伝いをしてもらおう」

静まり返る時計塔の廊下に張り詰めた空気だけが重くそこに停滞した。

V
—
戦果と代償

時計塔 一階 フロア

講堂の前で、ドカと置かれる黒鉄の砲塔。

その先の回廊は撃ち込まれた砲弾と宝石で崩壊しかけており、見るも無残な姿に変わり果てていた。

積みあがったボロボロの魔術師たちを回廊の隅にまとめると、エルメロイ教室の学生たちが先ほどまで自分たちを拘束していた愚者の鎖で一人ひとりしっかり縛り上げる。

時計塔の攻防はようやく落ち着きを取り戻しつつあった。

時間帯が朝早く、時計塔にきている魔術師の数自体少なかったようだ。

多くのロードと、その派閥の魔術師たちもこの戦争に不介入を決め込んだようで、それ以上部屋から出てきてシャルロットたちを狙うものは現れなかった。

「ひどい有様だな。時計塔きつての大スキャンダルだ」

意識を取り戻したロード・エルメロイ二世は葉巻を取り出して火をつける。

いつもであればこのような光景にはいつも胃を痛めるだけの彼も、覚悟を決めていたのか動揺していない様子で、葉巻を堪能している。

「お、いいもん持つてるな、ロード」

葉巻を吸うエルメロイを見て、アーチャーが近寄ってくる。

「吸うか？」

「ハツハツハ、ありがとよ」

エルメロイから葉巻を受け取って加えると、腰を落として火をつけてもらう。

(まさかサーヴァントに煙草を寄越す日が来るなんてな)

奇妙な感覚に陥るロード・エルメロイ。

アーチャーは豪快に煙を吸い上げると、講堂の天井に向かってプカプカと煙を吐き出す。

「……それにしても、想像していたよりもなんだか物寂しい幕切れになりそうだな」

「無関係な若い魔術師たちをこれ以上巻き込んでしまうのは私も本意ではない。それは相手も同じだろう」

「法政科をはじめ、貴族主義のお歴々は不介入を選んだようだ。みんな自分の一族がかわいいのだろう」

——これだけの砲撃能力と指揮官能力を目の当たりにすれば、魔術師であればサーヴァ

ントに戦闘を挑もうなどとはふつうは考えまい。

ロード・エルメロイはあらためてサーヴァントの持つ能力に驚いていた。

「だがここで伸びている懲罰部隊の連中は、どうも違うらしい」

膝をついてとらえられた魔術師の顔を覗き込むように見ながら、つぶやく。

「いや、そもそもこいつらは時計塔の魔術師ですらないな……」

「どういうことだ？」

「見たことのない顔だ……それに東洋人ばかり」

「リヤオ・ファンの雇ったフリーの魔術師だろう」

イザイ・エルトナム・アトラシアとシャルロットがエルメロイとアーチャーのもとへ歩いてくる。

「先ほどは醜態をさらしてしまい、面目ない」

「お気になさらずロード。結果として生き残ることができた」

「まあ、この非常事態にだんまりを決め込む他のロードたちに対しては一言いいたくもありませんがね」

苦笑い気味に彼女は愚痴をこぼす。

「返す言葉もない」

「それと比べて、君の教室の生徒たちはとても勇敢で素晴らしい。気になる力を持った者もいるようだしね」

そういいながら、グレイのほうを見る。

「……まあそれはいい。ホムンクルスの調整だが、すべて完了したよ。危ないところだったが、シャルロット君のおかげで間に合ったようだ」

「あのホムンクルスは、アトラス院に返されるのか？」

「私としてはそのつもりだ。だが、こちらのシャルロット君に頼まれしまつてね」

困った様子でイザイ・エルトナムはシャルロット・ロジエのほうを見た。

「私の命を助けた代わりに、ホムンクルスを差し出せと言ってきたんだ」

「……そうか」

「あまり驚かないんですね、ロード」

シャルロットが尋ねる。

「君たちがあのホムンクルスに特別な思いを抱いているということは、なんとなく察しがついていた」

簡易ベッドの上で目を閉じて眠っているホムンクルスを遠めに見て、ロード・エルメ

ロイは答える。

呼吸が落ち着いているのがここからでもわかる。

「イザイ・エルトナム。この際にはつきりさせおきたいことがある」
振り返ってシャルロットはイザイに言う。

「何かい？」

「キヤスターのマスターはあなたね？」

「……そうだ」

口端をゆがめてイザイは肯いた。

「ホムンクルスをアトラス院の外へ連れ出したのも、あなたね？」

「そうだ」

「このロンドンで聖杯戦争を引き起こすために、わざと？」

「その通りだ、すごいな君は。もう気づいていたとは」

「あなたは……聖杯を手に入れようとしているの？」

「それは違う……かな」

最後の質問にイザイが視線をわきにそらす。

「これは私の実験のためだけに用意した聖杯戦争、私の成果の証明さ」

「実験？」

「そうだ。私のホムンクルスの有用性をテストするためだね。アトラス院のルールは君も聞いたことがあるだろう？」

「ここで作られた兵器を外へ持ち出してはならない」このことね？」

「その通り。このルールには手を焼いたものだ。私がアトラス院でここまでの地位を手に入れるまで、私のほかにも多くの錬金術師がみずらかの夢をかなえられず寿命を迎えた」

遠い目をして、懐かしむような眼をしてイザイ・エルトナムはつぶやく。

「そうだ。」寿命」だよ、シャルロット・ロジエ。寿命は人類にとってひとつの課題だ」「永遠の繁栄という光に手を伸ばした者の執念がどれほど恐ろしいか、君たちもあの「聖杯大戦」で思い知らされたはずだ」

イザイはトウリファスで起きた聖杯大戦のことをやり玉に挙げる。

「ダーニック・プレストーン・ユグドミレニア、そして天草四郎……星に向かって手を伸ばそうとする者たちの執念」

「私の原動力もまた、そこにある。ただそこにいたる期間と、起源と、プロセスが違うだけだ」

—それに。と、イザイは続ける。

”自らが最強である必要はない。最強を作り出せばよいのだ”
「私が最強を手になくとも、いずれ誰かがたどり着く」

きつぱりと言い切った、そして。

「人類そのものが自らの力で”最強”になれば、それでいい」

「彼女はその第一号。大聖杯の欠片を心臓に、大聖杯とリンクした新しい人類、”願望の人間”そのプロトタイプだ」

そう言った。

かつて我々が手を伸ばしたその星は、ひとりのホムンクルスによって撃ち落されたのだという。

ジークと呼ばれたそのホムンクルスは、一人の青年が成し遂げようとしたその願いを否定した。

しかし星は撃ち落されてなお、消滅するわけではない。

砕かれようとも、太陽の熱に溶かされようとも、水の悠久なる流れにすり減らされて

も、その最小単位である量子を破壊することはできない。

どれだけ小さくとも、誰にも見つけられることがなくても、量子があるかぎり、星がこの世界からなくなることはない。

ただ、光を失い、他の石や砂粒との見分けがつかないだけだ。

トウリファスでの聖杯大戦は終わりを告げた。

大聖杯は邪竜ファブニールによって、人間の手が届かない”彼方”へ持ち去られた。

ここまでが資料で語られている聖杯大戦である。

しかしながら、この話には続きがある。

ファブニールが大聖杯とともに向かったこの旅路の最中、損傷の激しかった大聖杯からはその亀裂から少しずつ魔力が量子となつて零れ落ちていた。

それらのかから一つ一つは大した力のないものだが、これを効率よく収集してしまう魔術師がいた。

聖杯大戦の戦後処理に追われていた魔術協会は、トウリファスやその周辺地域で起こった地脈の変化に目を向ける余裕がない。

だから、その地で大聖杯のかからを熱心に集める者がいたことなど、到底気づくことはできなかつた。

連続した量子は一筋の線となり、道となつた。

天文学的な確率の奇跡によって、その道は再び“星の内海”へのリンクとなる。光を失ったはずの星は再び燃え上がり、旅立つことを夢見ている。

「願いをかなえるため、聖杯は量子の星となり、人々に自己実現の力を与える」

「セシリアは……そのために生かされているんだ」

「そのためには、彼女は学ばなければならない。人の在り方を、人の願いを」

「聖杯戦争は彼女にとっていい教材になるだろう。事実、すでにたくさん願いや思いを受けて成長しているのだから」

——つまるところ。

イザイはそれまでの堅苦しい口調から一転する。

「可愛い子には旅をさせよ、というやつさ」

「……随分とお騒がせな海外留学だこと」

ロード・エルメロイ二世、そしてシャルロットは同じく溜息を吐いた。

「これだけは聞いておかねばならない、イザイ・エルトナム」

葉巻の火を消して、ロード・エルメロイが尋ねる。

「あのホムンクルスが、この聖杯戦争が世界に悪影響をあたる可能性は？」

「それは……」

——イザイ・エルトナムが答えようとしたその瞬間。

時計塔 上階 フロア

「なあ……急に静かになったと思わないか？」

「確かに、下の階からドンパチする音が聞こえなくなっただけ」

エハッド・ティールマンと、カナウ・アルバーンはふと廊下で立ち止まる。

廊下から魔術師たちの姿気配が消え、先ほどまで聞こえていたアーチャーの大きな砲撃音もいつの間にか今は聞こえなくなっていた。

「どうする、一度戻って……？」

そう言いながらエハッドが振り返ると、視界の端に見知った姿を見つける。

リヤオ・ファンが廊下の反対側のほうで走り去り、下のフロアへ降りていく。

「リヤオ・ファン！」

エハッドが叫んで呼びかけるも、彼には聞こえていないようだった。

「後を追おう！」

「下の階へ降りて行つたな……というかあいつ、やつぱり来てたか……！」

「カナウ、行きましよう。ランサーには借りがあります」

セイバーがうずうずした様子でカナウを急かす。

「行こう！」

リヤオ・ファンの後を追いかけて二人も走り出す。

リヤオ・ファンの足はそれほど速くなかった。大人二人で十分に追いつけるスピードだ。

「リヤオ・ファン！ おい、待てよ！」

エハッドが彼に声をかけ続ける。

彼は一瞬二人のほうへ目を向けるが、止まらずそのまま走り続ける。

階段から一気に飛び降りて距離を稼ぐと、素早い身のこなしでそのまま下の階へ突き進んだ。

下のフロアから今度は講堂に向かう通路へ走り去っていく。

「あいつ……どこへ行く気だ？」

走り続けるリヤオ・ファンだが、次第に距離が縮んでいく。

「おい！ 待てつたら……」

ふいにリヤオ・ファンが立ち止まる。

片手をあげると、霊体化していたはずのランサーが突然現れる。

「おらああ！」

激しい金属音が響き、ベイリンの二本の剣は、すぐさまセイバーの剣に阻まれる。

「ランサー！ 私と勝負しなさい！」

「ハッ！ 偽物が生意気一転じゃねえぞ！」

「リヤオ・ファン。ここで何を企んでる」

「……シャルロット・ロジエはいないのか！ くそつこつちは外れか！」

イライラした様子でリヤオ・ファンは悪態をつく。

「お前らに用はない！ ランサー！ 宝具だ！」

「……いいのか、ロンギヌスを抜いても？」

「お、お前正気か！ こんなところでロンギヌスだろ！」

リヤオ・ファンの支持に、驚愕したのはエハッドだ。

「ロンギヌスって……あの時ライダーに使ったやつか!？」

カナウも目を見開いて、戦慄する。

「こんなところで使ったら……時計塔の人たちまで巻き添え……いや、周辺の街にいる人たちにまで影響が出るぞ！」

「俺のマスターは本気のようにだぜ？」

ベイリンは二本の剣をしまうと、詠唱をそのまま始めてしまった。

「悪いな……俺たちはもう戻れない！」

「ランサーー！」

バーサーカーがランサーに殴りかかる。

しかしながら、防御力に優れたベイリンの鎧に阻まれてしまう。

「頑丈な奴だ！ セイバーー！」

バーサーカーが叫ぶと後ろからセイバーが飛び出し、一太刀浴びせようとする。

「モラ・ルターー！」

セイバーが叫ぶと、彼女に紐づけられた魔剣の力が彼女の脚に収束する。

残像を残すほどの強力なステップで、超高速の突進から放たれる斬撃。

一撃必殺、初撃必勝の剣。

「うおおおおお!!」

だが、モラ・ルターの一撃でさえ、ベイリンの白い盾を破ることはできなかつた。

「だからてめえは“偽物”なんだよ！」

ベイリンはそのまま盾でセイバーをはじき返す。

後方に吹き飛び、回廊の壁にたたきつけられる。

「ぐっ！」

衝撃に手放したモラ・ルタは一振りですら砂のように崩れ去る。

彼女の中の力がまた一つ失われていく。

一度使用した聖剣は一度の現界に一度しか使えない。

「終わりを告げる嘆きの塔、浅ましくもわが身にそぐわぬ力と罪をここに背負おう！」

ベイリンの詠唱が完了する。

「崩壊せよ！ ロンギヌス！」

ベイリンが構えた巨大な塔の先がセイバーたちに向けられる。

「死ねえええええええ！」

リヤオ・ファンの叫びはロンギヌスが放つ金色の光にかき消される。

「しまっ……………！」

「はあ…はあ…!!」

光が収まったとき、この場にいた全員が絶句する。

セイバーとバーサーカーの前に、杖を構えたガンダルフがぼろぼろの状態で立ち尽くしていたのだ。

「ま、間に合った……」

弱弱しい少女の声で、ガンダルフがつぶやいた。

そのまま膝からペタンと崩れ落ちた。

「きや、キャスター!?!」

「ば、ばかな……ロンギヌスを真正面から受け止めるだ?!」

「少しばかりズルをした。その武器は私の世界と”ご近所さん”でね」

「私が間に入って、宝具の持つ崩壊の力を軽減させてもらったよ……」

「中つ国……つて聞いたことあるだろう?」

息を荒くしながらキャスターは答える。

信じられないといった様子でランサーは息を荒くした。

「くっ……さすがは星の内海で作られたもうひとつの聖槍。とんでもない威力だ。威力の軽減と……この現界のための低燃費な……体を維持しているだけで限界とは……」

話をするのもしんどいといった様子でキャスターはつぶやく。

「キャスター、お前体が……」

キャスターの体は金色の粒子状に崩壊しかかっていた。

サーヴァントの終わり。消滅を意味する。

「はあく、マスターのいうことほとんど守れずに終わっちゃうなんて。私は聖杯戦争が下手なのかもしれない」

「でもまあ、ここは犠牲フライってことでひとつで勘弁してほしいかな……」

「ランサー！」

「……ああ、ああ。行くぞ！」

キャスターの消滅を見届けずに、リヤオ・ファンとランサーは再び走って姿をくらまそうとする。

セイバーとカナウがキャスターに駆け寄る。

「キャスター、待ってくれ！ まだ聞きたいことが……」

倒れこんだキャスターを抱えるカナウ。

「ああ、ごめんよ。私ももうちよつと生き残って、君たちにもうちよつといろいろなちよつかいをかけたかったんだけど、もうダメみたいだ」

「マスターには申し訳ないことをしたよ……あつけない幕切れだったな」
「そんな、急すぎる！ どうしてこんな……!?」

「言つただろ……君が生き残ることが私と私のマスターの願いであると」
「君のマスターは一体……」

「ハハハ、君を守りたいなんて、そんなの理由は一つだろう？ 何せ……」
消えかかる金色に充てられて、ガンダルフの笑顔が輝く。

「君を守れと命令したのは君の母親なんだから……」

「なん……だつて？」

講堂のドアが開かれる。

エハッドとカナウが中を見ると、想像を絶する光景がそこにはあつた。

机やいすが散乱し、ガラクタになるまで破壊された講堂の真ん中で、エルメロイ教室の生徒たちが一網打尽に捉えられていて。

その隣ではランサーとアサシンがそれぞれ武器を向けて、ロード・エルメロイ二世と

イザイ・エルトナム・アトラシアが人質にさせられている。

シャルロットとアーチャーはその様子に対して何もすることができず、歯を食いしばって、にらみつけていた。

「シャルロット！」

「やられたわ……ランサーは囷。アサシンと、あいつが来たの！」

指をさした先にいたのは……。

「アバーライン!？」

人質にシヨットガンを構えたアバーラインが、捕らえられた学生たちのわきで椅子を置いて座り込んでいた。

その隣で、リヤオ・ファンはバツの悪そうな顔をこちらに向けてることなくうつむいていた。

「こいつ、アサシンと契約したのよ！ ミランダ・ウォルフオークから令呪まで奪って！」

シャツの前をはだけてたアバーラインの胸元にハード型の令呪が浮かび上がっている。

「アサシンがアバーラインと!? お前、監督役は……」

「聖杯戦争の感覚というのはすばらしいな。自分が生きているのだと実感できる」

エハットの言うことなど気にも留めない様子でアバーラインは続ける。

「気の抜けないサバイバル、極限状態の中で試される戦術と生存術。子どものころを思い出したよ」

おもむろに椅子から立ち上がると、ショットガンを学生たちに向けたままアバーラインは一本調子で語り始める。

「胸やけがするな……いくら腹がすいたからと言って、調理もせず魔術師の手を食べるのはまずったか。」

「は？ 魔術師の手？」

カナウが困惑する。

「こいつ……ミランダの令呪を手丸ごとを飲み込んだのか！」

「手を……は？ 何言ってるんだ……？」

「何もおかしなことじゃないだろう。ライダーだって同じことをしていたし、こんなもの持っていても銃を使うのに邪魔だからな」

「おかげしつかり馴染むよ。こんな裏技を教えてくれたライダーには感謝しないとな」

「だが人間の肉とはこうも不味いものか。二度とやりたくはないな」

その言葉に一切の感情はなかった。

「シャルロット・ロジエ。お前たちの戦争ごっこもここまでだ」

「ここからは、停戦協定」といこうじゃないか」

この場のだれもが、停戦協定など結ぶ気にもなれない精神状態でそこにいた。空虚で歪なこの男のやり方に、誰も議論をする気にはなれなかった。

「私たちの要求はサーヴァントだ。アーチャーとバーサーカーをこちらへ引き渡す」と

「それぞれ一人につき、ロード・エルメロイとイザイ・エルトナムを引き渡す。一対一の交換だ」

「この学生たちはまだ若い。交渉が終わったら、こいつらは無償で返してやろう」

無償、アバーライン風に表現するのであれば、どうしてもいい」とも言える。

椅子に座り、シヨットガンを構えたままアバーラインは交渉する。

アサシンはその様子を黙ってみている。

「私は聖杯戦争の監督役として、令呪の剥奪、継承の仕方について一通り心得がある」

「君たちの腕を切り落とさなくても、サーヴァントの譲渡は簡単だ、安心したまえ」

「だれがお前なんか……」

震えた声でエハッドが反論する。

「その選択もかまわないがね。であれば、どちらか一人を殺すだけだ」

「ふむ……そうだな」

顎に手を当ててアバーラインは考えをめぐらす。

「アーチャーを引き渡すならロードは殺さない。そしてバーサーカーを引き渡すならイ

ザイ・エルトナムは殺さない」

「恩師の命を救えるんだ。安い取引だろう」

「いや、君はエルメロイ教室ではなく、召喚科の生徒だったか……」

「サーヴァントを奪ってどうするつもり？」

シャルロットが恐る恐る尋ねる。

「聖杯戦争に勝つためだ」

アバーラインはキツパリと返した。

「だが、勝つだけではだめだ。公平な手段で、圧倒的な力を示して勝つ」

「二度と立ち上がれないように徹底的に叩く、それだけだ」

「さあ、おしゃべりの時間は終わりだ。決断したまえ、シャルロット、エハッド。君たちのどちらでも構わない。サーヴァントを引き渡すというのなら前へ出る」

アバーラインが椅子から立ち上がる。壁にもたれかかったアサシンが立ち上がると、アバーラインの後ろに移動する。

「……シヤルロット、エハッド」

カナウが心配そうに二人を見る。

「なあおい待てよ、神父さん」

「アーチャー？」

アーチャーが前に出る。

警戒してアサシンもまた前に出てけん制する。

「この俺を誰だと思ってるんだ？ 初代フランス皇帝のこの俺が、そこのいち魔術師と一対一で交換するのは割に合わないんじゃないか？」

「……ふむ」

アーチャーは胸に手を置いて、ロード・エルメロイ二世を指さしてアバーラインに呼び掛ける。

「この俺を捕虜にできるんだ。それに比べて、こつちのバーサーカーは人の話を聞かない上に、ただの音楽家だ」

「戦力には数えられない、困った野郎さ」

「この俺一人で、二人と交換するべきだろう。いや、それでもお釣りがくるくらいだろう」

「なんといつても、この俺はこの聖杯戦争において最強の将なのだからな！」
「何をばかなことを……君たちは交渉できる立場には……」

アバーラインが一蹴しようとするが、彼の見ている景色に異変が生じる。

「な、なんだ……頭が」

頭を抱えて呻くアバーライン。

彼の視界が急激に狭くなり、どういうわけか目の前のアーチャーにくぎ付けになる。
意識が強制的にアーチャーの方へ向けられてしまうようだ。

感情が揺さぶられ、暗示のようにアーチャーを無視できなくなる。

「あ、アーチャー……何をした……？」

「……目をそらすなよアバーライン、この俺の姿を見て、何も思わないのか？」

「アーチャー、まさか……」

「どういふことだ……アーチャーは何をしているんだ？」

”わが辞書、不可能の文字なきなり”……アーチャーの人心掌握戦術が宝具と化した姿である。

（アーチャーのもう一つの宝具。こういう使い方もできるのか）

シャルロットはアーチャーがその宝具を使っているのははじめてみた。

皇帝であるナポレオンのカリスマ、その圧倒的な求心力に、耐性のない魔術師は暗示から逃げ出すことはできない。

「……」

「さて、アサシン……」

アサシンが爪を構えてアーチャーに迫るが、アバーラインはこれを制する。

「……いいだろう、お前の言うとおりだ。では、アーチャー、君を私たちの捕虜とする」

「セントヘレナと違って、ロンドンの地下は辛気臭いところだが、歓迎しよう」

「どちらでも構わんさ」

アーチャーは自信たっぷりに答えると、一旦シャルロットのほうを向く。

「そういうわけだ、マスター。悪いな」

笑いながら、どうとでもないという様子で謝罪する。

「アーチャー、あなた……」

シャルロットが不安そうにアーチャーに駆け寄る。

その大きな背中を両腕で抱きしめる。

「どうして、あなた、そんな……」

「心配するな、俺たちはまた会える」

アーチャーはそれ以上シャルロットの顔を見なかった。

「必ず、迎えに行く。どこにいようとまああなたをまた……!!」

涙を浮かべてシャルロットが叫ぶ。

「ああ、待つてる」

「アーチャー、ありがとう……といえばいいのか、すまないといえばいいのか」

バツの悪そうにエハッドがつぶやく。

「エハッド、それからカナウもすっかりやれよ。まだ終わりじゃない」

アーチャーは答える。

「お前たちの可能性を信じる。セイバー、バーサーカーも、後を頼むぞ」

「言われるまでもない……だが、少し見直したよ、英雄（エロイカ）」

「死なないでください、アーチャー」

セイバーもまた胸に手を当てて、今から捕虜となるこの皇帝に最大限の敬意を表した。

「では、アーチャー。我々に下るといふことでもいいな？」

「おう、問題ない。それで令呪はどうする？」

「アバーラインはコートポケットから一冊の本を取り出す。

「これに令呪を込めろ、シャルロット・ロジェ。偽臣の書だ」

「偽臣の書？」

「マスター権を譲渡するための礼装だ。これを作って、私に引き渡す」

「なるほど、それなら穩便に済ませられ……」

「待てよ」

「リヤオ・ファンが急に口をはさんだ。

「……どうした、リヤオ・ファン？」

「もっと、手っ取り早い方法がある」

「そう言いながら、リヤオ・ファンとランサーもまた前に出る。

「いったい何をするつもり……？」

「シャルロットの心臓の鼓動が早くなる。

「この期に及んでこいつらは何を。」

「こいつらにはまだ、払うべき“代償”が残っている」

そこから先、講堂の中はまるでスローモーションのように、音が聞こえなくなり、すべての物事に全員の目が釘付けになった。

リヤオ・ファンが憎悪に満ちた表情で、勝ち誇ったかのように何かを叫んでいる。

シャルロット・ロジェは目を見開いて、何が起きたのかわからないといった様子で、ただ空中に浮かぶ自分の右腕を眺めていた。

「えっ……？」

手の甲で輝く六角形の三つ並んだ赤い光が自分の体を離れていく。

恐る恐るその視線は次に自分の右腕があった場所を見る。

きれいに無くなった自分の右腕から血が堰を切ったかのようにとめどなく流れ出る。

ランサーは目にもとまらぬ速さで、彼女の令呪がついた右腕を切り落とす。

右腕がボトリと、嫌な音を立てて講堂の床に落ちる。

その瞬間、時間は再びもとの速度を取り戻し、彼女の叫びが時計塔じゆうに鳴り響いた。

Quantum — IV

— 国とは体である。

— 国とは魂である。

かつての我が国は崩壊した。

欲望にまみれた異教徒たちの手は、苦しむ赤子の叫びなど気にも留めない様子で、それらを四股からバラバラに引き裂いた。

体を引き裂かれる苦しみ。

言葉を押圧される悲しみ。

拷問に打たれる痛み。

” 持つ者 ” への僻み。

かつてともに立ち上がった同胞たちは、ひとりずつ倒れていった。

私の妻子も、すべて彼らに蹂躪された。

薄暗く寒い冬の日のあばら屋。

床にばらまかれる友の血液。

拘束され、順番に処刑されていく私の同胞たち。

寒さは痛覺を鋭敏にし、叫びは乾いた冬の空気によく響き渡る。

辛くも生き延びた私は、復讐を誓った。

西洋の異教徒たちを恨んだ。

お前たちにも聞かせよう、国とは言葉である。

ビリ、ビリと破く。

お前たちにも見せよう、国とは体である。

ザク、ザクと刻む。

老人は、復讐のためだけに聖杯へと迎合する。

かつて反乱分子として肅清された秘密結社の棟梁は、西欧列強のせん滅だけを目指して矛盾した魂を聖杯の中で燃やし続ける。

殺意をくべよ、憎悪を煮沸せよ、怨恨を立ち昇らせ、猛毒を啜れ。

我が名は毒の蠍、我が名は立ち上る龍。

すべてを毒で犯す者。

シ・ファンの頭領、ドクターと呼ばれるその老人は底知れぬ深淵から這い上がる。

一切の秩序はなく、すべて終わらせるためだけに存在した男の名前は“フリー・マン

チュー”という。

かつて清国の独立を目指し、欧米列強に肅清された、毒物のスペシャリスト、不老不死とうたわれた怪人。

目の前でランサーが、シャルロット・ロジエの右腕を切り落とす光景にアサシンは仮面の中で言いようもない充足感に包まれていた。

—西洋の雄が、争い、勝手に自滅していく様は実に愉悦である。

彼らは自らの信念こそが正しいと信じ込み、卑しくも衰え、滅んでいく。

アサシンは直接手を下さない。しかしアサシンが周囲に振りまく憎悪は人々の心といともたやすく盲目にする。

本当に警戒すべき存在が誰なのかを、彼らはまだ理解できていなかった。

時間が再び動き出す。

シャルロットは腕の痛みに絶叫する。

エハッドとカナウはその場を動けず、驚愕した様子でランサーを見ることしかできな

い。

イザイ・エルトナムはその光景に目をそらした。

ロード・エルメロイ二世はその光景に激高し、リヤオ・ファンに詰め寄る。

セイバーもまた激高し、今にも剣を構えてランサーに襲い掛かろうとするようであった。

バーサーカーだけはただ黙って、アバーラインを見つめていた。

収まりかけていた空気は再び混とんへと戻る。

この場の張本人であるアバーラインは何の感想も抱かず、

「手間が省けたな」

とだけつぶやいて、床に落ちたシャルロットの令呪のがついた腕を、サッカーボールでも扱うかのように靴で起用に蹴り上げ、つかみ上げる。

「……ああああ！　ぐっあああああ！」

ランサーは痛みに叫び続け、よろめくシャルロットのそばで、一切目をそらさず、その光景をひたすらに見ていた。

彼女の腕からあふれ出る鮮血が、ベイリンの鎧兜を真っ赤に染め上げても、彼は一切その血を一切拭わなかった。

「……」

「ランサー、お前……見損なつたぞ！」

「それでもアーサー王の……円卓の騎士か！」

アーチャーが怒号する。

しかし血みどろの騎士は何も答えない。

ロード・エルメロイ二世がカナウがシャルロットのもとへ駆け寄る。

なんとか彼女を落ち着かせると、床に座らせて、止血を試みる。

「シャルロット……落ち着くんだ。大丈夫だ！」

「しつかり！ がんばれ、落ち着いて！」

アーチャーがシャルロットに駆け寄ろうとするが、アサシンに制止される。

「……アサシン」

「ここでの目的は果たした。一緒に来てもらうぞ、アーチャー」

「クソツ！」

「美しい、主従だな。これ以上彼女を壊されたくないだろう？」

「……後悔させてやる」

アバーライン、リヤオ・ファン、アサシン、アーチャーが集まると、アバーラインはさつそく拾ったシャルロットの腕を使って偽臣の書に令呪を込める。

「離脱するぞ、リヤオ・ファン」

「……ハハハ、やったぞ。よくやった！ランサー！」

「キヤスターを殺し、アーチャーも俺たちのものになった。あとは偽物野郎と能のない音楽家風情だ……」

「勝てる、勝てるぞ……はははははは……！」

勝ち誇った様子で目を見開いて、狂ったかのようにリヤオ・ファンの笑い声がこだまする。

その隣でアバーラインが自身の体に埋め込まれた令呪に向かって唱える。

「令呪を持って命ずる。アサシン、ランサー、この場から離脱するぞ」

ハート形の令呪から一画が消費されると赤い光が、5人を巻き込んで遠くへ飛び去って行った。

ランサーが令呪の光に包まれる瞬間、ふいにホムンクルスの少女と目が合う。

「……」

少女は何も言わず、悲しげな眼でランサーを見た。

一方でランサーのほうは、兜を脱がず、だれにも姿を見せないで、そのまま消えていった。

シャルロット・ロジエの腕の出血がようやく収まりつつあった。

多量の血が講堂に流れ、彼女の顔色が青ざめたまま眠りについていた。

「くそっ……ランサーの野郎！」

講堂の隅でエハッド・ティーレマンは頭を抱え、怒りに声を震わせながらつぶやく。

居合わせた魔術師たちの知恵を振り絞り、なんとかシャルロット・ロジエは一命をとりとめた。

しかしながら、英霊に腕を切り落とされるといふ衝撃的な痛みは、間違いなく彼女にトラウマを残すだろう。

ロード・エルメロイ二世がすべての処置を施すと、学生たちに指示をして彼女を聖堂協会の管理する病院へと運ばせる。

血痕が残る荒れ果てた講堂で、カナウとエハッド、セイバーとバーサーカーは立ち尽くすしかなかった。

「リヤオ・ファン……アバーラインの野郎も……殺してやる！」

エハッドは強くこぶしを握り締めた。

カナウもまた、エハッドのその様子を心配そうに見つめ、そしてこの戦いでついぞ消

滅したキャスターのことを思う。

「あの言葉はどういうことなのだろうか……？」

言いようのない不安が頭のなかで渦巻いていた。

カナウ・アルバーンはイザイ・エルトナムの方を見た。

シャルロットの言う通りイザイがキャスターのマスターであるのなら、イザイは自分の母親であるはずだ。

しかし、写真で見た女性とイザイの姿は明らかに異なる様子であった。

別人のように。

その日の事の顛末をロード・エルメロイ二世は、人生で二番目に忙しい日だったと振り返る。

時計塔で起こった未曾有の大惨事について、これまで不介入だった法政科は待ち構えていたとばかりに調査に乗り出す。

化野と呼ばれた和服姿の東洋人の女性がロードとイザイ立会いの下で、事情聴取が行われ、関係者は時間の経過とともにだんだんと解放されていく。

その場にいた全員が、真実を話した。

「…とはいえあなたには“借り”もありますし、無罪放免…というわけにもいかないでしょうが、今回の件は聖堂教会監督役の暴走ということで。我々から先方に何かしらのアクションは取らざるを得ないでしょう」

「君にしては、やり方に若干の容赦すら感じるな。このまま講師をクビになるぐらいの覚悟でいたのだから」

「そんなことをすれば、あちらにいらつしやるお弟子さんたちをコントロールできない方がいなくなってしまうわ」

「悪びれた様子もなく、化野はエルメロイ教室の魔術師たちのほうを横目に見ながら答えた。

「あなたは、ご自分の価値をもう少し見積もり直したほうがよいかと」

「……それは自分の価値、とは言えないだろう」

憎たらしい調子でロード・エルメロイ二世はぼやく。

「ところで」と化野は続ける。

「ランサーの宝具についてなのですが……こちらで回収しておきましたが、これはあちらにいらつしやる聖杯戦争のマスターに戦利品としてお渡しすればよいのかしら？」

「私、聖杯戦争にはあまり興味もありませんから、こういう時どうしていいのかわからな

くて」

「宝具？」

化野が手をかざすと、白い蛇のような生き物がシユルシユルと音を立てながら二人の前に現れる。

蛇が加えていたのは、燃やされて激しく損傷し、黒変したランサーの盾であった。

「これはランサーの……円卓の騎士ベイリンの盾だな。戦いの最中に使い物にならなくなつたわけか……」

ロード・エルメロイが盾に触れようとした途端、

「いっ……っっ！」

激しい痛みがロードの指先に走る。

サソリやハチに刺されたかのような刺すような痛みがじわじわと指先に残る。

「なるほど。やはり、西洋人に対する強い憎悪の呪いがかかるみたいね」

「知っているのなら、最初に説明してくれ！」

悪戯っぽく化野は控えめに笑う。

「それにしても西洋人に対する強い憎悪とはどういうことだ？」

「西洋とそれ以外の世界。そのことこそが、アサシンの正体に迫るヒントになるかと。

さあ、ロード、あなたはどうお考えですか？」

「フン、我々に恨みを抱く人間など、星の数ほどいるだろう」

「それもそうでしたね」

「何かの役に立つかもしれない。シャルロット・ロジエに渡すがよい。彼女とアーチャーはこの時計塔戦争の一番の功労者だ」

「では、そのように」

化野の白い蛇はシウルシウルとその場から遠ざかった。

こうして、時計塔の動乱は終了した。

ホムンクルスの少女は結果としてイザイ・エルトナムの手によって修復され、彼女が求めていた情報は手に入った。

しかしの代償として、彼らはアーチャーのサーヴァントと、右腕を失うこととなる。

しかしながら、聖杯戦争はまだ終わらない。

量子の魔術師たるミランダ・ウォルフオークはすでに次の手を打とうと動き出していた。

そして残された魔術師たちも、マスターたちも、それぞれが自分たちの未来のために生き残るための方法を模索していた。

星はまだ、そこからいなくなっただけではない。ただ光を失い、見分けがつかなくなっているだけなのだから。

そしてそのような星の最後の輝きも、どこかはるか遠くで、長い旅路を経て、突然人々の前に姿を現すことさえあるのだ。

Material — ランサー（全公開版）／アー
チャー（全公開版）

【ステータス】

真名：ベイリン

クラス：ランサー

地域／出典：イギリス『アーサー王伝説』より

信念：秩序・悪

身長：196cm

体重：94kg

【パラメータ】

筋力：A 耐久：A

敏捷：C 魔力：A+

幸運：— 宝具：EX

【スキル解説】

・無貌の白盾 EX

ステータスやスキルを隠ぺいするスキル。

兜で姿を隠し、自身の盾を使わなかったために兄弟に気づかず、殺してしまった逸話からきている。

・反骨の相 B

一つの場所に留まらず、また一つの主君を抱かぬ気性。

自らは王の器ではなく、自らの王を見つける事ができない流浪の星。

同ランクまでのカリスマもしくはは従属を強いる簡単な暗示を無効化する。

・対魔力 A

魔術攻撃に対する強い耐性を持つ。

【サーヴァント解説】

ベイリン、アーサー王伝説に登場する”蛮勇”。

あのランスロットやラモラックとも並ぶ最強の騎士と呼ばれている。

アーサー王の配下の騎士として数々の戦役に参加し、アーサー王のイングランド統一に貢献した。

その戦いの影でその苛烈で容赦のない激しい気性から多くの敵を虐殺した蛮勇でもある。

最終的にアーサー王からも見放され、放浪の旅に出る。

彼の生涯はかつて抜いてしまった選定の剣に呪われており、その最期もまた兄弟で殺しあうという悲惨なものだった。

このベイリンは宝具をロンギヌスとすることから、ランサーで召喚された。

二本の剣を所持しており、こちらを宝具とする場合にはセイバーで召喚されることもある。

他、アサシンとして召喚される可能性もある。

【宝具解説】

「償いべからざる嘆きの塔」ランクEX 対界宝具

ロンギヌス。ベイリンが持つ罪業の現れ。

救世主の胸を突いたとされる、もう一つの聖槍。

かつて手にしたベイリン卿がペラム王と戦った際に見せた超絶の威力を發揮し、城をも破壊してしまった。

ロンゴミアアドと同等の知名度を誇り、ひとつの世界ともとれる固有結界にも比類し、世界に対する干渉力を持つが、

その神秘性と同等かそれ以上の魔術でしかこの攻撃を打ち破ることができない。

【ステータス】

真名：ナポレオン・ボナパルト

クラス：アーチャー

地域／出典：18世紀フランス

信念：中立・悪（召喚された地域の知名度により、侵略者としての側面が補強された）

身長：189cm

体重：92kg

【パラメータ】

筋力：B 耐久：A

敏捷：C 魔力：C

幸運：E 宝具：B+

【保有スキル】

・騎乗C

調教されている動物であれば大抵は乗りこなすことができる。

・単独行動B

マスター不在・魔力供給なしでも長時間現界していられる能力。

・皇帝特権 B

本来持ち得ないスキルを、本人が主張することで短期間だけ獲得できる。

【サーヴァント解説】

真名ナポレオン・ボナパルト。初代フランス皇帝。

中世フランスにおいてヨーロッパのほとんどを征服した将軍である。

その波乱に満ちた彼の生涯から彼の存在は人々の願いによって変質し、サーヴァントとしての彼の在り方に影響を与えるが、ことイギリスでは侵略者としての側面が強く影響し、彼の信念は悪に変化しており若干通常の状態より性格が悪くなっている……らしい。

【宝具解説】

・「高らかに歌え、凱旋の時を」ランク A+

ラ・マルセイエーズ・ラ・グランダルメ。対軍宝具。

砲兵としての経験と、指揮能力により、大砲の軍勢を召喚し一斉砲撃を行う。

魔力消費は大きいですが、殲滅力にたけた宝具であり、ナポレオンが敵地と認識する場所で発動すると威力が増大する。

・「我が辞書、不可能の文字なきなり」ランク B

コード・ナポレオン。対人宝具。

「不可能の文字はない」というナポレオンの完璧主義者の一面を表す宝具。

カリスマに近い人心掌握術にたけており、市民を巧みに先導した話術とオーラを発揮する。

暗示に耐性のないものであれば簡単な命令に逆らうことはできない。

第四章 — 量子の魔術師

I — 乾杯

ロンドン東部 病院

「……犯人の行方はいまだ掴めておらず……」

「市内の大学で薬品の爆発事故が……」

どこからか聞こえるニュース番組の音。

病院の玄関ホールに壁に取り付けられた巨大ディスプレイに浮かび上がるのは、仇の顔だった。

ロバート・アバーライン刑事の不愛想な顔写真が画面に表示され、コメンテーターたちはこぞって彼の経歴について様々なコメントを出している。

時計塔での抗争から二日が経過した。

その間、聖杯戦争のマスターたちの間に大きな動きはなかった。

これまでの苛烈な戦いが嘘であるかのように、生き残っているマスター全員がまるで示し合わせたかのように動きを見せず、不気味な膠着状態が続いていた。

右腕を切断され、令呪ごとアーチャーを奪われたシャルロット・ロジエ。

彼女は聖堂教会の管理するロンドン東部の病院へと搬送されていた。

今日になってようやく面会が許可されるようになったので、セイバーのマスターであるカナウ・アルバーンがここを訪れていた。

「……だよな……」

この病院では聖杯戦争に巻き込まれた負傷者たちの治療や記憶の処理を施している。

普通の病院では診られない魔術や呪いによる病状。様々な事情で怪我を負った魔術師たちの治療を行う。

ロンドンでの聖杯戦争にあたって、聖堂協会は魔術協会と協力して「神秘の秘匿」に尽力している。

人口の多いロンドンにとって、いかに民間人に悟られず儀式を遂行するかは彼らにとって最大の課題である。

今しがたテレビで流れているニュースの数々も、聖堂教会が事件の真実を隠蔽し、代わりとなるシナリオを用意したものだ。

これまでロンドンでの魔術師による騒動は、ロンドン警視庁とも顔なじみであるアバーラインによって処理されていたのだという。

しかしそのアバーラインが聖堂教会から離反した今、教会の方でも大混乱が起きてい

ることだろう。

結果としてアバーラインは聖堂教会と魔術協会どちらの側からも狙われる立場となり、今もその居場所について議論が交わされている。

受付を済ませると、病室の番号を教えてもらい、カナウはエレベーターに乗り込んだ。上階に上るエレベーターからテムズ川周辺の景色が一望できる。

外側から見たロンドンの時計塔は、いつも見ていたあの景色と何ら変わらない。

しかし、そのテクスチャを一度はがしてしまえば、中は魔術師たちの世界。

そんな時計塔のすぐ近くで、民間人たち、おそらく観光客と思しき集団が今日もやってきていて、時計塔をバックに写真を撮ったりと大賑わいだ。

エレベーターが目的の階への到着を告げるベルが鳴る。

エレベーターを出て、カナウは目的の部屋を目指す。

ふと、カナウは顔を上げる。

シャルロットの病室から二人の男女が出ていき、廊下ですれ違う。

風貌にはどこことなくシャルロットに似た影がある。

女性のほうはハンカチで目を覆い、男性のほうはそれを支えるようにして歩き、今しがた彼が乗ってきたエレベーターに乗って下の階へ降りて行った。

—シャルロットの両親だろうか？

カナウはそんなことを考えながら、目的の病室にたどり着く。
ネームプレートは「シャルロット・ロジェ」の文字が書かれている。

ノックして入ると、広い個室の隅に置かれたベッドの上で上体だけ起こしたシャルロットが左手で起用に紙の束を整理しているのが見えた。

右肩の上腕から先が無く、包帯が巻かれているだけの様子は痛々しいものだったが、シャルロットは気にも留めてない様子で、資料に目を通していた。

「シャルロット」

「あら、もう来たのね」

シャルロットはカナウを見るとニッコリしながら部屋の奥にある丸椅子を指さした。

―シャルロットのこんな顔、初めて見た。

そんなことを思いながら、カナウも安心したように笑い、腰を下ろした。

「何読んでたんだ？」

「リヤオ・ファンと、ミランダ・ウォルフオークの資料。ロード・エルメロイの……妹さん？ にお願ひして、調査してもらったの」

「なんでそこでクエスチョンマーク？」

「複雑な事情があるのよ」

「どうかあなた……」

シャルロットが目を細めてカナウをにらみつける。

「こんな状況に、サーヴァントもつれずに歩いてるってどういうこと?」

「あ、ああ。セイバーはセシリアの方についてもらってる」

「本当に信じられない……」

—知らないわよ。きちんとしたお別れもできずにセイバーが消えちゃったりしても。

そう言いかけて、さすがに今の自分が言うのとシャレにならないのではと思い、言いよ
どんだ。

「まあいいわ。ここ聖堂教会の管轄だし、まさかアバーラインも乗り込んできたりはし
ないでしょ」

「私ももう、サーヴァントを失ったわけだし、聖杯戦争に敗北したマスターってことにな
るわけだし」

「でも、まだ諦めてないんでしょ?」

「当たり前じゃない」

シャルロットは力強く答えた。

「迎えに行くって、約束したから。セントヘレナだろうがどこだろうが」

「……その意気だよ、シャルロット」

彼女の自信に当てられて、カナウも調子を取り戻す。

「それにしても不思議だわ」

シャルロットはここまででの戦いを振り返りながらぼやく。

「あれだけ警告しておいてなんだけど、あなたがここまで生き残ってるなんて」

「アハハ……皆様のおかげでなんとか」

「本当にね。たまにはセイバーのことも労ってあげなさいよ」

「そうだな……なにか考えるか」

カナウが何かを考えていると、シャルロットが不意にカナウを顎で指す。

「その戸棚開けてみて」

「戸棚？」

シャルロットに言われて戸棚を開けると、ワイングラスと赤色のボトルが出てくる。

「えっ……シャルロット、君まだ……」

「私の家のワインなの。子どもものころから飲んでたわ」

カナウは目を丸くするが、シャルロットは平然と返す。

イギリスではお酒は二十歳からだとか、病院に堂々とアルコールをボトルで持ちこんでることとか、いろいろカナウには言いたいこともある。

「もしかして、飲んだことない？」

「お酒はほとんど飲まない。ワインなんかとても……」

——応養つてもらつてる身だし、贅沢はそれほどできない。

「一杯でいいから、付き合つてよ」

彼女が穏やかな顔でカナウに提案する。

「それじゃ、お言葉に甘えて……」

静かな病室の中、テーブルの上にワイングラスに入った赤色のワイン。

周囲の白色が余計に、ワインの赤色を引き立たせる。

カナウは緊張と、その色の美しさに喉を鳴らす。

恐る恐る、慣れない手つきでグラスの細い部分をつまんで持ち上げる。

シャルロットのほうは慣れた手つきでワイングラスを持ち上げる。

「作法とか気にしなくてもいいわよ。アーチャーにも飲んでもらつたけど、あの人もか

なり適當だったし」

「アーチャーともワインを飲んだのか？」

（人が人ならフランス皇帝とワインで乾杯なんてした日には嬉しすぎて気絶するんだろ

うな）

「ええ、すごくワインにうるさい男だったわ。でも私のワインはとても気に入ってくれたみたい」

「そうなんだ、すごいな……」

「ええ、一族の者として、私も鼻が高いわ」

「さて、それじゃ、乾杯！」

ささやかにグラスを突き合わせる。

口に入れた瞬間、じわじわと複雑な風味が混ざり合う。

「……うっ」

強烈な苦みと渋みがカナウの下を襲う。

後には炭酸の刺激が残り、口の中でしばらくの間はじける。

なんとか飲み込むが、ほんやりとした感覚が頭に残る。

「……これがワインの味か、すごい……個性的だね」

「ふふふ、まあ初めて飲むんだし、仕方ないわね」

逆にシャルロットは慣れているという感じで、口の中で楽しんでるようだ。

「ナポレオンはこうも言っていたわ。」ワイなくば兵士なし」

「彼にとつてワインとは兵士の士気を高め、戦争の残酷さ、戦友の死の悲しみから忘れさせてくれるもの」

「なんだか、慰められるような気分になるわ」

そういって、グラスを傾けるシャルロットの姿は高貴なものだった。

「君たちは本当に、最高の相棒って感じだな」

カナウがそういうと、シャルロットのグラスを傾ける手が止まる。

「ええ、召喚したのが彼で本当に良かった」

「ところで……話を戻すけど、カナウ」

グラスを置いてシャルロットがいう。

「たまにはセイバーのことも労ってあげないとだめよ。なんならボトルもう一本あるから、持って行っていいわよ」

「い、いや。どうだろうワインは……」

「いいから持っていきなさいよ。飲めなくてもいいから付き合っただげるの」

「それでいいのか？」

カナウがポカンとした様子で尋ねる。

「一緒の時間を過ごすことこそが大事な。一緒に過ごして、もっと話をしてあげて」「セイバーのことだから、彼女もきつとあなたに遠慮してるんでしょ？」

「……」

もう一度グラスを傾けて口に含む。

一口目で強烈だった刺激も、二口目になると妙になじむ感じがした。

ふわふわと浮かぶような高揚感が心地よい。

”ワインなくば兵士なし”か……」

時計塔戦争での傷など忘れたかのように、二人の間に優しい時間が流れた。

「やれやれ、入るタイミングを見失ったかなこりや」

病室の外、エハッド・ティールマンとパーサーカーはポツンと立ち尽くしていた。

「もつと深刻な様子だと持っていたのに、強いなああの子たちは」

「うむ、運命にあらがうには、時に休息も必要だろう」

「それじゃ、空気の読めるエハッド・ティールマン氏は、もう少し二人だけにさせてやるか」

その一時間後、エハッド・ティールマンが病室に入る。

「ブロンズリンク・マニピュレーター？」

「ああ、エルメロイ教室のカウレス・フォルヴェッジって青年、覚えてるか？」

「知ってるわ。ユグドミレニアの……」

「彼の姉が使っていた接続強化型礼装の派生でな、より小型にして制御が利くように彼

が改良したものらしい、本来は動物の魂をインストールさせたりと手間のかかるものなんだが、カウレスのそれは電気エネルギーで代用できるらしい……」

シャルロットの病室にエハッド、シャルロット、カナウの三人がそろろう。

シャルロットとエハッドは酒気が抜けきっておらず顔が少し紅潮していた。

エハッドは大型のボストンバッグから今しがた取り出した鋼鉄の礼装を取り出して説明する。

出てきたのは鋼鉄の腕を模した礼装だった。

「これ、義手ってこと？」

「ああ、魔術の行使もできるはずだ」

「よくこんなもの用意できたわね……」

驚いてシャルロットがため息をつく。

「ああ、助けてくれた礼にと、フラット・エスカルドスと徹夜で製造までやってのけたらしい」

「いい友人を持ったじゃないか、シャルロット。俺たちを取り巻く環境は確実に変化している」

「絶対に、この聖杯戦争生き残ってやろうぜ」

そういつてガッツポーズをとるエハッド。

「さつそく装備していくかい？」

「包帯をはがさないといけないから、あとでね。それより……」

シャルロットが左手で資料の束をかき集めてテーブルに広げる。

「リヤオ・ファンとミランダのデータをまとめてもらったの」

「何か手掛かりになるものはあつたか？」

「ええ、興味深いものがね。読んでみる？」

エハツドが束を受け取ると、カナウにも聞こえるように声に出して読み始めた。

「……リヤオ・ファン。東洋の魔術系統を汲むファン家の長男、次期当主か。かつてはロード候補を多く輩出した家系だが、現在は活躍も少ない……没落気味といった感じか」

「まあ東洋魔術って、西洋魔術に比べて先細りが激しいからな。時計塔みたいに本山と呼べるような大規模な魔術機関もないし」

「これまでの聖杯戦争でのやりとりを見て、マスターとしての力量はないと断言できるわ」

「お、おお……言い切つたな。でも、それは俺も同意見だ。マスターとしてのあいつはさほど脅威ではない」

—問題は。

「問題は……ランサーの方だな」

腕を組みなおしてエハッドがつぶやく。

「あの宝具、ロンギヌスを抜かれたら対処のしようがない……時計塔の時はキャスターに助けられたが、まさかサーヴァント一体と引き換えとは」

「サーヴァントは元となった英雄の逸話が弱点となることがあるんだったか」

カナウは確認する。

「そうよ。だから、通常の聖杯戦争ではいかに相手のサーヴァントの真名を把握して、逸話に即した弱点を用意できるかが鍵なの」

「弱点か……ベイリンの弱点なんか、あったか？」

「アーサー王伝説なら、一通り知られているだけの本は読んだことがあるけど……弱点ってほどのことは思いつかないよ」

カナウはかつて手に取った本の一つのことを思い出す。

ベイリンは円卓騎士結成前に王の配下だった騎士だ。

「アーサー王か……」

「セイバーが遍歴の騎士を名乗るきっかけのひとつでもあるわよね」

シャルロットはつぶやく。

「それなら、セイバーの宝具でこつちも同等の武器を用意してやればいいんじゃないか

？ ロンゴミニアドとかどうだ？」

「いや、セイバーの宝具で再現した武装は本物よりランクが下がるはずだ。互角に渡り合うのはきついかもしれない」

「なら、バーサーカーの予知能力は？」

「あれは予知能力なんかじゃないって……それに、あれだけの広範囲攻撃を予知だけかわすのは不可能だ」

しばらくの沈黙。

「こうなったら、マスターを直接手にかけるしか……」

「そ、それはダメだ！」

カナウが即座に反論する。

「でもアイツはシャルロットの腕をなんの躊躇もなく切ったんだぞ。魔術師たちにとって命よりも大事といえる魔術回路をダメにしたんだぞ……」

「それはわかってるけど……」

言い淀み、カナウは下を向く。

「そうね。リヤオ・ファンを殺害するというのも一つの手だと思うわ
シャルロットもうなずく。」

—ただし、と続ける。

「でもそれは最終手段ね。セイバーとバーサーカーにランサーを倒せないと分かったら、その時はマスターを狙うわ。いいわねカナウ？」

「……わかった」

「ミランダ・ウオルフオークと……アバーラインと、アサシンはどうする？」

「アサシンはほとんど情報がないのが痛いな……気配遮断はそれほど高くないから、感知能力の高いバーサーカーでならなんとかなるとしても……切り札は欲しいな。せめてアサシンの真名がわかればバーサーカーの宝具を使えるんだが」

「ミランダはバーサーカーの対心宝具を警戒して、アサシンの真名につながる情報はほとんど伏せるように立ち回らせていたから……唯一の手掛かりといえば、あれかしら」

シャルロットは顎で、病室の隅を指す。

二人がその方向を見ると、隅に置かれた巨大なトランクケースがおかれていた。

「中開けてみて、直接触らないように慎重に開けて」

「？ ああ、わかった……」

カナウがトランクケースを慎重に開けると、中に入っていたのは黒く変色しつつある盾だった。

「……これベイリンの盾か？」

驚いた様子でカナウが尋ねる。

「時計塔に落ちてたのを法政科が拾ったんだけど、ロードが私にとってよこしてくれたの」
「その焦げ跡、アサシンによるものらしいわ」

「アサシンの？」

「ええ、西洋由来の存在に対する強い怨念を抱いているって」

「西洋由来……西洋に恨みを持ってそうな英霊なんていっぱいいるけど……だれかいたか？」

エハッドは思慮を巡らせるが、思い当たるものが多すぎて断念する。

ふと、エハッドが顎に手を当てて、何かを思い出す。

「この盾、使えるんじゃないか？」

「どういうこと？」

シャルロットが尋ねる。

「あのベイリンの盾ともなれば、防御力は抜群だ」

「……いや、すまん。やっぱり忘れてくれ。というかこの盾、俺たちには使えないだら？」

「そこなのよね……ロードの話では触っただけで呪いでひどいくらい手が痛むらしい

し

「……」

ベイリンの盾を囲んで三人が考えあぐねていると、カナウが突然ベイリンの盾に手を伸ばす。

「あ、おい！」

「バカ、触ったら……」

カナウは盾を触るが、特に痛む様子は感じられない。

「……やっぱりだ。少しピリピリするが、これなら平気だ」

「カナウ？ どういうことだ？」

「あなたについてもしかして痛いのが好きな変態？」

「ち、違うよ！ そうじゃないんだ……」

カナウは説明する。

「僕はミックスなんだ。アジア系の血も流れてる」

「うちの家系は人種が混じってるせいで宗教とかも適当で、特定の宗教を信仰していません。あ、家系が多国籍だとよくあるやつな、それでごちゃ混ぜになっちゃって信仰心自体

が薄れるやつ……」

「カナウにはその盾が使えるってこと……?」

「まあ僕なんかが持ったところで、って感じだけど……」

—それって、もしかして。

「シャルロット、どうした?」

「……えっ?」

シャルロットが突然ぼうっとし始めたので、エハッドとカナウが心配して彼女の顔を覗き込む。

「どうした? ぼうっとして」

「いえ、なんでも、何でもないわ。ちよっと考えすぎてアルコールが回ってきたみたい」
「今日はここまでにするか……?」

「待って、ミランダについてももう一つ重要な情報がある」

エハッドが切り上げようとする、シャルロットが引き留める。

「ミランダ・ウォルフオークの居場所が分かったの」

改まって、シャルロットが説明する。

「本当か？」

「イザイ・エルトナムが教えてくれたの」

資料の余白にペンで絵を描き始めるシャルロット。

利き手でないが器用に描いたのは、時計塔の絵だ。

「アバーラインがアーチャーを連れ去るとき、ロンドンの地下世界って言うってたの覚え
てる？」

「ああ、そういえばそんなことも言ってたか」

「あの言葉、言葉通り、ロンドンの地下世界なのよ」

「ええと……地下鉄駅ってことか？」

シャルロットが時計塔の下に大きく丸を書いて斜線を引く。

「まさか……」

合点がいったという様子でエヘッドがつぶやく。

「時計塔の地下に広がる巨大迷宮……」 霊墓アルビオン」

「マジスフェアと呼ばれる、時計坑（クロックホール）の地下都市にいる」

「シャルロット、本気なのか？」

陽が傾きだしたのでその日は解散となり、先にカナウがセイバーたちの様子を見に帰ることとなった。

カナウを見送った後、エハッドにはもう少し時間があつたので、細かい打ち合わせをもう少し練ることになった。

「その作戦、確かに効果的だと思うが……カナウが聞いたらなんて言うか」

シャルロットが提案した作戦に、エハッドは声を低くしてつぶやく。

「カナウには絶対に言わないで……この罪業は私だけが背負う」

「罪業なんて言うなよ。俺たちは聖杯戦争の魔術師なんだ。こうなることはわかってたや」

「……」

シャルロットの目は、カナウたちと出会った頃のように、再び冷たいものとなった。

エハッドは今しがたシャルロットの言い放った「秘策」に言いようのない不安を覚える。

「覚悟を決めたって感じだな。わかったよ」

「だが、その“秘策”は本当に最後の手段だ。俺たちはあくまでランサーとアサシンを正攻法で倒すことを諦めない」

「私だって、アーチャーを取り戻すのをあきらめてないわ」

「アーチャー……そうだな。アーチャーもいる。きっとなんとかなるさ」
病室の窓から外の景色を見る。

遠くから時計塔の鐘の音が聞こえてくる。

今日もロンドンの街を、人々は何も知らず歩いている。

街を見下ろすとふと見知った人物の姿をとらえる。

地下鉄駅に入ろうとするカナウ・アルバーン。

——俺たちはやっぱり相いれないのだろうか？

その日一日が終わるまで、エハツドはシャルロットの目つきが頭から離れなかった。

II — 猛毒

ロンドン カナウの家

「な、なんで……」

ロンドンの夜が近づいていた。

自宅に帰ってきたカナウを待ち受けていたのはありえないはずの来客だった。

「ど、どうして……」

ダイニングのテーブルで向かい合うようにキャスター、ガンダルフと、セイバー、アロンソ・キハーノとホムンクルスの少女が座っていた。

あの時計塔の戦いで確かに、ロンギヌスをもろに食らい、消滅したはずのキャスターが勝手に拝借したカナウのティーカップで紅茶を飲んでいるではないか。

「ガンダルフ!? 生きてたのか、まさかまた幻術を？」

驚いた様子でカナウはガンダルフに駆け寄る。

当の本人は「やあ、おかえり」などと呑気な様子で言うので、カナウはあきれ半分にただただ質問を並べることしかできない。

「生きてたのか? でも確かにあの時……」

「心配してくれてうれしいよ。こんな老いぼれを……」

そう言つて少女然とした姿の自称おいぼれの魔法使いは照れながら微笑んだ。

「だが、残念ながら私は確かに死んだのだ。」サーヴァント」としてはな

「どういうことだ？」

「ここにいるガンダルフは正真正銘本物のガンダルフということですよ、カナウ」

セイバーが代わりに答えた。

「本物だつて？」

「そうだと。色々理屈はあるんだがまあ君のために超ざっくり説明するとだ。歩いて

きたんだよ。」中つ国”から」

「中つ国から……つて、ええ!？」

訳が分からないといった様子でカナウの声が裏返つた叫びが部屋中に響いた。

「つまり、サーヴァントとしては退去することになったが、中つ国の、サーヴァントじゃない本物のガンダルフが、ここまでわざわざやってきたということか？」

少し落ち着いたのか、カナウはゆっくりと事実を確認することにした。

「理解がはやくて助かるよ。つまり、次に死んだら本当にお別れってこと」

「あっさり言うけど、あなたが死んだらその・・・中つ国の方は大丈夫なんですか？」

「問題ない。妖精どもは仲良くやっているし」

中つ国について、カナウは様々なことを質問したくてウズウズしているのだが、キャスターはなんとか話題を戻そうとする。

「それよりも、私がこうして君の家まで歩いてきた理由について説明しなければならぬ」

「ええと、どこから説明したらよいか・・・」

「ガンダルフ、願望の人間とはいったい何なのですか？」

考え事をしているガンダルフに今度はセイバーが口を開いた。

「おっと、その話か。ならまず、イザイ・エルトナムの夢について話をしなければならぬいな」

「イザイの夢、そして人類の夢さ。人間が自らの力で願望を実現する。言ってみれば人間一人一人が聖杯をもった世界さ」

「人類みんなが聖杯をもった世界？」

「そういうことさ。本当にそんなことができるのなら素晴らしいだろう？」

「聞いた限りじゃ、反対する理由はない……と思う」

—本当に額面通りの意味なら、これ以上に素晴らしいことはないのではないだろうか？

—しかし本当に、そんなうまい話があつていいものだろうか？

「私はね、カナウ。そんな世界が果たして本当に存続できるのかどうか興味があつたんだよ。だからちよいとこの世界に干渉してやることにしたのさ。キヤスターのガンダルフとしてな」

腕を組み、得意げにガンダルフは答えた。

「この世界に住むものとして、君はどう思う。人間が自らの願望を自由にかなえられる世界なんて、本当に実現できると思うか？」

「……イザイには悪いけど、それこそ”おとぎ話”や”小説”のような話だと思う」

「いや、私も同意見だよ。それどころか世界を滅亡させかねない発想さ」

なぜなら、とガンダルフは声を低くする。

「この世の中には邪悪な願望を持つ人間だつて少なからずいるのだからね」

カナウたちの頭にはアバーラインの顔が浮かびあがる。

「この世の中は善意だけでなりついているわけではない。願望の人間はかならず悪意をも実現させてしまおうだろう」

「秩序が崩壊すれば、この世界そのものが、未来のない行き止まりの人類史として、”摘み取られる”可能性だってある」

「世界が終わるってことか？」

「プツツリと消えるのさ。まるで電源を落としたようにね」

——まあその辺の話は、本当にごくわずかな確率の話だ。とガンダルフは補足した。

「アトラス院がどうして作ったものを外へ持ち出さないのか、よくわかったよ・・・」

溜息を吐いてカナウはつぶやいた。

「でも、どうしてそこまで僕たちに説明してくれるんですか？」

「僕たちがあなたたちを止める可能性については？」

「君は止めないさ。カナウ・アルバーン」

カナウが尋ねると、自称老年の魔法使いは再びにつこりと笑って見せた。

「君が死んだら、誰も彼女を守れない。君のように魔術師世界に属さない人間だからこそ、務まる役目なのさ」

「これから私たちはこの聖杯戦争の結末を見届けるために行動する。もし協力が必要だ
というのなら喜んで手を貸そう。」

「アバーラインたちに悪用されるより、君たちが勝つ方がよっぽど夢見がいい」

「監督役があつちに寝返つたんだ。あちらも卑怯とは思うまい」

「私は君たちの行動をいつも見ている。用があつたらいつでも呼びたまえ、どこからと
もなく現れるからさ」

「キャスター、最後に一つだけ聞かせてくれないか？」

玄関扉の前で、カナウがガンダルフを呼び止める。

「聖杯戦争の決着がいたら、彼女は・・・セシリアはどうなるんだ？」

「実験が成功すれば、彼女は ” 願望の人間 ” となる」

「 ” 願望の人間 ” というのはその・・・長生きしたり、普通の生活を送れるようになるの
か？」

カナウは恐る恐る尋ねる。

ガンダルフは少し間をおいて慎重に答える。

「普通の生活・・・というのは少し難しいだろうな。長生きはできるだろう。彼女がそう
願う限りはね」

「……魔術師世界が彼女にどのような態度をとるのかもわからない。この世界の知識を借りて言えば彼女は正真正銘イヴのような存在なのだから」

「……」

カナウはそれ以上何も言うことができなかつた。

魔術師世界が彼女に対して行うこと——どうせ碌なことではないだろうと、カナウはこれまででの経験から察していた。

「成長した彼女が、何を願うのか、まったくの未知数だよ」

「君がかかわった命だ。君は必ずその責任を負うことになるぞ」

低い声でガンダルフがつぶやいた。

「腹をくくれ、カナウ・アルバーン。この先はもつと魔術師世界の残酷さを目にすることになる」

ひとりでに玄関のドアが開き、ガンダルフは外へと出た。

カナウはガンダルフを外まで見送ろうとしたが、ひとたび彼女がまもっていたマントを翻すと、編集された動画のようにその場からぱったりと姿を消してしまった。

狐につままれたような様子でカナウが立ち尽くしていると、彼の後ろから、セシリアが声をかける。

「また、どこかへ行くの？」

このようにホムンクルスの少女が他者に対して興味を持つとうとするのは、カナウにとつて初めての経験だった。

「ああ……でも心配はいらない。必ず帰ってくるさ、セシリア」

「私も彼と同じ気持ちです」

セシリアの背後にセイバーが現れる。

振り返つてカナウは答える。

微笑んではいるが、どこか悲しげに視線をそらして、二人は家の中へ戻つた。

アロンソ・キハーノは一人玄関の前に残ると、暗くなりつつある星空を見上げた。

この時期のロンドンには20時近くまで日は落ちないが、そこにひとつだけ一番星が輝くのを見つけた。

聖杯から与えられた知識から、彼女はそれがとある銀河の恒星であることを知つていた。

その星の輝きでさえも、ロンドンの地下深くまで届くことはかなわないだろう。

そのような光の届かない暗闇に向かつて旅をした邪竜というのは、いったいどれほどの恐怖にさらされたのだろうか。

それとも、案外星の内海というのは、かつて彼女が読みふけた本にある誰かのため

の理想郷のように、光あふれるような場所だったのだろうか。

それとも、光など存在せず、やはり暗闇の中で孤独に今も旅を続けているのだろうか。それとも、邪竜にはそうまでして会いたい人がその果てにはいたのだろうか。

物思いにふける間にも、夜のとぼりが広がりはじめ、上を見上げていた彼女は自分が空に向かつて落ちていくような錯覚に陥って、体のバランスを崩しかけた。

転ばないようにその足でしっかりと地面を踏みしめ、彼女は何かを再び決心し自室に戻った。

採掘都市 マギスフェア

採掘者たちが地上に戻るのがめんどくさいとして作り上げた生活圏が由来。ある意味で、もう一つの学術都市。

それでも採掘都市に引きこもって、ほとんど他者とのかわりを持たないような変人の魔術師たちでさえ、ここ最近現れた魔術師とサーヴァントたちに注目していた。

掘り進められ地表に露出したままの鉱石が星空のように周囲を照らすこの都市で、今話題になっているのは量子の魔術師だった。

窓の隙間から痛いほどの視線を浴びながら、不機嫌そうな様子でリヤオ・ファンは採掘都市の中心部を歩いていた。

その後ろにこれ見よがしに彼のサーヴァントであるランサー、ベイリンを従えて。

リヤオ・ファンもベイリンも、一言も発することなく、ただただある場所を目指して歩いていた。

後ろを歩くベイリンはなおも兜をかぶっていた。

実のところリヤオ・ファンはあの事件以降、ベイリンの顔を見ることがなかったし、言葉もほとんどかわしてはいなかった。

彼にとつては自分のサーヴァントが何者なのかということとはもうほとんどどうでもいいことだった。

時計塔での戦いの後、彼らはアーチャーのサーヴァントを手に入れ、同盟だったキャスターはすでに消滅した。

（彼らに残されているのは偽物をふるうことしかできないセイバーと、しがない音楽家の老人だ）

（アサシンの能力にはいまだ不可解な点が多いが、そもそも三騎士であるランサーとアーチャーを相手にどうにかできるわけがない）

（勝利は決まったも同然だが・・・あの神父、どうしたものか）

ランサーのマスター、リヤオ・ファンは目下もうひとつの気がかりな点について案を巡らせていた。

彼もまた、アサシンのマスターを名乗るこの聖堂教会所属の監督役の真意を見抜けずにいた。

（あの神父にマスター権を譲渡した理由はなんだ、ミランダ？）

（いくら聖杯戦争だからと言って、聖堂教会に勤めていた男がこうもあつさり寝返るのはどうしてなんだ？）

マジスフェアに来てからもリヤオ・ファンは何度もその理由を分析しようとした。

ところが分析を進めれば進めていくほど、煙のような何かが彼の頭に沸き上がり、思考を妨害するのだ。

（疲れているのか・・・それともほかのサーヴァントからの攻撃なのか？）

（思い出せ・・・ここへ来てから何があった。確かアバーラインとともに時計塔から出て・・・）

「くそつ、くそがつ・・・あいつら・・・」

頭に手を当てて、建物の壁にもたれかかって、彼は深呼吸することにした。

この街を照らすのは太陽ではなく、赤々と輝く松明とその光を反射して返す露出した鉱石だけだ。

陰鬱な採掘都市の光景は彼の消化器官を余計にいらだたせた。

この3日間、ほとんど食事がのどを通らない。

「……殺してやる。殺してやるぞ……カナウ・アルバーン、シャルロット・ロジェ」
「マスター、具合が悪いのか？」

心配したランサーがリヤオ・ファンに近寄ろうとするが、リヤオ・ファンは腕を振って退けた。

「余計な心配するな、ランサー。それより、ミランダが僕を呼んでいる……」

「ミランダから次の計画はすでに知らされている。やはり今無理をして外へ出る必要はないと思うが」

「ハッ、そういうわけにもいかないんだよ……当主として、勤めを果たさなければ」

ふとりヤオ・ファンはポケットからスクロールを取り出した。

「その手紙は……」

「催促の手紙さ、一刻も早く聖杯戦争で勝者になれ、とな。起死回生のためには、もう聖杯戦争に勝つことしか手段は残されていない」

「……まで来て脱落するわけにはいかないんだ……必ず僕は勝者となる。そのためならなんだってやってやるさ」

スクロールを口にくわえると一気に力を込めて噛んだ。

あまりの圧力に彼の齒ぐきからは血が滲み始める。

「ぐっ……うおおお……」

頭に血を巡らせる。

ふらふらとしながら自分を保つと、少し楽になった気がした。

リヤオ・ファンは再び歩き始め、ランサーも兜をかぶったままその後ろをついていくことにした。

「ひどい面だぜ、マスター」

ふとランサーが後ろから声をかける。

リヤオ・ファンはこれまでランサーと行動を共にしてきた。

顔は見えないが、その声はいつにもまして優しいものだった。

「……そう思うのなら、僕が少しでも楽できるように、早く戦いを終わらせてくれないか」

ランサーのほうを振り向くことなく、リヤオ・ファンはひたすら歩いた。

相も変わらず、ロンドンの地下のどこかから彼女は戦場を見渡していた。

金色の液体が満たす直径一メートルと少しばかりしかない彼女の領域の中で、ミランダ・ウォルフオークは次の手を打つべく電子の海で量子の脳を稼働させていた。

「その様子を見るに、私の手は口に合ったようだな神父、年代物だぞ」

「・・・味のことを言っているのなら、最悪だったよ。ミランダ」

調整槽の前にアバーラインとアーチャー、そしてアサシンが立っていた。

「伝統ある魔術師の家系である君が、マスター権を譲渡するとは思いつたな」

「ダーニックに影響でもされたか？」

アバーラインは挑発的な態度で尋ねるが、目の前の人形は口も目も開かずに言葉を発した。

「私をあの男と一緒にしないでもらいたい。当初から私の方針は変わっていない」

「聖杯戦争においてマスター権の譲渡は想定されている戦術だ」

「これでこちらにはアサシン、ランサー、アーチャーの三騎が揃った」

「ロンギヌスのベイリン、皇帝ナポレオン、加えて真名が漏れていないアサシン・・・」
「勝機は限りなくこちらにある。お前もこちらに下った以上、最後まで務めを果たすこ

とだな、アバーライン」

「・・・」

アバーラインは黙ってうなずいた。

彼が合図をすると、暗闇の奥からホルマリン漬けの腕が運ばれてきた。

「そいつは……」

見慣れた令呪の形を見て、アーチャーが呻いた。

「シヤルロット・ロジエの腕だ。これで、アーチャーのマスターになれるだろう」

「……なるほどな。使えないアサシンよりも、俺をサーヴァントにするというわけだな」
「見る目があるぜ、マドモアゼル。そうだなあ、こんな辛気臭いサーヴァントより、俺を従えて聖杯戦争に勝ったとなりや話題性も十分つて寸法だ」

ナポレオンが強がつて挑発するが、アサシンは何も言わなかった。

「チツ、面白くねえ奴」

「アサシン、お前は何とも思わねえのか？」

「……マスターの指示は絶対だ」

「けどよ、こいつはお前を捨てたんだぜ。崇高なる儀式だなんだ言ってるが、テメエのサーヴァントで勝負する自信がないってことだろ？」

「……その辺にしておけ、フランス皇帝」

アバーラインが遮る。

「お前もだぜアバーライン。お前も、あのリヤオ・ファンつてやつも結局この女の捨て駒

になつて終わるのさ」

「これ以上、新しいマスターの機嫌を損ねないほうが良いぞ」

「上等だぜ。俺を従えたければ、それこそ令呪でも使うんだな。アイツの腕を吹っ飛ばしたみたいによ！」

アーチャーが声を荒げる。

砲塔を取り出して、ミランダの調整槽めがけて引き金引こうと動き。

「では、さっそく使わせていただくとしよう」

砲撃が放たれることはなかった。

どこからともなく女の声が響く。

暗闇からコツコツと歩く音が聞こえて、人影が見えてきた。

白く、時代錯誤なドレスに身を包んだミランダ・ウォルフオークの人形が現れる。

人形がホルマリン漬けの腕に手を伸ばすと、ひとりで腕が飛び出して、彼女の手に取りまつた。

「なんだと？」

アーチャーが止めようとするのもつかの間。

「令呪を持つて命ずる、アーチャー……」

「ミランダア!!」

そして手の甲から眩い閃光が走った。